熊本県文化財調査報告　第34集

五ッ穴横穴群

—— 五ッ穴横穴群 ——
—— 岩立C古墳 ——
—— 大瀬田横穴群 ——
—— 高塚古塔群 ——

1979

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第34集

五ッ穴横穴群

—— 五ッ穴横穴群 ——
—— 岩立C古墳 ——
—— 大瀬田横穴群 ——
—— 高塚古塔群 ——

1979

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道建設に伴い、日本道路公団の委託により、昭和50年度から昭和54年度にかけて松橋～八代間の埋蔵文化財発掘調査を実施中であります。

本報告書は、昭和51年度に実施した「五ッ穴横穴群ー八代郡宮原町」に関するものであります。

五ッ穴横穴群は古墳時代後期の墳墓ですが、幸い主体部はルート外でありましたので、前庭部が消滅するにとどまりました。また、すぐ西側の岩立古墳は、同じく古墳時代後期のもので、八代地方特有の「鬼のいわや」形式の古墳で、この地方の文化財解明の手がかりとなるものと思います。

本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査の実施にあたっては、日本道路公団の御理解と御協力をはじめとして、調査指導の先生、地元の方々からの御協力を賜りました。ここに心からお礼を申し上げます。

昭和54年 3 月31日

熊本県教育長　井　本　則　隆

例　　言

1、本書は、昭和51年度実施した九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書である。

2、現地の埋蔵文化財の発掘調査は、熊本県教育委員会文化課が実施した。これを主に担当したのは村井真輝・倉原謙治（五ッ穴横穴群・岩立C古墳）と、上妻信寛（大瀬田横穴群・高塚古塔群）である。

3、出土遺物の整理および遺物の実測については、村井、島津義昭、高野信子（須恵器・土師器）・下村悟史（鉄器・馬具・装身具類）・豊崎晃一（縄文時代の遺物）・高木正文（中世の古塔）が当たった。

4、各本文および実測図の末尾には担当者名を記した。

5、周辺の遺跡の調査は島津が実施した。

6、遺物の写真は白石巌が撮影した。

7、本報告書の編集には村井があたり、島津の助言を得た。

本　文　目　次

第１章　序説……1

1．はじめに……1

2．周辺の古墳分布……3

第２章　調査の概要……7

1．調査の方針……7

2．調査の概要……7

1）Ａ地区……7

2）Ｂ地区……7

3）Ｃ地区……8

4）Ｄ地区……8

第３章　Ａ地区（五ッ穴横穴群）……9

1．現状と調査の方針……9

2．調査日誌抄……10

3．調査内容……12

1）トレンチの設定……12

2）トレンチの観察記録……12

3）出土遺物……14

4）まとめ……14

第４章　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）……16

1．現状と調査の方針……16

2．調査日誌抄……18

3．調査内容……19

1）外部構造……19

2）内部構造……40

3）古墳時代とそれ以後の遺物……46

4）古墳調査のまとめ……82

5）縄文・先土器時代の遺物・遺構……88

第５章　Ｃ地区（大瀬田横穴群）……114

1．現状と調査の方針……114

2．調査日誌抄……114

3．調査内容……116

1）トレンチの設定…… 116
2）トレンチの観察と排土作業…… 116
4．まとめ…… 116
第６章　Ｄ地区（高塚古塔群）…… 117
1．現状と調査の方針…… 117
2．調査日誌抄…… 117
3．調査内容…… 117
4．まとめ…… 120
附論…… 121
1．岩立Ｃ古墳付近の地質学的所見（長谷義隆・高橋俊正）…… 121
2．野津古墳群（乙益重隆）…… 125
3．大野窟古墳（三島格）…… 137
4．付城横穴群（隈昭志）…… 155
5．寺山宮の東横穴群（高木正文）…… 161
6．梅木谷横穴群（隈昭志・高木正文）…… 169
7．崩平横穴群（高木正文）…… 181

挿　図　目　次

第１図　周辺古墳分布図…… 5
第２図　Ａ・Ｂ地区地形図…… 11
第３図　Ａ地区（五ツ穴横穴群）トレンチ設定図…… 12
第４図　トレンチ断面図…… 13
第５図　Ａ地区（五ツ穴横穴群）表採坏実測図…… 15
第６図　岩立Ｃ古墳調査区分図…… 17
第７図　岩立Ｃ古墳墳丘実測図・断面模式図…… 21
第８図　墳丘断面図…… 22
第９図　墳丘断面・封土中の礫層図…… 23
第10図　周溝全体図…… 25
第11図　周溝区分図…… 26
第12図　周溝勾配模式図…… 27
第13図　周溝部分図（第Ⅰ区）…… 28
第14図　周溝部分図（第Ⅱ区）…… 30

第15図　周溝部分図（第Ⅲ・Ⅳ区）……32
第16図　周溝部分図（第Ⅴ・Ⅵ区）……33
第17図　周溝部分図（第Ⅶ'・Ⅶ区）……35
第18図　周溝部分図（第Ⅷ区）……36
第19図　周溝部分図（第Ⅸ区）……38
第20図　周溝部分図（第Ⅹ区）……39
第21図　石室内堆積物断面図……40
第22図　焼土分布図……41
第23図　石室俯瞰図と石室断面図……43
第24図　石室実測図……45
第25図　岩立Ｃ古墳出土遺物実測図……48
第26図　岩立Ｃ古墳出土遺物実測図……49
第27図　岩立Ｃ古墳出土遺物実測図……50
第28図　岩立Ｃ古墳出土遺物実測図……51
第29図　岩立Ｃ古墳出土遺物実測図……52
第30図　岩立Ｃ古墳出土遺物実測図……53
第31図　岩立Ｃ古墳出土遺物実測図……54
第32図　岩立Ｃ古墳出土遺物実測図……55
第33図　岩立Ｃ古墳出土遺物実測図……69
第34図　第Ⅶ区出土の空風輪……70
第35図　鉄器類実測図……75
第36図　鉄器・装身具類実測図……76
第37図　馬具類実測図……77
第38図　馬具類実測図……78
第39図　Ｊ－Ⅰ区における土層の柱状模式図……90
第40図　Ｊ－２層中の遺物出土状態……91
第41図　Ｊ－３層中の遺物出土状態……92
第42図　遺物出土状態図（Ｊ－Ⅱ区）……93
第43図　ＣＫ断面図……94
第44図　縄文土器実測図……101
第45図　縄文土器実測図……102
第46図　縄文土器実測図……103
第47図　石器実測図……104

第48図　石器実測図 …… 105
第49図　石器実測図 …… 106
第50図　石器実測図 …… 107
第51図　石器実測図 …… 108
第52図　石器実測図 …… 109
第53図　石器実測図 …… 110
第54図　石器実測図 …… 111
第55図　ナイフ型石器と細石刃 …… 113
第56図　C地区（大瀬田横穴群）地形図 …… 115
第57図　D地区（高塚古塔群）地形図 …… 118
第58図　高塚古塔群古塔実測図 …… 119
附1第1図　岩立C古墳地盤概念図 …… 124
附2第1図　端ノ城古墳実測図 …… 132
附2第2図　物見櫓古墳実測図 …… 133
附2第3図　姫ノ城古墳実測図 …… 134
附2第4図　中ノ城古墳実測図 …… 135・136
附3第1図　大野窟古墳（附3図版1参照）…… 231
附3第2図　周辺分布図 …… 140
附3第3図　大野窟古墳墳形実測図 …… 143
附3第4図　大野窟古墳横穴式石室実測図 …… 144
附3第5図　大野窟古墳須恵器瓦質実測図 …… 147
附3第6図　大野窟古墳出土土器復元図 …… 148
附3第7図　姫ノ城古墳出土の器台 …… 150
附4第1図　付城横穴第28号 …… 158
附4第2図　付城横穴第32号 …… 159
附5第1図　寺山宮の東横穴群位置図 …… 163
附5第2図　寺山宮の東横穴群配置図 …… 164
附5第3図　寺山宮の東横穴実測図（第1号）…… 165
附5第4図　寺山宮の東横穴実測図（第2号）…… 166
附5第5図　寺山宮の東横穴採集遺物 …… 167
附6第1図　梅木谷横穴群位置図 …… 171
附6第2図　梅木谷横穴実測図（上第1号、下第2号）…… 173
附6第3図　梅木谷横穴実測図（上第3号、下第7号）…… 174

附６第４図　梅木谷横穴実測図（第４号）…… 176
附６第５図　梅木谷横穴実測図（第５号）…… 177
附６第６図　梅木谷横穴実測図（第６号）…… 178
附７第１図　崩平横穴群位置図…… 183
附７第２図　崩平横穴群分布図…… 184
附７第３図　崩平横穴実測図（第１号）…… 186
附７第４図　崩平横穴実測図（第２号）…… 187

表　目　次

第１表　Ａ地区表採遺物表……15
第２表　葺石の計算値……20
第３表　石室の対比……44
第４表　土器類の分類基準表……47
第５表　実測土器一覧表……56～68
第６表　実測不能の土器片数……71～72
第７表　馬具・武具・装身具類一覧表……79～81
第８表　岩立Ｃ・年の神両古墳の各部計測値の中国の尺度換算表……85
第９表　岩立Ｃ古墳の玄門と類似の玄門を持つ古墳一覧……87
第10表　砂川以南球磨川以北における埴輪出土地一覧……88
第11表　縄文式土器一覧表……98・99
第12表　石器一覧表…… 99・100
附３第１表　大野窟古墳石室計測値数…… 149
附３第２表　羨道高と玄室高との比較表…… 149

図　版　目　次

図版１　Ａ地区（五ッ穴横穴群）トレンチ……191
図版２　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）遠景……192
図版３　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）墳丘……193
図版４　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）墳丘の断面……194
図版５　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）周溝第Ⅰ～Ⅴ区……195
図版６　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）周溝第Ⅰ～Ⅵ区……196

図版７　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）周溝中の遺物出土状態……197
図版８　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）第Ⅸ・Ⅹ区……198
図版９　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）第Ⅸ・Ⅹ区遺物出土状態……199
図版10　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）第Ⅸ・Ⅹ区遺物出土状態……200
図版11　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）石室外観……201
図版12　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）石室内観……202
図版13　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）石室内観……203
図版14　Ｂ地区Ｊ―Ⅱ区の遺物出土状態……204
図版15　Ａ地区（五ッ穴横穴群）とＢ地区（岩立Ｃ古墳）出土の須恵器……205
図版16　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）出土の須恵器……206
図版17　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）出土の須恵器……207
図版18　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）出土の須恵器と近世陶器……208
図版19　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）周溝中より出土の大甕……209
図版20　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）出土の土器……210
図版21　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）出土の埴輪……211
図版22　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）出土の埴輪……212
図版23　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）周溝出土の土師器……213
図版24　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）第Ⅸ・Ⅹ区出土鉄鏃・石突き……214
図版25　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）第Ⅸ・Ⅹ区出土馬具……215
図版26　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）第Ⅸ・Ⅹ区出土馬具……216
図版27　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）第Ⅸ・Ⅹ区出土武具・装身具……217
図版28　Ｂ地区出土縄文式土器……218
図版29　Ｂ地区出土縄文式土器……219
図版30　Ｂ地区出土縄文式土器……220
図版31　Ｂ地区出土の石器……221
図版32　Ｂ地区出土の石器……222
図版33　Ｃ地区（大瀬田横穴群）調査区全景……223
図版34　Ｃ地区（大瀬田横穴群）トレンチ……224
図版35　Ｄ地区（高塚古塔群）全景……225
図版36　Ｄ地区（高塚古墳群）御神体と古塔……226
附２図版１　野津古墳群……227
附２図版２　野津古墳群……228
附２図版３　野津古墳群……229

附 2 図版 4　野津古墳群出土遺物……230
附 3 図版 1　大野窟古墳……
附 3 図版 2　大野窟古墳……232
附 5 図版 1　崩平横穴群……

第1章　序　　説

1　はじめに

九州縦貫自動車道建設にともなう埋蔵文化財調査について、熊本県と日本道路公団との契約に従って、熊本県教育委員会が、昭和51年4月から10月まで「五ッ穴横穴群」の発掘調査を実施した。

遺跡の地学的所見については、高橋俊正氏（熊本大学教養部助教授）、長谷義隆氏（同大学理学部助手）に依頼した。

遺構の発掘及び遺物の整理については乙益重隆氏（国学院大学文学部教授）、白木原和美氏（熊本大学法文学部教授）、佐藤伸二氏（国立八代工業高等専門学校講師）の指導助言を得た。

関連資料については、三島格氏、乙益重隆氏、石人石馬研究会（代表岡崎敬氏）の協力を得て、「熊本県八代郡大野窟古墳」、「野津古墳群調査報告」を掲載した。他に隈昭志、高木正文が調査した付城横穴群・寺山宮の東横穴群・梅の木谷横穴群・崩平横穴群の調査記録を記載した。

報告書作成に関して、遺物の整理・水洗・接合修復・写真撮影・拓本・実測等については、熊本県文化財収蔵庫で行った。

調査の組織

調査責任者	岩崎　辰喜	文化課課長（昭和53年度）
	合志　太助	文化課課長（昭和52・53年度）
	境　信三郎	文化課課長（昭和51年度）
	真弓袈裟勝	文化課課長補佐（昭和53年度）
	田中　　繁	文化課課長補佐（昭和52・53年度）
	河野　宗忠	文化課課長補佐（昭和51年度）
	前田　利郎	文化課課長補佐（昭和51年度）
	上野　辰男	文化課主幹
調査総括	隈　　昭志	文化課文化財調査係長
調査事務担当者	望野　正雄	文化課管理係長（昭和53年度）
	松本　　巽	文化課管理係長（昭和51・52年度）
地質調査	高橋　俊正	熊本大学教養部助教授
	長谷　義隆	熊本大学理学部助手
調査指導助言者	乙益　重隆	国学院大学文学部教授
	白木原和美	熊本大学法文学部教授

調査指導助言者	佐藤　伸二	国立八代工業高等専門学校講師		
資料提供協力	乙益　重隆	国学院大学文学部教授		
	三島　　格	元福岡市立歴史資料館館長		
	石人石馬研究会（代表　岡崎　敬・九州大学文学部教授）			
	平山　修一	宇土市教育委員会社会教育課主事		
	高木　恭二	宇土市教育委員会社会教育課主事		
調査及び資料整理	村井　真輝	文化課技師	上妻　信寛	文化課技師
	島津　義昭	文化課学芸員	高木　正文	文化課学芸員
	倉原　謙治	文化課調査員	安達　武敏	文化課調査員
	中山　清美	文化課調査員	下村　悟史	文化課調査員
	勢田　廣行	文化課調査員	高野　信子	文化課調査員
	豊崎　晃一	文化課調査員		
	高橋　信武（熊本大研究生）・坂田　　直（熊大生）			
	清田　純一（熊本商大生）			
遺物写真撮影	白石　　巌	文化課調査員		
協　　力　　者	八代郡宮原町教育委員会			
	八代郡竜北町教育委員会			

2　周辺の古墳分布

八代平野　宇土半島の基部から、遠く日奈久まで拡がる大平野は八代平野と呼ばれ、熊本県第二の平野である。

平野の東部を限る山地からは、北から谷合川、北部田川、砂川、吉野川、氷川、瀬戸口川、弥勤川、岡谷川、大谷川、水無川、球磨川、敷川内川、大坪川、汐鶴川などの大小の河川が流れ出し、上流の山地から多くの土砂を運んでいる。とくに砂川は、その名の示す如く、夥しい土砂の流出により河床が埋没して天井川となっている。

八代平野の干拓は、これらの河川の形成した、扇状地状三角州[註1]を基礎として推進されたのである。古代にあっては、山麓線から、大略 1.5kmの幅をもった挾少な平野であった。今日の八代平野の大部分は、慶長年間以降に作られたものである。

地域区分　八代郡内には数多くの古墳が知られているが、[註2]山岳地域には皆無である。古墳は海岸を臨む丘陵、その背後の谷あい、および海岸平野に分布する。

ここでは、八代地方の古墳分布のあり方を小地域毎に検討し、[註3]それぞれの地区の古墳の特性といったものを素描してみたい。山地景観や、河川を境として地域の区分をおこなうと八代地方は7地域に区分できよう。[註4]

(1)A地区　松橋町の南半と小川町に相当する。すなわち大野川より南、砂川より北の地域で、東は標高 200～ 250m の山塊に限られている。山麓の丘陵は発達せず、すぐに平坦面に移行する。山麓には湧水が多く見られ、湧水池が築かれている。

(2)B地区　砂川から南、氷川までの地域。大略竜北町域に一致するが、一部氷川の右岸が宮原町に含まれる。この地区の丘陵地の背後（東側）には、大きな開析谷が発達している。

(3)C地区　氷川の右岸、宮原町早尾までの地域で、B地区と同様開析谷の発達が著しく、低丘陵が多くみられる。

(4)D地区　竜峰山の北西山麓、旧竜峰村中に相応する。山麓には発達の進んだ開析谷が多くみられる。

(5)E地区　D地区から球磨川右岸にかけての地区で、竜峰山の西南山麓部と球磨川の右岸三角州地帯に相応する。この地区は古代にあっては、球磨川の運んだ多量の土砂により、かなり西方まで三角州が発達していたらしい。

(6)F地区　球磨川から南、日奈久までの地域。北東部から東西に走る直線上の山麓線は中央構造線の一翼をなす八代・臼杵断層線の南端部に相当する。古代の平野は、山麓寄りの少地域である。

(7)G地区　八代平野の西端に存する島状の地区で、かっては島であった。北から、産島、大島、高島、小鼠蔵、大鼠蔵、水島などがある。ほとんどの島に古墳が築造されている。

各地区の古墳　各地区の古墳の分布を述べる。本報告書は、B地区に存する岩立C古墳の報告であるので、A、B、C地区のみに限って記述する。

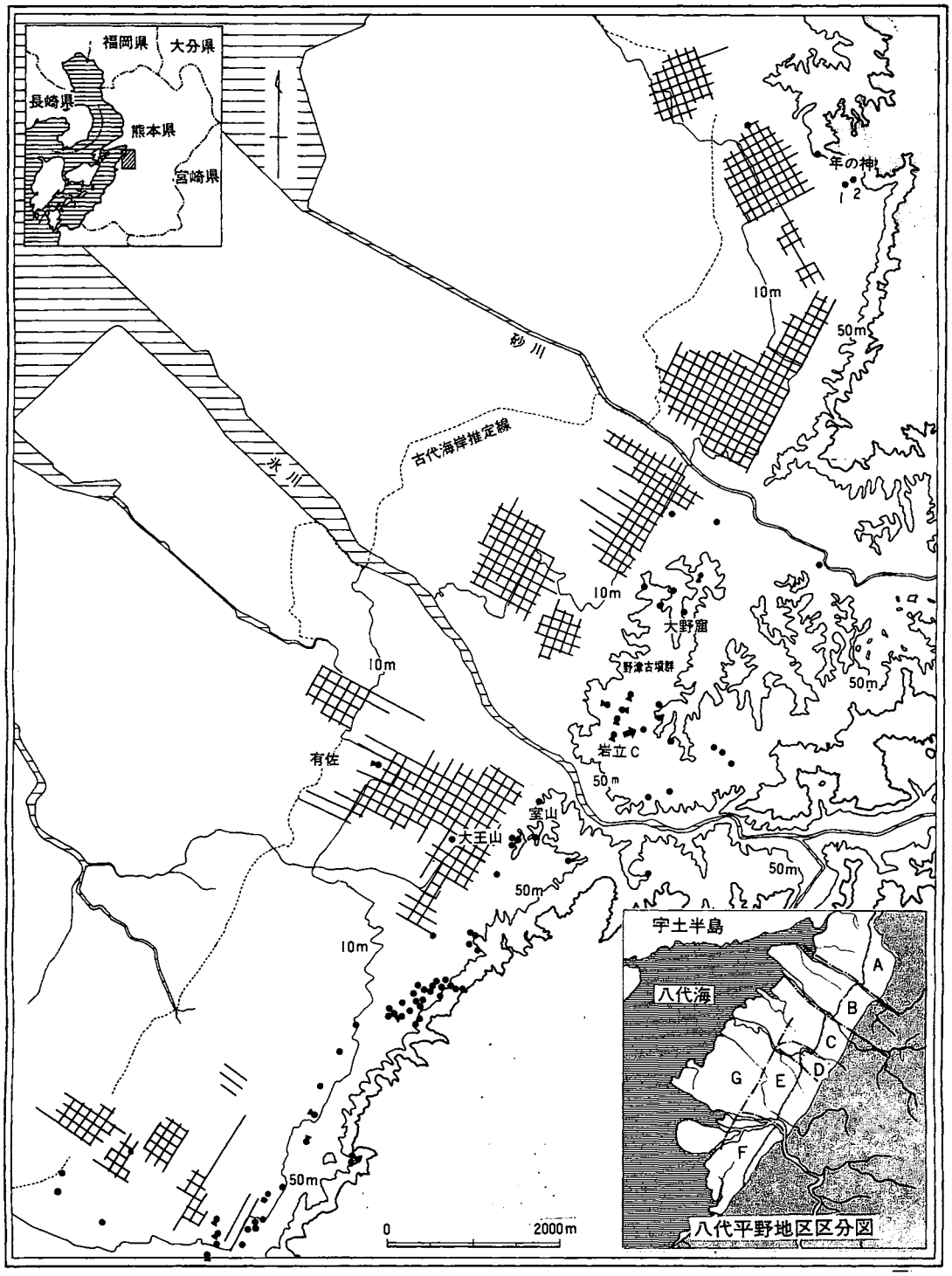
(1)A地区　古墳数は多くない。5基の円墳が知られている。小川町中小野から砂川右岸の南小川にかけては古墳が知られていない。古墳は、年の神1号墳を除いて巨石を使用した横穴式石室墳らしい。分散して分布する。調査がおこなわれた年の神1号墳は、石室の正面にくり込みのある玄門を持つ、特異な構造である。同2号墳は、凝灰岩の切石を使用した横穴式石室を持ち、7世紀の築造と推定されている。

(2)B地区　多量の壺が出土した高塚東原遺跡[註5]が、今日の知見では方形周溝墓であろうと推定される。出土土器は、塚原古墳群の最古式あるいは[註6]、それより古期の様相をもっている。高塚一帯には、数基の古墳が見られる。通称大野原の丘陵上には、4基の前方前円墳と数基の円墳が分布していた（野津古墳群　付論乙益重隆氏報文を参照のこと)。消滅した天提古墳、および姫ノ城古墳からは、凝灰岩製の石製品が出土していて、九州に於ける、この種の遺物の分布の南限となっている。大野原の東側の谷あいの小丘陵にも、前方後円墳と円墳が分布している。円筒埴輪を出土した東新城古墳[註7]（前方後円墳）山中古墳群（3基)、楮屋林古墳群（2基）はB地区の北側、砂川左岸に分布する[註8]。南の氷川右岸の宮原町立神地区には、蕾園古墳群（4基)、九十九古墳群（10基以上)、園の迫古墳群（2基)、立神本村古墳群（2基)、溝口古墳群（3基)、下溝口古墳群（3基)、馬原古墳群（5基)、深川古墳群（3基）が分布している。未調査のまま消滅したものも加えるなら、40基以上の一大古墳群であった。園の迫古墳群の一基は、乙益重隆氏により調査され、直径約18mの円墳で円筒埴輪を出土し、6世紀代のものとされている[註9]。

また、凝灰岩崖を利用して多くの横穴が築かれている。高尾横穴（20基以上)、乱橋横穴（40基)、小園横穴（数10基)、向山横穴群（2基)、竹の下横穴群（9基)、大瀬田横穴群（7基)、段横穴群（6基)、七ツ穴横穴群（9基以上)、五ツ穴横穴（5基)、岩立三ツ穴横穴群（24基）などがある。

(3)C地区　古墳の立地はB地区の立神周辺と似るが、築造数は少ない。この地区では、平野部に、2基の古墳が存し、以南の平野部に群集する古墳の北限となっている。原田古墳は凝灰岩の石材が残存している。さらに西方の有佐古墳は、縄文時代の貝塚の上に造られ、円筒埴輪などが出土している[註10]。

丘陵部には、小越古墳群（2基)、花立山古墳群（数基)、大王山古墳群（3基）などの群集墳の外に10数基の古墳が単独で分布している。佐藤伸二氏、佐々木貞行氏等によって調査された室山古墳は丘陵先端部を溝により区画した直径16mの円墳であり、2基の組合せ石棺が出土し2号棺からは、斧、ひる鎌、錐、鉈、剣、刀子などの多種の鉄製品が出土した[註11]。調査者は5世紀前半と考えている。また乙益重隆氏によって調査された、大王山三号墳は、長さ3.60m、幅1.15mの割石小口積の竪穴式石室内に、舟型石棺を収めている[註12]。


福岡県
大分県
長崎県
熊本県
宮崎県
年の神
1
2
10m
50m
砂川
古代海岸推定線
氷川
大野窟
野津古墳群
岩立C
有佐
室山
大王山
宇土半島
八代海
A
B
C
D
E
F
G
八代平野地区区分図
0
2000m

第1図　周辺古墳分布図

横穴は、わずかに天真積横穴群（数基）を見るのみである。

註１　三浦保寿『熊本県新誌』1963　東京　鏡・宮原（有佐・竜北）『日本図誌大系』（九州Ⅱ）

註２　土木学会編『明治以前日本土木史』1936　東京

註３　石川愛郷編『八代郡誌』1973（名著出片復刻版）東京

註４　乙益重隆『肥後上代文化史』1954　熊本　Ｐ153～Ｐ161では八代平野の古墳群の在り方を、地形的条件により次の三地区に分割されている。①砂川、氷川、鏡川、球磨川の三角洲が構成される、その頂点付近にまとまるもの。②五家荘山塊が南北に延びた、山麓線に平行して分布するもの。③沖合に点在する島々に群集するもの。更に②は吉野村を中心とする台地上に群集するものと、台地の崖下に平行するもの。

註５　富樫卯三郎・松本雅明「小川町年の神古墳」　熊本史学15・16号　1959　熊本

註６　花岡興輝「八代郡竜北村における土師器の埋設遺跡について」　熊本史学11　熊本

註７　乙益重隆「熊本県姫ノ城古墳発見の石製遺物」九州孝古学３・４　1958　福岡

註８　富樫卯三郎・平山修一・高木恭二「熊本県内前方後円墳地名表」『向野田古墳』所収　宇土市埋蔵文化財調査報告書第２集　1978　熊本県宇土市

註９　乙益重隆「熊本県八代郡園の迫古墳」『日本孝古学年報11』1955　東京

註10　富樫卯三郎氏によって調査された。また1978年墳丘から赤色顔料を付した石材が出土した。

註11　佐藤伸二・佐々木貞行『室山古墳調査報告書』宮原町教育委員会　1976　熊本県宮原町

註12　乙益重隆「熊本県八代郡大王山古墳」『日本孝古学年報11』1955　東京

（島津）

第2章　調 査 の 概 要

1　調査の方針

五ッ穴横穴群の発掘調査は、昭和51年４月下旬に開始した。調査対象地域を道路公団の建設計画書中の測点で示すならば、STA 81～ STA 82、STA 85＋60～ STA 88、STA 107～ STA 109＋20のそれぞれの間に当る。STA 81～ STA 82（高塚古塔群）と STA 85＋61～ STA 88（大瀬田横穴群）の調査は、上妻信寛が、STA 107～ STA 109＋20（五ッ穴横穴群、岩立Ｃ古墳）間の調査は村井真輝・倉原謙治が調査を担当し、高橋信武氏（熊大考古学研究室研究生）の協力を得た。

近接した４ヵ所の遺跡をほぼ平行して調査を実施するため各遺跡を五ッ穴Ａ～Ｄと仮称し、五ッ穴Ａ地区（五ッ穴横穴群）、五ッ穴Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）、五ッ穴Ｃ地区（大瀬田横穴群）、五ッ穴Ｄ地区（高塚古塔群）とした。

2　調査の概要

調査は昭和51年４月から同年10月にかけて実施した。調査対象は、八代郡宮原町大字立神字岩立の「五ッ穴横穴群の隣接地」・「岩立Ｃ古墳」と八代郡竜北町字高塚の「大瀬田横穴群の隣接地」・「高塚古塔群」である。

１）Ａ地区（五ッ穴横穴群）

現状は荒地であり、山火事の後のような状態であったので、立木の伐採作業から仕事を開始した。

この地区は戦後開墾されたことがあるとのことで、段々畑状になっている。

第２図に示すように10本の試掘溝を設定した。又、荒地と水田とが接する崖面を掘削した。各試掘溝からは横穴に関連する遺構、あるいは古墳時代より以前の遺溝は発見できなかった。

崖面掘削においても、横穴は発見できなかった。

ただしこの地区から２点のほぼ完形に近い坏を表採した。

２）Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）

石室の軸方向（Ａ－Ｏ－Ｂ方向）と、それに直交し石室を二分する方向（Ｃ－Ｏ－Ｄ方向）にトレンチを設定し、周溝の存在を確認した。又、この試掘溝観察から、第８・９図を作製した。

周溝は第10図に示すように少し角ばって「の」の字を描いている。周溝の中からは主に須恵器、土師器が出土しているが、第17図に示した地区からは古墳時代の遺物のほかに中世の遺物（瓦質

土器、糸切底の土師器の皿）が出土した。又羨道部・前庭部と周溝の南側から装身具、鉄鏃、刀子、馬具類が出土している。出土状態から当初埋葬した位置からかなり動いていると思われる。

石室内はごみ捨て場のような状態になっていた。石室壁面の石材は凝灰岩である。壁面の風化の度合いから見て、開口してからかなりの時が過ぎていると思われる。横穴式石室内の平面形はほぼ方形の単室墳である。計画に従って石室はむろんのこと周溝、墳丘まで完掘した。

墳丘は畑地の開墾の時掘削され、元の状態はほとんど止めていないが、周溝の状態から、円墳と考えられる。

封土中に多数の押型文土器が含まれている。残丘部の下部に旧地面が残存しており、縄文早期の包含層を検出したので発掘作業を引き続いて行った。封土の下からは旧表土層（縄文後期から古墳時代の表土）の下に縄文前期と縄文早期の遺物包含層を検出した。

3）C地区（大瀬田横穴群隣接地）

調査位置は、下益城郡小川町大字稲川の集落に川を挟んで面した標高50～60mの丘陵の東斜面である。道路建設地外には大瀬田横穴群が開口しているが、道路建設地内に横穴が存在するか否かは不明なので、存否の確認のため、横穴の存在しそうな部分に5本のトレンチを設定し、土層観察の後に、第56図（地形図）に示した一帯の崖面の覆土を除去した。しかし、遺物、遺構は何等存在しないことが明らかになった。

4）D地区（高塚古塔群）

小川町と竜北町の境界近く、稲川の左岸近くの台地（海抜25m）の藪の中に存在するコンクリートブロック製のお堂（中に2柱の御神体あり）と2基の古塔（五輪塔と灯籠を重ね合わせたもの）である。

お堂と古塔は他所に移転する予定であり、上物の実測と写真撮影を実施した。また古塔は元の位置から移設されており、発掘作業は行わなかった。

（村井）

第３章　Ａ地区（五ッ穴横穴群）

１　現状と調査の方針

八代郡宮原町大字立神字岩立に属する。調査は、昭和51年４月21日から６月18日まで実施した。この地区は、野津古墳群の存在する丘陵の東側後背地に当たる谷（大野貝塚と西平貝塚との間を流れる谷郷川の上流）の北側斜面である。

小河川を挟んで対峙して南側斜面の舌状に突出した小丘陵部上に岩立Ｃ古墳が構築されている。この小河川の両側の丘陵の背部及び傾斜面部一帯は戦前まで、大部分が雑木林であったということだが、第二次大戦後の食糧増産運動と柑橘植付のブームによって開墾された所である。この地区は、一度は畑地として開墾されたと見えて、段々畑状になりうねが残っている所もある。立ち木の大きさから耕作を放棄して20年は経たと考えられる。

調査にはいった時は、山火事の後のような荒地であり、大きな樹木や潅木が焼け残ったようにして立っていた。作業は立ち木の伐採から開始した。

ａ、縦貫道敷地内における横穴の有無を確認する。

ｂ、横穴群に付随する遺構の有無を確認する。

ｃ、横穴以外の遺構の存否を確認する。

ｄ、荒地の部分は樹根が多く、他方は湿田であり全面的な発掘作業は困難であることから地形に合わせてトレンチを設定する。

ａ～ｄの計画に従って、第３図に示すように10本のトレンチを設定した。また、荒地と水田と接する崖面は除草を行い、覆土のある所は排土した。

各トレンチからは、横穴に関連する遺構、古墳時代より以前の遺構や、中世の遺構等は検出されなかった。崖面の掘削においても横穴は検出されなかった。この地区からは、２点の坏を表採しただけである。ところで、宮原町教育委員会が佐藤伸二氏に依託して、五ッ穴横穴群の調査が時期を同じくして行われた。この調査により従来５基と言われていた横穴の数は、確実に９基は存在することがわかった。一部、崖がくずれて埋没した状態になっている部分があるのでそれ以上のことは不明である。同時に横穴が開口している前面の水田中から須恵器が出土し、多数採取されている。これらは宮原町公民館に保管された。宮原町の横穴群についての調査結果については、宮原町教育委員会から近日中に報告される予定である。

2　調査日誌抄

昭和51年４月21日から９月28日まで４地区（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ）の調査を実施した。各地区の調査期間を列記すると、Ａ地区（五ッ穴横穴群）は４月21日～６月21日、Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）は４月21日～６月21日、Ｃ地区（大瀬田横穴群）８月11日～９月28日、Ｄ地区（高塚古塔群）７月20日～９月３日である。

Ａ地区とＤ地区からは、遺構らしいものが検出されなかったので、調査期間が短縮された。

４月21日　本日から調査を開始する。調査者は、村井（文化課技師）と倉原（文化課調査員）の二名である。降雨激しく雑木の伐採作業を中止する。

４月22日　雑木の伐採作業を開始する。

４月26日　雑木の伐採と除草作業を行う。草や雑木は焼却する。第９トレンチ設定予定地近くに長楕円形（0.5×１ｍ）の竪坑を発見する。

４月27日　発掘に必要な器材を収蔵庫から搬送した。第５トレンチと昨日発見の竪坑の発掘を開始する。第５トレンチの側でマムシを見つけたので作業員全員、顔色を失う。

５月４日　Ａ地区、Ｂ地区を含めて地形測量（1/500平板測量）を開始する。４月26日から発掘していた竪坑からの出土遺物はなかった。また穴の底は水によって浸食さており、凝灰岩のひびわれの中を地下水が流れてできた穴と思われるので発掘を中止する。

５月10日　荒地と湿田との境の崖（東側）の掘削を行う。

５月13日　プレハブの作業小屋を建設する。今日からやっと発掘用具の収納が安心してできるようになった。

５月24日　最近、雨の降る日が多く作業がはかどらない。

５月28日　Ｂ地区の発掘に労力を集中するためＡ地区の発掘をしばらく休止する。

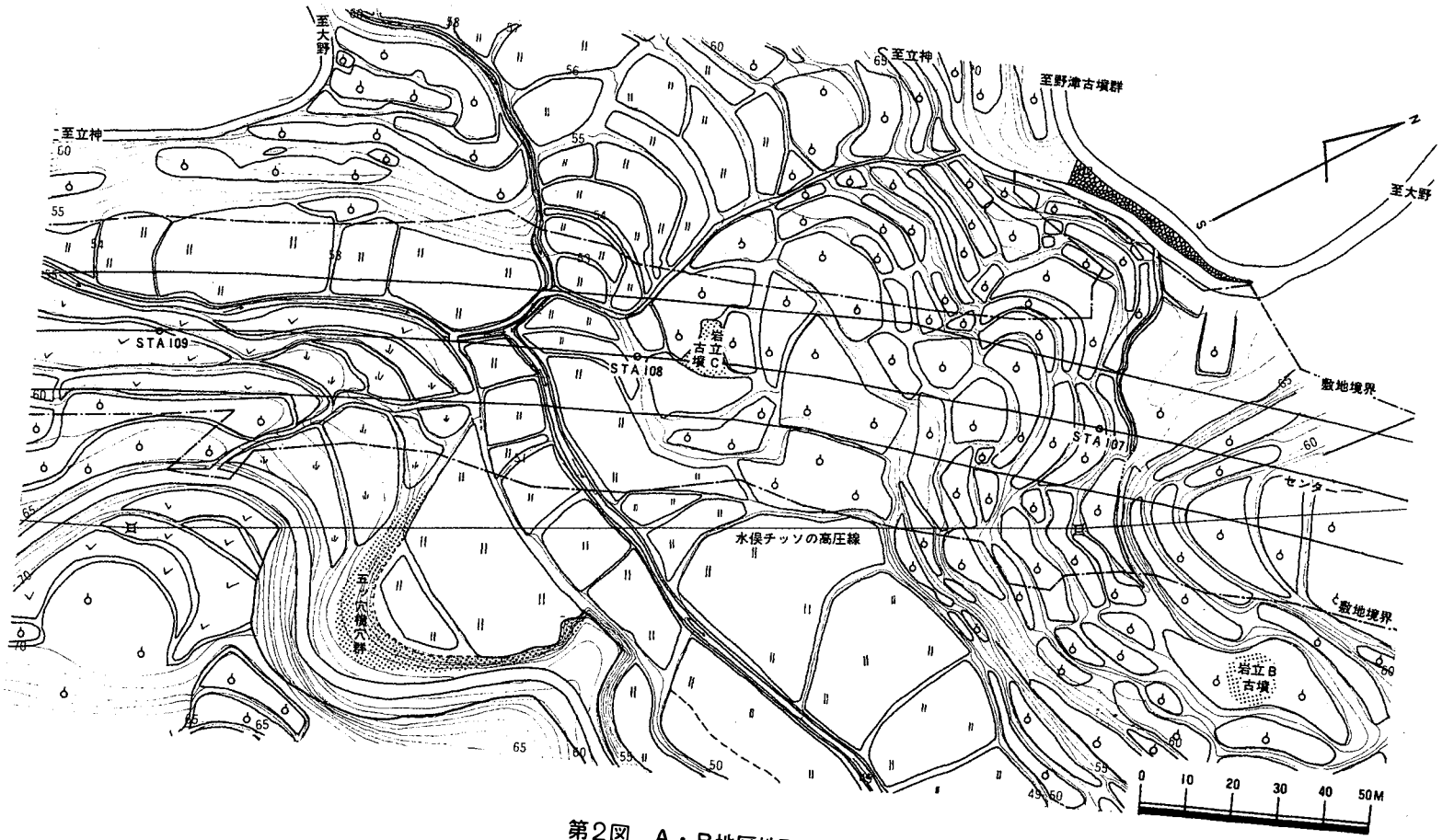
６月７日　第９トレンチの発掘を開始する。

６月８日　第５トレンチの発掘を開始する。３本のクヌギの大木があるので困難な作業となった。器材（鍬・鎌・鋸等）の消耗がはげしい。

６月10日　第６、10トレンチを設定する。第６トレンチ設定地付近は、開墾されて畑になる以前に石切り場になったことがあると見えて、トレンチ内から凝灰岩の破砕礫が多量に出土する。また、基盤となっている凝灰岩まで削平されている。

６月18日　第５、６、７、10トレンチを観察したところでは、採石や開墾によって基盤面に達するまで著しく攪乱をうけている。

６月19日　調査係会議で検討の結果、Ａ地区の発掘調査を打ち切る。


至大野
至立神
至立神
至野津古墳群
至大野
STA 109
STA 108
STA 107
岩立C古墳
岩立B古墳
五ノ穴横穴群
水俣チッソの高圧線
敷地境界
敷地境界
センター
0 10 20 30 40 50M

第2図　A・B地区地形図

3　調査内容

1）トレンチの設定（第3図）

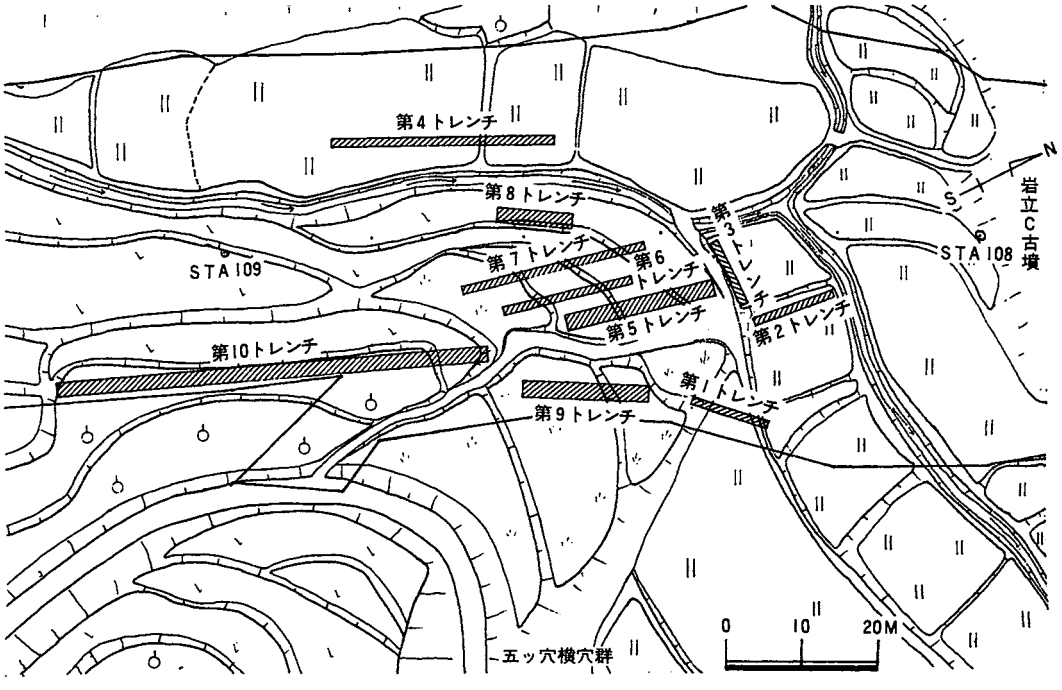
調査対象地域は、荒地（耕作を放棄したため雑木林となっている）と湿田である。隣接地の崖には9基の横穴（五ッ穴横穴群）が開口しているため荒地と湿田とが接する崖の除草と掘削を行い横穴の存否の確認作業を行った。

湿田には、近接する横穴群に関連する遺構の存否の確認と水田の基盤となっている土層の様子を確認するため第1～4トレンチを設定した。荒地の部分は山の斜面を段々畑に開墾した形跡が残っているので地形に合わせて任意に第5～10トレンチを設定した。

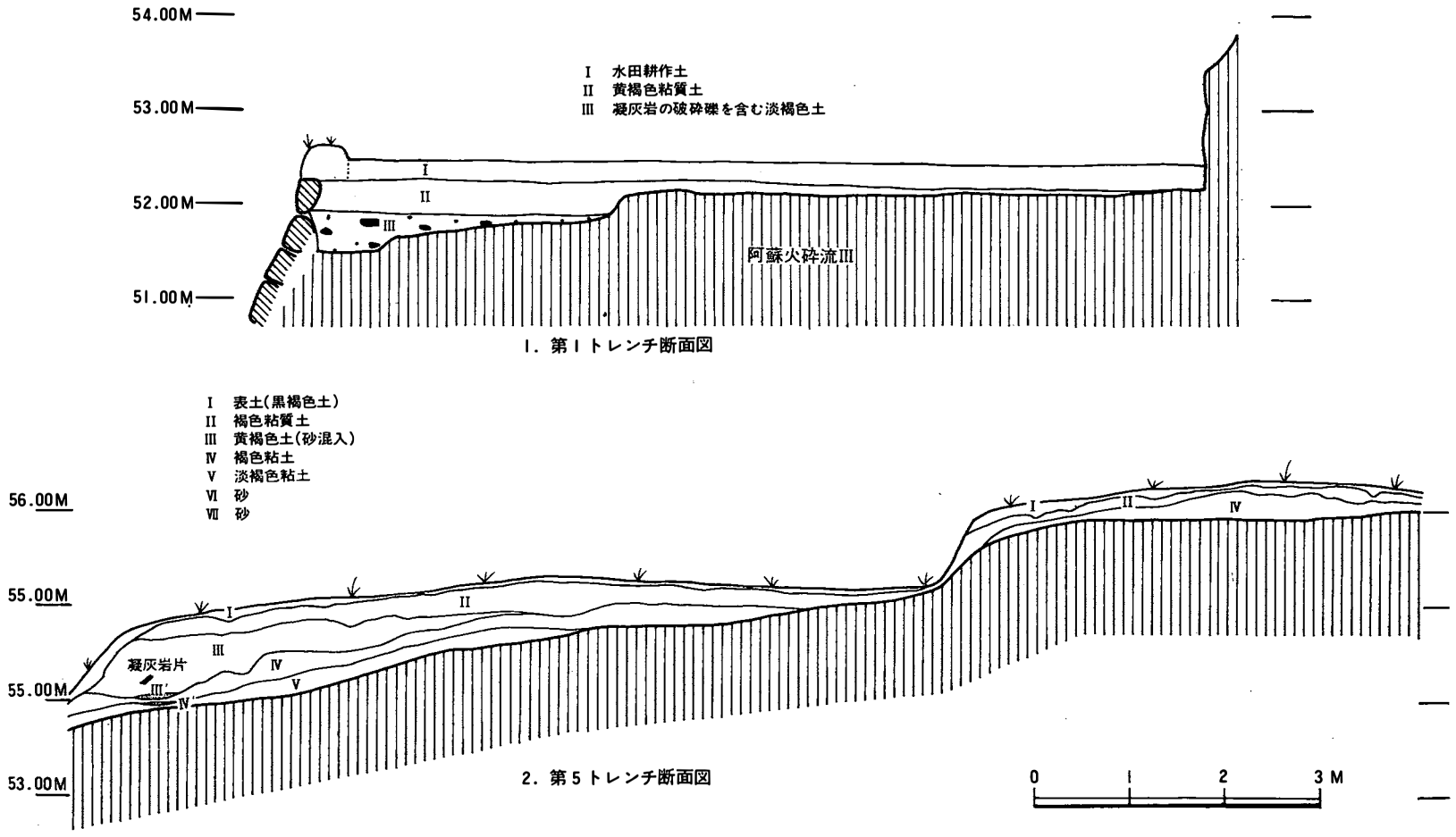
2）トレンチの観察記録

第3図に示したように、10本のトレンチを設定した。第1～4トレンチの壁面の観察結果はほぼ同様で、耕作土の下に水田特有の不透水層（粘土化して、鉄分が集積している。）、整地した土層、基盤の凝灰岩の順になっていた。

第5～10トレンチのうち、第5～9トレンチは一度は畑地だったが放棄されたため荒地となったところで、第6～8トレンチの崖に近い部分からは凝灰岩の破砕礫が多く出土した。これ等の破砕礫は周辺の水田の石垣の用材を採取した時できたものであろう。それを開墾の時じゃまになるので一ケ所に集めたためと思われる。3本のトレンチともほぼ同様であった。第10トレンチはミ



第3図　A地区（五ッ穴横穴群）トレンチ設定図


54.00M
53.00M
52.00M
51.00M
I 水田耕作土
II 黄褐色粘質土
III 凝灰岩の破砕礫を含む淡褐色土
I
II
III
阿蘇火砕流III
1. 第1トレンチ断面図
I 表土(黒褐色土)
II 褐色粘質土
III 黄褐色土(砂混入)
IV 褐色粘土
V 淡褐色粘土
VI 砂
VII 砂
56.00M
55.00M
55.00M
53.00M
凝灰岩片
2. 第5トレンチ断面図
0
1
2
3 M

第4図　トレンチ断面図

カン園であり、耕作土の下は基盤となっている黄色の凝灰岩（阿蘇火砕流Ⅳ）である。

10本のトレンチは以上のような状態であるため、第１トレンチと第５トレンチの断面図(第4図１・２）を例示する。

○　第１トレンチ（第４図1）

湿田の土層断面であり、上から順に第Ⅰ層（水田耕作土)、第Ⅱ層(黄褐色粘質土)、第Ⅲ層(凝灰岩の破砕礫を含む淡褐色土)、基盤（黒色凝灰岩、阿蘇火砕流Ⅲ）である。

第Ⅱ層の上面にはうすく褐色の鉄分を多く含む部分がある。この層の土は水田化されたため、水の作用で粘質化したものと思われる。

第Ⅲ層は、開墾した時、整地のため低い所に埋立てた土と思われる。

基盤は、凝灰岩であるので水を透さないために水捌が悪く、崖下からは、常に水が湧いているので第１トレンチ設定地は山間特有の湿田である。

○　第５トレンチ（第４図2）

北端から７ｍ間の東壁断面図である。上から順に第Ⅰ層（表土層、黒褐色、腐葉土)、第Ⅱ層（褐色粘質土)、第Ⅲ層（黄褐色土、砂混入)、第Ⅳ層（褐色粘土)、基盤（阿蘇火砕流Ⅳ、風化が進んでいる。）である。

第Ⅰ層は、耕作を放棄してから後に雑木林になってからできたと考えられる。

第Ⅱ層から第Ⅴ層の土は均質ではなくトレンチの北端の堆積の状態は低い方に埋立てて整地した状態であり、第Ⅲ層には凝灰岩を含んでいる。第Ⅲ層と第Ⅳ層、第Ⅳ層と第Ⅴ層の間には、第Ⅲ′層、第Ⅳ′層として示した砂の堆積した部分がある。

以上、列記したようなことを関連づけて考えると、山の斜面を削平して耕地化する作業が４回に分けて行われていることが第Ⅱ～Ⅴ層の堆積状態から考えられる。しかも砂の間層（第Ⅲ′・Ⅳ′層）があることから連続して作業が行われなかったことを明示していると考えられる。

３）出土遺物

第５図に示す２点の遺物はいずれも表採である。坏の蓋と身であるが一対の坏ではない。坏の蓋は、山焼きの時、焼けたと思われる。中に木炭が入っていた。坏の身は第９トレンチの南端近く、坏の蓋は第５トレンチ中央部近くから表採している。遺物の特徴については第２表に示す。

４）まとめ

Ａ地区の調査対象とした地域は、正しくは五ッ穴横穴群隣接地であり、山の斜面はおそらく４回程度の大きな開墾作業が実施されて畑地となったと考えられる。

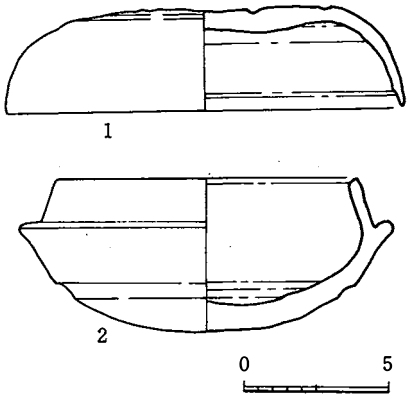
横穴に関連するような遺構は、何等検出されなかったので、五ッ穴横穴群は、調査した範囲までは広がっていないと考えられる。

表採の２点の須恵器（坏の蓋と身）は、焼質、形式ともに五ッ穴横穴群の中から採集されて

いるものと類似しているので横穴群の遺物の一部かもしれない。これらの遺物は岩立C古墳出土の遺物より古い形態を持っているように見える。

五ッ穴横穴群の地主の話では、田圃の排水路を掘る時多数の須恵器を採集したが、全てを横穴の中に投棄したということである。

(村井)



第5図　A地区（五ッ穴横穴群）表採坏実測図

(高野)

第1表　A地区表採遺物表

図版	器種	法量cm	形態上の特徴	技法上の特徴	色調・胎土・焼成
1	坏蓋	口径 13.7 器高 3.4	天井部はフットである。 口縁端部はやや尖り気味であり口縁部内面には、ヨコナデによる稜を残す。	口縁部から天井部にかけてヨコナデが施され、天井部はヘラ削り後ヨコナデにより調整されている。 器内面はヨコナデ	色調は褐灰色。 胎土は小粒子を含む。 焼成は良好。
2	坏身	口径 10.5 器高 5.3 立ち上がり部 1.7	底部は丸味を帯びる。 受け部は肉厚で短くほぼ水平で丸く収める。 立ち上がり部は 1.7cmを測り、内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに傾斜し、内面に稜を残す。	口縁部から底部にかけては、ヨコナデが施されている。 底部は回転ヘラ削り後ヨコナデにより調整されている 器内は口縁部から底部にかけてヨコナデが施されている。	色調は灰色。 胎土は小粒子を含む。 焼成は良好。

(高野)

第4章　B地区（岩立C古墳）

1　現状と調査の方針

八代郡宮原町大字立神字岩立に属する。

調査は、昭和51年4月21日から9月3日まで実施した。A地区（五ツ穴横穴群）と隣接するため平行して調査を行うことにした。

岩立C古墳の存在する小丘陵は、先にも述べたように小河川の谷の南斜面の舌状に突出した小台地である。

この台地の土層は、黒色の溶結凝灰岩（阿蘇火砕流Ⅲ）、黄色の凝灰岩（阿蘇火砕流Ⅳ）、その上の縄文土器包含層から成っている。

古墳墳丘の隣接地は柿園、蜜柑園、梅園および菜園である。墳丘の残丘部上は、クヌギが生えていたらしい。これを伐採して栗を植え付けてあった。

この地区は、前述したように第二次大戦後、開墾された所であり、墳丘は三枚の畑の境にあって、三角錐状になるまで封土が掘削をうけている。封土の上や中および裾には人頭大の礫が散在している。礫の種類はチャートと礫岩が大部分である。墳丘の隣接地の耕作土の下はこの小台地の基盤となっている黄色の凝灰岩（阿蘇火砕流Ⅳ）であり、場所によってはその下の地層をつくっている黒色の凝灰岩（阿蘇火砕流Ⅲ）が露出している所もあり、削平したことがよくわかる。

石室の天上石はすでに失なわれていて、側壁と奥壁の上3分の2は露出していた。石室内には塵芥が投棄されていて、その上に封土の一部が流入していた。石室の用材は、黒色の熔結凝灰岩であり、露出部分は、表面が魚鱗状に剝離し亀裂も走っていた。風化の進行の程度から、開口してからの年月が古いものと考えられる。

旧地主の話しによると、石室はこの一帯が開墾された後に好事家の手で二、三度、盗掘をうけたとのことである。

石室が露出していることから次のように調査の方針をたてた。

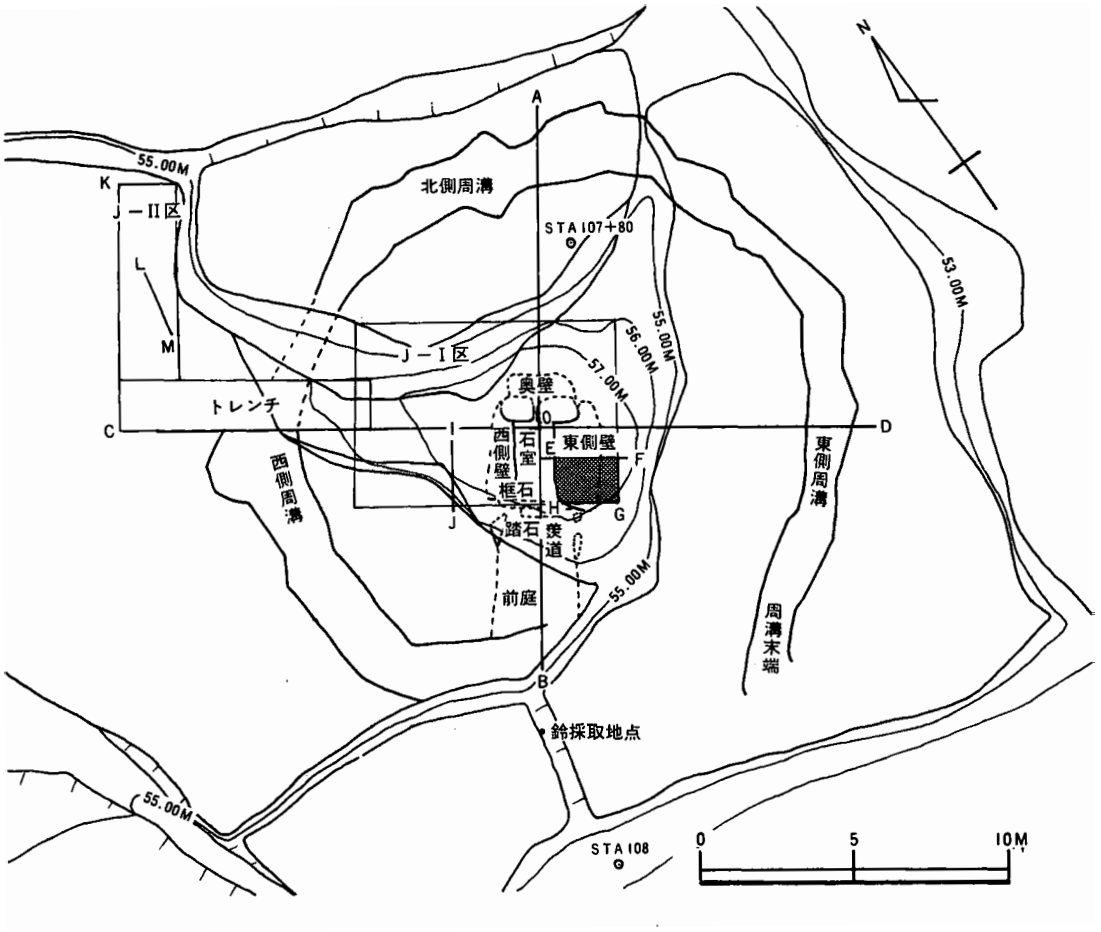
a、石室内の土石を排出して、石室の実測を行う。

b、墳丘を四分割して封土の状態を観察した後、築造時における地表面まで封土を除去する。

c、封土除去後、石室の掘り方の観察をする。

d、周溝の有無を確認し、有する時は、全面を露出し、実測する。

e、古墳に付随する遺構はできうる限り、露出させ築造の工程が最大限把握できるように調査する。



第6図　岩立C古墳調査区分図

f、調査実施中、安全性を優先する。

B地区の各部の名称は、第6図に示す。

OA・OB・OD・EF・IJ・CK・LMは断面図を取った位置を示す。

長方形に囲んだJ－I、J－II区は縄文土器を発掘した区域を示す。

（村井）

2　調査日誌抄

4月21日　A地区の日記に記録したように、雨のため作業を中止する。

4月22日　八代郡宮原町教育委員会の佐々木主事と協議し、今回発掘する五ツ穴横穴近くの古墳の名称を「岩立C古墳」と呼称することにした。

なお縦貫道用地周辺の踏査によって、新たに1基の高塚古墳を発見し、近隣の2基の古墳を合わせて「岩立古墳群」と呼称することにした。

A古墳ー七ツ穴横穴群の東側、宮原町と竜北町の境界の宮原町側にある。石材、墳丘が残存する。

B古墳ー石棺が出土したとの伝承あり。径10m程度の墳丘状の高まりがある。

C古墳ー今回調査する古墳

4月26日　墳丘の除草作業を行う。

5月4日　墳丘周辺の枯木の整理と除草した草を焼却する。

5月7日　墳丘の平板測量（1/100）を開始する。

5月11日　石室内の土石の排出作業を開始する。室内は、まさにゴミ捨て場であり、ガラス片が多く出る。それらに混って須恵器片、瓦質土器、埴輪片等が出土した。

5月17日　第6図のODの南側を発掘する。周溝を検出した。 墳丘の東側の周溝の上、耕作土層直下から磨製の石斧が出土した。

5月20日　17日検出の周溝を追跡する。

5月27日　周溝の輪郭をおおよそ露出させることができた。

5月31日　前庭部の表土の排土中から馬具の帯金具と思われる鉄地金銅張の鈒具を検出した。

6月11日　石室内の土石を排出する。礫やゴミ（電球の部品、ガイシ、窓ガラス片、茶碗片等）が出土する。

6月22日　鈒具（鉄地金銅張）の出土地点の近くの崖ぎわの桧の根元から金環が出土する。

7月1日　周溝（第Ⅹ区）から鉄鏃や馬具の一部が出土する。

7月5日　周溝の形は、石室を中心として「の」の字状になっていて、しかも6角形〜8角形状を呈している。

7月7日　八代郡宮原町、平原瓦窯跡の調査現場から援助をうけて調査の能率をはかることにする。墳丘の4分割・石室の俯瞰図作成・羨道部発掘、周溝の実測、石室床面の検出作業等を行う。

7月9日　第Ⅹ区出土の鉄鏃や馬具の出土状態の実測および取り上げを行う。

7月14日　装身具や馬具の出土した付近の土を水洗する。一輪車7台分ほど水洗したが土師

器片が数片出土しただけであった。

7月26日　墳丘を構築以前の地表面（旧地表面）が焼けていることに気付く。しかも、焼土の広がりの様子から見て壁となる石材を建ててから火を焚いたと考えられる。

8月3日　石室の実測を行う。石材の風化の進みぐあいから開口してかなりの年月を経ていると思われる。床は、残存していた一部分の様子から考えて、こぶしより大きな石をしきつめた礫床上に粘土をうすく張ってつくったと考えられる。

8月5日　壁面の隅の部分にうっすらと赤色の顔料が残っていることを確認する。石室内を一面に塗布してあったとも考えられるが、その可否は断言できない。

8月12日　墳丘西方に土層観察用のトレンチを掘る。

8月13日　本日から16日まで盆休みをとることにして調査を休止する。

8月19日　これまでの実測図の点検を行う。

8月23日　水洗した遺物を乾燥させた後、荷造りを開始する。

8月27日　周溝の平板測量と周溝中の遺物の取り上げを行う。

8月31日　本日にて作業員を使っての発掘作業は終了する。

9月3日　4月21日以来、発掘作業を行ってきて終了したので遺物及び器材を全て撤収して、収蔵庫に搬送する。

3　調査内容

1）外部構造

①　墳丘（第7図）

墳丘は、三枚の畑（密柑園・菜園）の境にある。墳丘は三方から掘削されたために、三角錐状になっている。

墳丘の存在する台地は第2図と第7図に示すように谷間の南斜面に舌状に突出した微高地である。この微高地の基盤は第7図に墳丘の断面と土層の断面を模式的に示しているように墳丘の封土下に旧表土J－1層（古墳時代の表土層0.10m）、明褐色土層J－2層（縄文前期遺物包含層0.16m）、明褐色土層J－3層（縄文早期遺物包含層0.28m）、凝灰岩約2m）、阿蘇火砕流Ⅲ（黒色熔結凝灰岩、石材として採石されている）がある。

墳丘は東側にゆるやかに傾斜している旧地表面（海抜55.8m）上に構築されている。墳頂は、海抜57.9mである。墳丘の径は、第6図のA－O－B方向で14.4m、C－O－D方向で16.7m（周溝を含むと20.6m）である。

墳頂近くには、葺石がていねいに葺かれていた。葺石は墳丘の断面観察から墳丘全体を葺くのではなく、何段かにわけて帯状に葺かれていたと思われる。

第３表は、墳丘上にあった葺石と墳丘の裾に転落していた礫(葺石と考えられる）を計測した結果である。葺石は自然礫であり一定した形でないので一番長い部分を縦、次に長い部分を横、縦と横でつくる面に対して直角方向の厚みを高さとして計測した。この表から縦18cm、横13cm、高さ８cm前後（重さにして５～６kg前後）の礫を葺石として使用していることがわかる。礫の大部分がチャートと礫岩であり、その比は13対２である。これらの礫は付近一帯の洪積層の露頭や永川の川底で見つけることができる。他に凝灰岩が少数混じっていた。

	たて	よこ	高さ
5 cm 未満			99個
5cm以上～10cm未満		95個	285
10 ～15	85個	218	50
15 ～20	179	87	8
20 ～25	102	36	2
25 ～30	58	8	
30 ～35	11		
35 ～40	8		
40 cm 以上	1		

第２表　葺石の計測値

円筒埴輪片が墳丘中腹部(海抜57.00m）の表面から検出された。埴輪片はこれ以外に８片(周溝中や表採等）ほど採収している。

第Ⅶ′区において周溝の縁から1.5mほど墳丘の中心の方向にはいった所から糸切底の皿が出土している。この皿は耕作土の下、縄文土器包含層（Ｊ－３層）の一部残存している所の上にはりついたようにして出土した。出土状態から見てこの皿は原位置から動いているとは見えない。このことから中世においては古墳の墳丘の裾は第Ⅶ′区付近において、周溝から1.5mほど削平等によって縮小していたとも考えられる。

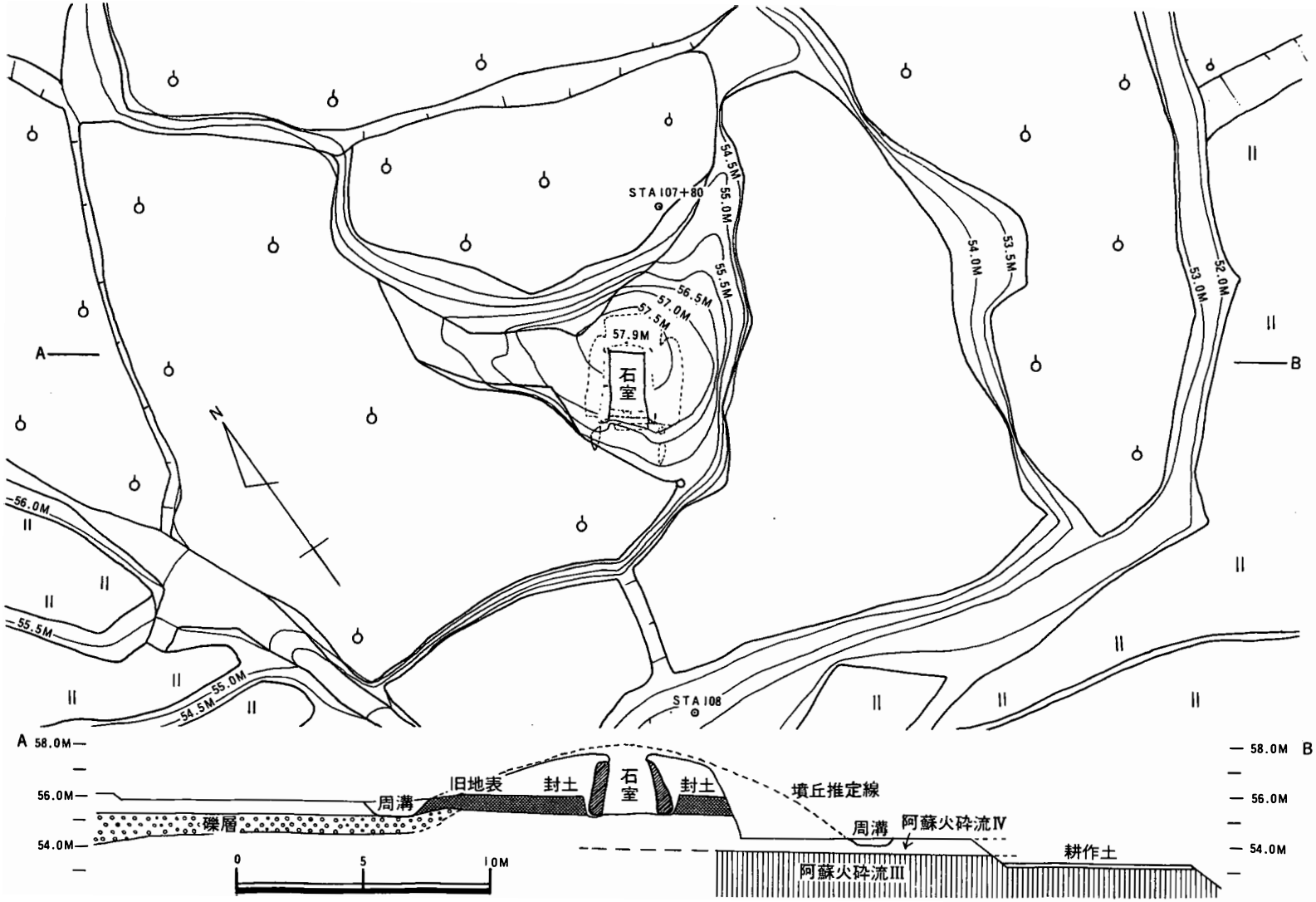
第８・９図に墳丘のＡＯ、ＣＯ、ＤＯ、ＩＪ断面図を示す。

ＡＯ断面図〈第８図〉は石室の主軸方向に切断した墳丘の図である。現状における封土の高さは2.05mである。墳頂近くの表土（Ⅰ）下には葺石が少し間隔をおいてならんでいる。奥壁上端部（天井石の乗る部分）の高さに凝灰岩の細片を含む層（Ⅲ）がある。厚さ0.40mあり、石室側が高く外側にいくに従って低くなっている。封土の塊はレンズ状になっている。厚い所で0.3m程度あり、広がりは一定しない。土盛の状態を全体的に見ると、石室の方が少し高くなるように盛り上がっている。

旧表土層（Ｊ－Ⅰ、海抜 55.72m）は淡い黒褐色の土層であり、表面は焼けている。この上に封土を盛り上げて墳丘が構築されている。Ｊ－Ⅰ層は、縄文後期から古墳時代にかけての表土である。

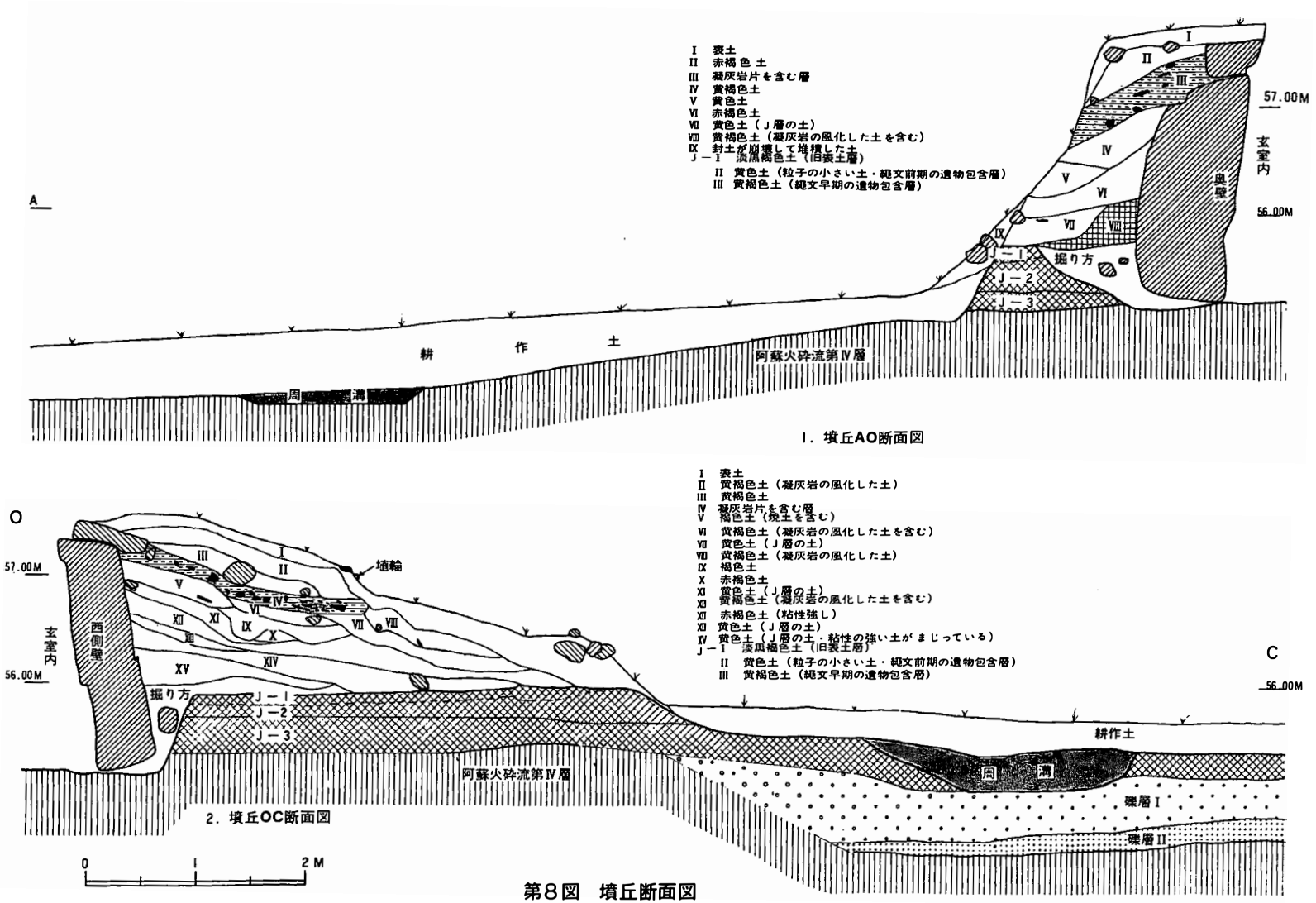
Ｊ－２土層は明褐色土から成っている。黄粉のように見える粘性のあまりない土であり、土の粒子は小さい。縄文前期の条痕調整土器を包含する。

Ｊ－３土層もまた明褐色土から成っているが、Ｊ－２層の土よりも褐色が強く、乾燥すると固くなる。この層は下方にいくにしたがって粟粒から米粒ほどの大きさの軽石状の軟い粒子

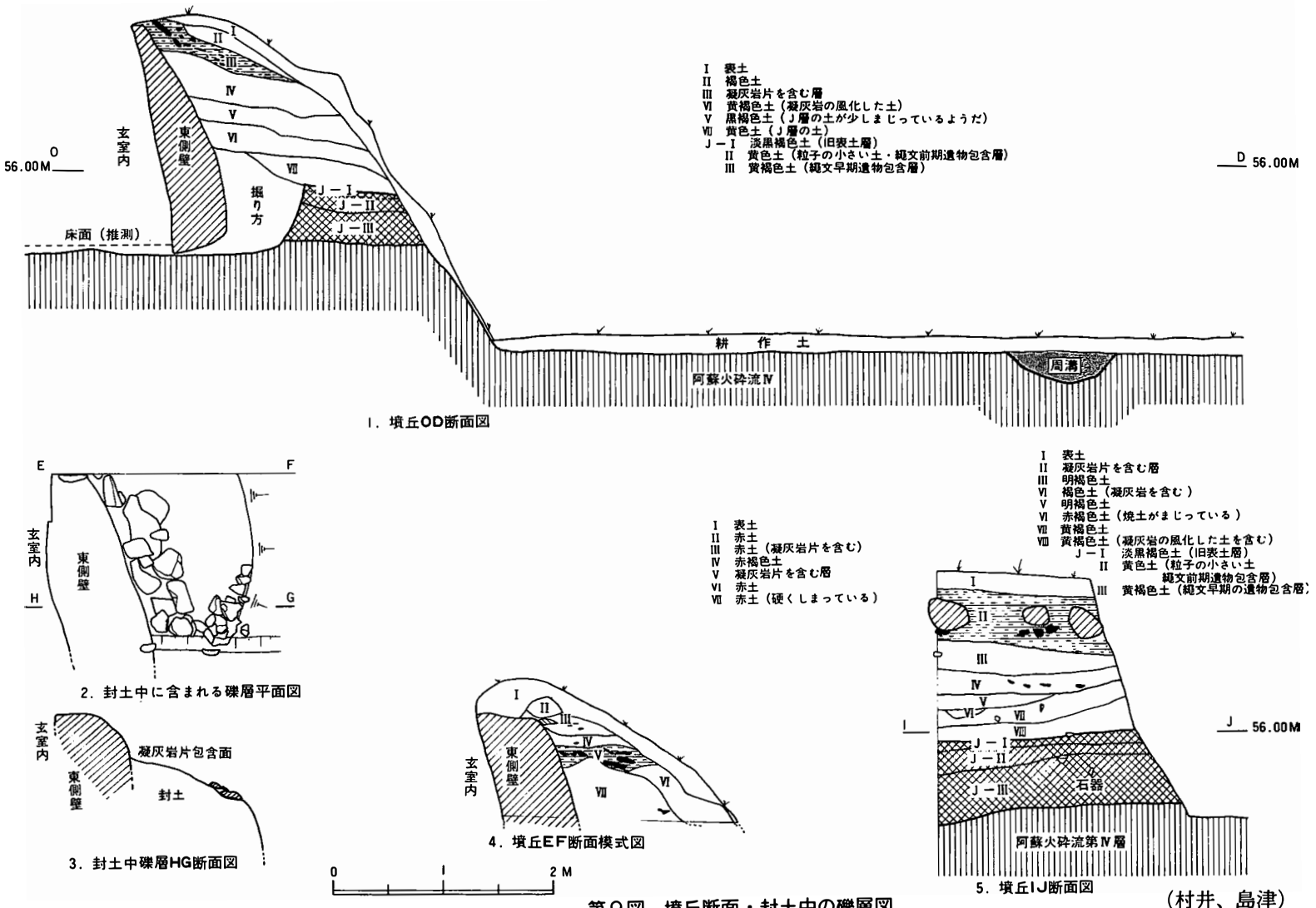


第７図　岩立Ｃ古墳墳丘実測図・断面模式図

（村井）


I 表土
II 赤褐色土
III 凝灰岩片を含む層
IV 黄褐色土
V 黄色土
VI 赤褐色土
VII 黄色土（J層の土）
VIII 黄褐色土（凝灰岩の風化した土を含む）
IX 封土が崩壊して堆積した土
J－I 淡黒褐色土（旧表土層）
II 黄色土（粒子の小さい土・縄文前期の遺物包含層）
III 黄褐色土（縄文早期の遺物包含層）
A
57.00M
56.00M
玄室内
奥壁
掘り方
J－1
J－2
J－3
耕作土
阿蘇火砕流第Ⅳ層
周溝
1. 墳丘AO断面図
I 表土
II 黄褐色土（凝灰岩の風化した土）
III 黄褐色土
IV 凝灰岩片を含む層
V 褐色土（焼土を含む）
VI 黄褐色土（凝灰岩の風化した土を含む）
VII 黄色土（J層の土）
VIII 黄褐色土（凝灰岩の風化した土）
IX 褐色土
X 赤褐色土
XI 黄色土（J層の土）
XII 黄褐色土（凝灰岩の風化した土を含む）
XIII 赤褐色土（粘性強し）
XIV 黄色土（J層の土）
XV 黄色土（J層の土・粘性の強い土がまじっている）
J－I 淡黒褐色土（旧表土層）
II 黄色土（粒子の小さい土・縄文前期の遺物包含層）
III 黄褐色土（縄文早期の遺物包含層）
O
C
57.00M
56.00M
玄室内
西側壁
埴輪
掘り方
J－1
J－2
J－3
耕作土
阿蘇火砕流第Ⅳ層
周溝
礫層I
礫層II
2. 墳丘OC断面図
0
1
2M

第8図　墳丘断面図



第９図　墳丘断面・封土中の礫層図

（村井、島津）

を含んでいる。この層中からは、押型文土器・撚糸文土器・円筒条痕文土器・石器類等が出土し、しかも集石状の遺構も検出されている。

Ｊ－３の下層は黄色の軟い凝灰岩（阿蘇火砕流Ⅳ）の層と成り、古墳の存在する微高地の基盤を成す。さらに下部は黒色の溶結凝灰石の層（阿蘇火砕流Ⅲ）となっている。

ＣＯ断面図（第８図）は石室主軸に対する横断面図（西側）である。現状における封土の高さは旧地表面から1.66ｍである。封土の塊の厚さは0.2ｍ前後である。石室の方が少し高くなるように土を広げてつみ上げた様子が盛土の塊からわかる。側壁の上端部（天井石が乗る高さ）にやはり厚さ0.2ｍの凝灰岩の破砕礫を多く含む層がある。この層は石室の方が高く、外側にいくに従って低くなっている。

ＤＯ断面図（第9図１）はＣＯ断面（第８図）の反対方向に墳丘を切った図である。墳丘の東側は開墾によって著しく掘削されている。封土の重なりの状態は上記２方向の断面と差異はない。この方向の断面にも凝灰岩の破砕礫を包む層がある。

第９図２はＤＥＦＧＨ内の凝灰岩の破砕礫層の層序を表わしたものである。又第9図3・4はＥＦ、ＧＨの断面を表わしたものである。

ＩＪ断面（第８図５）は石室の主軸に平行に西側３ｍの所の墳丘断面図である。封土の高さは1.54ｍあり、他の断面と同様に凝灰岩の破砕礫を含む層（厚さ0.45～0.50ｍ）がある。封土の盛り方は旧表土面に対してほぼ平行になっている。

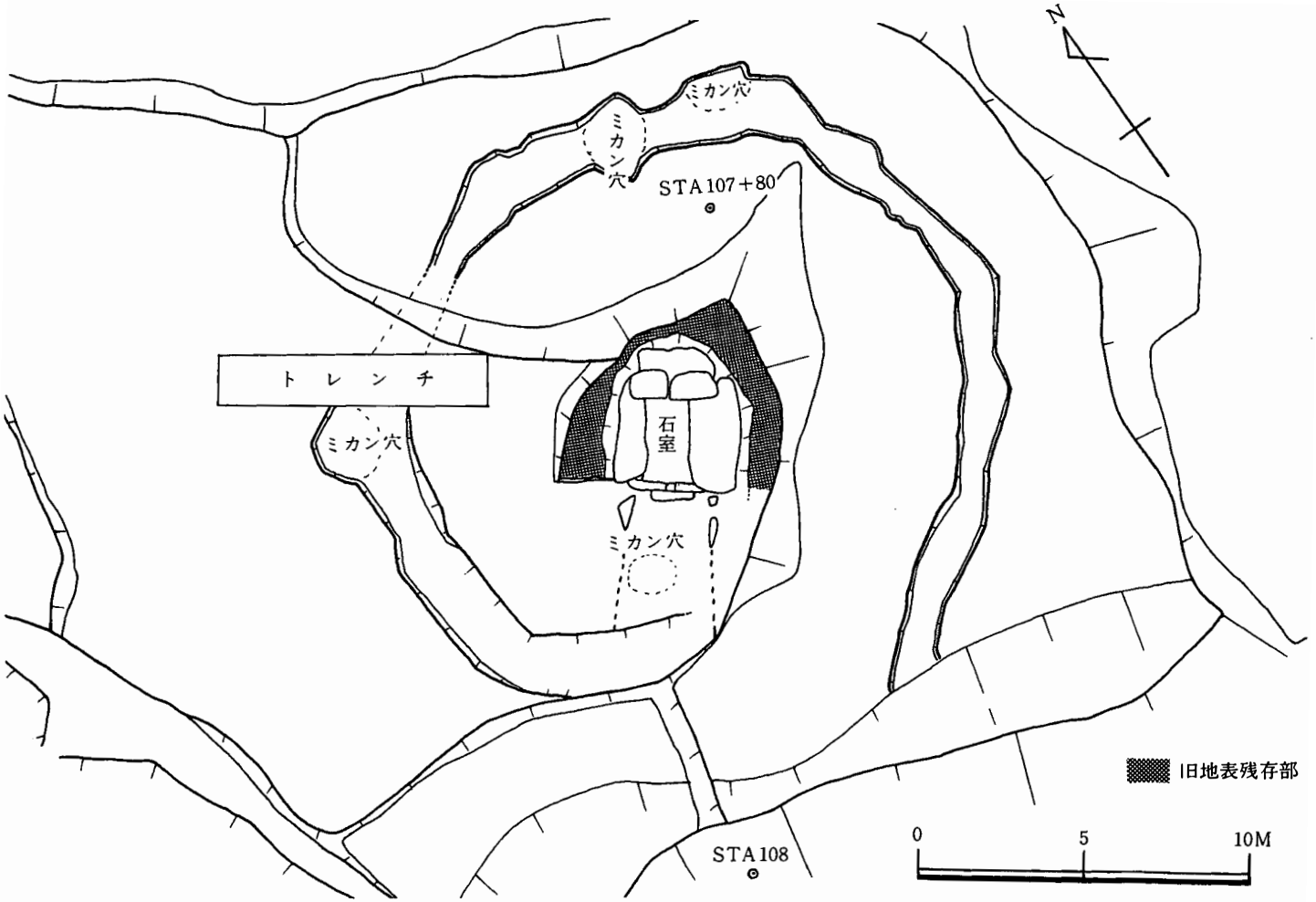
以上のことから次のようなことが考えられる。封土の構築は、石室を頂点として、ゆるやかな斜面を持つ円錐形状に土盛りが行われた。地表から1.2～1.3ｍほど土盛りがなされて、奥壁、側壁の上端部近くで、厚さ0.15～0.50ｍの凝灰岩の破砕礫がひかれている。この礫層は天井石を乗せるために石材の加工がなされたためだとも考えたが、天井石を上の方に持ち上げるために礫をひいたとも、あるいは、高く盛り上げた土を安定させるためにひいたとも考えられる。葺石は墳頂近く（海抜57.4ｍより高い部分）、中腹部（海抜57.0ｍ前後）と裾の部分（旧地表近く）に帯状に並べられていた可能性が強い。円筒埴輪片が墳丘中腹部（海抜57.0ｍ、第8図）に検出されている。また、周溝中や表採資料中から合わせて９点検出されているので、少数ながらも埴輪が存在していたと考えられる。

② 周溝（第10図～第20図）

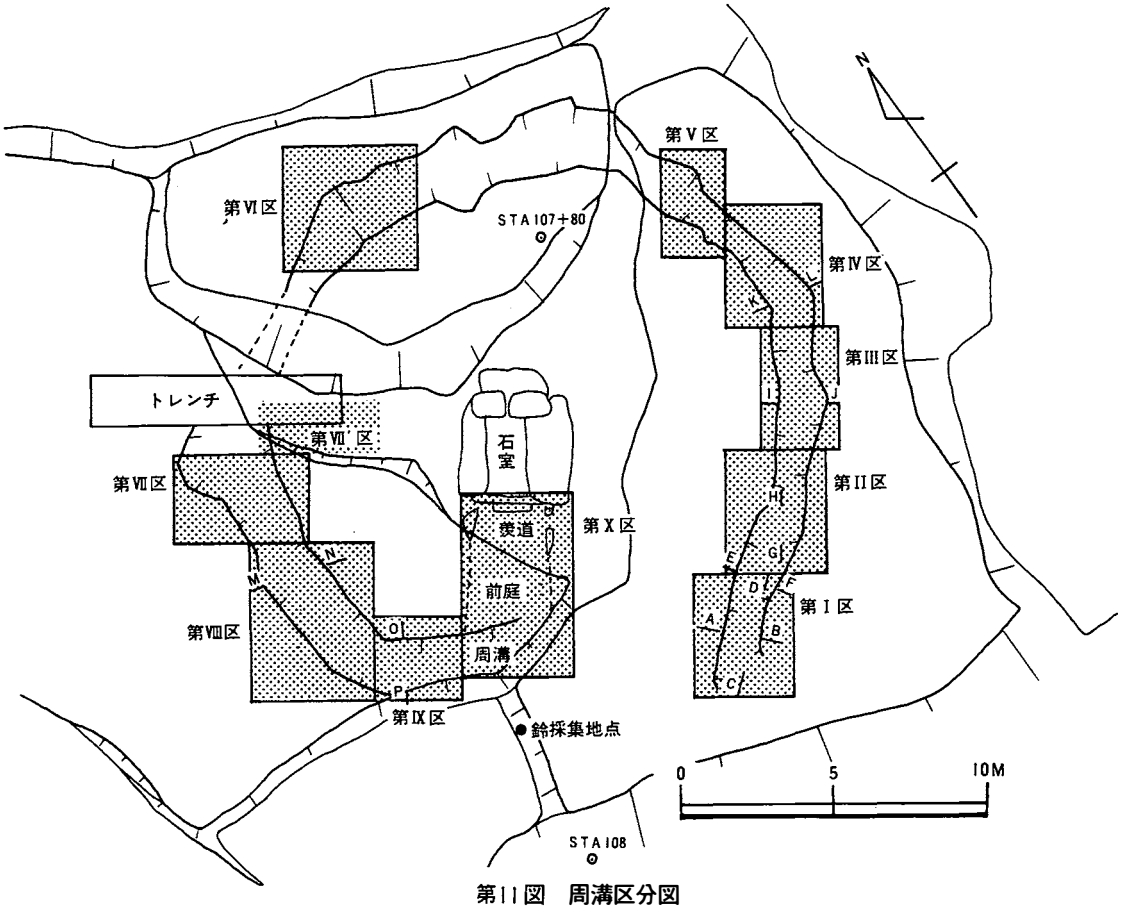
周溝を全体的に見ると石室を中心として「の」の字を描くようにして羨道部と周溝が繋がっている。また、整然とした「の」の字ではなく多角形状になっている。第10図は周溝の全体図である。周溝の幅1.9～0.9ｍ、框石から周溝末端までの中心線の長さ56.6ｍを測る。

周溝の上面は強く削平されていて、元の掘り込み面と現状における掘り込み面とを比較すると約 0.4ｍは低くなっていると考えられる。

第12図は縦軸に周溝中央部の海抜高を、横軸に框石から周溝までの距離を取って周溝の傾斜の



第10図　周溝全体図



第11図　周溝区分図

状態をグラフ状に示したものである。 この図から羨道部と周溝の末端との落差が約1.1mあることがわかる。 また周溝全体図（第10図）と合わせて考えると周溝が緩やかな螺旋状を描くことが理解できるであろう。

周溝の末端は南側の高い崖（落差約 2.5m）の方に開き、その部分で周溝は終る。

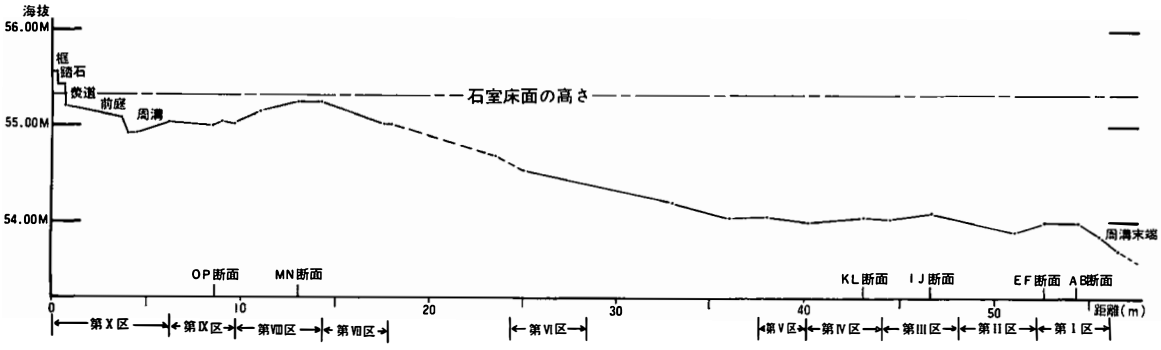
周溝の各部の実測及び遺物の出土状態を記録するに当って周溝の幅が狭く長く曲線を描くので、第11図に示すように第Ⅰ区から第Ⅹ区に区分して記録した。第Ⅹ区は周溝以外に羨道部と前庭部を一繋がりにして区分せずに1枚の図に納めた。

周溝中からの出土遺物を概括すると第Ⅰ区から第Ⅲ区にかけて、須恵器の大甕片多数、土師器長頸壺、須恵器高坏、須恵器長頸台付壺が出土し、第Ⅳ、Ⅴ区から多数の鉄鏃、装身具、馬具、鉄片、埴輪片等が出土した。

周溝中出土の埴輪片（第Ⅷ区出土、一片のみ）は周溝の底にはりつくようにして出土したが、馬具、装身具、鉄鏃、鉄片等は有機質の黒色土中に含まれていて、周溝底より浮き上っていた。有機質の黒色土中には古墳時代の遺物に混じって古墳の用材の一部と思われる凝灰岩片（一部を面取りしてある）や葺石に使用されたと思われる礫が含まれている。 中世の遺物の大半は

第Ⅶ・Ⅷ区から、古墳時代の遺物に混って有機質の黒色土中から出土している。

周溝の各部の大きさ、形の変化、遺物の出土状態については、第11図（周溝区分図）の区分に従って以下述べる。



第12図　周溝勾配模式図

○第Ⅰ区

周溝の末端部であり先述したように南側の高い崖の方に開いている。周溝は軟い黄色の凝灰岩（阿蘇火砕流Ⅳ）に掘り込んで造られている。周溝の末端から崖渕まで傾斜面が約２ｍあり、その先端が黒色の凝灰岩（阿蘇火砕流Ⅲ）の露頭となって急激な崖（落差約２ｍ）になっている。

耕作土を排除した後の、周溝の上面を露出した状態（第13図１）を見ると、周溝は少し蛇行しているが、中心はほぼＮ－50°－Ｅの方向に延びていて、幅1.0～1.2ｍある。

周溝の掘り込みの上面は開墾によって著しく削平されて底に近い部分のみが残存している。現状における周溝の掘り込みの上面は、海抜54.2ｍである。掘り込みの角度はＡＢ断面において、内側で75°あり、外側は凹形に浸食をうけているため掘り込みの角度は不明である。

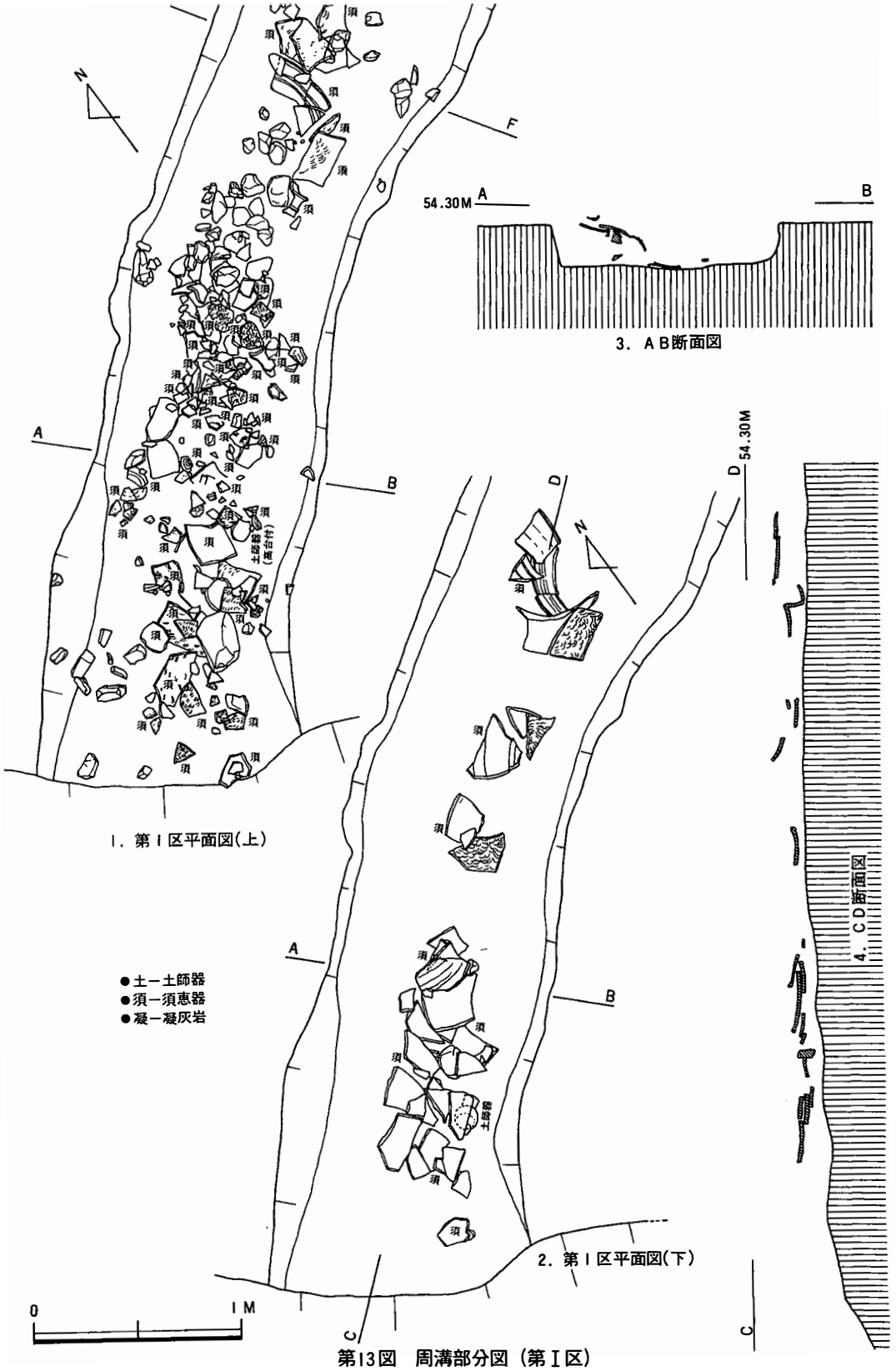
周溝の末端部を溝の延びる方向に断面を取ってみると、底面はほぼ平坦であり、海抜約54.0ｍである。底面が波うっているのは流水による浸食によるものと考えられる。

遺物の大部分は須恵器の大甕の破片で、礫の間から検出された。これらの破片は近くからまとまって出土し、接合したところ、大甕の口縁から胴部が復元できた。破片の割れ口は摩耗していないことと、周溝内に堆積した遺物や土砂には層位が明瞭でないことから短い期間内に、これらが堆積したと考えられる。

出土遺物が多く、上部の遺物を取り上げて溝底近くの遺物の出土状態（第13図2）を実測した。須恵器の大甕片の下から、周溝の底面にはりつくようにして赤色の土師器長頸壺が完全な形で出土した。また大甕片の間から鉄器が１個出土した。

遺物の最上部から平安時代の須恵器高台付埦（赤焼き）の底部が検出されているので、平安時代頃までは周溝が完全には埋没していなかったと考えられる。

ＣＤ断面（第13図）は周溝末端部を周溝の延びる方向に切断した図である。末端部の底面は



第13図　周溝部分図（第Ⅰ区）

崖の方にゆるやかに傾斜し、急に崖渕に落ち込んでいる。

○　第Ⅱ区（第14図）

耕作土を排除して、第Ⅰ区と同様に周溝と遺物を露出した。周溝の中心線は第Ⅰ区に引き続いてN－50°－E方向に延びているが、EF断面を取った部分近くでN－60°－Eの方向に少し屈曲し、第Ⅱ区の中央部でN－45°－E方向に再び大きく屈曲している。周溝の幅は1.5m～1.0mを計る。

現状での掘り込み面は海抜54.3mあり、内側の掘り込みの角度は75°、外側は浸食されて急になっていて掘り込みの角度は不明である。

周溝底の海抜高は台付長頸壺の出土地点の北東側で54.3m、高坏の出土地点の南西側で53.9mである。

出土遺物はEF断面付近まで須恵器の大甕の破片が出土し、これより北西側からは少数の須恵器片・土師器片が出土するが、他は周溝中に流れ込んだ土石のみである。この土石は周溝の末端部（第Ⅰ区）に多くの遺物が堆積していたため排水が悪くなり、より厚く堆積したと思われる。これらの土石を排除したところ、無蓋高坏（須恵器、ほぼ完形）・長頸台付壺（須恵器、完形）・長頸壺（土師器、ほぼ完形）が出土した。

これら3点の遺物は、周溝底にはりつくようにして、中央より墳丘側によった所に、約0.6mの等間隔で検出した。

須恵器の無蓋高坏は坏部は砕けて、坏部を下にして出土した。

土師器の長頸壺は薄手で脆く、底部が著しく破損していた。口縁部は元々欠失しており、横転していてほぼ北東（N－38°－E）の方向を向いて出土した。

須恵器の台付長頸壺は口縁部が破損していたが、破片を接合したところ、完形となった。横転していて、向きはほぼ北東（N－58°－E）である。

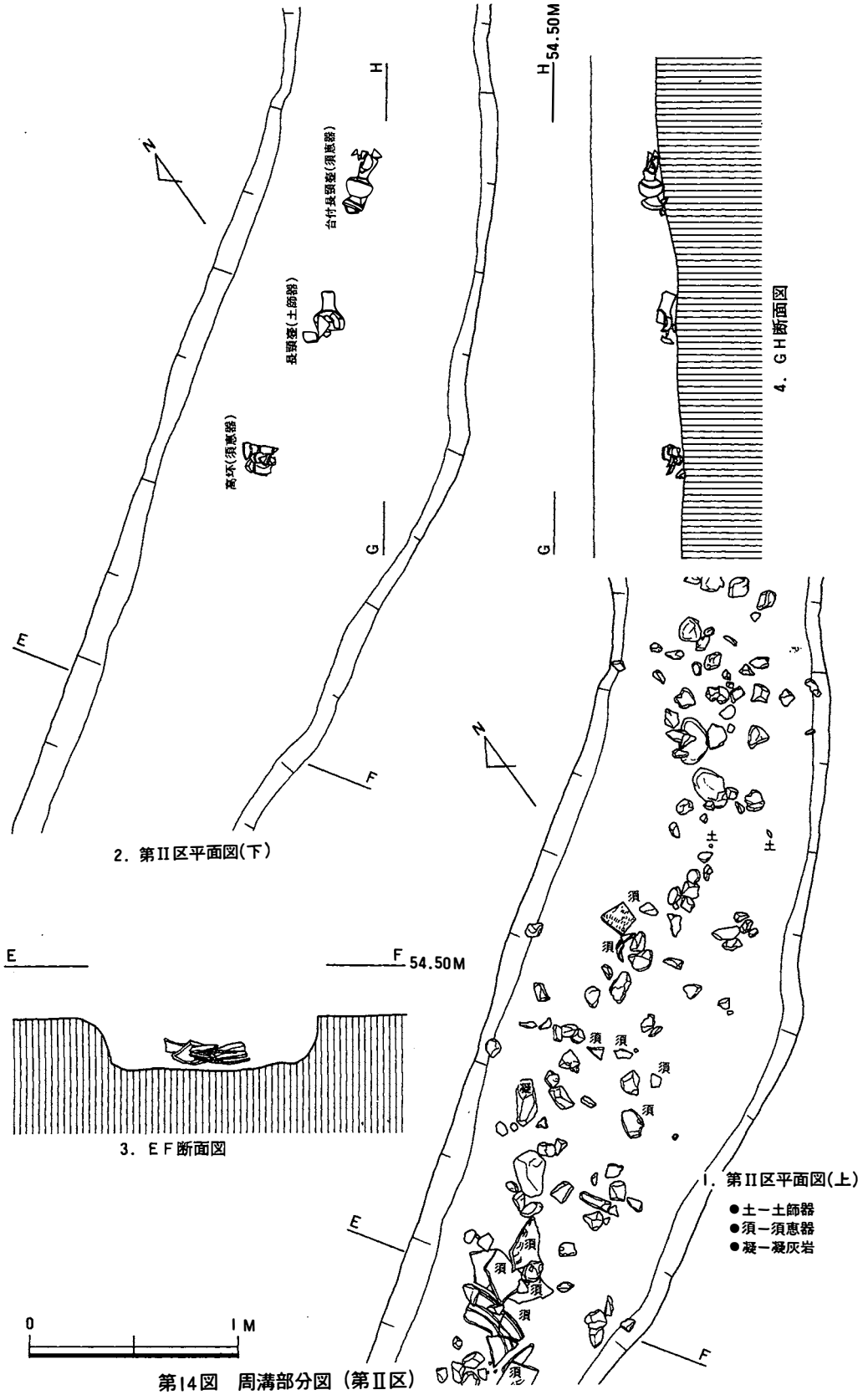
これら3点の遺物は、いずれも一部が砕けていたことから周溝が造られてまもない頃、周溝の上（墳丘）に置かれていたのが転落した可能性が充分に考えられる。

○　第Ⅲ区（第15図1）

大きく削平されていて、残存状態は悪い。現掘り込み面から約15cm、幅0.9～1.1mの周溝の底部が残存しているのみである。

周溝の幅1.0m、周溝の底面は海抜54.1mである。掘り込みの角度は約70°であり、断面の形は台形である。局部的に見ると、周溝は直線状であるが、中心の方向はN－45°－E方向に延びていたのがIJ付近からN－30°－E方向に屈曲している。

出土遺物としては、耕作土直下(周溝最上部)から磨製石斧が礫に混って出土したほかは須恵器、土師器の細片（器形不明）が少量出土したのみである。



第14図　周溝部分図（第II区）

○　第Ⅳ区（第15図2）

現掘り込み面での周溝の幅は0.7～1.2mである。深さはＫＬ付近で局部的に深いが、北側にいくにしたがって浅くなり0.1mの深さになる。

ＫＬ断面の部分は周溝の屈曲部であり周溝底が周囲より少し深い。周溝の現掘り込み面は海抜54.3mである。ＡＢ～ＩＪの間においては、周溝底はほぼ平坦であるが、この部分では中央部が深くなり丸味をおびている。おそらく平坦であったものが流水の浸食をうけて丸くなったのであろう。周溝底の中央部で海抜54.0m、周溝幅1.2mである。掘り込みの角度は内側70°、外側60°であり、外側が少しゆるやかになっている。

第Ⅲ区からＮ－30°－Ｅ方向に延びていた周溝がＫＬ部分で大きく屈曲し、Ｎ－５°－Ｗ方向に伸びる。周溝中の遺物としては屈曲部近くから周溝底に炭化物がごく少量はりついていることを認めたほかに器種不明の土師器を採取した。

○　第Ⅴ区（第16図１）

第Ⅳ区と同様に遺物は出土せず、周溝中からは流入したと思われる礫だけが出土した。元の掘り込みの面はかなり削平されていて深さ約0.1mの周溝の痕跡が残存していた。周溝の幅は0.9～1.1mである。

周溝の中心線は第Ⅳ区に引き続いてＮ－５°－Ｗ方向に延びて、この区に入ってから２m北側部分から屈曲してＮ－71°－Ｗ方向に延びる。

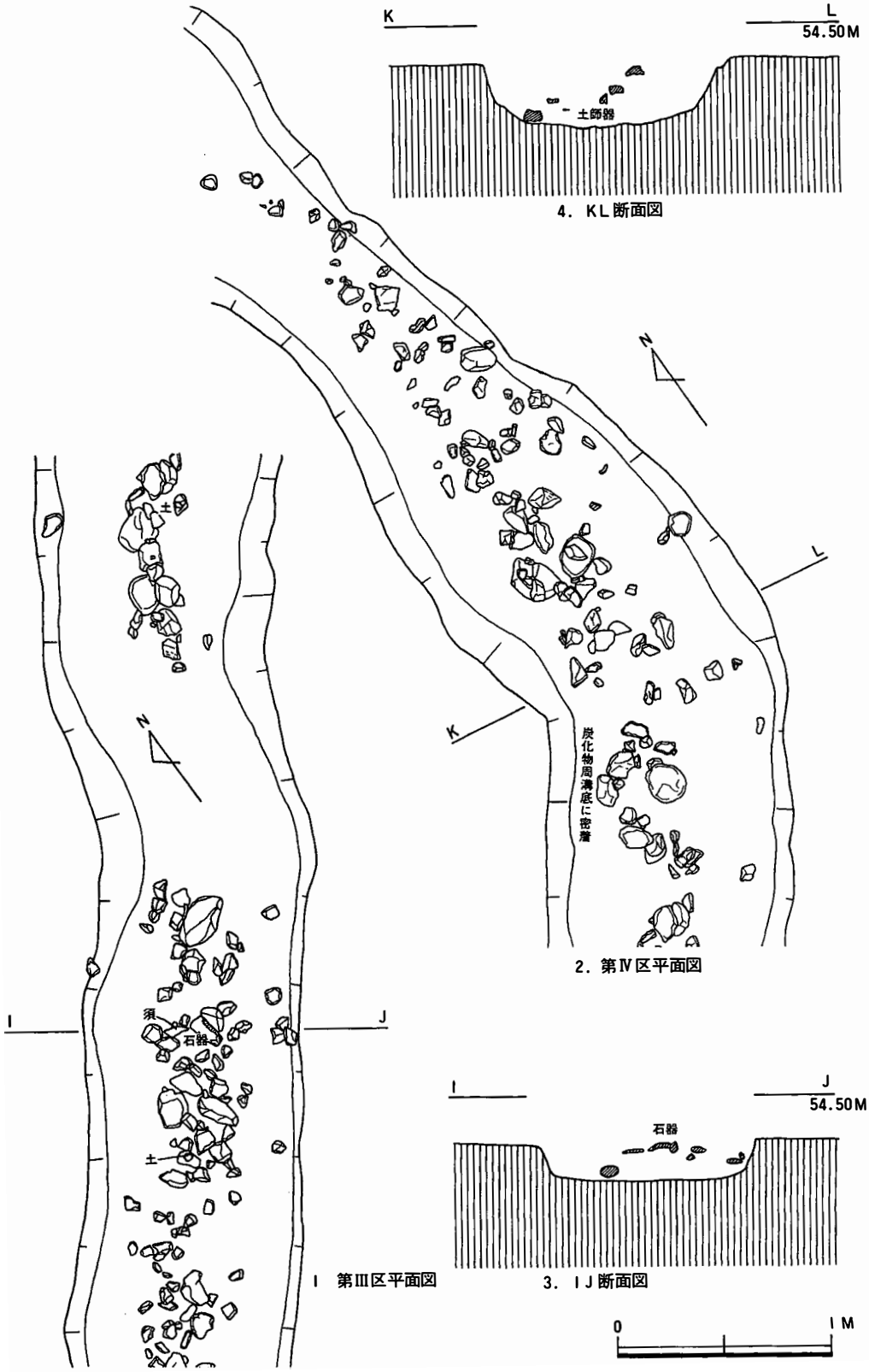
※　第Ⅴ区と第Ⅳ区との間は開墾によって著しく削平された上に蜜柑植樹のために攪乱をうけていた。周溝中からの出土遺物はなく流入したと思われる礫のみであった。

○　第Ⅵ区（第16図２）

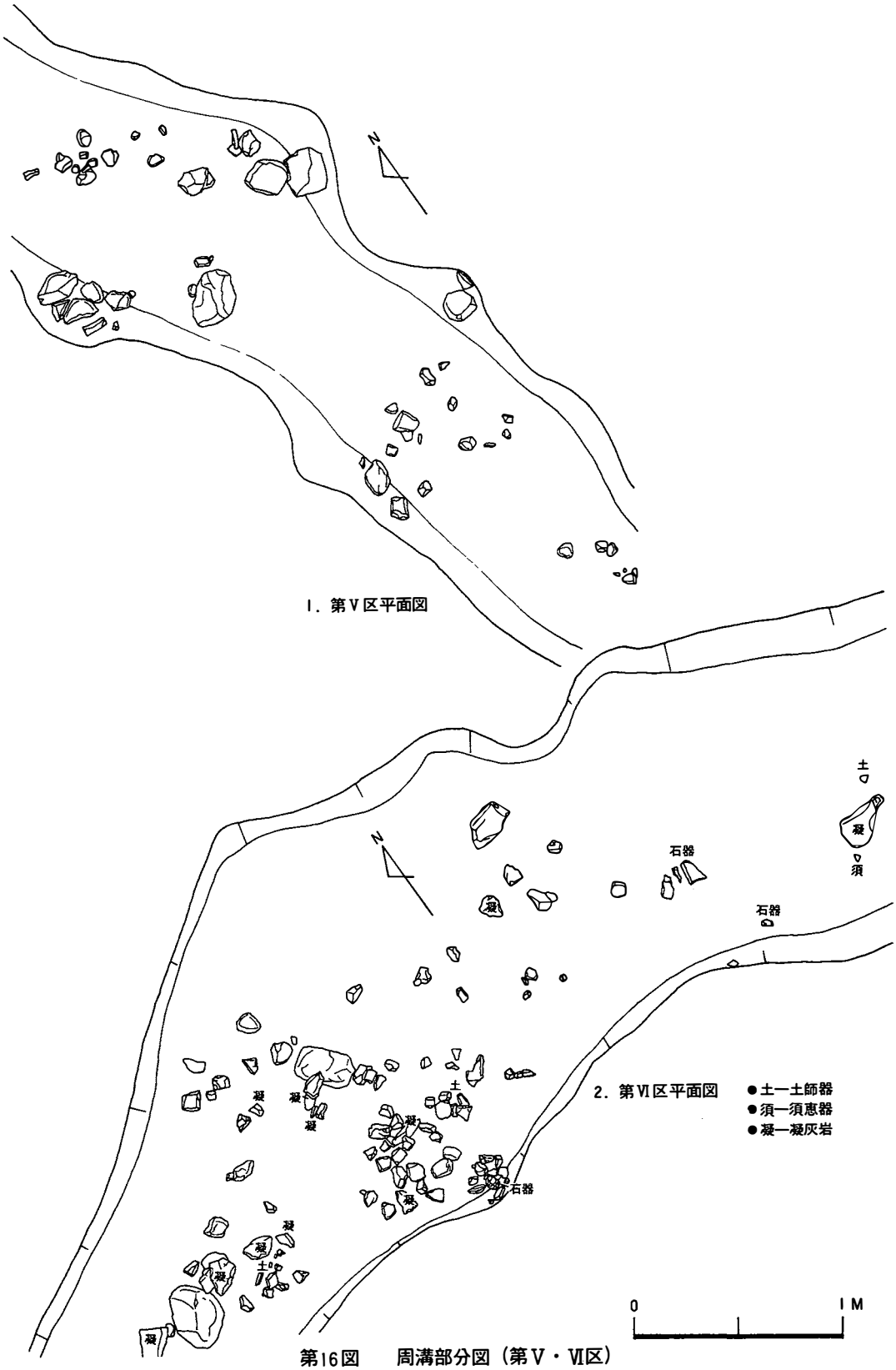
墳丘の北側から西側に屈曲する部分である。この部分もまた開墾によって著しく削平され、周溝の痕跡を残すのみである。現掘込み面は海抜54.7mである。周溝の深さは、0.05～0.20m、幅は1.2～1.6mある。中心はＮ－71°－ＷからＮ－113°－Ｗ方向に屈曲している。周溝中からは、礫に混じって石核や石器が出土した。土器は検出されなかった。第Ⅵ区と第Ⅶ区との間には現掘り込み面において0.7m、周溝底において0.5mの落差がある。このことから、開墾時に崖を掘削したと思われ、周溝が完全に切断されている。

○　第Ⅶ区（第17図１）

第Ⅶ区の東側（墳丘側）である。第Ⅶ区には多数の中世の遺物が出土しているが、この区からも土師器の糸切り底の皿が古墳築造当時の地表面よりも下の縄文土器包含層の上面にはりついて出土した。この土器の出土状態から見て二次的に動いたとは見えないので、土器が埋蔵される時点で墳丘の裾部がすでに掘削され、周溝から1.5mほど墳丘が縮小していたと考えられる。そうしてこの部分に何か中世の遺構が存在したと思われる。このことは、第Ⅶ区、第Ⅷ



第15図 周溝部分図（第Ⅲ・Ⅳ区）



第16図　周溝部分図（第Ⅴ・Ⅵ区）

区から多くの土師器の糸切り底の皿や瓦質土器片を検出している上に、第Ⅶ区付近の地表から第34図に示す五輪塔の空風輪を採集していることと関連があるものと考えられる。

○　第Ⅶ区（第17図２）

第Ⅶ区から第Ⅷ区にかけては蜜柑植樹による攪乱が二ヶ所あるが、周溝が深いため遺構の保存状態が良い。周溝中には有機質の黒色土が堆積し、その中に縄文時代の遺物（石器）・古墳時代の遺物・中世の遺物が混入している。周溝中の埋土を層位的に把えようと努力したが、中世の遺物（糸切り底の土師器の皿）が周溝の底面近くからも出土したので、層位的には把えることはできなかった。

現掘り込み面は海抜55.5m、深さは0.2〜0.4m、幅は1.7〜2.1mである。中心線は第Ⅵ区からつづいてN－113°－W（推測）方向から北側のミカン穴付近で屈曲して、N－6°－E方向に延びる。

周溝中出土の遺物は有機質の黒色土に混入した土器の細片（瓦質土器、土師器）と石器である。なお、この区の上部から五輪の空風輪を表採したので、この区の付近に中世の何かの遺構が存在したことが考えられる。

○　第Ⅷ区（第18図）

第Ⅶ区と同様、有機質の黒色土に混入した状態で礫や土師器の細片（古墳、中世）、須恵器片が出土したほか、埴輪片が周溝の壁面にはりついたようにして１点だけ出土した。

現掘り込み面は海抜55.5m、深さはMN断面付近では深く、OP断面近くの屈曲部付近からは浅く0.2〜0.4m、幅は1.3〜2.0mである。周溝底の高さは、OP断面近くの屈曲部付近が海抜55.1mに対してその前後は55.2mで0.1mほど高い。

中心線はN－6°－EからMN断面近くで少し屈曲し、南北方向に延びOP断面近くの屈曲部で強く屈曲してN－120°－E方向に延びる。

現掘り込み面は、内側で海抜55.5m、外側で55.6m、周溝底はほぼ水平で、内側の掘り込みの角度は不明であるが、外側の掘り込みはゆるやかであり、ほぼ17°の傾きがある。

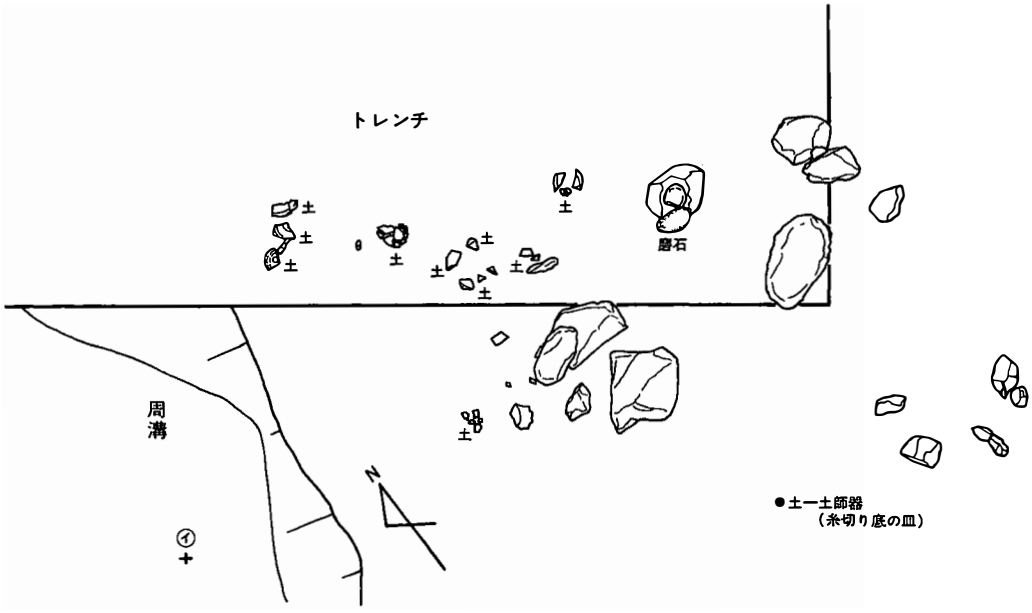
○　第Ⅸ区（第19図）

現掘込み面は、海抜55.2mであり、周溝の外側は開墾により著しく掘削され、幅は不明である。周溝の全体の形から、おそらく 0.3m 以上は掘削されたと考えられる。

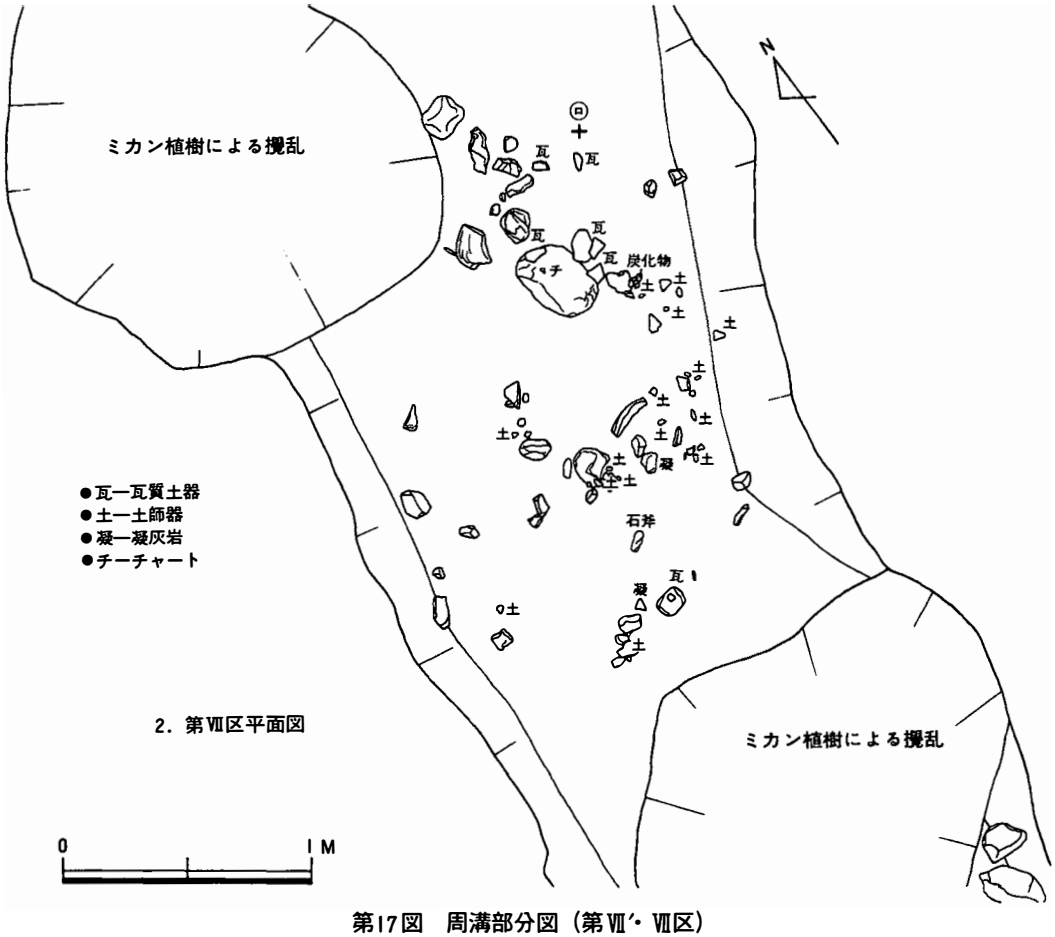
周溝底は南方にゆるやかに傾斜し、中央部で海抜55.2mである。

0.1m掘り込んだ底面は外側にゆるやかに傾斜（約11°）している。基盤は黄色の軟い凝灰岩（阿蘇火砕流Ⅵ）である。

遺物や礫は、ともに周溝底から浮いた状態で出土し、その間は有機質の黒色土が埋っている。

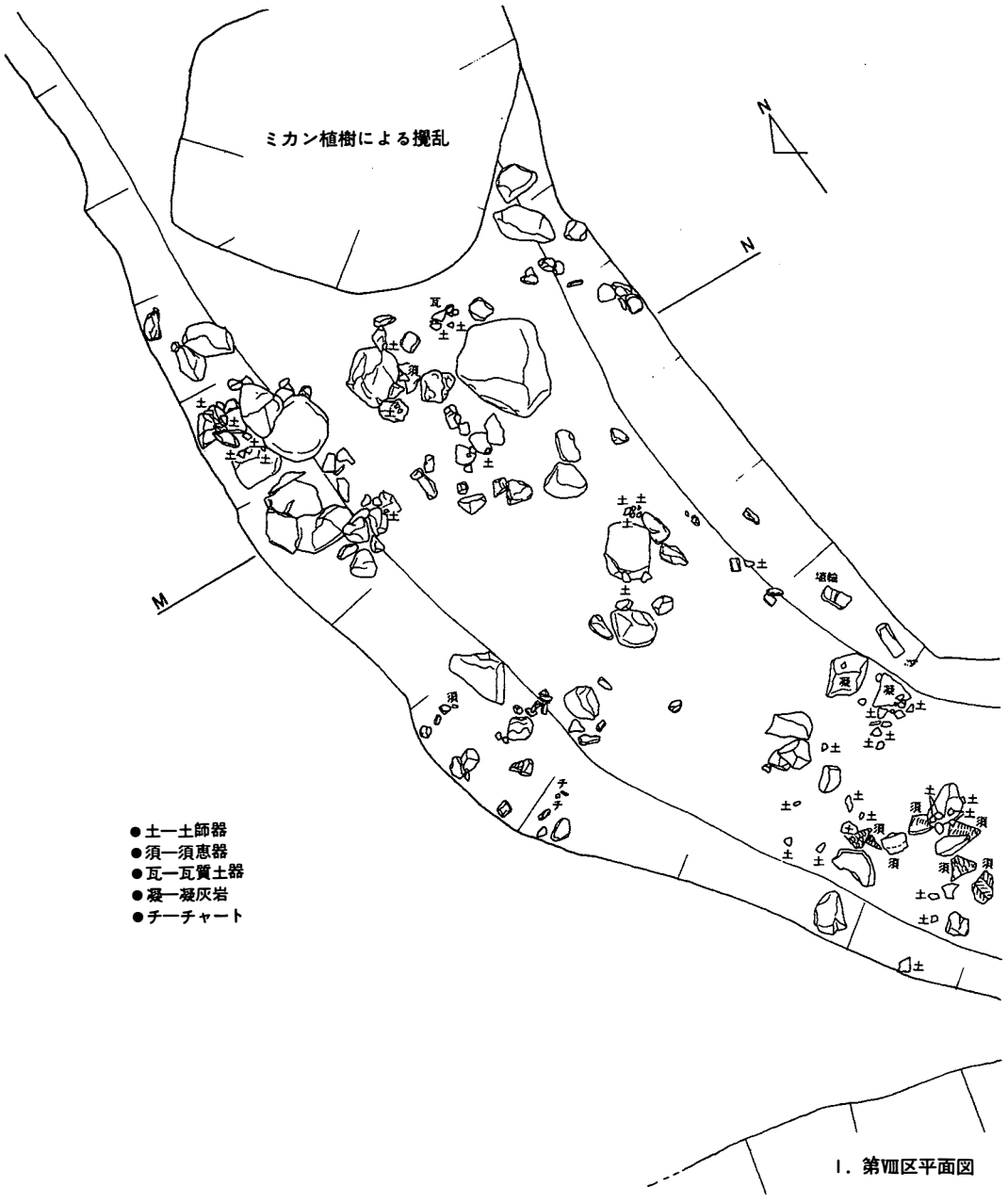


1．第Ⅶ′区平面図　　＋印㋑と㋺は同一地点

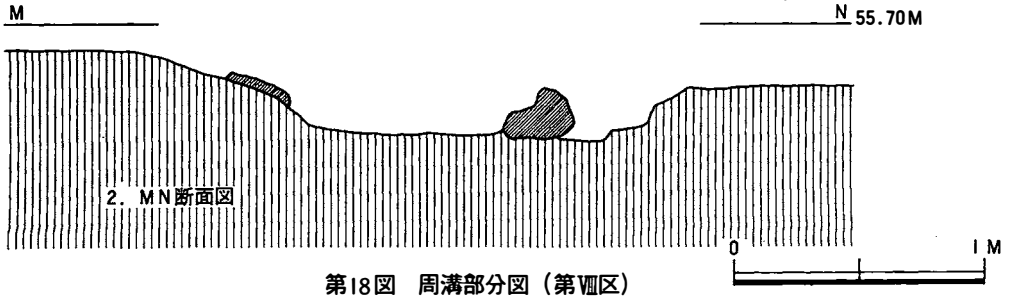


2．第Ⅶ区平面図

第17図　周溝部分図（第Ⅶ′・Ⅶ区）



1．第Ⅷ区平面図



第18図　周溝部分図（第Ⅷ区）

出土遺物としては、黒色土に混じった礫の間から須恵器片、土師器片、鉄鏃、装身具（瑪瑙製の丸玉）等が出土した。屈曲部付近からは、古墳時代の遺物（土師器、須恵器）に混って中世の遺物（糸切り底の土師器片）が出土した。

周溝底は屈曲部付近は高く、ＯＰ付近では外側が低くなっているので、周溝が完全な姿であったとするならば、この屈曲部から羨道にかけては、元々、排水が悪い状態であったと考えられる。

○　第Ⅹ区（第20図）

羨道部・前庭部と周溝とがつながる部分である。周溝の掘り込みは少しずつ浅くなり前庭部とつながっている。前庭部と羨道部との境界の中央部に円形（直径１ｍ）の攪乱部（蜜柑植樹による）がある。框石から周溝の端までの距離は3.7ｍである。羨道部の幅2.2 ～ 2.7ｍ・奥行2.4ｍ前後（推定）、前庭部の幅 2.7 ～ 2.2ｍ・奥行1.2ｍ（推定）である。羨道部と前庭部は同一面で、仕切りのための施設は認められない。

羨道部と前庭部の床面及び框石の前の踏石上から、鉄鏃（２本）、鉄片（21点、帯金具の一部、馬具？の一部、形態が不明な物等）と金メッキのある銅片を検出した。銅片は細片であり、緑青をふいていてもろく、取り上げたところ小さくくだけてしまった。

周溝では、有機質の黒色土の中から、鉄片（使途不明）、鉄鏃、装身具（金環２、銀環１、瑪瑙製の玉１）、馬具（轡、鞍の金具類等）、銅片（緑青をふいた薄片で採取不能）が散乱した状態で出土した。鉄鏃は身や茎の数から40本前後と推定されるが、確認できたのは23本である。

鉄鏃の出土状態は、一ヶ所に集まって出土したものも、単独に出土しものも散乱した状態であった。

馬具の出土状態を見ると、２個の鉸具の間は4.7ｍ、鉸具と杏葉との間は2.1ｍと2.8ｍ、鈴は第Ⅹ区の南側の崖下（開墾の時に崖を掘削したからであろう）の耕作土の下面から検出され、轡から５ｍも離れた位置から検出した。

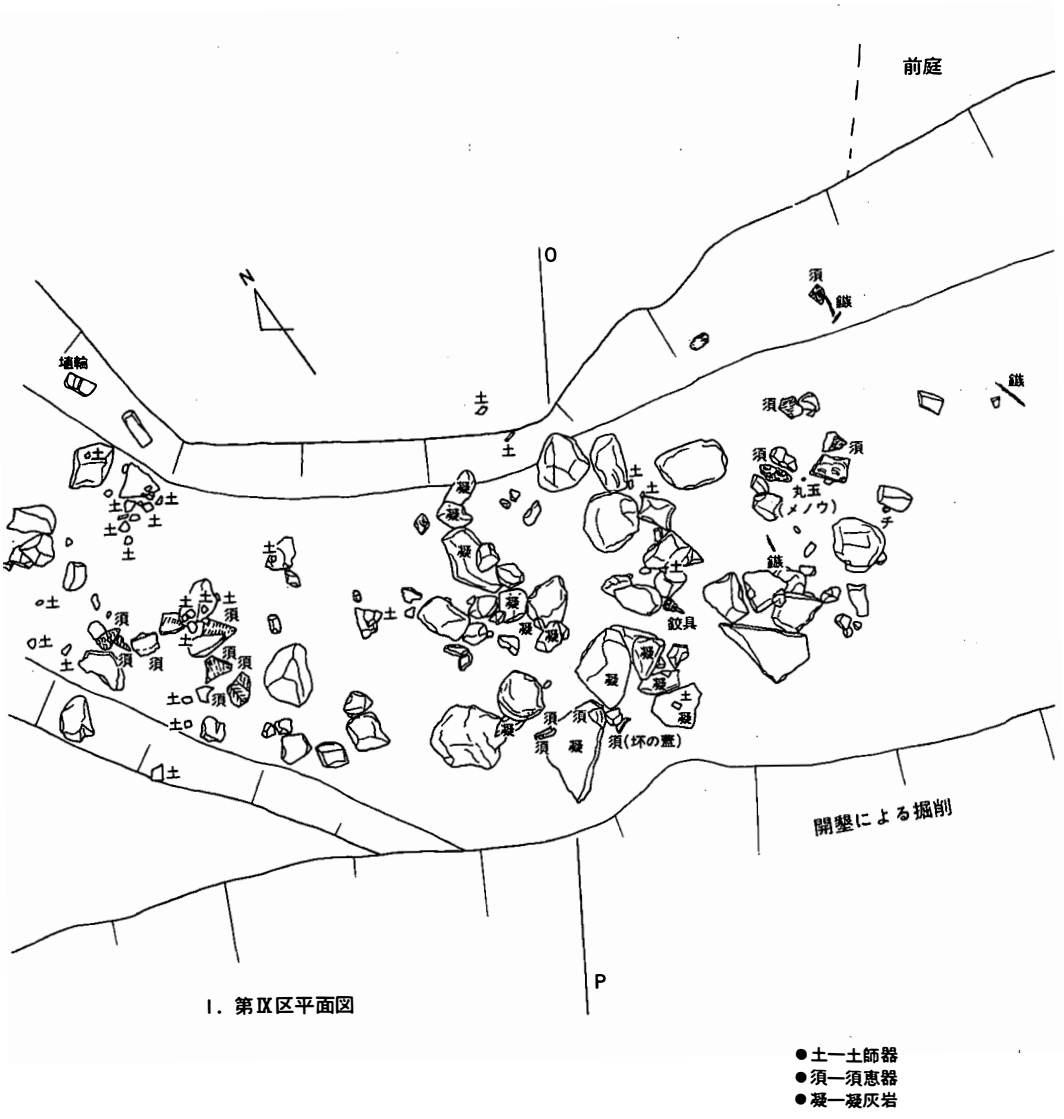
装身具の出土状態を見ると、２個の金環（材料の太さ、径ともに異り一対の物でない。）の間は1.2ｍ、銀環と金環の距離は0.8ｍと1.2ｍ、銀環と瑪瑙製の玉との間は 2.8ｍ離れている。

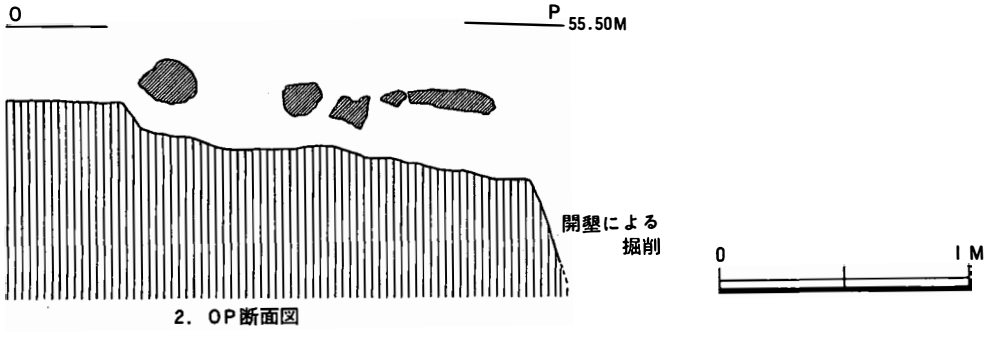
以上、鉄鏃、馬具、装身具の出土状態から推して、本来の位置でないので、二次的に動かされたと思われる。

羨道部から、須恵器の蔵骨器片が２片検出されている。第Ⅶ・Ⅷ区に多く検出されていた中世以後の遺物（糸切り底の皿、瓦質土器）は、この区からの検出数は少ない。

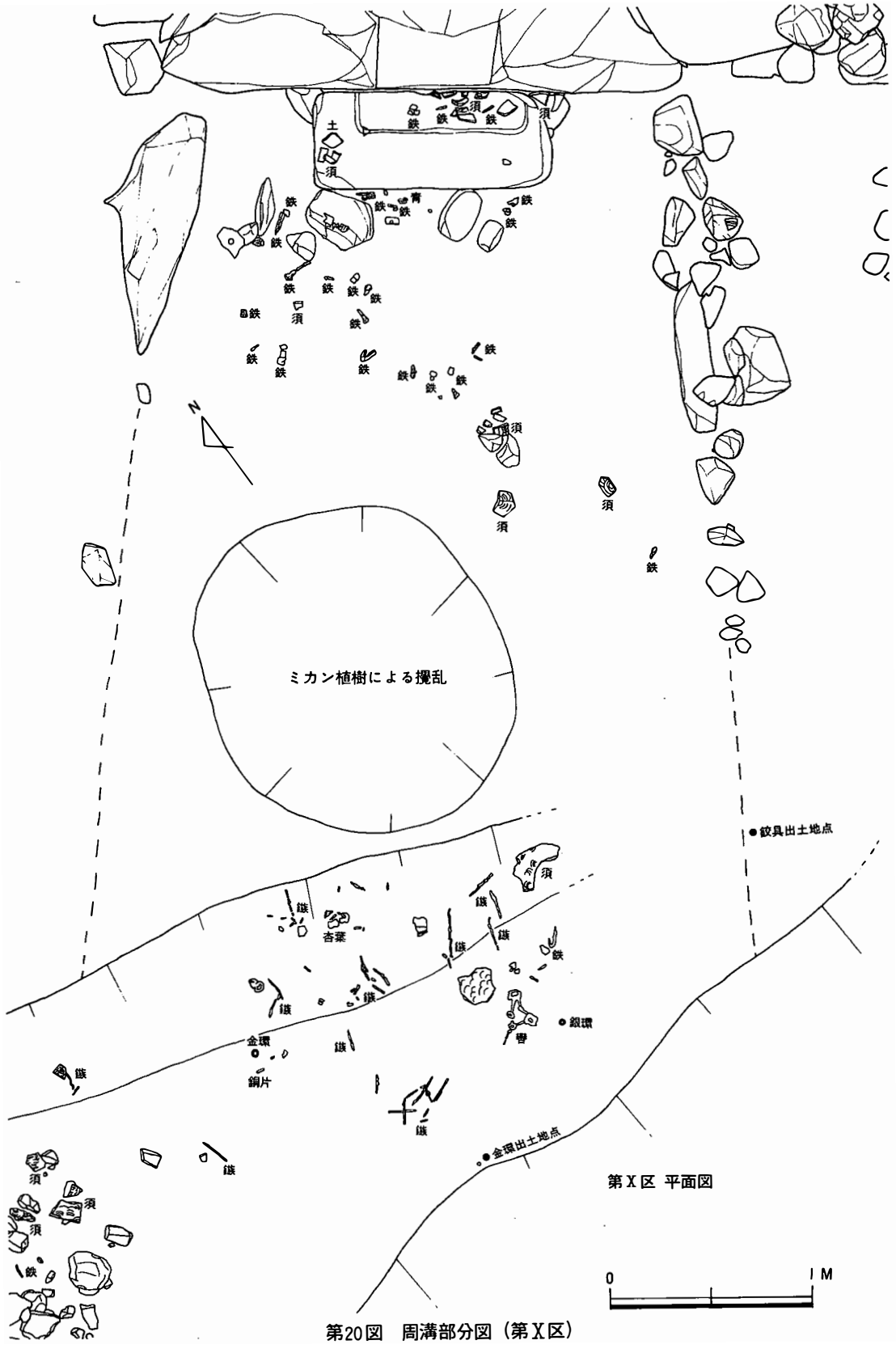
周溝の南側（外側）は開墾によって削平されて崖（１ｍ程度）になっていて、幅は不明である。

羨道部についての記述は羨道部の項で述べる。





第19図　周溝部分図（第Ⅸ区）



第20図　周溝部分図（第Ⅹ区）

2）内部構造

埋葬施設の主軸をN－39.5°－Eにとり、南西に開口する単室の横穴式石室である。天井石は欠失し、框石の上部もまた破壊され、閉塞石も失われていた。石室内は、ごみの投棄と流土によって床面から7分目ほど埋没していた。また前述したように、数回におよぶ盗掘と古墳の周辺部の開墾時に出た礫が羨道部や石室内に山積みになっていた。

石室はU字形の掘り方内に構築され、四方の壁はそれぞれ一枚の巨石でできていたと思われる。玄門部は框石の正面中央部を幅0.59m（高さ不明）の窓形に刳り貫いている。玄門の前には踏石が置かれている。羨道部・前庭部と周溝はつながり、「の」の字形を呈する。

羨道部端から石室奥壁までは3.56mと推定（羨道の長さは推定）される。羨道部と前庭部と境界の目やすとなるものは、羨道部の側壁の基部の一部のみである。

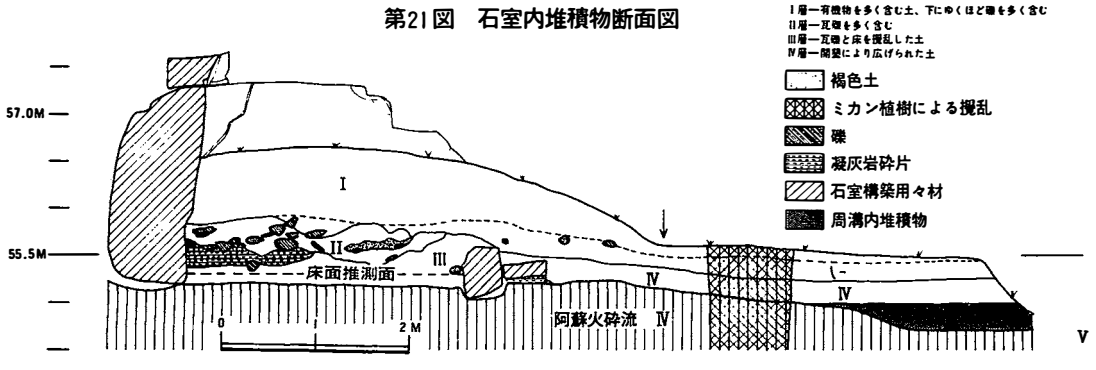
① 石室の掘り方と焼土（第22・23図）

封土を取り去り、旧地表面（古墳構築時の地表）を露出させたところ、東方に少し傾いていて海抜53.80mあり、第22図に示したような釣鐘状の掘り方と焼土が3カ所から検出された。

石室の掘り方は平面形が釣鐘状を呈し、玄門近くで幅4.41m、奥行5.06m あり、掘り方の深さは旧地表面から、東壁側で0.63m、西壁側で0.74m、奥壁側で0.59mである。掘り方は旧表土層（J－1層）、縄文土器包含層（J－1層とJ－2層）を掘りぬいて黄色の軟い凝灰岩層（阿蘇火砕流Ⅳ）の一部まで掘り込んでいる。このため、側壁を建るための基礎を固める工事は何もなされてはいないが、非常に安定した石室の構築がなされたと言える。

掘り込みの角度は、東西側壁側は急であり70°～80°、奥壁側はゆるやかに弧をえがくような状態に掘られ65°前後である。奥壁の掘り込みの曲面は、奥壁壁材の背面の曲面によく似ている。

第21図　石室内堆積物断面図

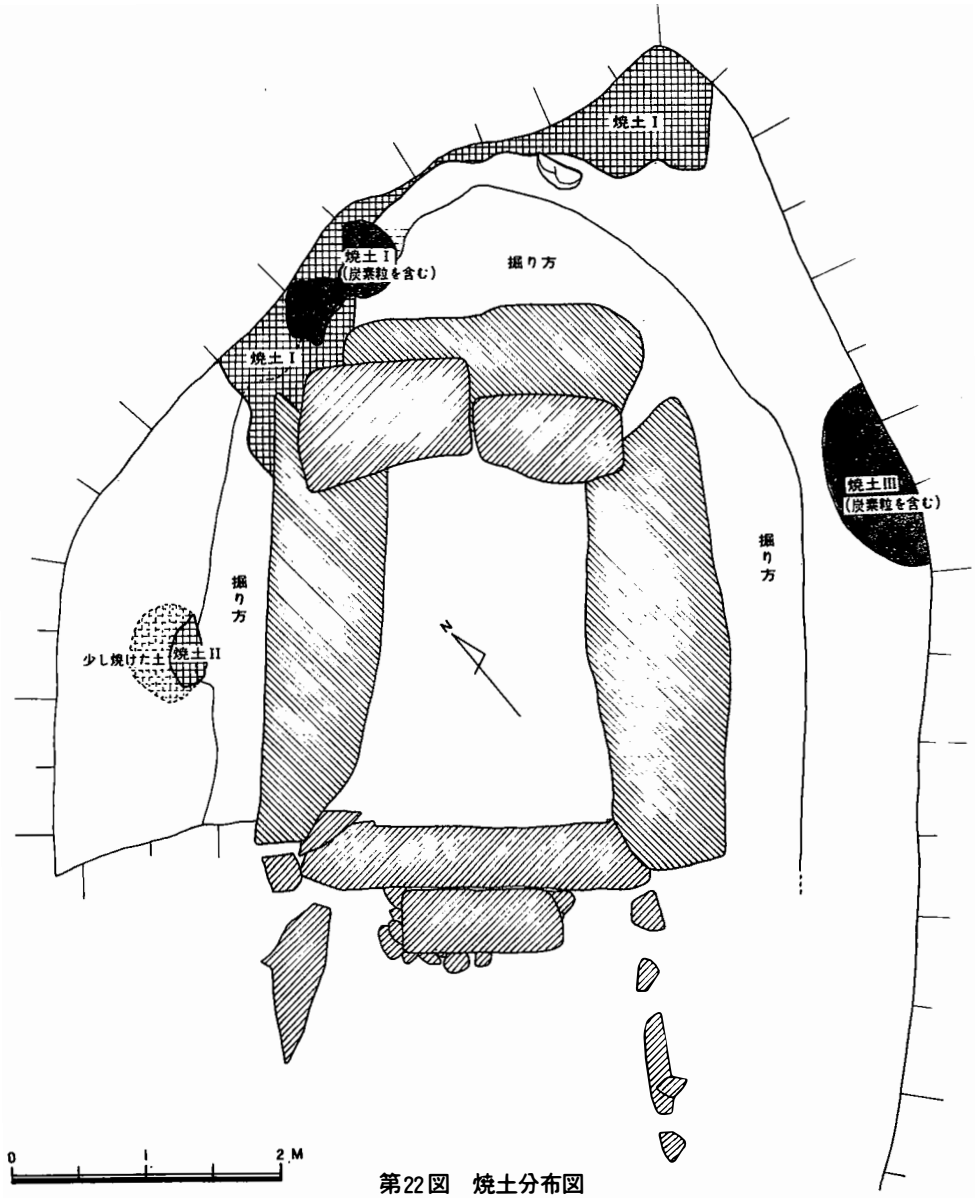


羨道も石室と同様に黄色の凝灰岩の層まで掘り下げているが、両者を比較すると石室の方が0.13mほど深い。石室床面の基底部の高さより側壁の掘り込みの方が6cmほど深い。

掘り方に対して、石室の位置を見ると少し西の方によっている。

東側側壁と掘り方との隙間には、整然と径30cm前後の根がため石が3列につめられていた。しかし、西壁側と奥壁側には、所々に礫がつめられているのみである。根がため石の種類は、葺石と同種であり、チャート、礫岩、凝灰岩である。根がため石が東側のみにかたよってつめられていることから、東側側壁に力が加わりすぎることを恐れての工事だと思われる。

第22図には、3カ所の焼土と石室の位置関係を明らかにするため、石室を俯瞰的に入れた。



第22図　焼土分布図

焼土Ⅰは、奥壁の後背部に赤褐色の帯状（4.10 ×0.90ｍ）に広がっているが、開墾によって墳丘が掘削されているので、全容は不明である。この焼土は石室構築のための掘り方の穴の上におおいかぶさっており、しかも、奥壁北隅の外側の近くまで広がっていた。このことから、側壁を建てて、掘り方の穴を埋めた後に、奥壁の後背部で焚火をしたことが考えられる。

焼土Ⅱは西側側壁の西側に楕円形状（0.73 ×0.60ｍ）で検出した。掘り方の埋土直上に、強く焼けた部分があり、その外側に軽く焼きしまった部分があった。この焼土もまた掘込みの上にあることから、側壁を建てた後に掘り方の穴を埋めてから火を焚いたと考えられる。

焼土Ⅲは東側側壁の東側に半楕円形状（1.40 ×0.56ｍ）に検出された。これは開墾により半分が欠失したためである。この焼土は多くの木炭片を含み木炭片の中から指頭大の土師器の細片（器種、器形は不明）を採取した。

焼土Ⅰ・Ⅱ・Ⅲともに旧地表（古墳構築時の地表）面において検出されたことから、火を焚いたのは同時期と思われる。また、掘り方の穴の埋土上に焼土が乗っていることから、奥壁と側壁が建てられ、掘り方の穴が埋められた後に、奥壁後背部と東西側壁の外側において火が焚かれたと思われる。

② 石室

奥行2.93ｍ、玄門近くの幅2.50ｍ、奥壁近くの幅2.28ｍ、高さ1.97ｍ、東側側壁長3.06ｍ高さ2.03ｍ、西側側壁長3.00ｍ高さ1.99ｍを測る。

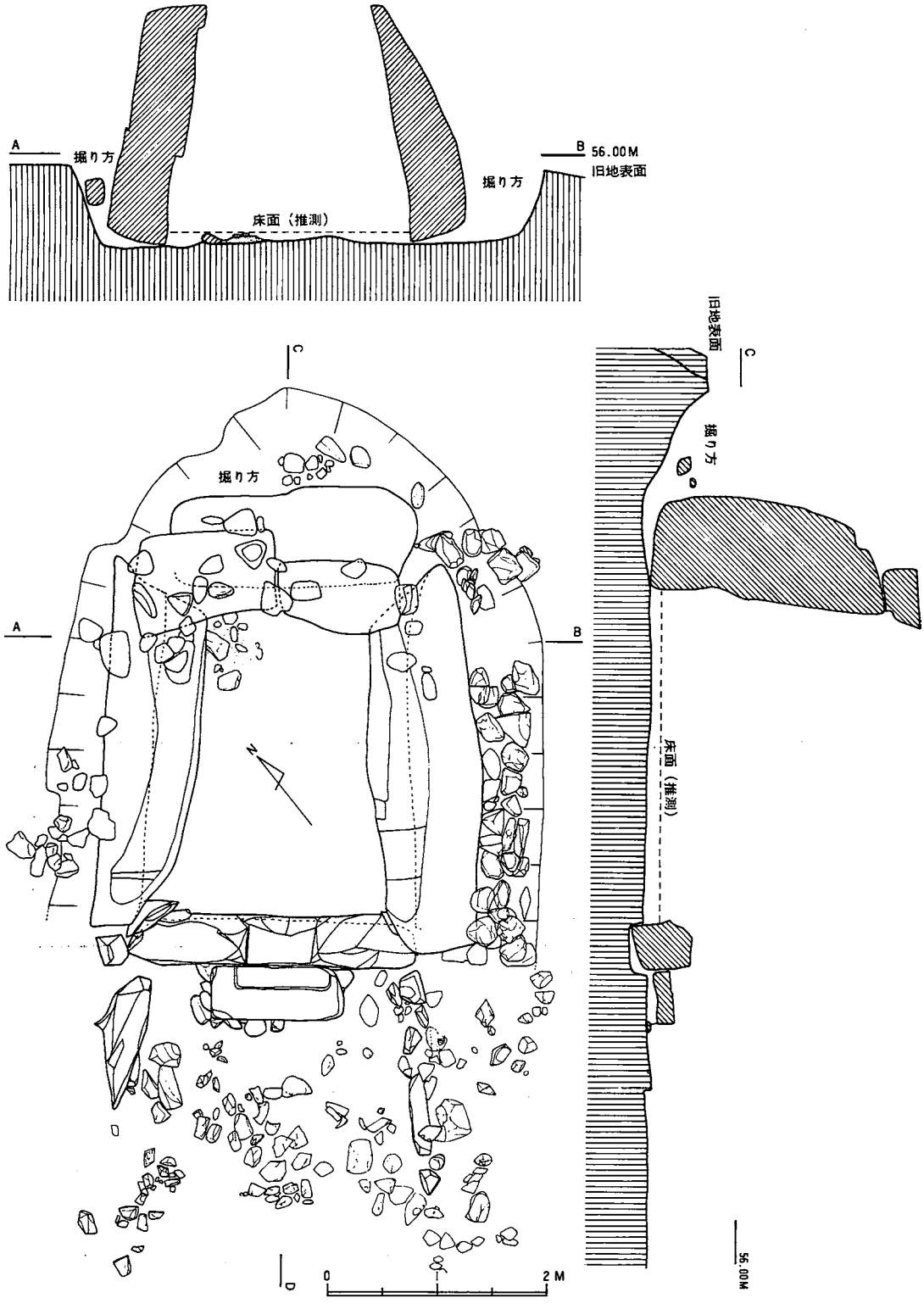
床面の平面形はほぼ方形（等脚台形状）である。床面は数回の盗掘（旧地主の話し）によって破壊されて、わずか0.3㎡ほど残存するのみである。残存する床面から、黄色の軟い凝灰岩（阿蘇火砕流Ⅳ）をほぼ水平になるように掘り下げて基盤面（海抜55.32ｍ）をつくり、直径0.05～0.20ｍの礫（凝灰岩片が多い）を並べた上に粘土を貼った床であることが解った。残存床面は攪乱が著しく、床面の高さは礫面の一番高い所に粘土を貼った高さだとすると、海抜55.30ｍ前後と推定される。

玄門は框石の中央の部分を窓状（横幅0.59ｍ、現存する高さ0.35ｍ、現存する奥行0.35ｍ）に刳り貫いてつくられている。框石は、高さ1.0ｍの所で破損している。

東西の側壁と奥壁は少し内側に傾いて（東側側壁10°、西側側壁9°、奥壁6°）いるので、現状の室内空間は角錐台状を呈し、床面から天井までの高さは、2.0ｍ前後と推定される。

石室を構成している4枚の巨石の大きさは框石（幅2.6ｍ、高さ1.0ｍ、厚さ0.4ｍ）、奥壁（幅2.2ｍ、高さ2.1ｍ、厚さ0.9ｍ）、東側側壁（幅3.4ｍ、高さ2.1ｍ、厚さ0.5ｍ）、西側側壁（幅3.3ｍ、高さ2.2ｍ、厚さ0.5ｍ）である。これらの石材の重さは24ｔ以上あろう。奥壁の石材は内面は平坦に加工されているが外面は丸く他の三方の壁材よりも厚い。

三方の壁や框石等の石室を構成している石材は全て黒色の凝灰岩層（阿蘇火砕流第Ⅲ層）から採取されたものである。壁面は平に削られて調整されたものと思われ、風化していない



第23図　石室俯瞰図と石室断面図

部分には石ノミの痕も残っていた。また、三方のすみに赤色の顔料もわずかに残っていた。おそらく石室内全面に赤色顔料が塗布されていた可能性もあるが、壁面の風化がはげしく断言はできない。石材と石材が組合わさる部分は、角を斜めに切り取って隅を合わせるような加工がなされている。

奥壁上端部（天井石の乗る部分）の東西には、L字形（高さ、幅10～30㎝）の切り込みがあり、その間に直方体の凝灰岩が力石として埋め込まれていた。東西の側壁の玄門側の上端部にもL字形の切り込みがある。東側側壁には2段（高さ8㎝、幅25㎝、高さ33㎝、現存する幅45㎝）に切り込みがあるが、末端部が欠けているのでもう1段あった可能性も考えられる。西側側壁は1段（高さ13㎝、幅25㎝）の切り込みだが、切り合う角度が鈍角になっている。この細工は天井の高さを調整するための切り込みか、石を安定させるための切り込みか、梁石をわたすための切り込みかはっきりしないが、上記の三点が考えられる。

奥壁、框石の石材は東西の壁にはさみ込まれた形になっていることから、石室を構築する手順として、奥壁と框石が建てられた後に、東西の壁が建てられたと考えられる。

第4表に石室の奥行を1としたときの各部の比を示した。この表から石室の平面形は奥行の8割の長さに幅が設計されていることがわかる。類似の玄門を持つ年の神古墳よりも方形に近い形を呈している。

第3表　石室の対比（石室の奥行を1としたときの各部の比）

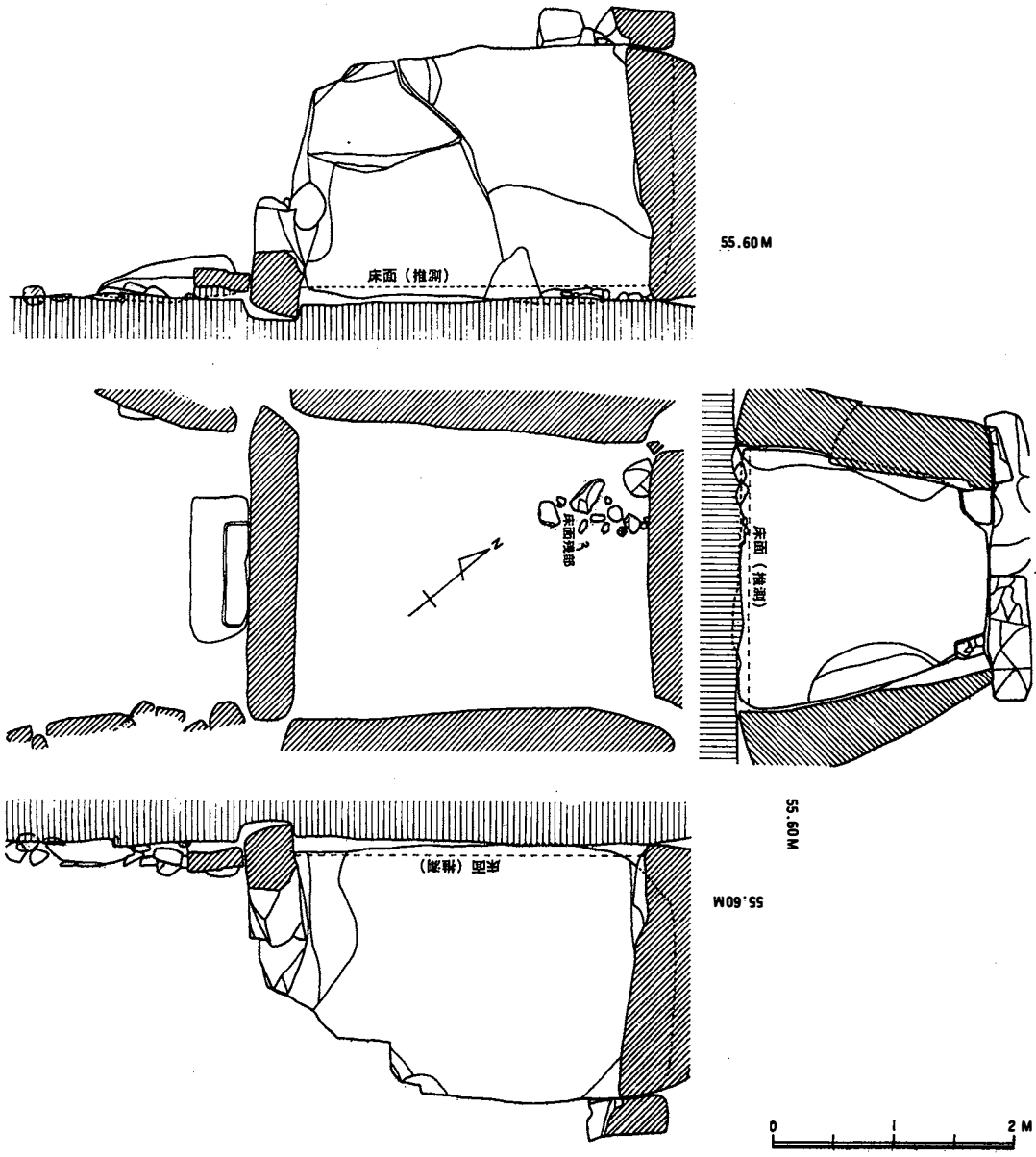
古墳名	石室					羨道		
	奥行	幅			天井の高さ	奥行	幅	
		奥壁近く	中央部	玄門近く			玄門近く	前庭部近く
岩立C古墳	1	0.8	0.8	0.9	0.7	0.8	0.8	0.8
年の神古墳 註1	1	0.6	0.7	—	0.6～0.7	—	—	—

註1　富樫卯三郎、松本雅明「小川町年の神古墳」熊本史学15・16号　昭和34年5月

③　羨道・前庭

破壊が進み前庭部と羨道の区分がつけにくく、残っている側壁の石積みと黄色の軟い凝灰岩の掘り込みと遺物の分布から類推した。

羨道の東側側壁の石積の基礎部の石列が 2.2mにわたって一列に並んでいる。石の大きさ・質ともに葺石と類似する。西側側壁は 1.4mの凝灰岩1個のみが残存している。羨道部の規模は東西の石列から類推して、方形に近い台形状になり玄門側がいくぶん狭く幅2.2m～2.7m、奥行2.4m前後と思われる。周溝から框石の主軸の長さは3.8mである。これは前庭部と羨道部を合わせた長さである。



第24図　石室実測図

羨道の床面は石室と同様、縄文時代の遺物包含層及び黄色の軟い凝灰岩（阿蘇火砕流Ⅵ）の一部を削ってつくられている。掘り込みの深さは開墾によって周囲が削平され、また表土（耕作土）の下は凝灰岩であるので明らかではない。

床面は踏石近くで海抜55.60m、周溝近くで海抜55.09mであり、ゆるやかに周溝の方に傾いている。床面上には、凝灰岩の細石が踏み固められていたが、その間から第20図に示すような鉄片、銅片、須恵器片が出土したので、構築時に細石がひかれていたと断定はできない。

前庭は羨道へなだらかに連らなっているので羨道の側壁の延長部分までであろうと推定する。床面や遺物の出土状態から前庭部を判定することは出来なかった。

玄門の直前（羨道の奥）に板状の凝灰岩製の踏石（1.20×0.47×0.15m）があり、その表面には長方形(0.86×0.20m、深さ0.02m）の掘り込みがある。この掘り込みの幅は玄門の幅より広く、掘り込みの位置は玄門の直前にあることから、板状の閉塞石をたてるための掘り込みと考えられる。

古墳に関する遺物以外に羨道部から2片の高台付須恵器の蔵骨器と思われる物を採取した。このことから、この古墳が奈良時代から平安時代頃墓地として利用されたことがうかがえる。

（村井）

3）古墳時代とそれ以後の遺物

①古墳時代の遺物

古墳時代の遺物としては、須恵器の坏（第25図)、高坏（第26図)、甕（第27・28・29・30図)、壺(第29図)、大形器台(第30図)、埴輪(第31図）土師器の壺(第32図)、竈(第32図)が出土している。

○須恵器

坏の蓋は、口縁部がほとんど欠損しており確認できない。つまみは、つくものとつかないものが出土しており、宝珠形つまみが3点、中央部にかけて横ナデを施しているためにやや窪むものが5点、同時期のつまみのみ1点が出土している。

坏の身は、1点だけ高台付きのものが出土している。

小田富士雄氏の編年表によれば、これらの須恵器のほとんどはⅢ6からⅣに対応すると思われる。

高坏は、1点だけ有蓋高坏が出土している（第26図　2）。脚部には浅い2条の沈線が施されており脚部内面は、しぼり痕が認められる。焼成はなま焼けである。他は無蓋高坏であると思われる。脚部には透しは認められない。第26図2のようにⅣに対応できると思われるが、ほとんどの高坏はⅢからⅣに対応できると思われる。

長頸台付壺は、口径26cm、胴径13.0cm、器高23.9cm、底径 9.6cmを測る。口径部下方に4条の沈線が胸部の最上腹部よりやや上方に2条の沈線が施されており、外下方に八の字状に開く脚部が認められ、Ⅵに対応できると思われる。

埴輪は、ほとんどが両面とも摩滅しており破片のみである。その内1点だけ、内面にわずかに指圧のあとが認められるものが出土している。出土状況は、周溝第Ⅷ区から破片1点が出土しており、他は墳丘の表面、石塚などからの採集であるので、報告だけにとどめておく。

○土師器

長頸壺は、周溝第Ⅰ・Ⅱ区の底面より2点出土している。他の出土状況などから須恵器の編年によるところのⅣに対応できると思われる。

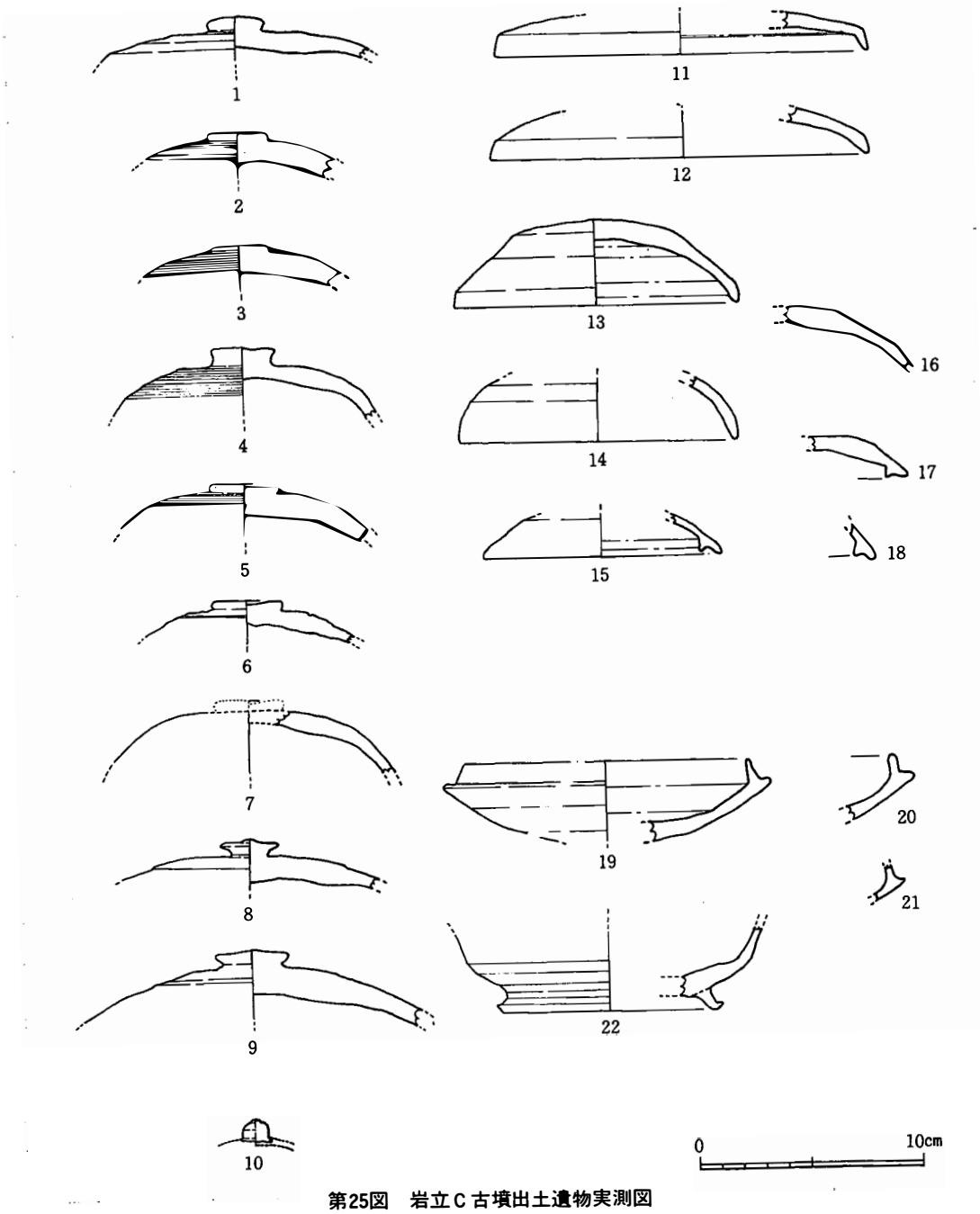
最後に注目すべきことで、竈の破片が出土している。これは封土排除作業中に検出されたもので出土事実だけの報告にとどめておく。

以下「土器一覧表」にして説明する。

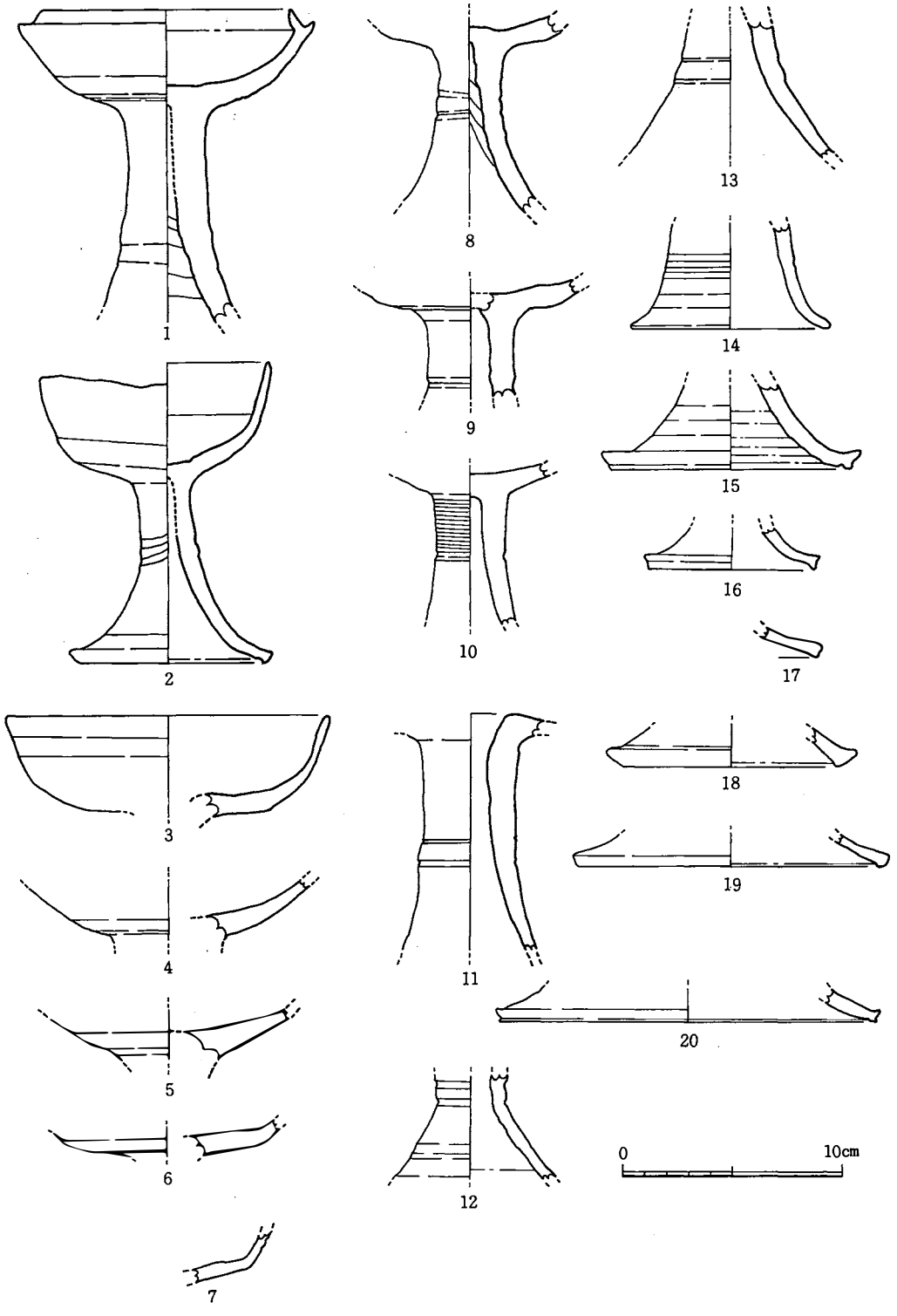
（高野）

第4表　土器類の分類基準表

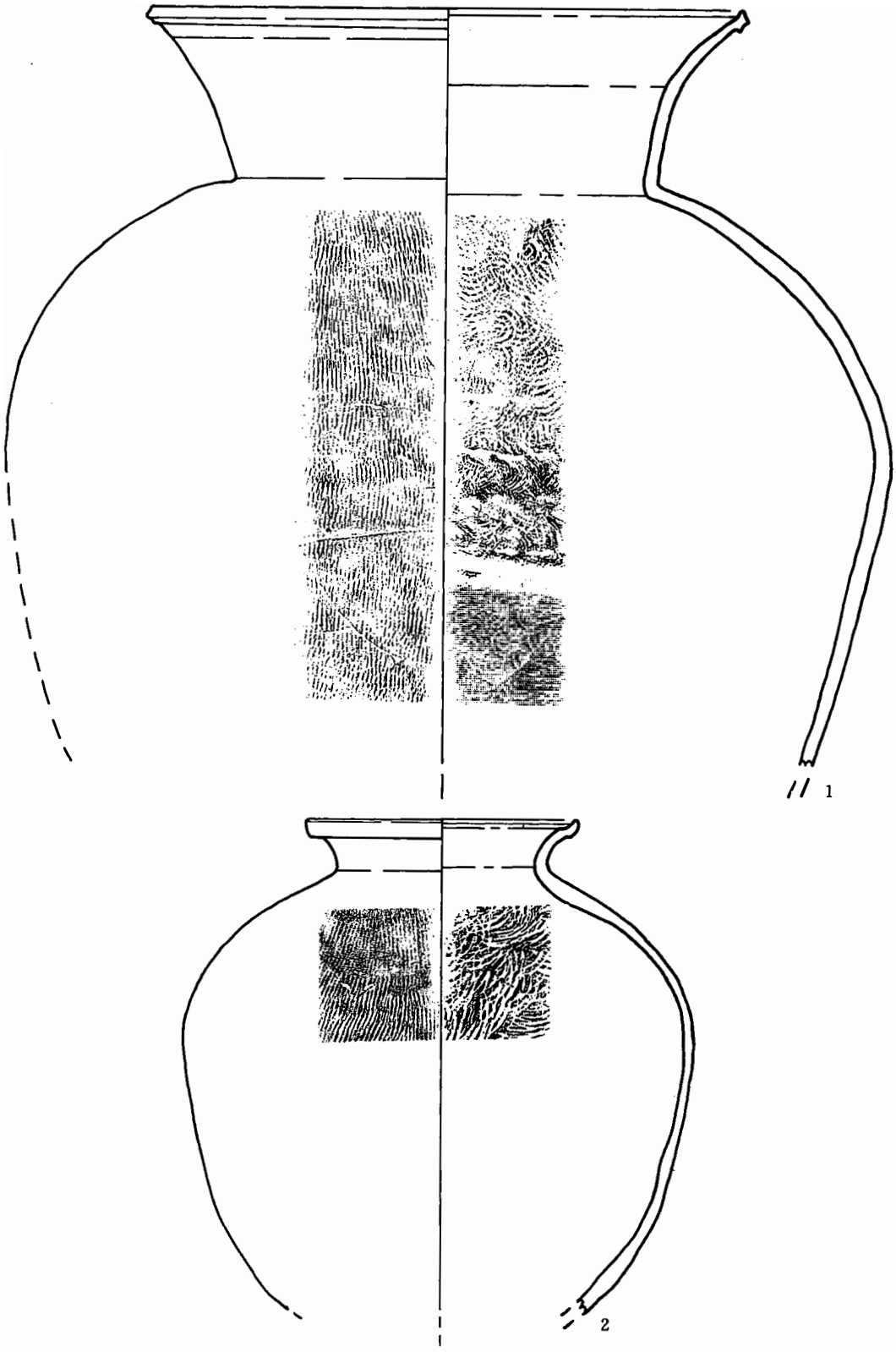
時代	種別	器種	類別	分類基準	実測した土器片数
古代（古墳時代・奈良平安時代）	須恵器	坏の蓋	I 類	つまみを有する物	10
			II 類	つまみを有しない物	8
		坏の身	I 類	高台を有しない身	3
			II 類	高台付の身	1
		高坏	I 類	坏部に蓋受けを有する物	1
			II 類	坏部に蓋受けを有しない物	19
		壺	I 類	台付の壺	1
			II 類	台のない壺	8
		甕			16
		器台			2
		聰			2
		その他		器種不明の破片	2
	土師器	壺			2
		その他		器種不明の破片	2
	埴輪			円筒埴輪	9
	カマド				1
中世	須恵質土器				6
	土師質土器				9
	瓦質土器				0
近世・現代	陶器			江戸時代から明治にかけてのもの	2
	磁器			現代の磁器片（大正・昭和）	1
	その他			ガラス製品	0



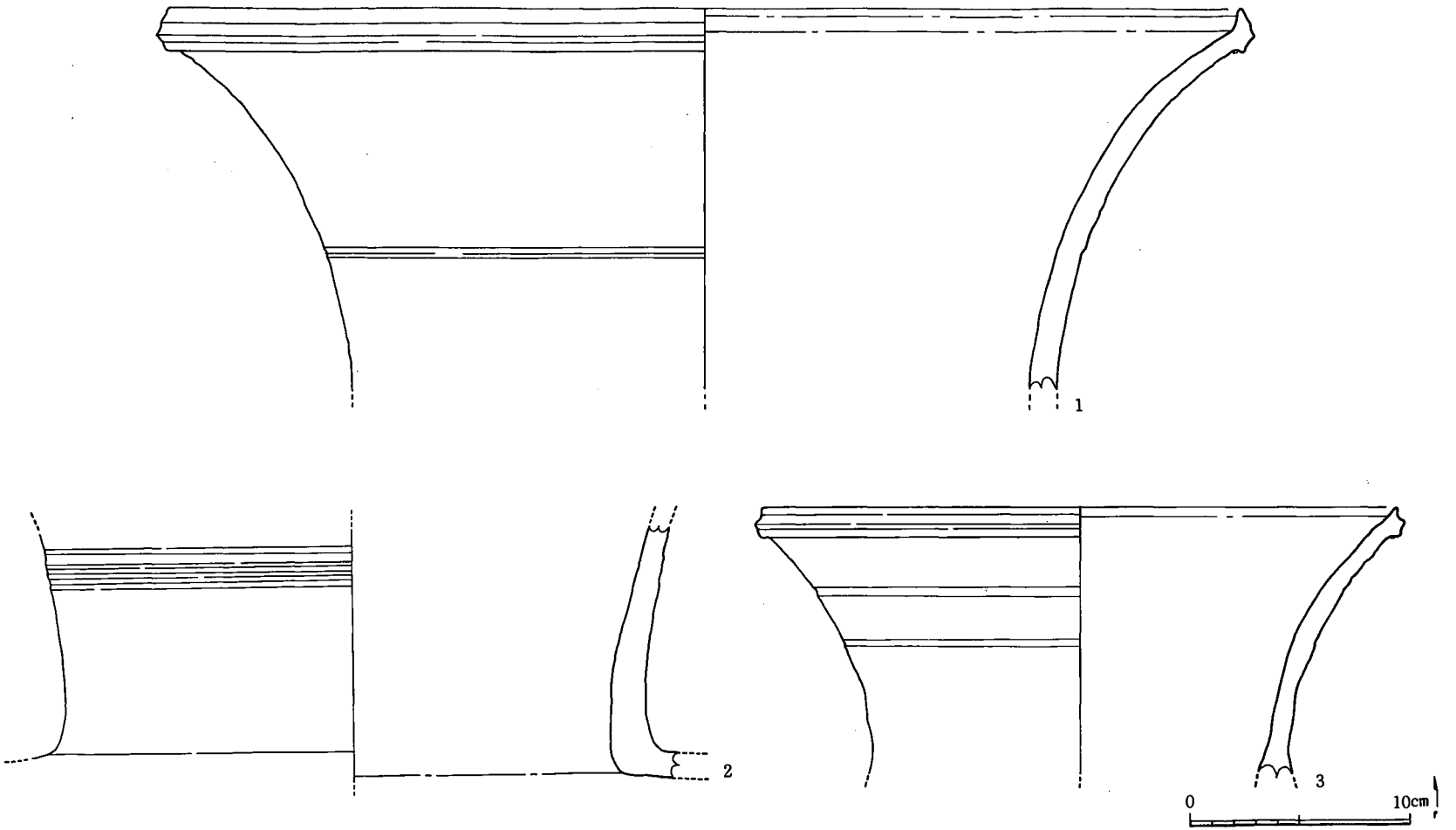
第25図　岩立C古墳出土遺物実測図



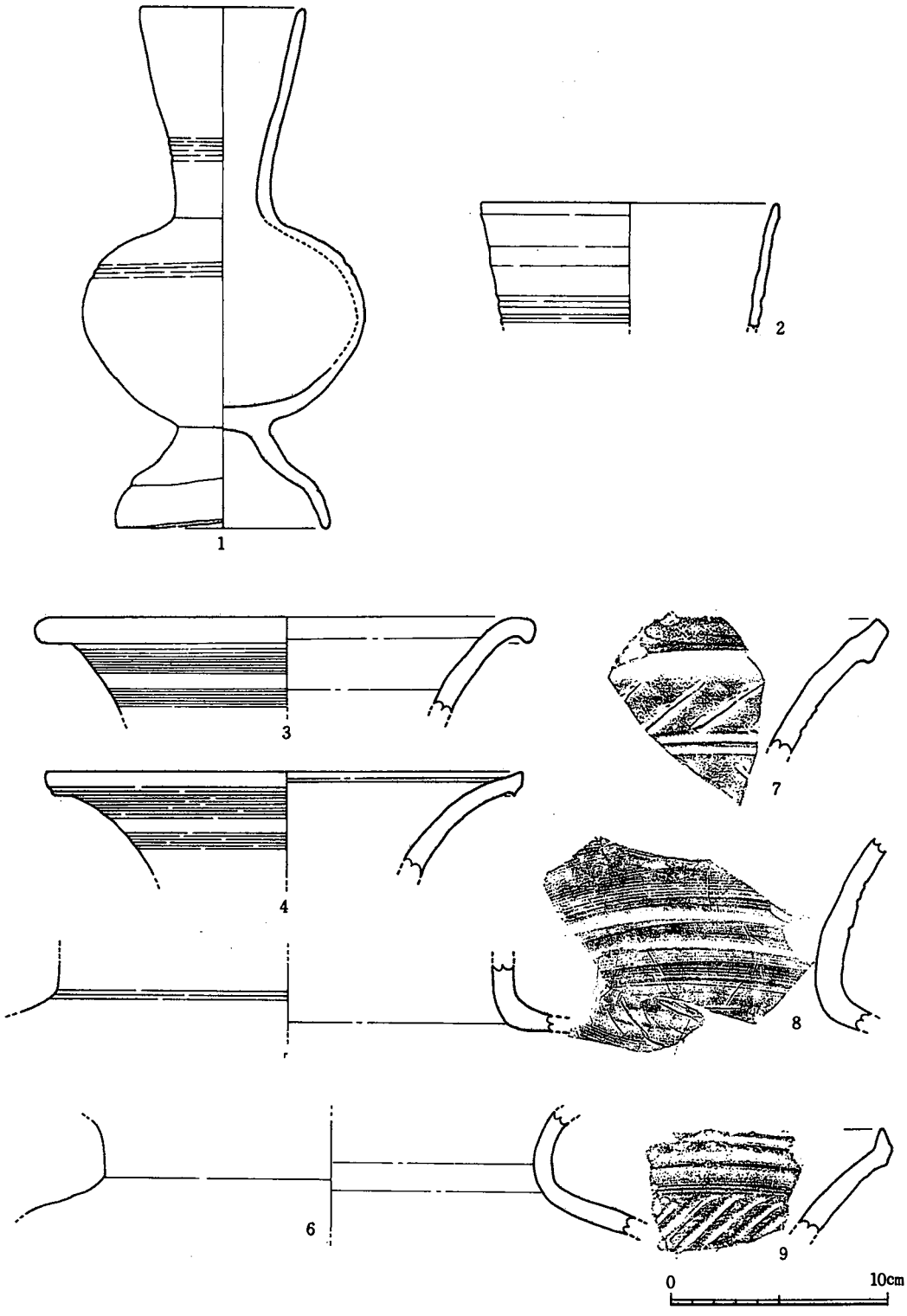
第26図　岩立Ｃ古墳出土遺物実測図



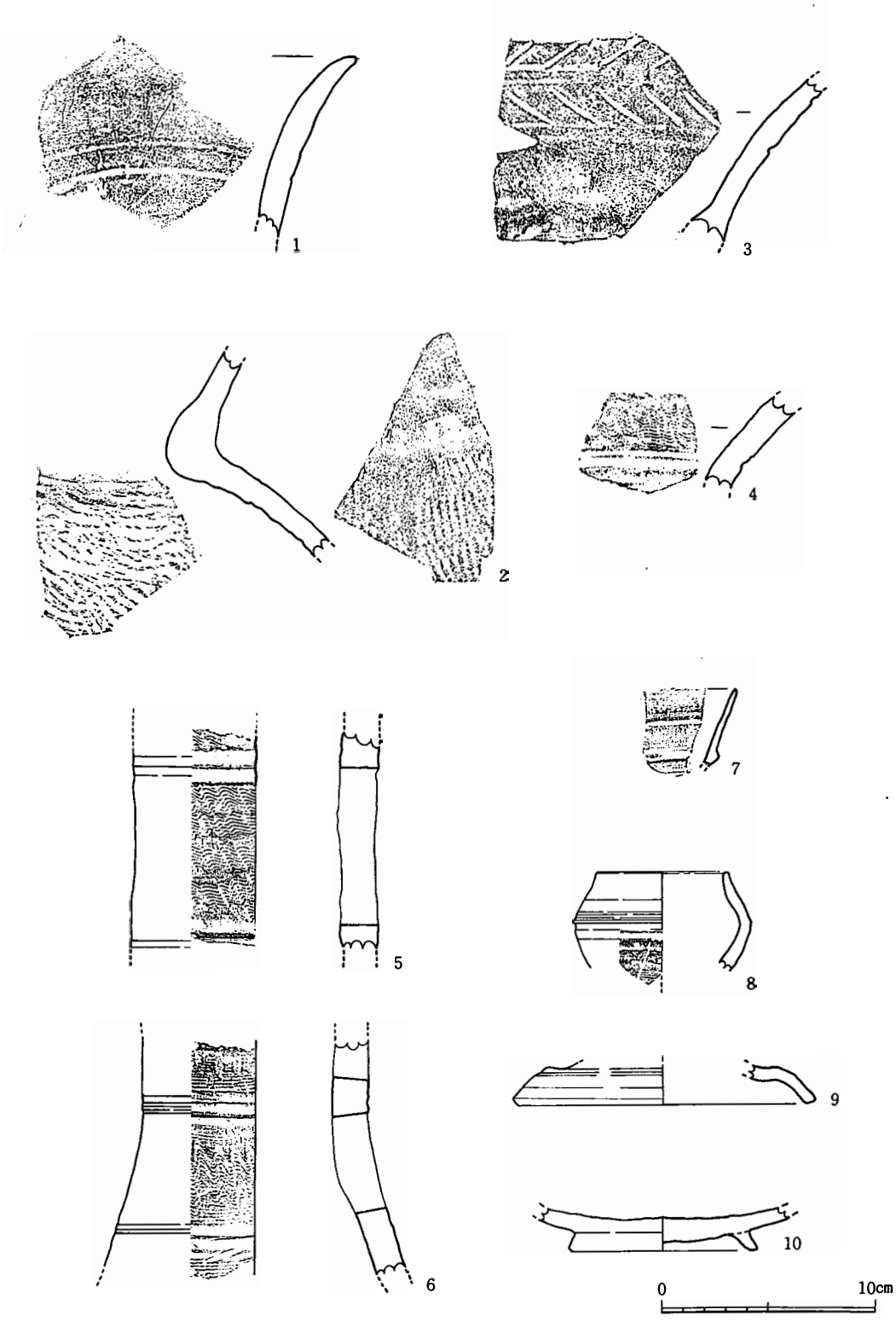
第27図　岩立Ｃ古墳出土遺物実測図



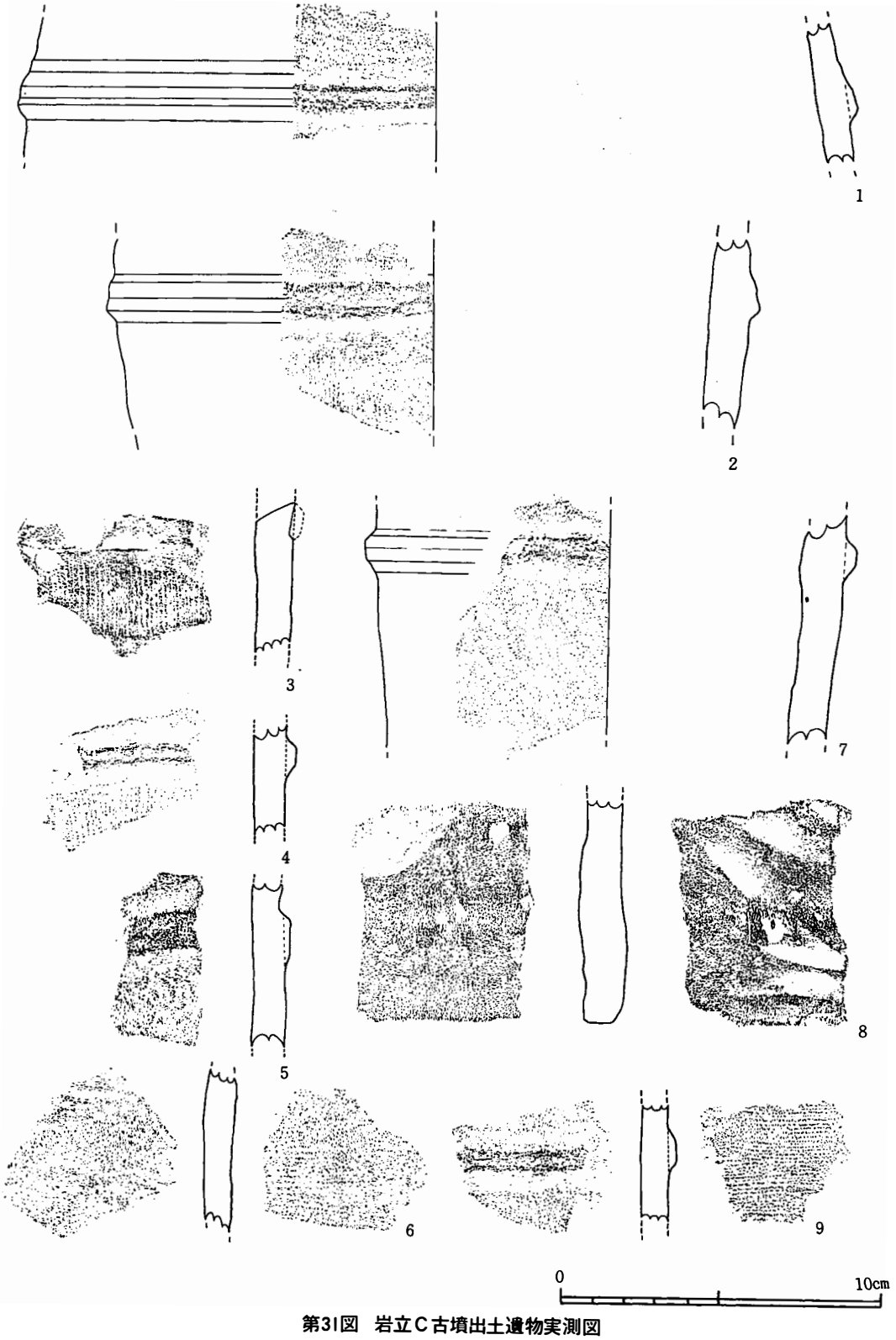
第28図　岩立C古墳出土遺物実測図



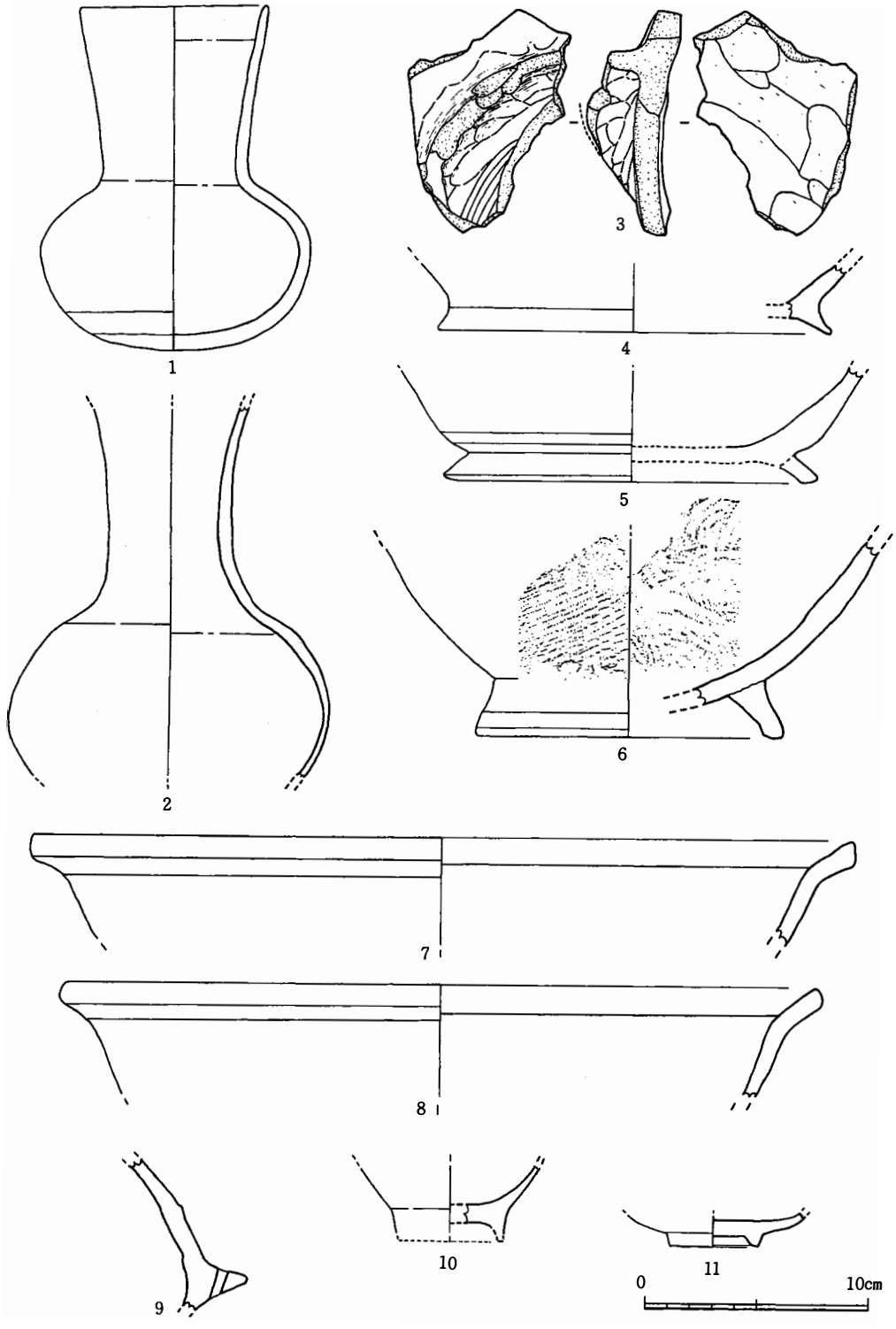
第29図　岩立C古墳出土遺物実測図



第30図　岩立C古墳出土遺物実測図



第31図　岩立C古墳出土遺物実測図



第32図　岩立C古墳出土遺物実測図

坏　蓋

第5表　実測土器一覧表

図版No	器種	法量 cm	形態上の特徴	技法上の特徴	色調・胎土・焼成
25—1	坏　蓋	つまみの高さ 0.6 つまみ最大幅 2.5	扁平な天井部にやや不定形を有する宝珠形つまみがつく。	天井部はヘラ削ののち横ナデ。 器内は横ナデ。	色調は内外面とも淡灰色。 胎土は2mm前後の細砂を含むが密である。 焼成は不良。
25—2	坏　蓋	つまみの高さ 0.5 つまみ最大幅 2.7	やや丸みを帯びる天井部に扁平なつまみを有する。つまみは中央部にかけて横ナデを施しているためにやや窪む。	天井部はカキ目を施す。 器内は横ナデ。	色調はやや茶を帯びた青灰色。 胎土は2mm前後の細砂を含むが密である。 焼成はあまい。
25—3	坏　蓋	つまみの高さ 0.3 つまみ最大幅 2.7	やや丸みを帯びた天井部に扁平なつまみを有する。つまみの高さは非常に低く中央部にかけて横ナデを施しているためやや窪む。	天井部はヘラ削ののち器壁を調整しカキ目が施されている。 器内は横ナデ。	色調は茶を帯びた青灰色。 胎土は細砂の包含も少なく緻密である。 焼成は良好。
25—4	坏　蓋	つまみの高さ 0.8 つまみ最大幅 2.8	やや扁平ぎみの天井部に変形した宝珠形つまみを有する。つまみの高さは②③に対して高く中央部にかけて横ナデを施しているため窪む。	天井部はヘラ削ののち横ナデ。 器内は横ナデ。	色調は外面が青灰色で、内面は淡青灰色。 胎土は緻密である。 焼成は良好。
25—5	坏　蓋	つまみの高さ 0.3 つまみ最大幅 3.1	扁平な天井部に扁平なつまみを有する。つまみは中央部に対して横ナデを施しているためわずかに窪む。	外面天井部はヘラ削ののち横ナデ。 内面は横ナデ。	色調は外が茶褐色、内が暗褐色 胎土は2mmの細砂を含むが緻密である。 焼成はなま焼け。
25—6	坏　蓋	つまみの高さ 0.2 つまみ最大幅 3.1	やや扁平ぎみの天井部に扁平なつまみを有する。横ナデを施すためつまみ中央に対して窪む。 器外面天井部にはヘラ状工具による1条の沈線を施す。 天井部と体部を識別する弱い稜が観察される。	外面はヘラ削ののち横ナデ。 内面は横ナデ。	色調は淡灰色。 胎土は緻密。 焼成は不良。
25—7	坏　蓋		扁平な天井部につまみを有すると思われるがつまみ部は欠損していてその形状を把握することができない。	天井部はカキ目。 体部は横ナデ。 天井部には長さ 2.5mmほどの2条の縦方向の平行沈線を有する（ヘラ記号の可能性あり） 器内は横ナデ。	色調は青灰色。 胎土は緻密。 焼成は良好。
25—8	坏　蓋	つまみの高さ 0.8 つまみ最大幅 2.6	扁平な天井部に宝珠形のつまみを有する。	天井部はヘラ削ののち横ナデで調整され、体部、外内面とも横ナデ調整。	色調は外面が青灰色、内面が淡青灰色。 胎土は良。 焼成は良好。
25—9	坏　蓋	つまみの高さ 0.6 つまみ最大幅 3.2	やや丸みを帯びる。 天井部に変形した宝珠形つまみを有する。	器面は全体的に粗雑な成形が施されている。 天井部はヘラ削ののち横ナデ。 体部は横ナデ。 内部は横ナデ。	色調は外面が淡黄灰色、内面は淡青灰色。 胎土はやや良。 焼成はあまい。

図版No	器種	法　量cm	形　態　上　の　特　徴	技　法　上　の　特　徴	色　調　・　胎　土　・　焼　成
25—10	坏　蓋	つまみの高さ 0.7 つまみ最大幅 1.1	つまみのみの残存である。	内外面とも横ナデ。	色調は灰色。 胎土は微砂粒を含む。 焼成は良。
25—11	坏　蓋		天井部は扁平である。 口縁部は外下方に傾斜し、口縁端部はやや尖りぎみである。 天井部と口縁部は弱い稜をもってわかれる。	内外面とも横ナデ。 内面にヘラ状工具による弱い1条の沈線を有する。	色調は淡青灰色。 胎土は緻密。 焼成はあまい。
25—12	坏　蓋		天井部と口縁部とをわける稜は内外面とも退化しており明朗ではない。 口縁部は短かく外下方に傾斜し端部は丸くおさめる。	内外とも横ナデ。	色調は淡青灰色。 胎土は緻密。 焼成はややあまい。
25—13	坏　蓋	口径　12.7 器高　3.8	天井部は丸みを帯び天井部と口縁部は弱い稜により分離される 口縁は下方に直下し、端部は丸くおさまる。	天井部はヘラ切りののち横ナデと思われ中央部に未ヘラ削のため粘土の起状を様する。 口縁部は横ナデ。 内面部は横ナデ。	色調は淡青灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良。
25—14	坏　蓋		口縁部のみの小破片である。 天井部は失損しており不明である。 口縁部は下方に直下し頭部は丸くおさまる。	内外面とも横ナデ。	色調は淡青灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良。
25—15	坏　蓋		口縁部のみの小破片である。 口縁部は外下方により丸く収める。 口縁部内側のかえりは内傾してその先端の位置は端部より上方にある。	内外面とも横ナデ。	色調は淡黄灰色。 胎土は密。 焼成は良。
25—16	坏　蓋		口縁部と体部との稜は退化しているために意識的に区別するために2条の沈線を施している。	天井部の80%はヘラ削で他は横ナデ、内面は横ナデ。	色調は淡黄灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。
25—17	坏　蓋		口縁部のみの小破片 天井部は扁平である 口縁部とほぼ同じ長さのかえりを付し、端部は鋭い。	天井部上面はヘラ削の横ナデ、内面は横ナデ。	色調は外面が淡黄青色。 内面が青灰色。 胎土は良。 焼成は良。
25—18	坏　蓋		口縁部のみの小破片 口縁部は外下方に丸く収める。 口縁部内側のかえりは内傾してその先端の位置は端部より上方にある。	内外面とも横ナデ。	色調は淡黄灰色。 胎土は密。 焼成は良。

坏　身

図版	器種	法　量cm	形　態　上　の　特　徴	技　法　上　の　特　徴	色　調　・　胎　土　・　焼　成
25—19	坏　身	口径 残存高	たちあがりは内傾し受部はやや外上方にのび端部は丸くおさまる。底部は扁平である。 たちあがり部に横ナデ調整を施しているため浅沈線が認める。	外面は横ナデ、内面は横ナデ。	色調は外面が黄灰色、内面が暗青灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良。
25—20	坏　身		たちあがりは直立し、受部は平行にのび頭部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	色調は外面が青灰色、内面が暗青灰色。 胎土は細砂粒を含む。 焼成は良。
25—21	坏　身		口縁部のみの小破片である。 たちあがりは直立し受部は平行にのびる。頭部は失損。	内外面とも横ナデ。	色調は青灰色。 胎土は細砂粒を含む。 焼成は良。
25—22	高台付坏	脚径（9.6）	体部と高台の小破片である。底部は平らになっており、残存する体部の中央に弱い稜を有し横より内弯し、上方へのびる高台は張り付けによるもので八の字状に広がり端部は外上にはねる。	外面底部はヘラ削ののち横ナデ。	色調は灰白色。 胎土は細砂を含む。 焼成は普通。

高　坏

図版	器種	法　量cm	形　態　上　の　特　徴	技　法　上　の　特　徴	色　調　・　胎　土　・　焼　成
26—1	高　坏	口径（11） 坏の深さ 3.4 残存高14.2	坏部から脚部にかけて残存 柱状下方の間に浅い2条の沈線が施されている。 坏底部は丸みを帯びる受部は外上方にのび端部は丸くおさまる。 立ち上がり部は内傾して立ち上がり 0.8cmを計る。	坏の体部・口縁部・脚部の外面は丁寧な横ナデ。 脚部の内面はシボリの後横ナデ。	色調は坏の体部の内面はにぶい赤橙色で坏の外面・脚部は灰赤色。 胎土は良。 焼成はなま焼け。 自然釉が付着。
26—2	高　坏	口径 9.2 器高13.7 坏の深さ 4.6	坏底部は丸みを帯び口縁はほぼ直上に外上方に立ち上る。 脚部に1条の浅い沈線が施されて、脚部は柱状部から裾部にかけて外反度を増す。柱状部に幅5mmほどの浅い沈線2本が施されている。端部内面は段をなす。	坏の内面・口縁・体部は丁寧な横ナデ。 坏の底部はヘラ削の後横ナデ。 脚部・内外面とも丁寧な横ナデ。	色調はにぶい黄橙。 胎土は細砂を含む。 焼成は坏部に焼けひずむ。 自然釉が付着。
26—3	高　坏	口径14.8 坏の深さ 3.6	坏部のみ残存している。 口縁部はわずか外上方に内弯しながら立ち上がりその後わずかに外反し端部は丸くなる。	坏の内外面とも横ナデ。	色調は灰色。 胎土は細砂を含む。

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
26—4	高坏	口径（7.0）	坏部の$\frac{3}{8}$残存。	坏部内面・体部は横ナデ、底部はヘラ削の後横ナデ。	色調は灰黄色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良。 坏部・内面は自然釉付着。
26—5	高坏		坏部小破片である。	横ナデ。	色調は灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は不良。
26—6	高坏		坏部の$\frac{1}{4}$のみ残存。 扁平な底部を呈する。	内外面とも横ナデ。	色調は灰黄色。 胎土は細砂を含む。 焼成は普通。
26—7	高坏		坏部小破片である。	横ナデ。	色調は灰黄色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良。
26—8	高坏	脚部径 3.0	坏部欠損 裾部欠損 脚部は細く八の字状にひらく。 柱状部に2条の沈線を施している。	全体に横ナデ。	色調は青灰色。 胎土は微粒子を含む。 焼成は良。
26—9	高坏	脚部径 3.9	脚部の一部分のみ残存している。 脚部下方に浅い1条の沈線が施されている。	内外面とも横ナデ。	色調は外面が黄灰色で、内面が暗灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。
26—10	高坏	脚部径 3.2	脚部の一部分のみ残存残存部中央に1条の沈線が施されている。	外部は残存脚部全体にカキ目 内部は横ナデ。	色調は外面が暗灰色、内面が青灰色。 胎土は密。 焼成は良。
26—11	高坏	脚部径 4.5	脚部の一部分のみ残存 残存部中央に浅い2条の沈線が施されている。	内外面とも横ナデ調整が認められる。	色調は黄灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良。
26—12	高坏	脚部残存最小径 3.1 脚部残存最大径 7.5	脚部の一部分のみ残存 脚部に浅い2条の沈線が施されている。 脚部内面にしぼり痕が認められる。	内外面とも横ナデ。	色調は暗灰色。 胎土は密。 焼成は良。

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
26—13	高坏	脚部残存最小径 3.9 脚部残存最大径 8.5	脚部の一部分のみ残存 脚部に2条の沈線が施されている。 内面にしぼり痕が認められる。	内外面とも横ナデ。	色調は黄灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良。
26—14	高坏	底径（9.0）	脚部裾部のみ残存。 脚部は外下方に八の字状に開き脚端部ではより上方で外反度を強める。 残存脚部中央にはヘラ状工具による弱い2条沈線を有する。	内外面とも横ナデ。	色調は外面が暗灰色で内面が黄灰色。 胎土は雲母、細砂を含む。 焼成は良。
26—15	高坏	底径（11.0）	脚部のみ残存。 脚部は外下方に八の字状に開き端部は横ナデを施すことでわずかにくぼみ端面を丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	色調は外面が暗青灰色内面が青灰色 胎土は密。 焼成は良好。
26—16	高坏	底径（7.6）	脚部端部のみの小破片である。 底径が小さく、肉薄器壁を有する。	内外面とも横ナデ。	色調は暗青灰色。 胎土は良。 焼成は良。
26—17	高坏		肉薄な器壁を有する。 脚部のみの残存である。 脚端部をつまみだしているために内外面にわずかな弱い窪みを有する。	内外面とも横ナデ。	色調は外面が黄灰色で内面が青灰色。 胎土は良。 焼成は良。
26—18	高坏	底径（9.7）	脚端部のみの小破片である。	内外面とも横ナデ。	色調は黄灰色。 胎土は良。 焼成は良。
26—19	高坏	底径（14.0）	脚端部のみの小破片である。 脚部は外下方に八の字状に開く端部をつまみだしているため内面に薄い窪みを有する。	内外面とも横ナデ。	色調は外面が暗青灰色で内面が黄灰色。 胎土は良。 焼成は良。
26—20	高坏	底径（17.2）	脚端部のみの小破片である。 脚部は外下方に八の字状に開く端部をつまみだしているため、内外面にわずかなひ弱い窪みを有する。	内外面とも横ナデ。	色調は外が暗青灰色。 内が青灰色 胎土は良。 焼成は良。

甕

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
27—1	甕	口径 50.3 最大幅 74.6	頸部で丸く屈曲し、口縁部は上方に直に立ち上がったのち、器内に弱い稜を有し外反度を強め口縁部にいたる。 口縁部外面は、わずかに垂下し横ナデを施すことにより、わずかに窪む。端部はつまみ上げることにより器内に弱い稜を有し丸く収める。 ２条の上下２段の沈線を有する最大幅は器の中央よりやや上方にあり、体部は変球形状を呈する。	口縁外面は、クシ目調整 体部外面は平行叩きののち、スリケシ調整。 内面は青海波状文。	色調は灰色。 胎土は小砂粒を含む。 焼成は良好。
27—2	甕	口径 23.0 最大幅 43.3	口縁部は内弯し外上方に立ち上がる。口縁部外面はわずかに垂下し、上方につまみ上げるために器内に弱いくぼみを有し、端部は丸く収まる。 最大幅は器の中央よりやや上方にあり、体部は変球形状を施す。	外面頸部から口縁部はカキ目調整ののち叩を施して器壁の調整を行なっている。 内面は、青海波状文の叩き。	色調は灰色。 胎土は小砂粒を含む。 焼成は良好。
28—1	甕	口径（48.8）	口縁部は外上方に内弯して立ち上がり、外面でわずかに垂下する。口縁端部を上方につまみあげるため器内に弱い稜を残し端部は丸く収める。		
28—2	甕		頸部で丸く屈曲し、口縁部は上方に直に立ち上がる。口縁部上方には２条の浅い沈線を有し、その上方には、ヘラ状工具による刺突文が配されている。	外面は口縁部から頸部にかけて横ナデ。 器内は口縁部から頸部にかけて横ナデ 頸部から体部にかけては青海波状文。	色調外面は青灰色。 〃　内面は暗灰色。 胎土は密。 焼成は良好。
28—3	甕	口径（28.8）	口縁部は上方に外反し、立ち上がり外面でわずかに垂下する。 口縁端部をつまみ上げるために器内に弱い稜を残し端部はとがりぎみである。 口縁部には１条の２段の沈線を有しており、その間にヘラ状工具による稜杉文状の刺突文が配されている。	外・内面とも横ナデ。	
29—3	甕	口径22	口縁部の$\frac{1}{3}$残存 口縁部外上方に外反して立ち上がり、口縁端部はわずかに垂下する。	外面は横ナデののちカキ目調整 内面は横ナデ。	色調は灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良。 自然釉付着。
29—4	甕	口径 22.2	口縁部の$\frac{1}{3}$残存。 口縁部は外上方に立ち上がり、口径外面はつまみだしのため垂下し同様に１条の沈線を有し、端部は丸く収める。	外面は横ナデののちカキ目調整 内面は横ナデ。	
29—5	甕		口縁部は垂直に立ち上がる。	内面・肩部は同心円文叩きののち横ナデでスリケシしている。 外面は叩き。	色は外内面とも暗青灰色。 胎土は密。 焼成は良好。 自然釉付着。

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
29—6	甕		頸部で屈曲し、口径部は外方に直に立ち上がる。	外面は平行叩き 内面は青海波状の叩きを施し部分的に横ナデによりスリケシている。	
29—7	甕		頸部 ⅓ 残存	内面は横ナデ。 外面は中程に2条の沈線が施されており他はカキ目調整。	色調は灰色。
29—8	甕		口縁部の小破片 口縁部は断面長方形状である。	外面は横ナデののち口頸部に右上がりのヘラ状工具刺突文が施されており、その間に浅い2条の沈線が施されている。他はカキ目調整。	色調は青灰色。 胎土は小粒子を含む。 焼成は良好。 自然釉付着。
29—9	甕		口縁部のみの小破片 口縁は外上方に外反して立ち上がり口縁端部を内外方につまみ上げるために器内に弱い稜を残し直に立つ。口縁部形態を有する。	外面は横ナデののち口頸部にヘラ状工具刺突文が施されている口縁部に弱い沈線が施されている。 内面は少々摩滅しているが横ナデ。	色調は。 胎土は。 焼成は。 自然釉付着。
30—1	甕		口縁部のみの破片 口頸部は外弯ぎみに外上方にのびる残存する破片の下方に2条の沈線が施されている。	内外面とも横ナデ。	色調は暗灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。 自然釉付着。
30—2	甕		口頸部のみの破片が残存している。 口頸部は外弯しつつ外上方に開くようである。	外面は平行叩き目 内面は青海波状文が施されている。	
30—3	甕		破片のみ残存 外面には2条の2段の沈線を有しており、その前後にヘラ状工具による綫形文状の刺突文が配されている。	内外面とも横ナデ。	
30—4	甕		破片のみ残存。 外面は6条の櫛描波状文で飾りその下に2条の沈線が施されている。	内外面とも横ナデ	色調は暗灰色。 胎土は密。 焼成は密。

壺

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
29—1	長頸台付壺	口径 7.6 胴径 13.0 器高 23.9 底径 9.6	頸部で丸く屈曲し、口縁部は内弯ぎみに外方に直線的にのび端部は丸く収める。 口径部下方に4条の沈線を有する。 胸部は変球状を呈し、最上腹部よりやや上方に2条の沈線がめぐっている。 脚部は外下方にハの字状に広き一端稜を有し内傾し端部は丸く収める。	体部の下方はカキ目調整が施されているが、他は横ナデ調整 内面は横ナデ。	色調は青灰色。 胎土は緻密。 焼成は良好。
29—2	壺	口径（13.8）	口縁部のみの残存 比較的器壁のうすい口縁部は外上方に直線的にのび頸部で丸く収める。 口縁部下方には弱い2条の沈線を有する。	内外面とも横ナデ	色調は外面は明黄褐色で、内面は黄褐色。 胎土は良好。 焼成はなま焼け。

大形器台

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
30—5	大形器台	残存部 径（11, 6） 透し部分 7, 3	杯部と裾部が欠損 脚部残存、外面は2条の沈線を2段に施し、その間に長方形の透しが入ると思われる。	体部外面に5段の7条の波状文が施されている。	色調は暗青灰色。 胎土は緻密。 焼成は良好。
30—6	大形器台	残存部の径 最小径 (10.8) 最大径 (13.2) 透し部分 4.5	杯部と裾部が欠損 脚部残存 外面は2条の浅い沈線を2段に施し、その間に透しが入ると思われる。透しの上方より外反度を強める。	外面は2条の沈線の上方にカキ目調整がみられ、その後波状文が施され、2条の沈線の上方部は横ナデが施されている。 透し部は横方向のカキ目を施し、2段の12条の波状文が横走している。 内面指圧により器壁を整形したのち横ナデを施す。	色調は青灰色。 胎土は緻密。 焼成は良好。

その他

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
30—7	瓶（口縁部）		瓶の口縁部と想定される口縁部下方に稜を有し、外上方に直線的にのび、口縁端部は丸く収める。比較的肉薄な器壁を有する。	内外面とも横ナデ。	色調は外面が暗青灰色で内面が淡灰色。 胎土は緻密。 焼成は良好。
30—8	器形不明	口径 (6.1) 胴径 (8.4)	あまり類例がないが、壺ではなかろうかと思われる。 残存部のほぼ中央部に稜を有する。 口縁部は短かく内傾して立ち上がり端部は丸く収める。	稜から口縁部にかけて横ナデ。 稜から底部にかけては横ナデののち、部分的にカキ目調整がみとめられる。 内面は横ナデ	色調は外面が、暗青灰色、内面が、青灰色。 胎土は緻密。 焼成は良好。 自然釉付着。
30—9		口径 (13.5)	底部のみの小片辺である。	外内面ともナデ調整。	色調は青灰色。 胎土は緻密。 焼成は良好。

埦

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
30—10	埦	高台径 8.6 高さ 1.0	埦の底部のみの残存 高台は張り付けによるものであり、外下方に八の字状に開く。	坏底部は回転ヘラ削によるもので高台の張り付け部はていねいな横ナデを施すためわずかにくぼむ。 内面は摩滅のため不明であるが横ナデと思われる。	色調は淡黄褐色 胎土は雲母細砂を多量に含むが緻密である。 焼成は良好。

埴輪

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
31—1	埴輪	籠部径 (62.8) 〃 高さ 0.5 〃 上面幅 1.3	破片は籠を中心に上方約4cm、下方約2cm 断面三角状の籠を有す	外・内面とも摩滅しているが、籠の上・下約1cm幅に横ナデ調整、その上下に縦方向の刷毛目調整が認められる。	色調は淡褐色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。
31—2	埴輪	籠部径 (41.2) 〃 高さ 0.5 〃 上面幅 0.7	破片は籠を中心に上下約 2.5cm 下方約6cm	籠部の接合後、上下を幅約1cm横ナデ調整している。 外面や内面は摩滅しているが、器表の籠の下に縦方向の刷毛目が施されている。	色調は赤褐色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
31—3	埴輪		8cmほどの小破片 箍は剝離した痕跡が残っている	器面は摩滅しているが縦方向の刷毛目調整が施されている。 箍の形状は不明であるが下方を約1cm横ナデ調整、内面は外面より摩滅して不明。	色調は明褐色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。
31—4	埴輪		破片は箍を中心に上方約 1.5cm 下方約 3.5cm 箍は断面台形を有している	器面は箍の上下に縦方向の刷毛目調整が施されている。 箍の上方約 0.5cm下を約1cm横ナデ調整	色調は明褐色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。
31—5	埴輪		破片は箍を中心に上方約2cm、下方約5cm	器表、内面とも剝離や摩滅が著しく確認できない。	色調は赤褐色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。
31—6	埴輪		約9cmの破辺 器面は摩滅しており箍を確認できない。	外・内面とも摩滅しているが部分的であるが器表に縦方向、内面に横方向の刷毛目調整が認められる。	色調は赤褐色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。
31—7	埴輪	箍部径 (31.0) 〃高さ 0.7 〃上面幅 0.5	破片は箍を中心に上方約 2.5cm 下方約11cm	器表や内面は剝離や摩滅をしているが器表は間隔の狭い縦方向の刷毛目調整が施されている。 内面は、わずかに指圧のあとが認められる。	色調は赤褐色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。
31—8	埴輪		基底部の破片	器表や内面は剝離・摩滅が著しいが上方でわずかに縦方向の刷毛目が確認できる。 内面は基底から約4cm範囲に2本の明瞭な指圧痕が認められる。	色調は淡褐色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。
31—9	埴輪		破片は箍を中心に上方約 1.5cm 下方約 3.0cm	器表や内面とも剝離や摩滅しているが箍の上方約1cm下方約 0.5cmの横ナデ調整をし、その上下に縦方向の刷毛目調整が認められる。内面は横方向の刷毛目調整が認められる。	色調は淡褐色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。

土師器

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
32—1		口径 8.5 胴径 12.2	口縁部は外上方へのび器壁は薄く端部は丸くおさまる。 肩部は外方へ張り出しており最大径部は上方にある。 底部は丸くおさまる。	外面とも摩滅しているがナデ調整。	色調は明褐色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良。

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
32—2		胴径 14.5	口縁部と底部が欠損。頸部は外上方にのびている。胸部は変球状を呈している。	外・内面とも摩滅が著しく確認できない。	色調は黄灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は不良。
32—3	甕		土師器の甕形土器である。 庇の一部が残っており、焚口部に当ると思われる。つばは張り付けによるものであり残存最大高は 2.6 cmを計る。	つばの張り付けには指圧痕が観察され、体部には部分的にあらいハケが確められる。 器内面は指圧後ヘラ削り	色調は茶褐色。 胎土は1mm方眼の雲母や他の細砂を含むが密である。 焼成は良好。

歴史時代の土器

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
32—4	蔵骨器	底径 (17.7)	脚部の小破片である。 高台張り付で、端部は突がりぎみで、外下方に八の字状に開く。	内外面とも横ナデ。	色は青灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。
32—5	蔵骨器	底径 (15.6)	体部から脚部にかけての残存である。体部は上方に内傾しながら立ち上がる。 高台は張り付けで力強く八の字状に広き断面はフラットである	外面はヘラ削りののち横ナデ。 内面は横ナデ調整 内面底部は叩きかとも思われる	色調は外面が黄灰色で、内面が暗灰色。 胎土は雲母と細砂を少々含む。 焼成は良。
32—6	蔵骨器	底径 (13.5)	体部は上方に内傾しながら立ち上がる。 張り付けられた高台は幅も長さもNo4、No5より大きく力強い八の字状に開く。	体部外面は横ナデと平行叩きと重ねて調整している。とくに高台の内面は横ナデで調整されている。 内面も横ナデと平行叩きで調整されている。	色調は外面が灰色で、内面は黄灰色。 胎土は緻密である。 焼成は良。
32—7	鉢	口径 (37.0)	口縁部のみ残存 内弯ぎみに立ち上がった体部を外上方につまみだすため頸部で屈折し、器内に稜が残る。	内外面とも横ナデ。	色調は灰色。 胎土は雲母、細砂を含む。 焼成は良好。
32—8	鉢	口径 (34.0)	口縁部のみ残存 内弯ぎみに立ち上がった体部を外上方につまみだすため頸部で屈折し、器内に稜が残る。	内外面とも横ナデ。	色調は外面が黄灰色で、内面が暗灰色。 胎土は細砂を含む。 焼成は良好。
32—9	釜		つまみより体部にかけて残存している。つまみは断面三角形を呈して約3mmの穿孔を有している。 体部は内傾しながら上方に延びており上方に剥離された所に接合部分であるだろうと観察されるものがある。	内外面とも横ナデ調整。	色調は灰白色。 胎土は細砂を含む。 焼成は不良。

近世陶器

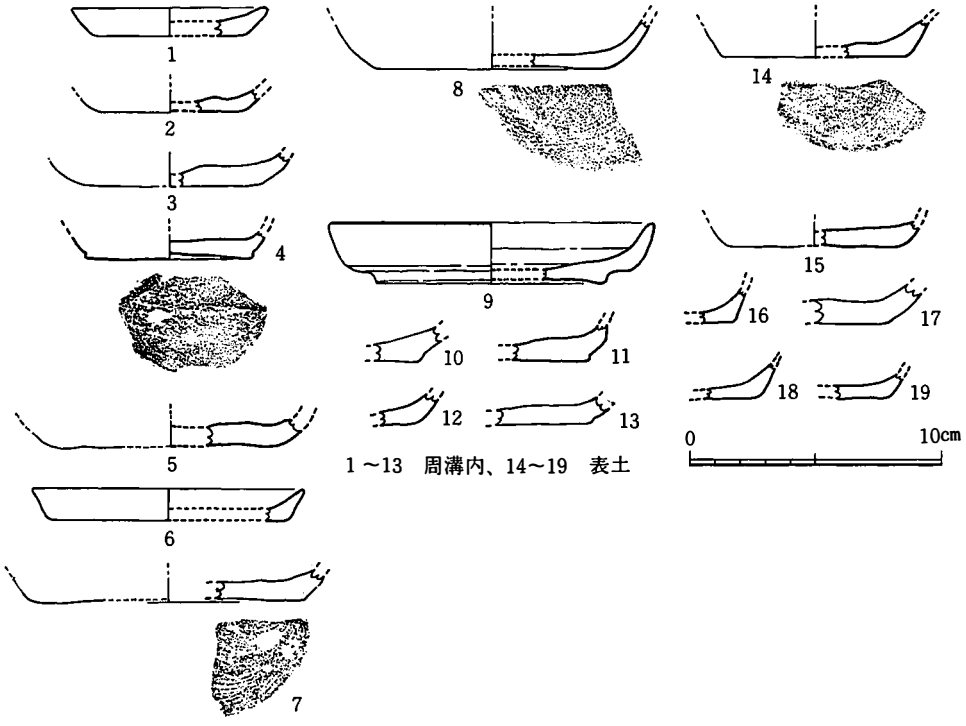
図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
32—10			底部のみ残存。	細片のため技法等不明。 乳白色の釉がかかっている。	色調は、淡白色。 胎土は良。 焼成は良好。
32—11	皿		底部のみ残存。	細片のため技法等不明。 緑色の釉がかかっている。	色調は淡灰色。 胎土は良。 焼成は良好。

中世土師器

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
33—1	皿	口径 7.8 底径 (6.0) 器高 (1.1)	残存 $\frac{1}{4}$	全体に摩滅している。 底面には糸切り痕が認められる。	色調は明褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成は良。
32—2	皿	口径 不明 底径 (5.6) 器高 不明	残存 $\frac{1}{4}$	全体に摩滅している。 底面には糸切り痕が認められる。	色調は明褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成は良。
33—3	皿	口径 不明 底径 (6.8) 器高 不明	残存 $\frac{1}{8}$	全体に摩滅している。 底面に糸切り痕が認められる。	色調は明褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成はやや良。
33—4	皿	口径 不明 底径 6.8 器高 不明	残存 $\frac{1}{8}$ ヘラ削りで底面をつくっている。	全体に摩滅して不明。	色調は淡褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成は良。
33—5	皿	口径 不明 底径 (8.0) 器高 不明	残存 $\frac{1}{8}$	全体に摩滅している。 底面の一部は糸切り痕が認められる。	色調は淡褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成は良
33—6	皿	口径 10.8 底径 (9.2) 器高 (1.2)	小破片	全体に摩滅して不明。	色調は明褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成はやや良。

図版No	器種	法量 cm	形態上の特色	技法上の特色	色調・胎土・焼成
33—7	坏	口径 不明 底径 (10.6) 器高 不明	残存 $\frac{1}{4}$	器面は横ナデ調整だと思われるが、全体的に摩滅している。 底面には糸切り痕が認められる。	色調は明褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成は良。
33—8	坏	口径 不明 底径 (9.2) 器高 不明	残存 $\frac{1}{3}$	全体に摩滅している。 底面の一部に糸切り痕が認められる。	色調は濃褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成はやや良。
33—9	坏	口径 (13.0) 底径 (9.2) 器高 2.4	残存 $\frac{1}{4}$ ヘラ削りで底面をつくっている。	器面は横ナデ。 内底はナデ。 底面は角をヘラ削りしており、糸切り痕が認められる。	色調は明褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成は良。
33—10～13	皿		小破片 ヘラ削りで底面でつくっている	全体に摩滅して不明。	色調は明褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成はやや良。
33—14	皿	口径 不明 底径 (7.4) 器高 不明	残存 $\frac{1}{3}$	全体に摩滅している。 底面には糸切り痕が認められる。	色調は明褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成は良。
33—15	皿	口径 不明 底径 (6.8) 器高 不明	残存 $\frac{1}{4}$	全体に摩滅している。	色調は明褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成は良。
33—16～19	皿		底面のみの小破片	全体に摩滅している。 底面は糸切り痕が認められる。	色調は淡褐色。 胎土は小粒子を含む。 焼成はやや良。

※（　）内の値は図面より復元した値を示す。



第33図　岩立C古墳出土遺物実測図(土師器・糸切底)

②歴史時代の土器・陶器・五輪塔

歴史時代の遺物としては、須恵器蔵骨器（第32図）、須恵器高台付埦（第30図）、中世の遺物、近世及び現代の陶磁器類が出土している。これらの遺物は、その遺物が示す時代の遺構から検出されたものではない。以下、各遺物について出土状態、器形、特徴等について述べたい。

○須恵質蔵骨器（第32図・第6表「歴史時代の土器」）

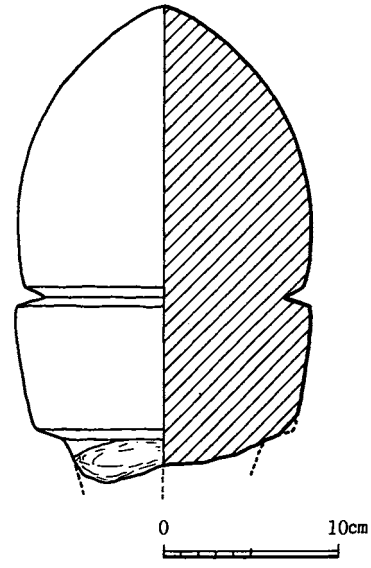
3点のうち第32図の5と6は第Ⅰ区から採集したもので、第32図の4は表採品である。第32図の4と5は高台の破片で、図上で復元すると高台の径は17.7cmと16.9cmになる。器高はわからないが、高台の高さは 1.0cmと 1.3cmを計る。底部は平になっている。内面は横ナデを施している。

6は器全体の16分の1ほどの2個の破片を接合した実測図である。 2個の破片は互に4～6m離れた所から検出した。 表面には平行たたきが、内面には青海波状文が施されている。 器高は胴部で破損のため不明である。 高台の径は14.0cm、高台の高さは 2.6cmを測る。底部は球状になっており短頸壺と思われる。底部には半径 3.0cmの穴があいているが、意図的に穿ったものか、破損によって生じたものかわからない。

以上、3点の須恵質蔵骨器を福岡県教育委員会の九州縦貫道関係埋蔵文化財報告XXの編年によれば、奈良時代後半に比定されると思われる。

○須恵器高台付埦（第30図10）

底部のみを残す赤焼きの高台付埦である。高台の径は8.9 cm、高台の高さは0.9 cmである。外面は横ナデが施され、内面は風化がはげしく、明らかではないが、恐らくは横ナデが施されていたと思われる。この遺物は周溝第Ⅰ区出土の多くの遺物の最上部から検出されたもので平安時代の遺物と思われる。この点から前にも述べたように平安時代頃までは、周溝は埋もれてはいなかつたと考えられる。



第34図　第Ⅶ区出土の空風輪

○中世の出土遺物

周溝のほとんどの所から土師器の糸切底の皿が古墳時代の遺物にまじって出土した。とくに第Ⅶ・Ⅷ区からは多数出土した。第Ⅶ区から出土した土師器の皿のように原位置を保っている物は他にはなく、細かくくだけ、割れ口は丸く摩耗していた。このことは風化のほか強く攪乱された可能性が考えられる。土師器以外に瓦質土器が周溝中から検出され、また表採されているが、いずれも器面が強く荒れている。これらの実測図は第33図に示す。又、各固体の説明は第6表に示す。検出した鍋の外面には煤が付着していた。破片が小さいため土器の大きさは計測できないものが多い。

第Ⅶ区の項でもふれたが、中世の遺物の出土状態から考えて中世において、墳丘の裾はいくぶん削られて小さくなっていたと思われる。また、第Ⅸ・Ⅹ区に示すような遺物の攪乱状態があったと推測される。

墳丘の裾から五輪の空風輪を表採している。第34図に示す五輪塔の空風輪は扁平で、厚い方で16.5cm、薄い方で13.5cm、高さ26.0cmを測る。材質は、軽石を含む軟い溶結凝灰岩である。

西側周溝付近から中世の遺物が多く出土したことから中世において何かの遺構が存在した可能性が考えられる。

○近世の陶磁器

埦（第32図10）・皿（第32図11）は表採遺物で、墳丘周辺に投棄された物と考えられる。江戸時代の後半の遺物であろう。　（村井）

③　鉄器・馬具・装身具類

a、鉄鏃（第35図1～36．第36図1～20．図版24）

第6表　実測不能の土器片数

地区名	種　別	器　種	数	備　考
①東側周溝	須恵器	坏　蓋	16	
	〃	坏　身	8	赤焼1点
	〃	高　坏	4	赤焼1点
	〃	甑	0	
	〃	壺	15	台付壺2
	〃	甕	100	
	〃	部位不明	21	
	土師器	壺	67	厚手2
		土師器	45	
	中　世	土師器質土器	25	
	縄　文		3	
	近世・現代	陶　器	4	
		近世ガラス	1	
		磁　器	1	
		砥　石	1	
②北側周溝	須恵器	坏　蓋	1	
		坏　身	1	赤　焼
		壺	3	
		甕	6	
	中　世	須恵質土器	1	
		土師質土器	69	
		瓦質土器	1	
	縄　文		6	曽畑2

地区名	種　別	器　種	数	備　考
③西側周溝	須恵器	坏　蓋	2	
	〃	坏　身	4	
	〃	高　坏	2	
	〃	壺	23	
	〃	甕	51	
	〃	部位不明	9	
	土師器		50	器種不明
		坏　身	4	
	中　世	土師質土器	+8 326	
		須恵質土器	2	
		瓦質土器	3	
	縄　文		3	
	弥　生		1	
		甕	1	
	近　世	陶　器	4	
		近世陶器	5	
④羨道・前庭・南側	須恵器	坏　蓋	11	
		坏　身	8	赤焼1
		高　坏	7	
		甑	1	
		壺	26	
		甕	57	
		台付壺	1	
		部位不明	10	
	土師器	土師器	29	
	中世土師質土器	土師質土器	123	糸切り皿
	須恵質土器	須恵質土器	3	
	縄文土器	無文器種文明	1	
	弥生式土器	壺	1	
	近　世	陶　器	4	
		磁器	7	

地区名	種別	器種	数	備考
⑤石室内	須恵器	坏蓋	1	
		高坏	1	
		壺	12	
		甕	23	
		部位不明	1	
	土師器		3	
	中世	土師質土器	1	
	その他	チップ		
		鉄片	10	
	近世	近代ガラス	4	
⑥その他（主に表採）	須恵器	坏蓋	2	
	〃	高坏	1	
	〃	壺	8	
	〃	甕	14	
	〃	部位不明	7	
	土師器	土師器	3	
		〃 (高坏)	1	
	中世	土師質土器	52	
		須恵質土器	4	
		縄文	8	
	近世現代	陶器	1	
		近世陶器	2	
		近代ガラス	3	

地区名	種別	器種	数	備考
総計	縄文	無文	21	
	弥生	壺	2	
	須恵器	坏蓋	33	
		坏身	25	
		高坏	16	
		聰	1	
		壺	154	
		甕	252	
		台付甕	1	
		部位不明	48	
	土師器	土師器	77	
	中世	須恵質土器	10	
		土師質土器	614	
		瓦質土器	4	
	近世・現代	陶器	18	
		磁器	8	
		ガラス	8	
		砥石	1	
		鉄片	10	

すべて尖根の片丸造鑿箭式で、形状は細部において幾分差異が認められる。身は先端部から箆被にかけてなだらかに変化し、中には段を有するものがある。身の断面は半月形から略三角形となり、一部には鎬造状（第35図４～７）や片刃箭式状（第35図14）を呈するものもある。４は完形品に近く、長さ14.0cmを測り、箆被は方形中空で身は鎬造状を示す。箆被の多くは断面方形ないし長方形で中空となり長さ11.5cm以上を測るもの（第35図24・25）も存在する。箆代も形状に変化をもち、矢柄の付着したものが数例確認できる。30は最も箆代の長い例で残存長6.0 cmを測り、断面円形で竹製の矢柄がよく残っている。

b、短刀（第36図26．図版27）

物打ちから切先にかけての部分で残存長12.5cmを測る。形状は身幅２cm、細身の平造りで切先にはフクラがつく。棟幅は 0.5cmで平をなし幾分平肉がつく。

c、刀子（第36図23～25．図版27）

それぞれ大きさは異なるが、平造りで棟区は段を持ち刃区はゆるやかに細まりながら茎部へと続く形態である。24は細身でかさねが厚く、25は切先きから刃区にかけて弯曲した切り出し部を持つ。茎は棟方、刃方共に平をなし棟方のかさねがやや厚い。一部に木質の残存が認められる。

d．鐓（第36図28．図版24）

長さ 9.3cmで、両側から素延によって丸く折り曲げ袋部を形成したものである。

e．挈先（第36図29.）

先金の一部で残存長 8.5cmを測り、表面に数条の筋を持つ。銹化の度合いは低く鋳造品と思われる。新しい時期の混入かもしれない。

f．轡（第37図１．図版25）

各部揃った完形品で、鏡板は外径 5.9×5.0 cmの楕円素環で造り付けの立聞が着く。銜は中央で連結した二連式で総長16.2cm、引手は鏡板の内側につき長さ15.0cmを測る。各部の連結は全て環耳によってなされている。

g．尾錠（第37図２・３・７・図版26）

鉄地金銅張りで金銅製釣金具を接続する形態をとり、外環は長径 4.8cmの楕円形となり別作りの留針を嵌め込む。共に断面は八角形で明瞭な稜を持ち、秀巧な造りである。釣金具には径 3.9cmで中央部に一本の凹線を有する座金（７）が組み合わさる。

h．鐙金具（第37図６．図版25）

木心鉄張壺鐙の上部金具で、両側より２本の円頭鋲と先端を折り曲げた部分で木部に固定する形態をとる。全長12.5cm、最大幅 1.8cmで、釣り下げ部は断面 0.8 cmの円形を呈する。円頭鋲は長さ1.1cmを測る。

i．釣舌金具（第37図８．図版25）

鉄板と鉄地金銅張りの薄板を組み合わせたもので、舌部を折り曲げて釣り下げ部となす。中

央部には鋲留痕が認められる。

j．鞍状金具（第37図９．図版25）

縦 3.1cm、横 2.8cm、厚さ 0.1cmの隅の取れた菱形状の座金に、革紐通しの環をつけた鉄棒を挿入するものである。

k．杏葉状金具（第38図１～３．図版26）

鉄地金銅張りの薄板と鉄板を鋲留したもので、１は残存長 4.1cm、幅 5.7cm、厚さ 0.3cmを測り、径 1.9～ 2.0cmの円形の凹みで文様を構成する。２は円形の凹みと同様に三角形状の凹みも認められ文様構成の一端を窺い知ることができる。３は円形の文様の一部を残す破片である。

l．鉸具状鉄器（第36図21．22.）

21、22は同一個体と思われ、つくりは鏃の箙被に類似し、上部は環状となる。

m．鉸具（第37図４・５．第38図４・５．図版26）

第37図４・５は環体の破片で、４は断面径0.55cmの銀張り、５は幅 0.9cm、厚さ 0.3cmで鉄板を２枚貼り合わせたものである。第38図４は推定長 8.6cm、最大幅 6.4cmの体部に4.5×2.9cmの隅丸の方形環を折り曲げ舌によって取り付けたもので、体部には長さ0.7cmの円頭鋲を５本程打って革帯に留められていたものと思われる。５は長さ6.0cm、幅 4.7cmの環状部に断面方形の長さ４cmの角釘を持つもので、鞍として使用されたものと考えられる。

n．辻金具（第38図６．図版26）

鉄地金銅張りの鉢部の残欠で２本の凹線を持つ。金箔が部分的に見受けられる。

o．飾り鋲（第38図７．図版26）

金銅張り六葉の座金に鉄製の座金を更に一枚重ね宝珠形の鋲頭を持つもので、精巧な作りである。座金径 3.1cm、鋲幅 1.7cm、鋲長 2.2cm、鋲軸径 0.5cmを測る。

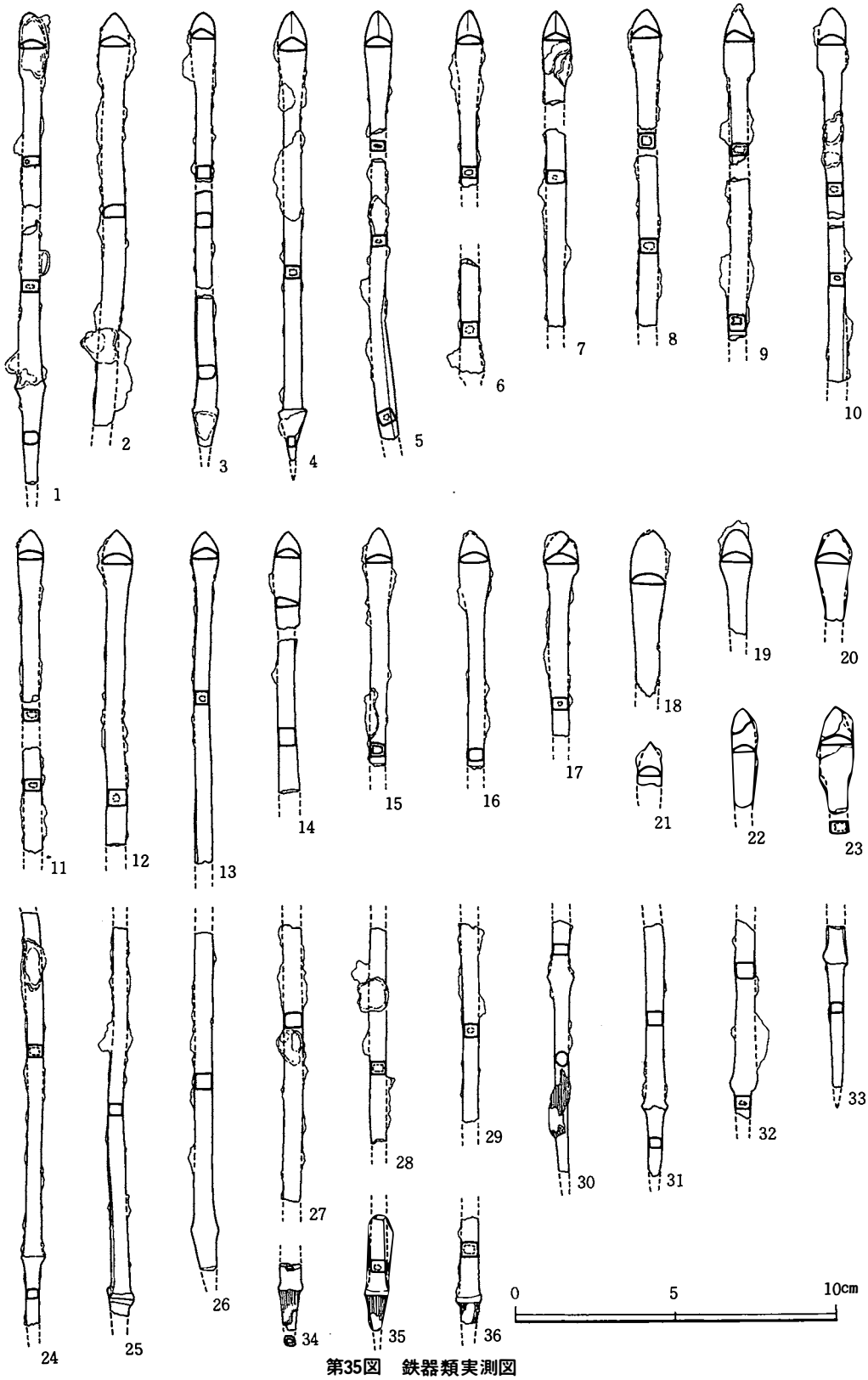
p．帯金具（第38図８～16．図版27）

９点出土しそれぞれ形態を異にする。8・9・12 は長方形で幅 2.4～2.5 cmを測る。10・11は対になるものと考えられ鉄地金銅張りで両端に２本の円頭鋲を持つ。部分的に金箔が残り精巧な作りである。14は鉄板を折り曲げて貼り合わせたもので、15は一端が半円形になる。16は長方形で長さ 4.4cm、幅 2.3cm、厚さ 0.2cmを測り、一端に３個反対側に４個の鋲孔が認められる。13は方形に近い形をとり、縦 2.7cm、横2.3cm、厚さ0.3cmで４箇所に鋲を持つ。

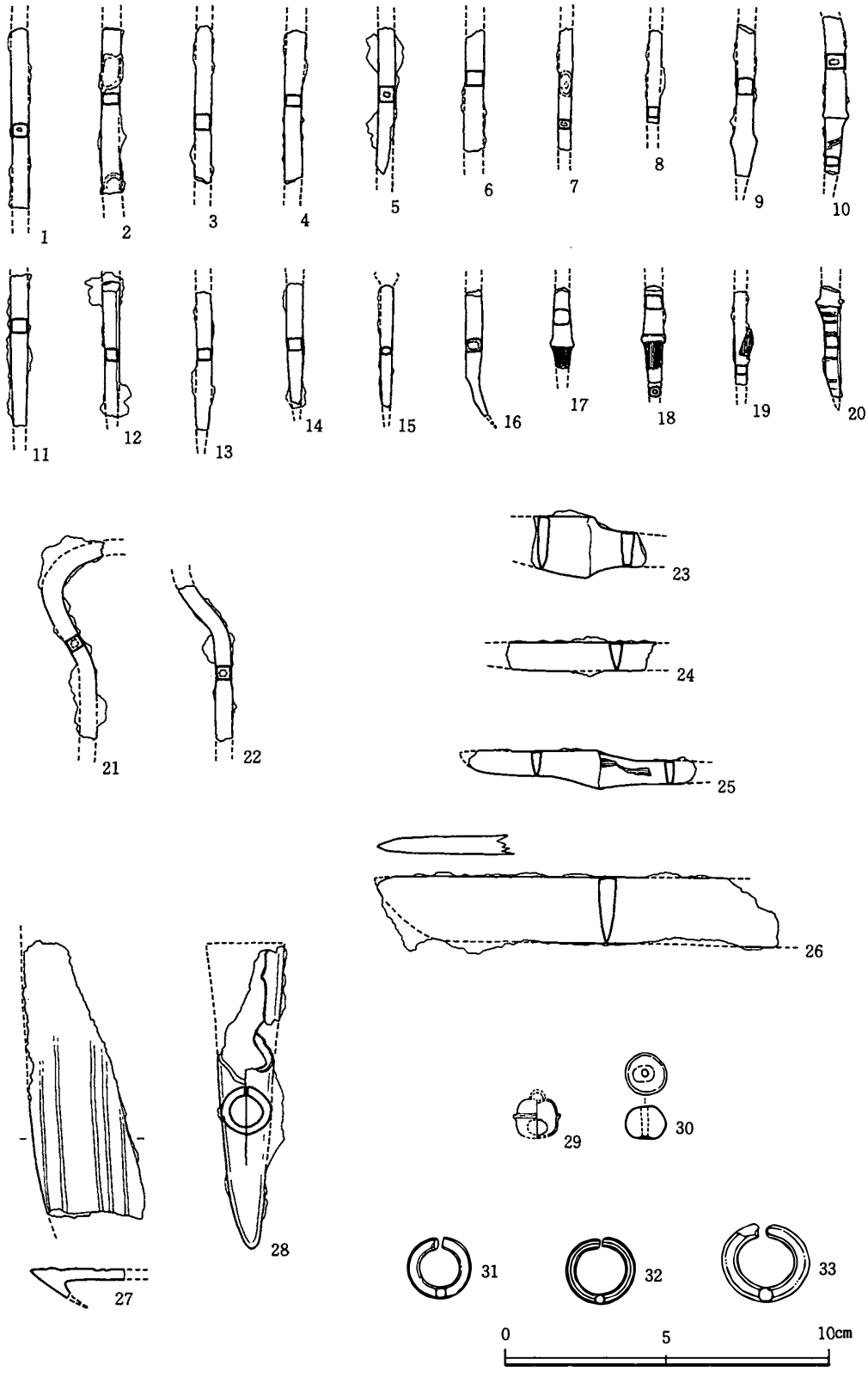
q．鈴（第36図29．図版27）

鉄製で鈕部と縦裂孔の部分を欠失する。胴中央に折り曲げによる帯を形成し、石製の鈴子を入れる。

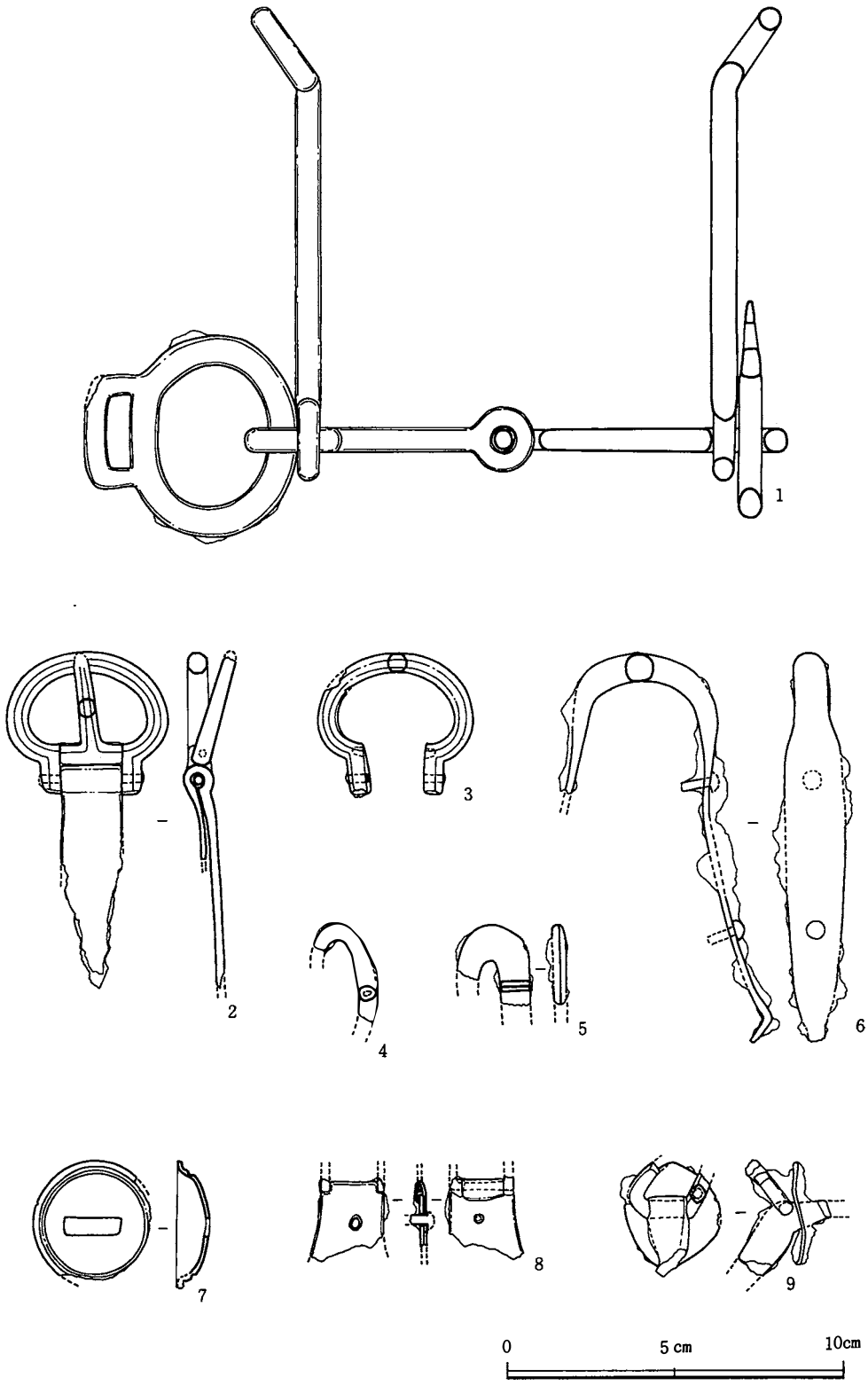
r．丸玉（第36図30．図版27）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
5
10cm

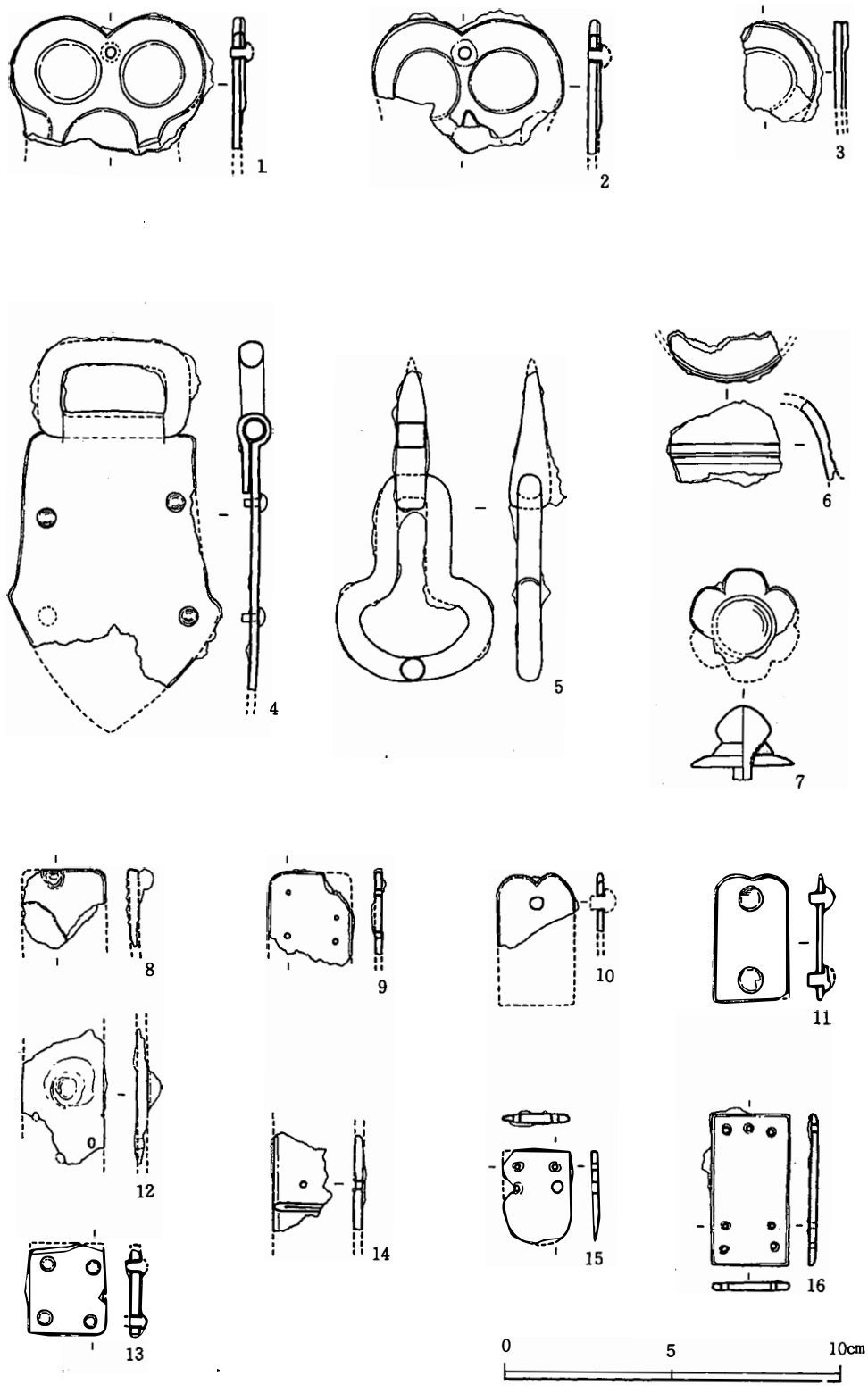
第35図　鉄器類実測図



第36図　鉄器・装身具類実測図



第37図　馬具類実測図



第38図　馬具類実測図

第7表　鉄器・馬具・装身具類一覧表

器種		形態	出土地区	挿図	備考
鉄器	1．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	第35図－1	
	2．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－2	
	3．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－3	
	4．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－4	先端部のみ鎬状に造る
	5．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－5	先端部のみ鎬状に造る
	6．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－6	先端部のみ鎬状に造る
	7．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－7	先端部のみ鎬状に造る
	8．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－8	
	9．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－9	
	10．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－10	
	11．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－11	
	12．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－12	
	13．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－13	
	14．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－14	片刃箭式状の形態をとる
	15．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－15	
	16．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－16	
	17．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－17	
	18．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－18	
	19．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－19	
	20．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－20	
	21．鉄鏃	片丸造鑿箭式		〃　－21	
	22．鉄鏃	片丸造鑿箭式		〃　－22	片刃箭式状の形態をとる
	23．鉄鏃	片丸造鑿箭式	前庭部	〃　－23	
	24．鉄鏃		前庭部	〃　－24	
	25．鉄鏃		前庭部	〃　－25	
	26．鉄鏃		前庭部	〃　－26	
	27．鉄鏃		前庭部	〃　－27	
	28．鉄鏃		前庭部	〃　－28	
	29．鉄鏃		前庭部	〃　－29	
	30．鉄鏃		前庭部	〃　－30	篦代部に矢柄残存
	31．鉄鏃		前庭部	〃　－31	
	32．鉄鏃		前庭部	〃　－32	
	33．鉄鏃		前庭部	〃　－33	

器種		形態	出土地区	挿図	備考
鉄器	34. 鉄鏃		前庭部	第35図—35	箆代部に木質残存
	35. 鉄鏃		前庭部	〃 35	箆代部に木質残存
	36. 鉄鏃		前庭部	〃 36	箆代部に木質残存
	37. 鉄鏃		前庭部	第36図—1	
	38. 鉄鏃		前庭部	〃 —2	
	39. 鉄鏃			〃 —3	
	40. 鉄鏃		前庭部	〃 —4	
	41. 鉄鏃		前庭部	〃 —5	
	42. 鉄鏃		前庭部	〃 —6	
	42. 鉄鏃			〃 —7	
	44. 鉄鏃		前庭部	〃 —8	
	45. 鉄鏃			〃 —9	
	46. 鉄鏃		前庭部	〃 —10	
	47. 鉄鏃		前庭部	〃 —11	
	48. 鉄鏃			〃 —12	
	49. 鉄鏃			〃 —13	
	50. 鉄鏃		前庭部	〃 —14	
	51. 鉄鏃		前庭部	〃 —15	
	52. 鉄鏃			〃 —16	
	53. 鉄鏃		前庭部	〃 —17	箆代部に木質残存
	54. 鉄鏃			〃 —18	箆代部に木質残存
	55. 鉄鏃		前庭部	〃 —19	箆代部に木質残存
	56. 鉄鏃		前庭部	〃 —20	
	57. 鉸具状鉄器		東側周溝	〃 —21	馬具の一種か
	58. 鉸具状鉄器		東側周溝	〃 —22	馬具の一種か
	59. 刀子		前庭部	〃 —23	
	60. 刀子		前庭部	〃 —24	
	61. 刀子		周溝	〃 —25	茎部に木質残存
	62. 短刀		C—7 ST 107+80	〃 —26	
	63. 鐵		前庭部	〃 —28	
	64. 犂先		前庭部	〃 —27	犂面に数条の細い溝あり
馬具	1. 轡	楕円形素環鏡板	前庭部	第37図—1	
	2. 金銅張尾錠		前庭部	〃 —2	

器種		形態	出土地区	挿図	備考
馬具	3．金銅張尾錠	木心鉄張壺鐙	前庭部	第37図－3	
	4．銀張鉸具			〃 －4	
	5．鉸具		前庭部	〃 －5	
	6．鐙金具		前庭部	〃 －6	
	7．金銅張座金		前庭部	〃 －7	第37図－2と組み合わさる
	8．金銅張釣舌金具		前庭部	〃 －8	
	9．鞍状金具		前庭部	〃 －9	
	10．杏葉状金具		前庭部	第38図－1	鉄地金銅張
	11．杏葉状金具		前庭部	〃 －2	鉄地金銅張
	12．杏葉状金具		前庭部	〃 －3	鉄地金銅張
	13．鉸具		前庭部	〃 －4	
	14．鉸具		前庭部	〃 －5	
	15．辻金具		西側周溝	〃 －6	鉄地金銅張
	16．鉄地金銅張留金具(飾り鋲)		前庭部	〃 －7	
	17．帯金具		前庭部	〃 －8	
	18．帯金具		前庭部	〃 －9	
	19．帯金具		前庭部	〃 －10	金銅張
	20．帯金具		前庭部	〃 －11	金銅張
	21．帯金具		前庭部	〃 －12	
	22．帯金具			〃 －13	
	23．帯金具		前庭部	〃 －14	
	24．帯金具		前庭部	〃 －15	
	25．帯金具		前庭部	〃 －16	
装身具	1．鈴	丸玉	前庭部	第36図－29	小石の鈴子
	2．玉		前庭部	〃 －30	瑪瑙製
	3．金環		前庭部	〃 －31	鉄地金銅張
	4．金環		前庭部	〃 －32	
	5．銀環		前庭部	〃 －33	鉄地銀張

赤味を帯びた褐色の瑪瑙製で径 1.3cm、厚さ 1.0cmで孔は 0.2cmを測る。孔は一方から穿たれている。

s．耳環（第36図31～33．図版27）

31は外径 2.0cmの金銅張りの金環で、環体の断面は円形となり 0.3cmを測る。開き部は腐蝕のため幾分幅広くなっている。32は精巧な作りの金環で非常に重い。開きは 0.1cmで、外径2.1cmを測り環体の断面は八角形となり稜を有する。33は銀環で、外径 2.7cm、環体の断面は円形で径0.4cmを測る。開きは腐蝕のため幅広くなっている。耳環は 3 点とも異なった形態を示す。

（下村）

4）古墳調査のまとめ

当古墳を発掘した結果次のような特徴が周溝・墳丘・石室には見られた。観察記録の所で述べた事と重複する点もあろうが再びここに述べてみたいと思う。

周溝は前庭・羨道部と繋がっており全体的な形は「の」の字状を呈している。しかもきれいな「の」の字を描くのではなく、所々角ばっていて見方によっては六～八角形状に見え、羨道部と周溝末端部との間には 1.1m 落差がある。末端部は崖の渕の所まで延びている。遺物の出土は周溝末端部および周溝と前庭が繋がる部分付近に多かった。

墳丘は三角錐状になるまで掘削をうけているが周溝の周り方から円墳と思われる。封土には構築の状態を物語るかのように縞文様が見られ、石室側壁の 7 分目から上端部付近の高さに当る所に礫層（凝灰岩の破砕礫）が見られる。

石室の天井石はすでに失われており、玄門の上半分は破損していた。石室の四面はそれぞれ 1 枚の凝灰岩の巨石で構成されていた。石室の四隅は小隅合わせをするようにそれぞれの石材の角を打ち欠いて合わせている。玄門は巨石の中央部を幅59cm（高さ不明）刳り貫いて造っている。その前には踏石がおかれている。玄門の框石の部分と床面とは30cmの落差がある。側壁の上端部にはL字形の切り込みがあり、奥壁の切り込み部には直方体状の凝灰岩の力石が埋め込まれている。石室の形式は、巨石を使った単室墳という点では八代地方に多く見うける単室の巨石墳（一般的に鬼の窟式と言っている）の一つである。また巨石を使った単室墳で玄門を刳り貫いた例では、年の神古墳（小川町）、鬼の釜古墳（免田町）等によく類似する。

以上のような事実を観察した結果から当古墳の発掘記録のまとめとしたい。

○墳丘と石室の構築過程

古墳時代の地表面に石室構築のための掘り方、及び墳丘の封土断面の観察と石室の用材の組合わせの状態から、古墳の構築の過程は㋑～㋩の順序と考えられる。

㋑ 小丘陵の先端部に平面形を割付した（推測）のち釣鐘状に四枚の壁材の掘り方を設定した。奥壁部分の掘り方の断面は、奥壁材断面の裏側に実によく似ていることから、石材の形状

によく合わせて掘ったことがわかる。掘り方の深さは石室の床面の基盤よりも側壁の下部が少し深くなるように掘り下げている。

㋺ 框石と奥壁が東西の側壁にはさみ込まれていることから、框石と奥壁を建てた後に東西の側壁を建てたと考えられる。これら4枚の用材を建てる時のささえとして、石室内部にわく組なり、土盛が必要であろうが、この点については明らかでない。

㋩ 四方の用材を建てた後に、掘り方に裏込めの石を並べ土を入れて埋め、平に地表をならしている。このことは、旧地表面（古墳構築時の地表）の焼土の広がりから言える。

㋥ 四方の壁材を建てた後、封土を盛る前に石室の裏側において火を焚いた。このことは掘り方の上面に広がる焼土の分布からわかる。掘り方の上の部分にも焼土が広がっていた。

㋭ 封土の断面から、平らな旧地表に石室をつつみ込むような形で、ゆるやかな傾斜をもつ円錐形状に土盛を行ったことが考えられる。石室の壁の高さの七分目から八分目の高さのところに凝灰岩の礫を 0.4～0.5 m ほど積んだ部分がある。これは、封土を安定させるための工事か、天井石を側壁上に乗せるための足場作りか、壁の上端部の調整による破砕礫か、いずれの理由かはっきりしない。

㋬ 封土は側壁の上端部まで残存していたが、天井石はすでに失われていたため墳丘築造時の高さは明らかにできなかった。しかし天井石の厚みを壁面の用材の厚みより少し厚めに勘算して、その上に封土が有ったと仮定するならば、旧地表面（古墳築造時の地表面）からの封土の高さは、2.3 m 以上になると推測される。

㋣ 周溝の掘削は墳丘の封土の表面の整形作業と前後しながら行われた可能性が地形的環境と作業能率から考えられる。

○石室の形状

第4表は、玄室の奥行を1とした時の各部の比を示したものである。この表から岩立C古墳の石室構築の平面的地割を考えると、正方形状（等脚台形に近い）の玄室に、奥壁と同じ辺の長さ（奥行の8割の長さ）の正方形の羨道をつけた形状に計画されたものと考えられる。天井は奥行に対して7割の高さに計画されたと推定できる。奥壁は6°、東側側壁は10°、西側側壁は9°内側に傾いているので、全体の形としては角錐台状の室内空間を持っている。

玄門のつくりが類似する年の神古墳の石室の各部の大きさを比較すると各部の大きさともに約 0.3～0.6 mほど岩立C古墳の方が大きい。年の神古墳の石室の各部の比の値（奥行を1とした場合）を見ると、幅が6割～7割になり、幅が狭く長方形の平面形を持っていることがわかる。[注1]年の神古墳の石室内は凝灰岩の仕切石で仕切られた「コ」の字状に三区の屍床があり、通路は屍床よりやや狭い。床は粘土で固められ、その上に砂混じりの小礫がひかれており、丹は使用されていない。

岩立C古墳の石室の空間は、年の神古墳の石室よりも奥行・幅ともに大きいので、「コ」の

字状の三区の屍床と通路をつくることは充分にできる。しかし、床面は破壊されているため、元の状態は明らかでない。

床面は前述のように、基盤面に礫を並べて上面を粘土でうすく（表面の凹凸がなくなる程度）張ったことが、残存していた床の一部から知ることができた。床の厚さは12～14cm程度と推測される。

赤色顔料の使用は、石材と石材を組み合わさった隅で、風化をまぬがれた部分３ヵ所に、わずかに残っていた顔料の広がりから、玄室内一面に赤色の顔料が塗布された可能性が考えられるが、壁面の風化が著しいので断言はできない。

②古墳構築に使用した尺度

第９表は古墳各部の計測値を中国の尺の長さに換算した表である。比較のため玄門が類似している年の神古墳のデーターを付した。１尺の長さは「古墳の発掘」を参照した。表中に※印を付した所は割り切れた値を示している。晋尺（１尺0.24m）で換算[注1]した値が一番割り切れる値が多い。このことから１尺を0.24mとした晋尺を使用した可能性も考えられる。

○石材の加工

框石、奥壁、東西壁の用材は、内面を平坦に削っている。また石材が組み合う四隅の部分は角ばった部分を打ち欠いて、小隅合わせを行っている。

踏石の上面と框石の正面部分も平坦に面取りの加工をしている。

天井石が乗る壁材の上隅には、三枚の石材（奥、両側）ともにＬ字形の切り込みがある。

東側側壁は入口側に２段に、西側側壁は入口側に１段に、奥壁は両隅にＬ字形の切り込みがある。しかも奥壁のＬ字形の切り込みの中には直方体の凝灰岩が埋込まれており、力石としての石室構造上からくる緩衝作用（力の分散）の働きがあるのか、それとも他の理由があるのか、問題を提起したい。側壁上端部のＬ字形の加工、および玄門を１枚の巨石を刳り貫いて造る手法は、大野窟古墳にも見られる。

○出土遺物と構築年代の推定

出土した遺物のうち、須恵器は周溝第Ⅰ・Ⅱ区と第Ⅶ、Ⅷ、Ⅹ区から出土したものが大部分であり、鉄鏃・馬具・装身具等は第Ⅸ・Ⅹ区から出土している。古墳時代の土師器は周溝第Ⅰ・Ⅱ区から２点の長頸壺を検出している。

埴輪は周溝第Ⅸ区の壁にはりつくようにして、破片を１点検出したものと、墳丘の表面から１点採集した以外の７点の破片は、畑の耕作時に集めた石塚の中から採集したものである。

竈（かまど）の破片は墳丘の封土中から検出した。

出土遺物の大部分は周溝中から検出した物であり、他は埴輪片のように石塚の中から採集したものである。石室内・石室の掘り方、封土中等から検出した物は非常に少ない。石室内から検出した遺物は全て、盗掘によって攪乱された中から出土した物であり、しかもゴミ棄て場同

第８表　岩立Ｃ・年の神両古墳の各部計測値の中国の尺度換算表

古墳名	古墳各部の長さ(m)		中国の尺の長さ(m)	戦国 0.23	晋 0.24	梁 0.249	東魏 0.348	隋 0.274	唐 0.301
岩立Ｃ古墳	玄門	幅	0.57	2.5	2.4	2.3	1.6	2.1	1.9
		高さ	不明	——	——	——	——	——	——
		奥行	0.40	1.7	1.7	1.6	1.1	1.5	1.3
	踏石	縦	0.20	2.1	※ 2.0	1.9	1.4	1.8	1.6
		横	1.20	5.2	※ 5.0	4.8	3.4	4.4	4.0
	踏石の掘り入み	縦	0.20	0.9	0.8	0.8	0.6	0.7	0.7
		横	0.86	3.7	3.6	3.5	2.5	3.1	2.9
		深さ	0.02						
	石室	奥行	2.93	12.7	12.2	11.8	8.4	10.7	9.7
		幅 奥壁近く	2.28	9.9	※ 9.5	9.2	6.6	8.3	7.6
		幅 中央部	2.31	10.0	9.6	9.3	6.6	8.4	9.7
		幅 玄門近く	2.50	10.9	10.4	10.0	7.2	9.1	8.3
		天井の高さ(推定)	2.0	8.7	8.3	8.0	5.7	7.3	6.6
	羨道	奥行	2.2	9.6	9.2	8.8	6.3	8.0	7.3
		幅 玄門近く	2.2	9.6	9.2	8.8	6.3	8.0	7.3
		幅 前庭近く	2.7	11.7	11.3	10.8	7.8	9.9	9.0
	墳丘の径	A－O－B方向	14.4	62.6	※ 60.0	57.8	41.4	25.6	47.8
		C－O－D方向	16.7	72.6	69.6	67.1	48.0	60.9	55.5
年の神古墳	玄門	幅	0.47	2.0	2.0	1.9	1.4	1.7	1.6
		高さ	0.63	2.7	2.6	2.5	1.8	2.3	2.1
	扉石(閉塞石)	高さ	1.15	※ 5.0	4.8	4.6	3.3	4.2	3.8
		幅	0.70	3.0	2.9	2.8	2.0	2.6	2.3
		厚さ	0.14	0.6	0.6	0.6	0.4	0.5	0.5
	石室	奥行	2.55	11.1	10.6	10.2	7.3	9.3	8.5
		幅 奥壁付近	1.64	7.1	6.8	6.6	4.7	6.0	5.4
		幅 中央部	1.70	7.4	7.1	6.8	4.9	6.2	5.6
		幅 玄門近く							
		高さ	1.50～1.70	6.5～7.4	6.3～7.1	6.0～6.8	4.3～4.9	5.5～6.2	5.0～5.6
	墳丘の径	東西径	6	26.1	※ 25	24.1	17.2	21.9	19.9

① ※印は完全に割り切れた値
② 年の神古墳の値は、「小川町年の神古墳」富樫卯三郎・松本雅明(熊本史学15・16号　S．34年5月)より

様の状態の出土遺物であるので、表採された物と同様の価値である。

出土した須恵器の器種を列記してみると坏（蓋・身）・高坏（有蓋・無蓋）・瓿・台付長頸壺・壺・大形甕・器台である。これらの須恵器を小田富士雄氏の須恵器の編年表[注2]に対応させると、第26図２の高坏、第30図５・６の器台のようにⅢに対応できると思われるものから第29図の台付壺のようにⅣに対応できる物まである。坏・高坏・甕のほとんどはⅣに対応すると思われる。

馬具については、轡・杏葉・鈴具・帯金具・あぶみの一部、鈴等が出土している。鈴具（鉄地金銅張り）については、白木原和美氏より７世紀頃の物であろうとの御教示をうけた。[注3]

砂川以南・球磨川以北にける埴輪の出土地を第11表に示した。岩立Ｃ古墳がこれら出土地のどの時期に対応するかは現在のところ明らかではない。しかし、石室の形態と須恵器から考えて、埴輪を持つ古墳としては第11表のグループの中では新しい古墳と思われる。

以上のことから総合して、古墳の構築時期は６世紀後半頃と考えられ、７世紀に入っても機能していたと思われる。

○類似の古墳の分布

巨石を８個から12個程度組合わせた横穴式の単室を持つ古墳は、緑川以南から球磨川以北の間に多く分布することが知られている。『竜北村史』の中で江上敏勝氏は「八代郡史」をもとにして、「八代市竜峰校区から太田郷校区にかけて、百基[注4]以上あったと推定する。」と記述しておられる。これらの古墳の石室の形状について江上敏勝氏は「この古墳は八代地方独特の様式を持ち、またこの地方に集中的に分布する。大形板状の自然石を側壁に５枚立て、３枚で天井をおおい、内部は前室と奥室を持つ合葬墓である。」、松本雅明氏は「八代平野の山麓線に点在する数十の巨石墳は、ほぼ二種類に分けられる。最も分布が多く特徴ある構造をとっているのは、龍峯から宮地にかけてのもので、羨道がなく、石室の内部は、側壁の二つの石の間に袖石があり、前部と後部との長さの比は１と２、屍床の支切石はない。その北方には分布は少いが、それでも点在し、雁回山の北麓木原まであり、形にはかなり変化がある。」と言っておられる。

両氏が述べられているような古墳について石材の面から見た場合[注5]、阿蘇溶結凝灰岩・変成岩・花崗岩・安山岩等を使用している。これらの岩石の一種又は数種を使って１つの石室を構築している。ところで、小川町から八代市にかけての地域には、安山岩の露頭はない。安山岩を最も採取しやすい所は、宇土半島或いは水俣・芦北地方であろう。とくに水俣・芦北地方に産する安産岩は板状に節理が発達しているのを見うける。これら石材の面から、今後の検討が必要と思われる。

石室内の構造を見た場合、県文化課が調査した八代市岡町境２号墳・同清水古墳には「コ」

第９表　岩立Ｃ古墳の玄門と類似の玄門を持つ古墳一覧

		所　在　地	備　　考
1	古墳名無シ	宇土市住吉	石室の残欠アリ
2	御殿山古墳	〃	小部田横穴の上の台地上
3	塚原２号墳	宇土郡不知火町塚原	
4	年の神１号墳	下益城郡小川町北小野	昭和33年９月　宮樫卯三郎・松本雅明両氏調査 20体近くの人骨出土 昭和34年５月　熊本史学15・16号に報告
5	〃　　２号墳	〃	昭和48年　県文化課調査 石室の前半分は不明だが、形は年ノ神にきわめて類似する。 熊本史学15・16号にも記載あり
6	岩立Ｃ古墳	八代郡宮原町立神	今回調査
7	一トロ坂古墳	〃　　平原	未調査、開口している
8	鬼ノ釜古墳	球磨郡免田町	乙益重隆氏調査　玄門、石室の形はきわめて類似すると乙益氏より御教示あり

この表の作成に当り、乙益重隆、高木恭二、島津義昭、松本健郎各氏の御教示を得た。

の字状の屍床を持っていた。この場合、年の神古墳・岩立Ｃ古墳のように刳り貫きの玄門を持つ古墳と、境２号墳・清水古墳のように袖石を立てて刳り貫きになっていない古墳の２種類に分けられるであろう。

第10表に石室正面の框石の中央部を刳り貫いて玄門（框）を造った石室を持つ古墳を示した。

岩立Ｃ古墳、一トロ坂古墳、年の神古墳、不知火町塚原２号墳は八代平野の北側から東側の縁に当る小丘陵地帯にあり、地理的にも似かよっており、距離的にも互いに近い。不知火町塚原２号墳と岩立Ｃ古墳の距離は、約16㎞、岩立Ｃ古墳と一トロ坂古墳の距離（途中に氷川が流れている。）は約４㎞ある。鬼ノ釜古墳は、九州山地の真中である球磨盆地に存在し八代地方と何らかの交流があった事を証明するものであろう。[注6] 交通路として宮原町から氷川の支流である河俣川（八代郡東陽村）に沿って登りつめ、大通峠を越えて球磨郡五木村に出て、川辺川に沿って下り、人吉盆地に出るルートを想定すれば、岩立Ｃ古墳と鬼ノ釜古墳は近い距離にあると言えるのではなかろうか。

注１　森　浩一　古墳の発掘　中公新書
注２　小田富士雄　塚の谷窯跡　八女教育委員会
注３　昭和51年６月　白木原和美先生の御教示による。
注４　竜北村教育委員会　竜北村誌　昭和48年６月26日
注５　富樫卯三郎・松本雅明　小川町年の神古墳　熊本史学15・16号　昭和34年５月
注６　昭和53年10月　乙益重隆先生の御教示による。

第10表　砂川以南・球磨川以北における埴輪出土地一覧

出土地名		所在地	備考
1	姫の城古墳	八代郡竜北町字北川	昭和39年8月 石人石馬研究会　墳丘実測
2	中の城古墳	〃　上北山王	〃　〃
3	端の城古墳	〃　〃	〃　〃
4	有佐大塚古墳	八代郡鏡町有佐字大塚	昭和53年　富樫卯三郎氏調査
5	蕾園古墳	八代郡宮原町字川上	乙益重隆氏調査
6	園ノ迫古墳	〃　〃	乙益重隆氏調査
7	岩立C古墳	〃　立神	今回の調査によって検出
8	野寺跡	〃　野寺	宮原町八火会館に資料あり
9	川田遺跡	八代市川田町西	古墳ではない。 九州縦貫道建設にともなう埋文調査により検出
10	八代大塚古墳	〃　片町	昭和42年調査
11	竹原神社古墳	〃　竹原町	江上敏勝氏　資料を表採したとの情報を高木恭二氏より聞く。

この表作成に当り、野田拓治、高木恭二、平山修一、佐藤伸二各氏の御教示を得た。

5）縄文、先土器時代の遺物・遺構

①縄文時代の遺物とその出土状態

旧地表面下の土層の説明は、墳丘の断面についての項で述べたが、第39図の模式図により説明したい。縄文時代の遺物・遺構の発掘区については石室周辺部をJ—I区、周溝外の部をJ—II区とする。

○J—I区

第I層（J—I層）は古墳構築時の表土層である。層の厚さは0.10mを計る。旧地表面（第1層の表面）に3カ所の焼けた所がある。焼土中からは、縄文早期から晩期にかけての土器片にまじって須恵器片と土師器片が検出されている。土の色は淡黒褐色を呈しており、植生による土色の変化があったと思われる。土層中から、縄文晩期頃と思われる薄手の粗製の土器片、弥生時代の石器（扶入石斧、長さ約15cm、現物は調査中に紛失）・古墳時代の遺物（須恵器・土師器の細片）を採集した。出土した遺物から、この土層は古墳時代の表土層と考えられる。

第II層（J—2層）の土の色は明褐色（きな粉状）を呈する。層の厚さは0.16mである。土の粒子は微細で、粘性があまりない。黄色味が強くさらさらした手ざわりなので調査中はきな粉層と呼んでいた。

第40図は、J—2層中の遺物出土状態を示す。周辺の縄文遺物包含部分は果樹園の開墾と石室の掘り方によってこわされ、石室を取りかこむU字形（幅0.3～1.2m）に取り残されている。遺構と認め得るものは検出できない。出土遺物は、石皿（礫岩製）、縄文土器片（条痕文、隆

帯文、無文、厚さ0.3～0.5cm程度で薄い）、剝片（黒曜石、安山岩、チャート）、自然礫（焼けている物もある）等である。検出された遺物群の中から轟式土器として分類され得る貝殻条痕文土器片や隆帯文土器片を検出した。遺物群の検出面の高さは、

第Ⅲ層（J －3層）の土の色は明褐色（第Ⅱ層より褐色が濃い）を呈する。層の厚さは0.28mである。粘性の強い土で乾燥すると硬く固まりひび割れを生じ、水を含むと再びもとに戻る。この土の中には軽石のような粒状物質（指で押しつぶれる）を少し含み、層の下になるほど多く含んでいる。検出された遺構は第41図に示すような2ヵ所の礫群であるが開墾による掘削のため全容はつかめなかった。石室奥壁裏の集石からは、山形押型文と条痕文のある円筒形土器（平底と思われる）、

mの範囲で密に礫岩やチャートの礫が集まっている。礫中からは剝片（石英、チャート、黒曜石）・打痕のある礫・条痕文土器の細片が検出されている。礫や石片は周溝の方に散布し第Ⅶ区まで広がっている。遺構の検出される高さは、海抜55.10～55.50mの範囲内にある。

J －3層の下には黄褐色の軟い凝灰岩の層（阿蘇火砕流Ⅳ）であり、二遺跡の基盤となっている。この層の厚さは約2mほどと思われるがその下に黒色の凝灰岩の層（阿蘇火砕流Ⅲ）がある。

J －Ⅰ区における縄文時代の遺構・遺物の出土状態は上記のとおりだが、その他に石室の掘り込み中（古墳時代の攪乱）から先土器時代の遺物（ナイフ形石器）を検出したことを付しておく。

○J －Ⅱ区

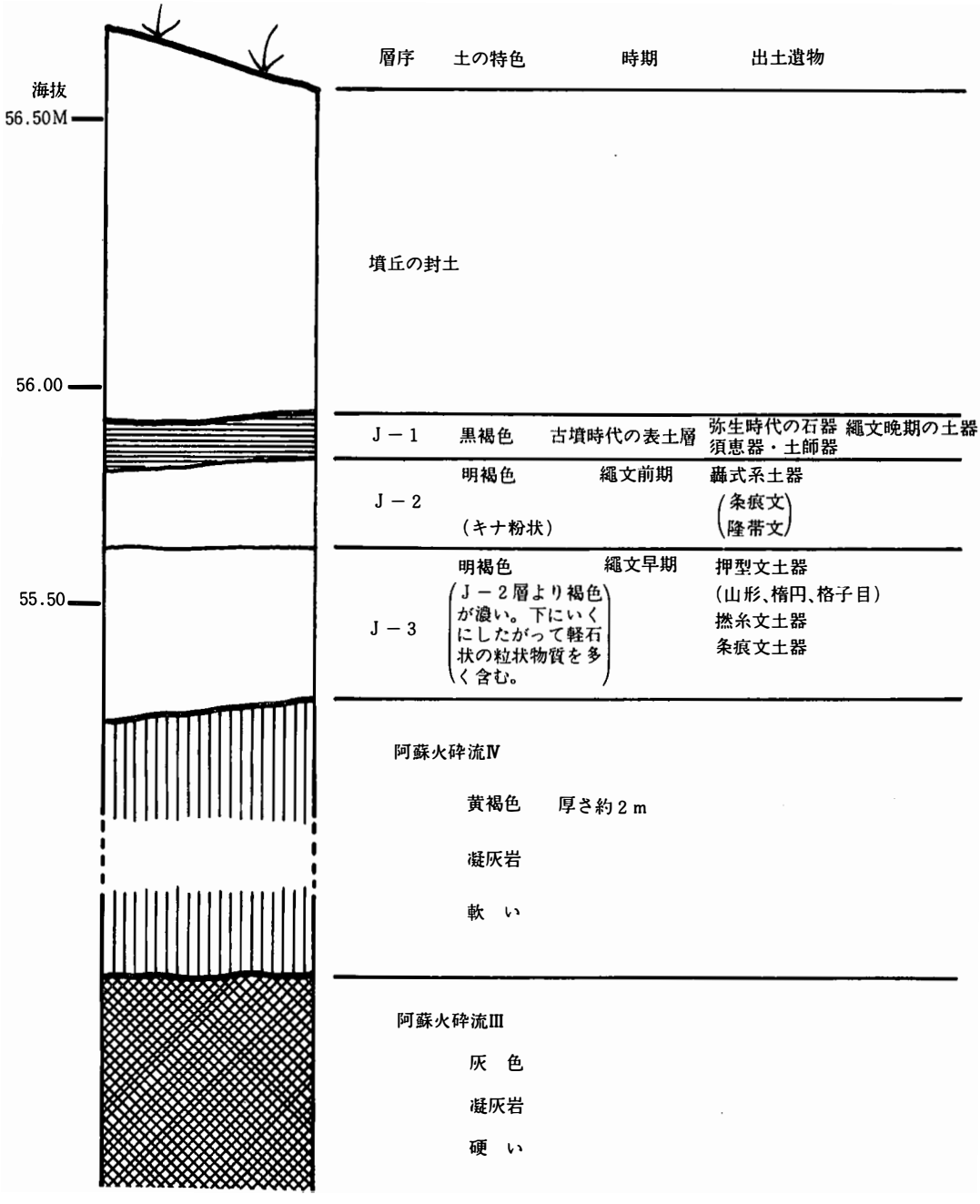
周溝の西側外にも縄文土器を包含する層が残っていることがトレンチの断面から解ったので路線境界わきにJ －Ⅱ区を設定した。

墳丘のＡＢ断面（第7図）から解るように、J－Ⅰ区では残存していたJ－1層は耕作によって完全に消失している。J －Ⅰ区に存在したJ－2層はなく、赤褐色土の第Ⅱ層が見られる。このことは、谷間の微高地という斜面の多い地形環境からきているものと思われる。

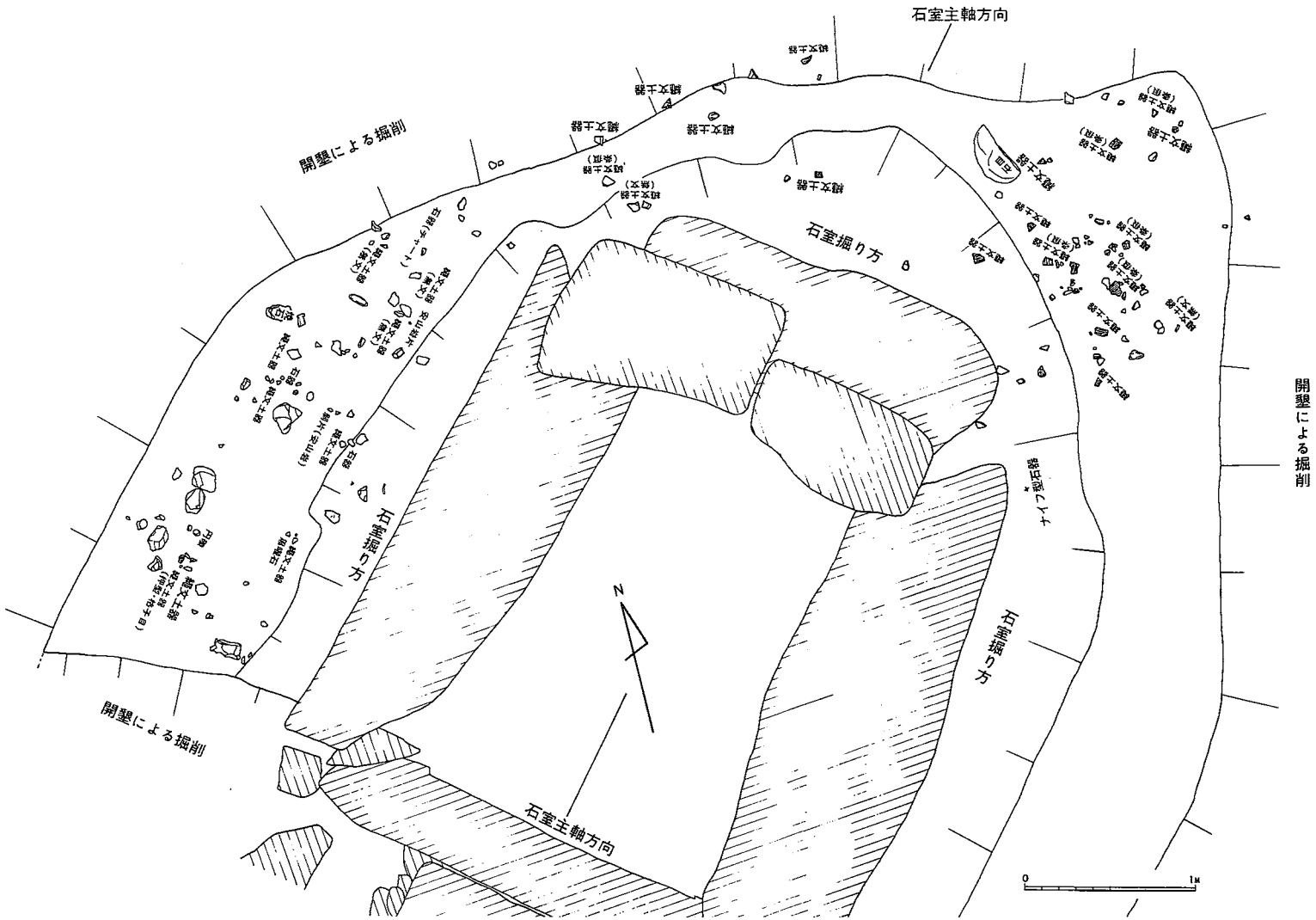
第Ⅰ層は耕作土で厚さ0.25～0.30mである。第Ⅱ層の土の色は赤褐色で厚い所で0.56mあり、不整合で第Ⅲ層に乗っている。この層から遺物は検出できなかった。第Ⅲ層の土の色は明褐色土であり厚さ0.78～0.17mある。この層には押型文土器・条痕文土器・石器等を含み、J －Ⅰ区のJ －3層と同一層である。第Ⅲ層の中ほどに第Ⅲ層を掘りぬくような形で黒褐色の掘り込み（第Ⅲ'層）がある。この掘り込みは、路線境界端であり調査できないので性格は不明である。第Ⅳ層の土の色は黄褐色を呈し、砂粒と粘土が混じったようになっている。第Ⅴ層は貝白色の粘土に礫を含んでいる。この層の下に黄褐色の軟い凝灰岩層（阿蘇火砕流Ⅳ）がある。第Ⅳ・Ⅴ層はトレンチを掘って観察したが、これらの層からは遺物が検出されなかったので文化層は第Ⅲ層までと考えて、Ⅲ層の下面までの発掘に止めた。トレンチの観察結果から第Ⅲ層が出来

る以前にJ－Ⅰ区とJ－Ⅱ区との間つまり古墳の周溝のある付近には沢（小川）が存在した可能性が考えられる。

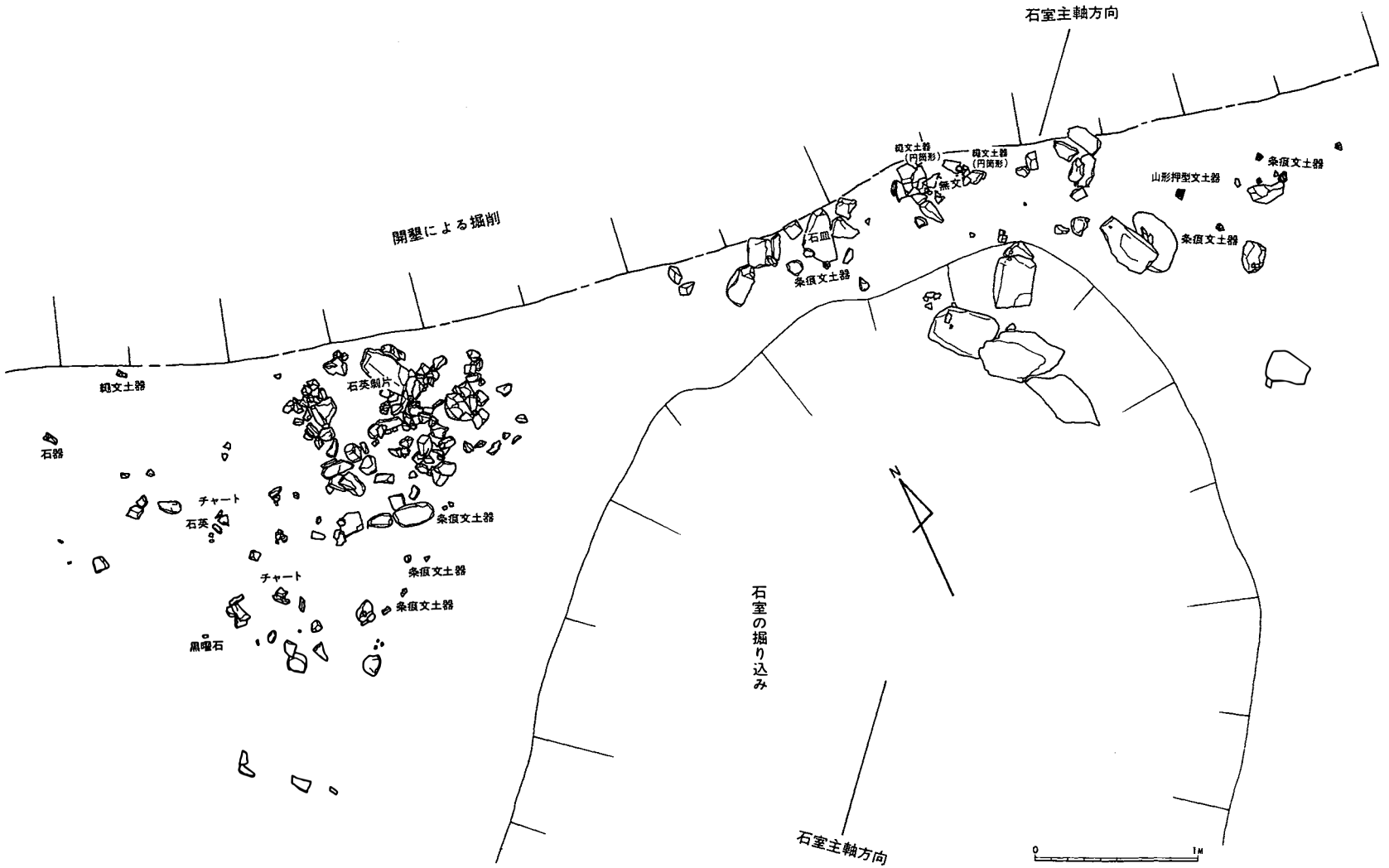
第42図1は第Ⅲ層(J－3層)中から検出した集石と土器の出土状態を示したものである。集



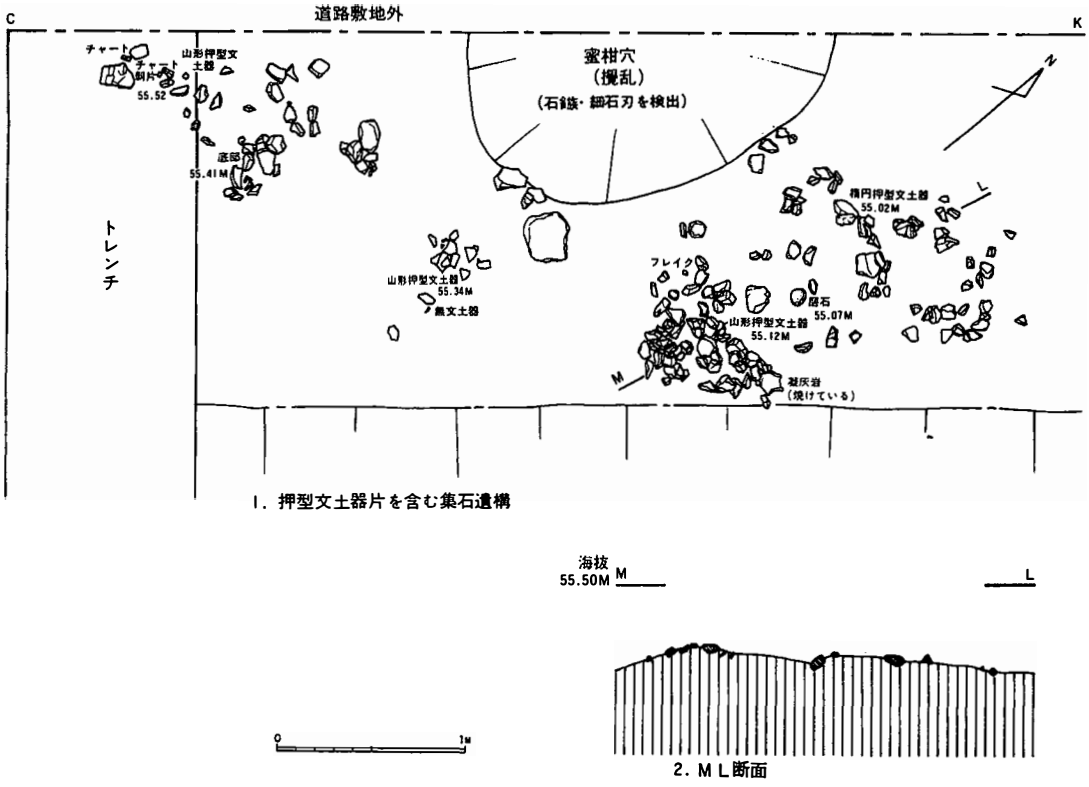
第39図　J－1区における土層の柱状模式図



第40図　Ｊ－２層中の遺物出土状態



第41図　J－3層中の遺物出土状態



第42図　遺物出土状態図（J－II区）

石が東西に2ヵ所あるが開墾による掘削と道路敷との関係から全容は不明である。集石中から押型文土器（山形文・楕円文)、剥片､磨石等を検出した。第III層は東から西の方に傾斜しており、出土遺物の高さは海抜55.00～55.52ｍである。第42図２は東側集石のＭＬ断面である。掘り込みはなく生活面上に単に石が集まっているだけの遺構であり、遺構の性格はわからない。この集石中からは１個の磨石を検出した。

以上、記した遺構・遺物以外に、蜜柑を植樹した穴の中から、白いチャート製の石鏃と頁岩製の細石刃（先土器時代）と思われる遺物を検出した。　（村　井）

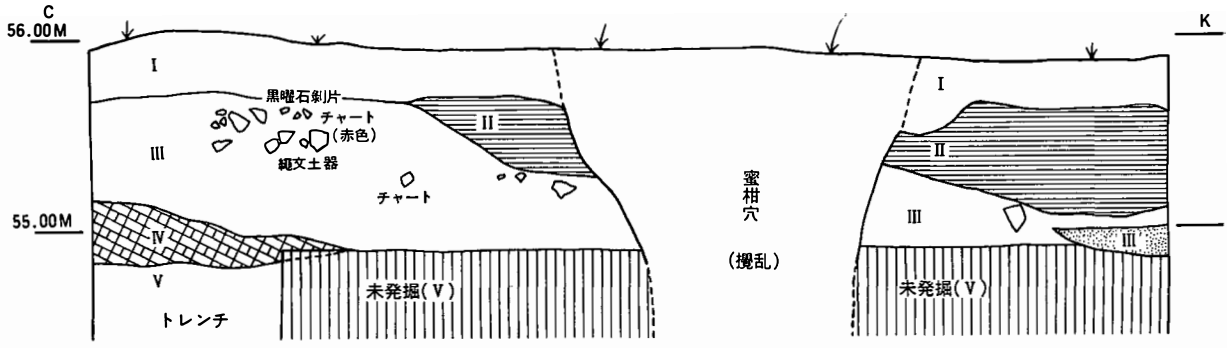
②縄文式土器

今回の調査により出土した縄文式土器は以下のとおりである。

(1)押型文土器(１～15・18～19)

押型文の多くは焼成が悪く器面が剥落して文様がはっきり確認できないものが多い。文様は山形・楕円・格子目文に大別される。器形は口縁部がやや外反し、胴部は幾分張り、底部は平底あるいは尖底に近い平底をなすと考えられる。内壁の調整も剥落のため不明瞭である。器厚は１～ 1.2 cmを測る。

１は口縁部内壁に山形文と条痕文で構成し、２は他の山形文と同様に文様の波状が低く間伸



第43図　C K断面図（敷地境界）

I　耕作土、II　赤褐色土、III　明褐色土(縄文早期の土器を含む)、J－3層、IV黄褐色土(砂と粘土と混る)、V　貝殻粘土(礫を含む)　III′黒褐色土（掘り込み）

びしている。いずれも少し外反する口縁部片である。9は他の山形文に比べ小さく、4・12は反対に大きく施されている。13は横位あるいは斜位に不規則に文様を構成している胴部片である。5は器面剝落のため不明瞭であるが、山形文が横位に施されている口縁部近くの破片と考える。

6・7は楕円文をもち、6はいわゆる連珠文を有する口縁部近くの土器片で、7は胴部である。

3・10・11は格子目文を有する。3は少し外反する口縁部片で、器壁表面は横位に、内壁は縦位に文様を施す。10・3は同様の文様で口縁部近くの破片で同一のものと思われる。

(2)縄文土器

14は器壁表面に単節な縄文を施した胴部片である。表面は剝落して文様は不明瞭である。

(3)撚糸文土器

15は撚糸文を器表面および内壁に施した外反する口縁部片である。

(4)条痕文土器(16・17・20～31・42～45・51・52・58・59)

条痕文を有する土器は前期および晩期のものと考えられる。前期と思われる土器は轟A式といわれるもので、条痕文がほとんど横位に走るが縦位も認められる。口縁部は外反するものが多く底部は平底をなす。器厚は厚いもので1cm、平均0.5cm内外を測る。胎土は砂粒子を含み、焼成は悪く風化がはげしい。

晩期土器と思われる条痕文土器の器形は深鉢型が多く、浅鉢型の土器片も少数出土している。底部は平底をなし、口縁部に穿孔を持つものもある。焼成は良か不良で、器厚は平均0.6cmを測る。

16・17・20は同一個体のものと考えられるが、明確ではない。条痕文は器面が剝落のため不明瞭である。口縁部から幅5cm内外の施文区を形成し、肩部から直線上に立ち上がり口縁部先端

部が外反する。22は器面に21と同様の文様の条痕が施され、口唇部に半裁竹管状の施文具による刻みがあり、23と同一のものと思われる。21・22は内壁に横位に条痕を施し、24は21と文様構成が類似するが内壁に条痕文はない。25は条痕の幅が他の土器片と比べ広く左斜位に施され、器厚は薄い。26は22・23と文様・口唇部の刻みが類似するが、刻みと刻みとの間隔が21・22に比べせまい。31は回転を有する条痕文をもつ土器片である。42は底部付近の破片で縦位に条痕文を施す。

43～45・51・52・58・59は晩期土器と思われる土器片である。43は条痕文を施した口縁部で、少し外反し、内壁に条痕がわずかに残る。44は口縁部に43と同様の文様を施し、器面に一部煤が付着する。51は広口の口縁部に二次的穿孔を有する。穴の径は1㎝を測る。器面は孔を中心に幅4㎝内外に強く条痕を施す。器形は口縁部の角度により浅鉢と思われる。52は深鉢の口縁から頸部にかけての破片で横位に条痕を施す。58・59は口縁部又は頸部にかけての破片で、58は肩部を残す。いずれも横位に条痕を施している。61・62は条痕が縦位に施されている底部近くの破片と思われる。

(5)沈線文土器

32～34は箆描沈線文を有する胴部片である。いずれも内壁に条痕文を施している。46は口縁部が波状をなし、沈線文が横位に走る。口縁部は先ぶとりになり、粗製深鉢型土器と考えられる。47は46に比べ幅広い沈線文を施し、他に三本の沈線文を施す。

(6)隆起文土器

35～41は隆起文土器である。器壁表面は他の土器片と同様に剝落が激しい。36・37・39・40・41はすべて同一個体と思われる円筒形土器の破片で、36は口縁片、37・39・40は胴部片で41は底部である。口縁部には刻みを施し、わずかに外反し、胴部はややふくらみ底部は平底である。器厚は1㎝内外を測る。隆起文土器は押型文と同一層の出土であるので近い時期のものである。

(7)その他の土器

48は器面剝落のため文様が不明瞭であるが、おそらく条痕文を有する口縁部片であろう。49は口縁部が少し内湾し、先ぶとりしている無文土器片で、50は埦状の器形を有する無文の口縁部片である。53は無文帯に三角柱状貼り付文を持つ口縁部片である。埦状の器形をなすと思われる。54～57は粗製深鉢型土器と思われる。54～56は頸部の破片で、57は頸部から肩部にかけての破片と考えられる。いずれも無文に頸部の隆起が直線状に施されている。60は無文帯に二次的穿孔を有する土器片で口縁部近くの破片と思われる。63は網目の組織痕を施した文様を有し、一部ふくらみを持つ。64～66は粗製深鉢型土器の底部と思われる。いずれも平底で無文であり、器面調整は粗雑である。（豊崎）

③　石器

(1)磨石

1は正背面に擦痕が側縁面全面に敲打痕が認められ、とくに図左右側面に強く残る。正面はいくぶん凹み、背面は凸になる。横断面は丸味を帯びた長方形をなす。2は全面に著しく磨研され、側面には稜が走る。3は正面に若干の打痕を残し、擦痕は少ない。4はほぼ円形をなし、正表面に複雑な擦痕が走る。1と同様に正面がくぼみ、背面は逆になる。5は上半部を欠損し、一部打痕がある。他に比べ小形で、正裏面に研磨痕が若干残る。6は全体的に卵形に近く、他の出土磨石にくらべ5と同様に小形であり、一部敲打痕がある。7は礫岩を素材とし、研磨部はいくぶん凹み、その中に敲打痕が残る。全体的に自然面を多く残す。8は硬質砂岩を素材とし研磨部は正面に認められる。使用痕は著しく、敲打痕は認められない。9は正面に研磨部が認められ、背部にはない。側面および正面に若干の打痕が認められるが、不明確である。10は9と同様に研磨が認められる。敲打痕が強く残る。

(2)礫器

11は扁平な円礫の縁部の半分ほどを、裏面からの打撃で剝離して刃部を形成し、一側縁部のみ別の面から剝離している礫器である。

(3)敲打器

12はhammer stoneの機能をもち、両側面の一部に打痕を残す。他は自然面である。

(4)磨製石器

13は硬質砂岩を素材とした磨製石斧である。裏部は使用により大きく破損している。基部調整のためと思われる打痕があり、側縁部には研磨以前の剝離面が著しく残る。刃部はゆるやかな稜を持ち、刃部の縦断面はゆるやかな三角状をなし先端は鋭利である。研磨は正面左斜位よりが強く残り、縁部は縦位に残る。使用による刃こぼれは少ない。14は軟質砂岩を素材とした扁平磨製石斧である。正面に研磨以前の剝離が著しい。基部調整の打痕が残る。研磨はほぼ横位に走り、背面は著しく、自然面に研磨を行っている。

(5)石鏃

17は大まかな剝離により三角形を呈する。縁辺部は小さな調整がわずかに認められる。その調整も不規則で基部、先端部右縁部に著しく、全体的に整っていない。基部のえぐりは浅い。15は細長い細まかな剝離により形成され他の石鏃に比べ厚さが薄く、先端部が鋭利である。側縁部はわずかにふくらみ、えぐりは三角状に深くくいこむ。16は剝片の鋭利な縁部を片側面として使用し、全体的に細長く、先端部がわずかに欠損している。脚部は丸味をおびる。18は先端部半分を欠損している三角鏃と思われる。基部の調整はやや中央部がふくらみ、側縁部の調整は不明である。

(6)削器

19は削器と石錐の両方の機能をもつ石器と思われる。側縁部から中心部への細かな剝離は削器としての形態を示し、先端部の鋭利的調整剝離は明らかに石錐である。基部への調整は、わず

かで、使用による刃こぼれは少なく横断面はソロバン形を呈す。20は軟質石英を素材にした偽石器である。尖頭器と削器的形態をもつ。表面は風化して剝離面は明確ではない。断面はレンズ状をしている。

(7)二次加工剝片、剝片、石核

21は任意の打撃により生じた剝片を素材に二次的剝離を加えた剝片石器である。正面左側縁部を刃部として使用したと思われる。22は扁平な縦長剝片を素材として利用し、両側縁部の鋭利な部分で刃部を形成している。刃こぼれが認められる。23は石核と考えられる。任意の剝離面が数面認められる。24は一部に刃部的調整剝離をもつ、使用痕剝片である。25は縦長剝片を素材とし左図左側縁部に二次的剝離が認められる。26は自然面を持つ剝片石器である。上下の大きな二面の剝離に、右側に細かな調整痕をもつ削器と考える。27は上下の大きな剝離が認められる。左側縁部を刃部として使用したと思われ、刃こぼれが認められる。28は任意の打撃により剝ぎ取られた剝片を素材として利用した二次加工剝片である。右図右上縁部の他はすべて刃部と考える。使用によると思われる不規則な剝離が認められる。29は剝片である。背部に打痕を残す。刃部として使用された部分は認められない。30は使用痕のある剝片である。正面右図の鋭利な部分を刃部として使用したと思われるごく細かな刃こぼれが認められる。31は縦長剝片である。2本の平行な稜が走り一部自然面を残し、横断面形は台形を呈する。32は薄い縦長剝片である。石核調整時の一時的なものと考える。33は偽石器と考えられる。明確な使用痕と思われる剝離面がなく、二次加工剝片と考えられない。しかし鋭利な下部は刃部としての機能をもつと思われる。34は縦長剝片を素材としている。上からの打撃により生じた打面に小さな剝離が認められるが、人偽的なものではない。35は上部より数条の剝離が認められ、5面を数える。36は剝片石器と考られるが、二次的剝離が不規則で偶発的に思える。一部自然面を持つ。37は横長剝片で、正面に3面の任意の剝離が認められる。上面に自然面を持つ。38は不定形石核である。39は残核とも考えられるが下部に微調整が認められる。一部自然面を残し、背面に下からの打面が認められる。40は石核である。上面は最近の自然剝離で少しくぼむ。石核形成時の微調整は認められない。41は不定形石核である。上下からの打撃により形成され方向は任意である。上部に平坦面はなく4方向からの剝離面が認められる。左図下部に二次的加工が認められる。42は石核石器である。下部に使用による摩滅が著じるしい。hand-axe的機能をもち、一部自然面をもつ。横位からの大きな剝離により形成されている。43は大きな二次的剝離により、残核利用の掻器と思われる。

(8)石皿

44～46は石皿である。44は下部を欠損している。研磨部は（←‥→）で表す。

(9)ナイフ形石器

石質は黒曜石で縦長剝片を使用している。基部はやや丸味を帯びる。両側縁は主要剝離面よ

第11表　縄文式土器一覧表

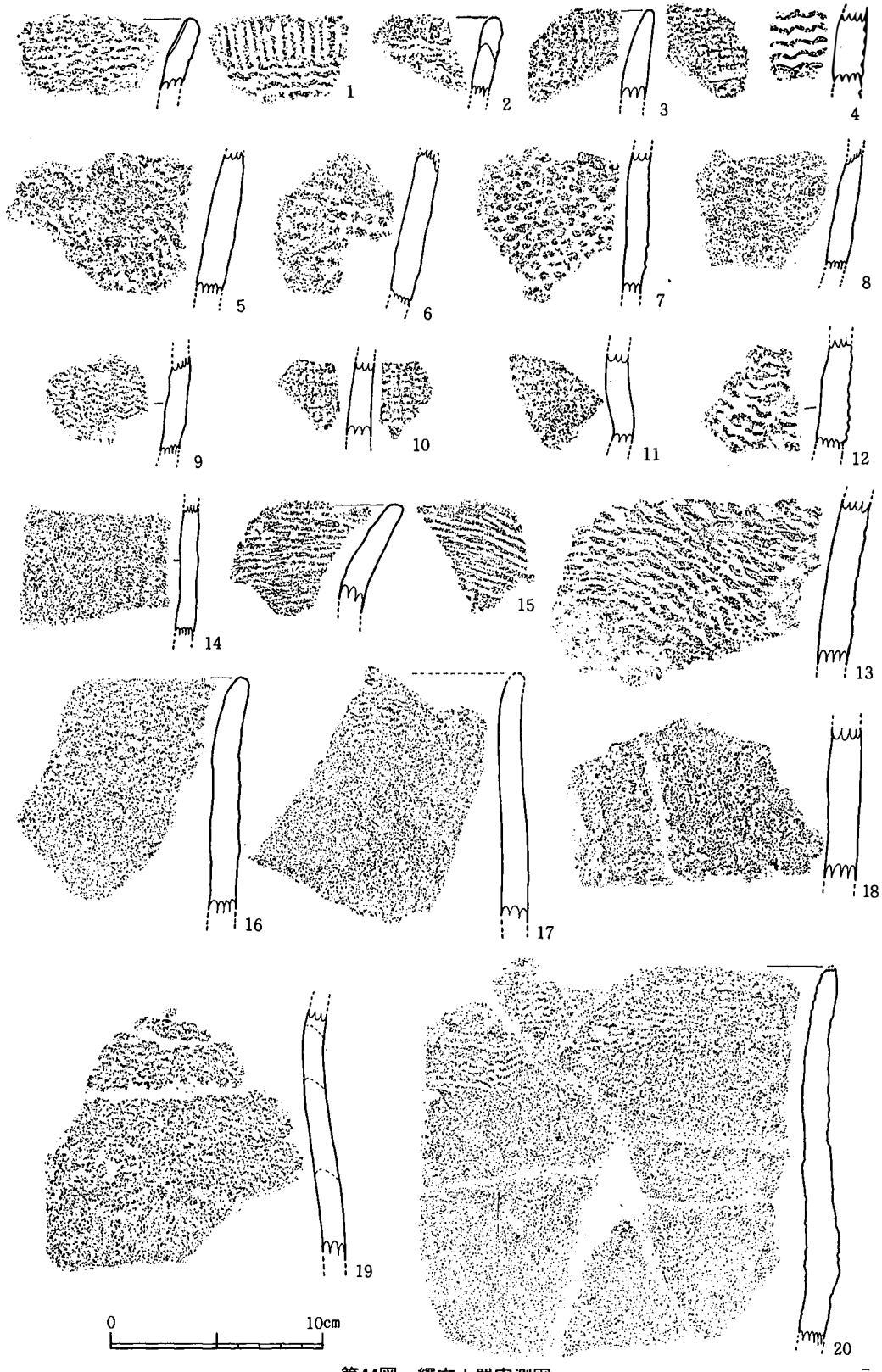
No.	時期	文様	焼成	胎土	色調	備考
1	早期	山形文	不良	砂粒子	黄橙色	裏面原体条痕　3－E　表土層
2	〃	〃	〃	砂粒子(雲母)	〃	5－F
3	〃	格子目文	〃	砂粒子	黄褐色	4－D　石室側辺部
4	〃	山形文	〃	小石・砂粒子	橙色	5－D　奥壁掘込み
5	〃	〃	〃	砂粒子	黄褐色	5－E　封土
6	〃	楕円文	〃	〃	〃	5－E　封土
7	〃	〃	〃	〃　(石英)	〃	封土
8	〃	山形文	〃	〃	〃	5－F　封土
9	〃	〃	〃	〃	明褐色	封土
10	〃	格子目文	〃	小石・砂粒子	黄橙色	Pit　No.1
11	〃	〃	〃	〃	〃	4－D
12	〃	山形文	〃	〃	〃	5－D
13	〃	〃	〃	砂粒子	浅黄橙色	5－E　封土
14	〃	縄文	〃	小石・砂粒(石英)	にぶい褐色	5－D　奥壁北側
15	〃	撚糸文	〃	小石・砂粒子	黒褐色	封土
16	前期	条痕文	〃	砂粒子(雲母・石英)	浅黄橙色	4－D　西側
17	〃	〃	〃	砂粒子	〃	奥壁北側・縄文最下層
18	早期	無文	〃	〃	〃	4－D　石室右側
19	〃	山形文	〃	〃	橙色	5－G
20	前期	条痕文	〃	小石・砂粒子	黄橙色	奥壁北側・縄文最下層
21	〃	〃	良	〃	橙色	4－C　封土
22	〃	〃	不良	砂粒子	明黄褐色	5－F　封土
23	〃	〃	良	小石・砂粒子	にぶい黄橙色	4.5－D　側壁裏込中
24	〃	〃	〃	砂粒子	黄橙色	4－D　封土
25	〃	〃	やや良	〃	黒褐色	4－D　封土
26	〃	〃	〃	〃	〃	4－D　封土
27	〃	〃	不良	〃	橙色	奥壁北側・黄色土層
28	〃	〃	〃	〃	黄橙色	5－D　奥壁黄色土層
29	〃	〃	良	小石・砂粒子	橙色	旧表土
30	〃	〃	〃	砂粒子	黄橙色	5－D
31	〃	〃	不良	〃	にぶい橙色	奥壁裏込
32	〃	沈線文	〃	〃	〃	5－E　封土
33	〃	〃	〃	小石・砂粒子	〃	4－E　封土
34	〃	〃	〃	砂粒子	〃	封土
35	〃	隆起文	良	小石・砂粒子	淡黄色	5－D　封土
36	〃	〃	〃	〃	黒褐色	封土　轟B式？
37	〃	〃	〃	〃	〃	〃
38	〃	〃	〃	〃	〃	4－D　封土　轟B式？
39	〃	〃	〃	〃	〃	5－D　奥壁北側黄色土層
40	〃	〃	〃	〃	〃	5－G　〃

No.	時期	文様	焼成	胎土	色調	備考
41	前期	無文	不良	小石・砂粒子	赤褐色	集石
42	晩期	条痕文	やや良	〃（石英）	明褐色	5－D 攪乱
43	〃	〃	良	小石・砂粒子	浅黄色	4－C 封土
44	〃	〃	〃	〃	黄橙色	5－D
45	〃	〃	〃	〃	〃	焼土付近
46	〃	沈線文	〃	砂粒子	明黄橙色	封土
47	〃	〃	〃	〃	明褐色	5－D 石室北東封土
48	〃	〃	〃	〃	黄橙色	5－D
49	〃	条痕文	不良	〃	黒褐色	5－D 奥壁黄色土層
50	〃	〃	〃	〃	〃	4－E 封土
51	〃	〃	良	〃	浅黄橙色	二次的穿孔・4－D 封土
52	〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐色	5－D 黄色土層上部
53	〃	無文	〃	〃	〃	三角柱状貼り付文・4－D 封土
54	〃	条痕文	不良	〃（石英）	赤褐色	4－C 封土
55	〃	〃	〃	砂粒子	〃	〃
56	〃	〃	良	〃	明褐色	表土
57	〃	〃	不良	〃	にぶい黄橙色	表採
58	〃	〃	良	〃	〃	奥壁北側・黄色土層
59	〃	〃	不良	〃	浅黄色	5－D 奥壁
60	〃	〃	〃	〃	明黄褐色	二次的穿孔・5－D 石室北東封土
61	〃	〃	良	〃	浅黄橙色	側壁裏込
62	〃	〃	〃	〃	〃	奥壁北側・黄色土層
63	〃	組織痕文	不良	小石・砂粒子	黄橙色	4－C 封土
64	〃	無文？	良	〃	〃	5－D
65	〃	条痕文	不良	砂粒子(石英)	〃	5－D
66	〃	〃	良	砂粒子	明黄褐色	6－D 封土

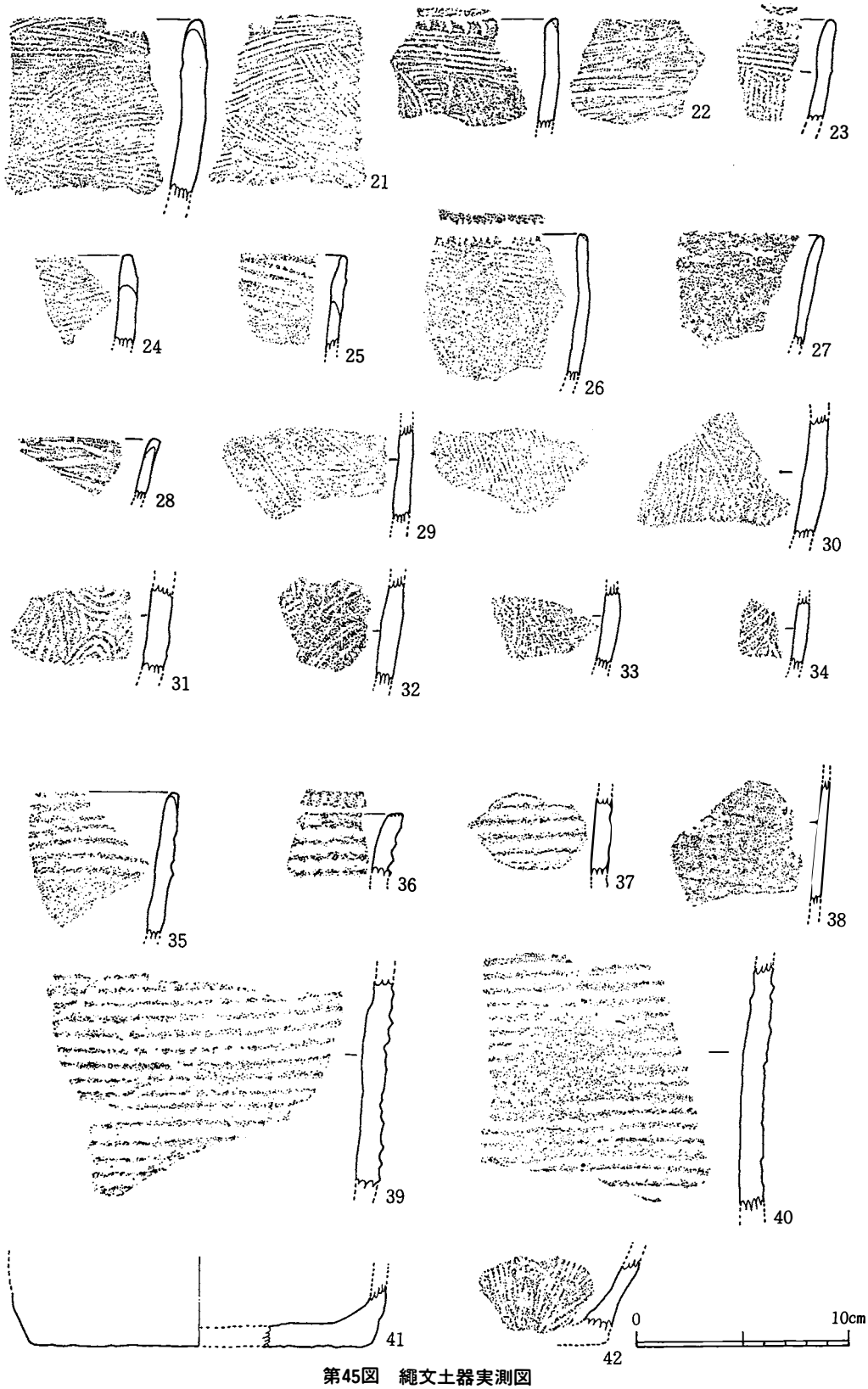
第12表 石器一覧表

No.	種類	石質	重さ(g)	備考
1	磨石	安山岩	530.4	5－F 周溝上面
2	〃	砂岩	618.4	5－E
3	敲石(磨)	〃	597.8	表採
4	磨石	安山岩	543.3	5－F 周溝上面
5	敲石	砂岩	162.75	5－F 周溝上面
6	敲石(磨)	〃	149.6	マウンド西側周溝上面
7	〃	〃	860.9	5－F 周溝上面
8	磨石	礫岩	507.8	封土
9	敲石(磨)	砂岩	790.3	表採
10	〃	礫岩	663.6	4－F 周溝

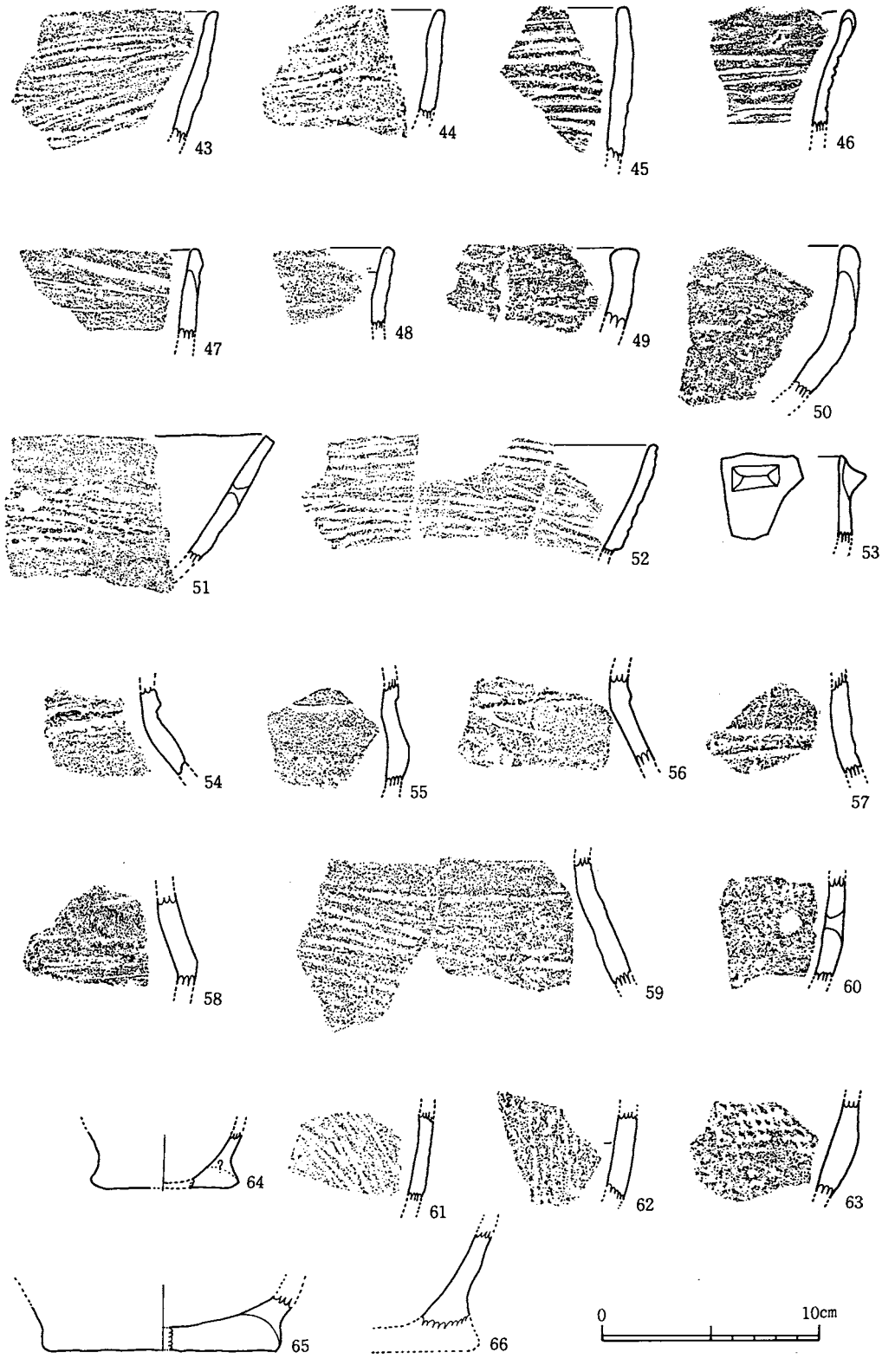
No.	種類	石質	重さ(g)	備考
11	礫器	砂岩	591.0	4—D 表採
12	敲打器	〃	394.5	6—F 周溝
13	磨製石斧	〃	468.28	4—B 周溝
14	〃	〃	65.41	6—F 周溝
15	石鏃	黒曜石	1.2	5—D 石室(撹乱)
16	〃	頁岩	1.5	5—G 撹乱
17	〃	チャート	4.1	表採
18	〃	サヌカイト		4—C 撹乱
19	スクレイパー	チャート	17.0	表採
20	スクレイパーポイント	結晶質石灰岩	29.8	表採
21	二次加工剥片	チャート	50.6	3—D 周溝
22	二次加工剥片	〃	26.9	6—G
23	剥片	〃	26.8	1—E 表土
24	二次加工剥片	〃	7.08	4—F 撹乱
25	〃	硅岩	28.9	5—D
26	〃	砂岩	—	3—D 周溝
27	使用痕剥片	頁岩	26.9	5—E
28	〃	チャート	34.3	5—E
29	剥片	頁岩	27.4	5—D
30	使用痕剥片	チャート	16.0	3—E
31	剥片	頁岩	16.3	7—D 周溝
32	〃	黒曜石	3.4	5—D 石室(撹乱)
33	使用痕剥片	チャート	20.6	5—D
34	剥片	〃	5.0	4—D
35	使用痕剥片	〃	45.2	5—D 封土
36	〃	黒曜石	7.5	J—3層
37	剥片	サヌカイト	39.1	4.5—D
38	石核	チャート	20.6	5—G 撹乱
39	残核	〃	8.4	〃
40	石核	砂岩	50.5	5—E
41	不定形石核	チャート	28.3	3—E 周溝
42	礫器	〃	214.5	4—E
43	二次加工石器	〃	176.4	表採
44	石皿	礫岩		
45	石皿	砂岩		
46	石皿	〃		



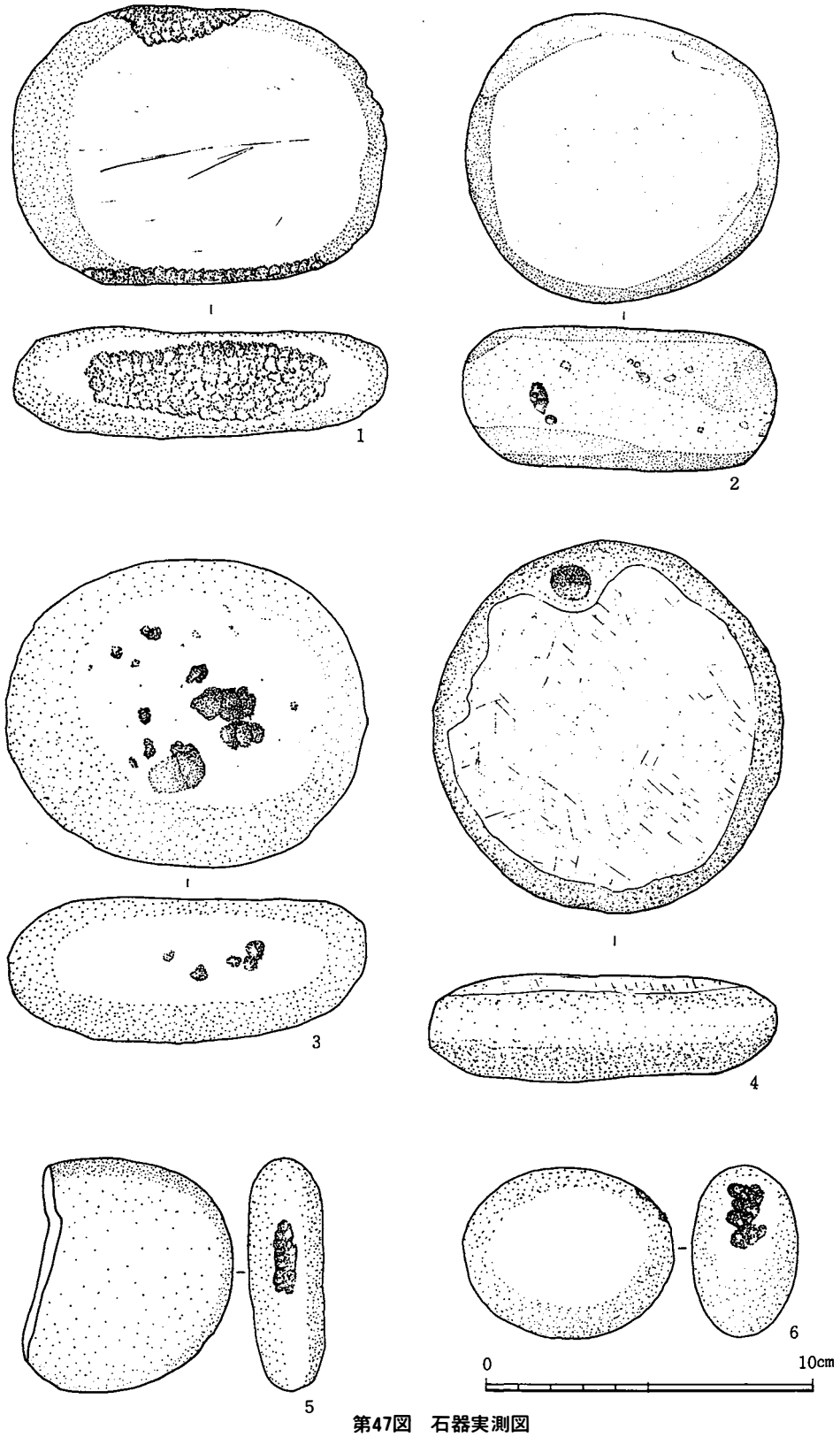
第44図　縄文土器実測図



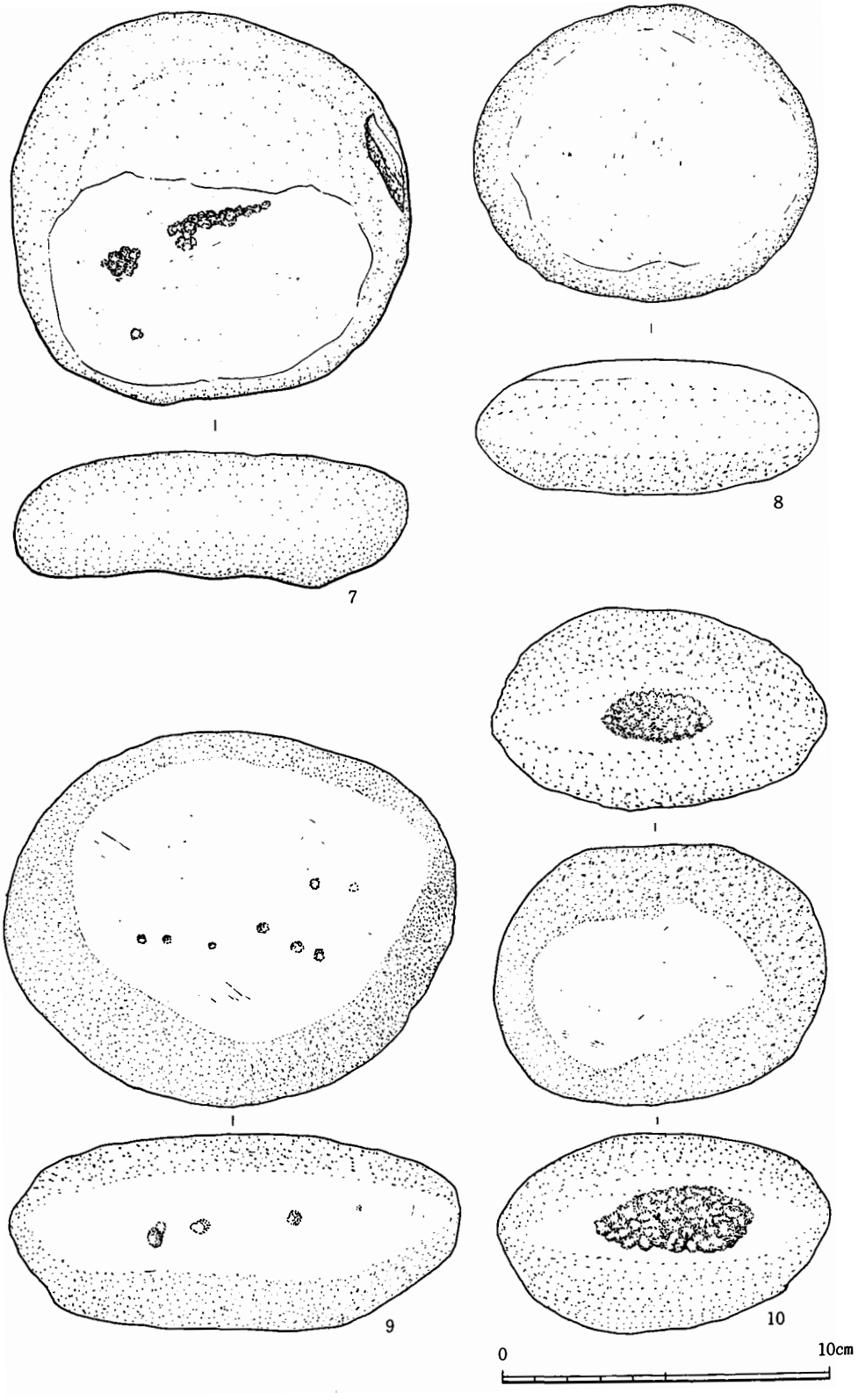
第45図　縄文土器実測図



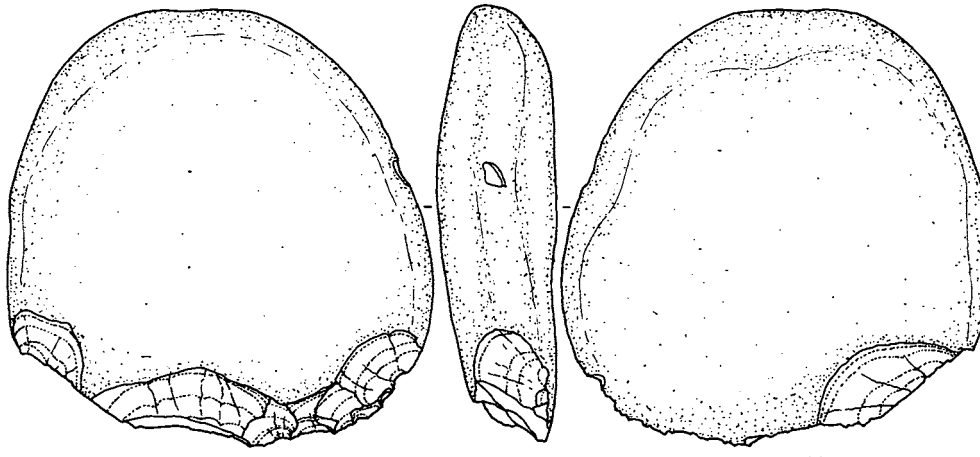
第46図　縄文土器実測図



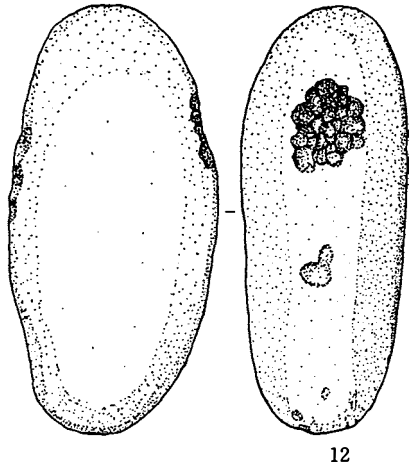
第47図　石器実測図



第48図　石器実測図

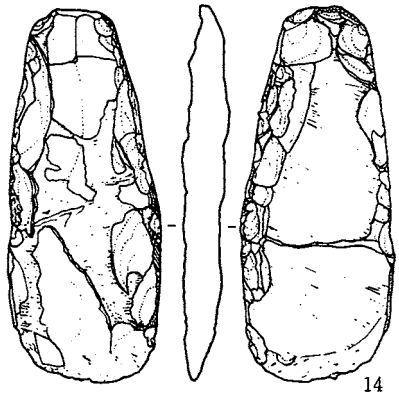


11



12

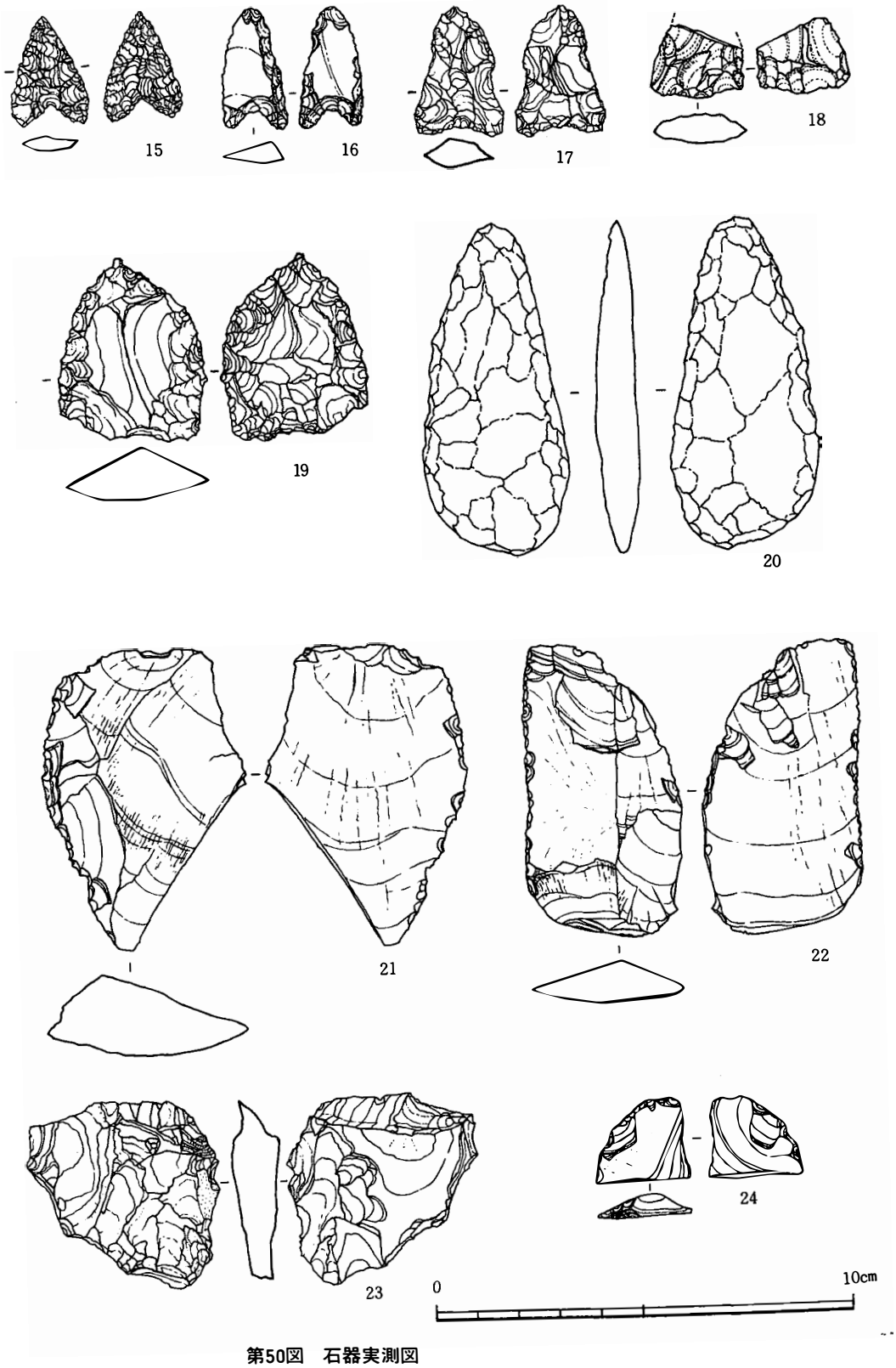
13



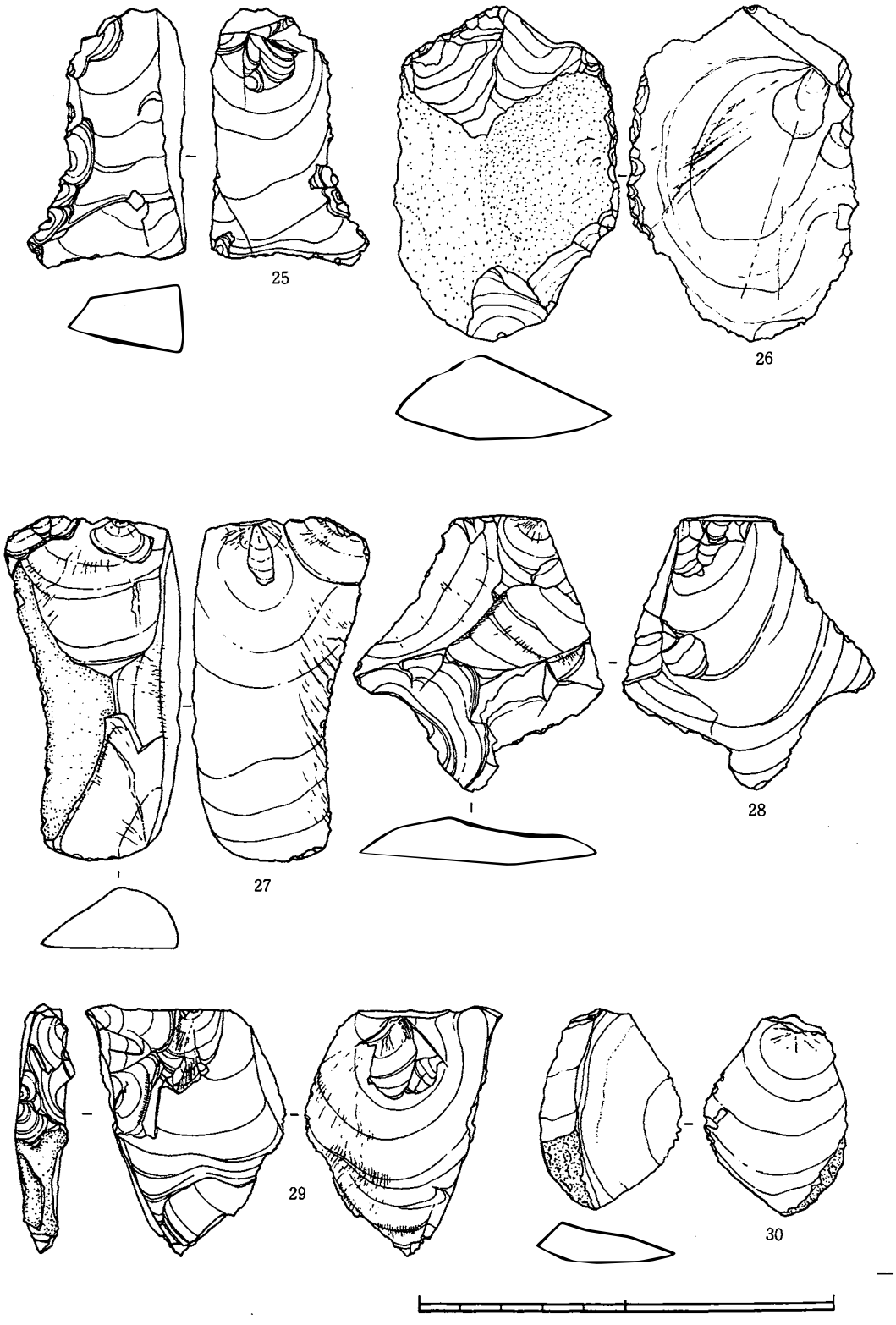
14

0 10cm

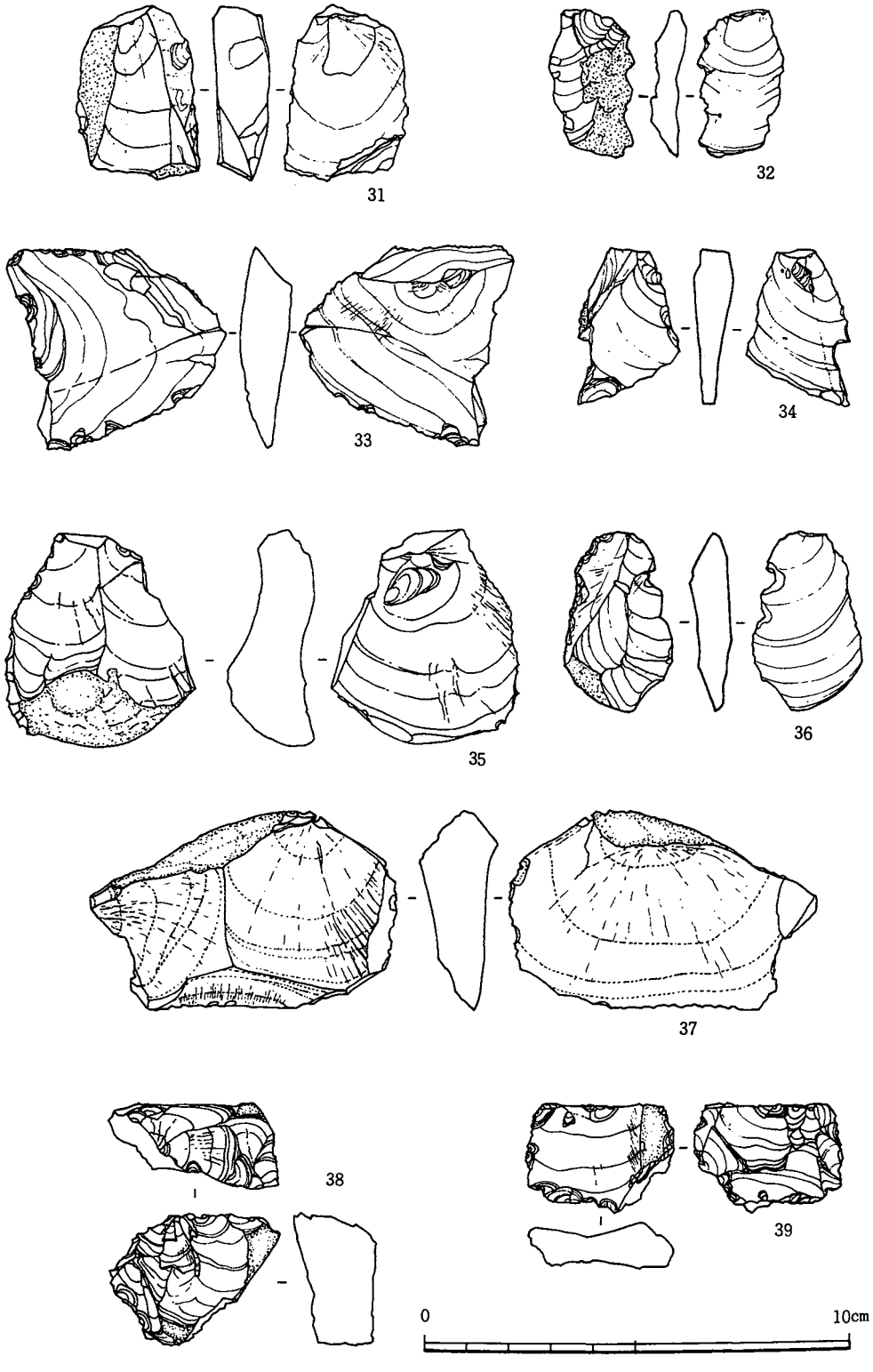
第49図　石器実測図



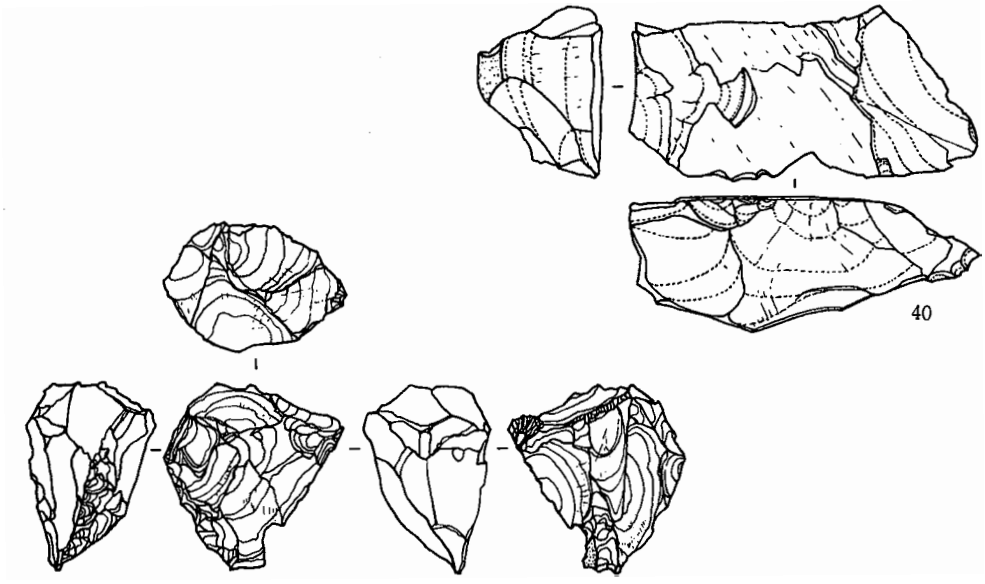
第50図　石器実測図



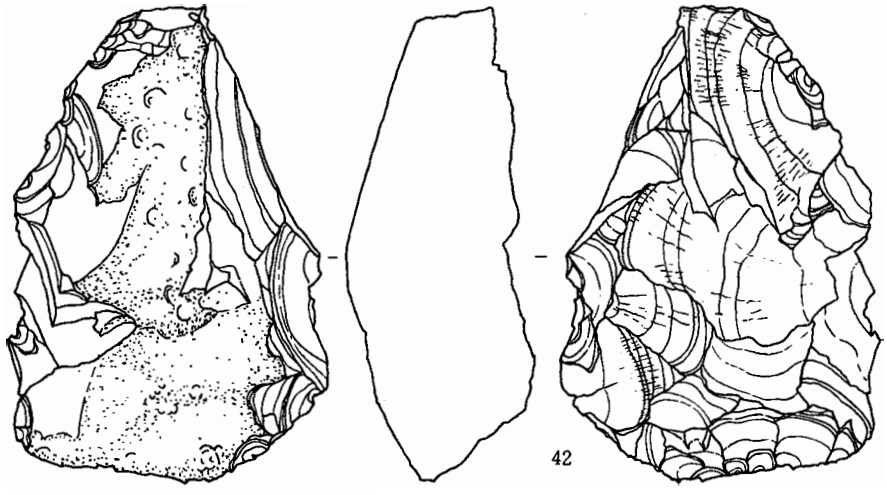
第51図　石器実測図

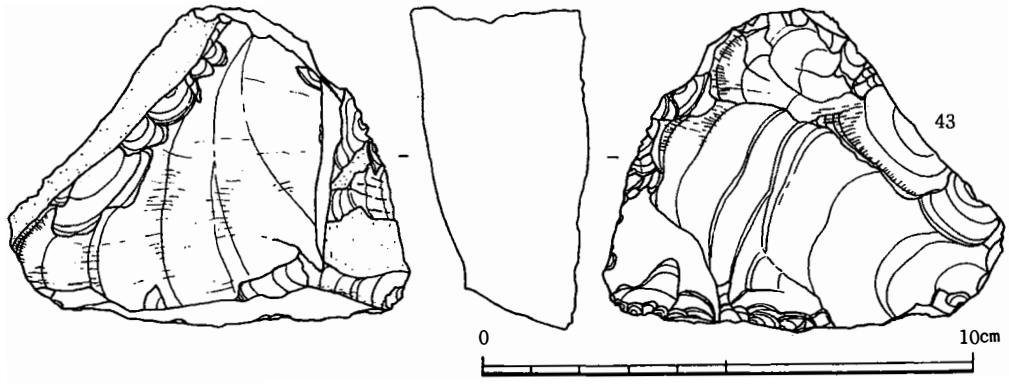


第52図　石器実測図

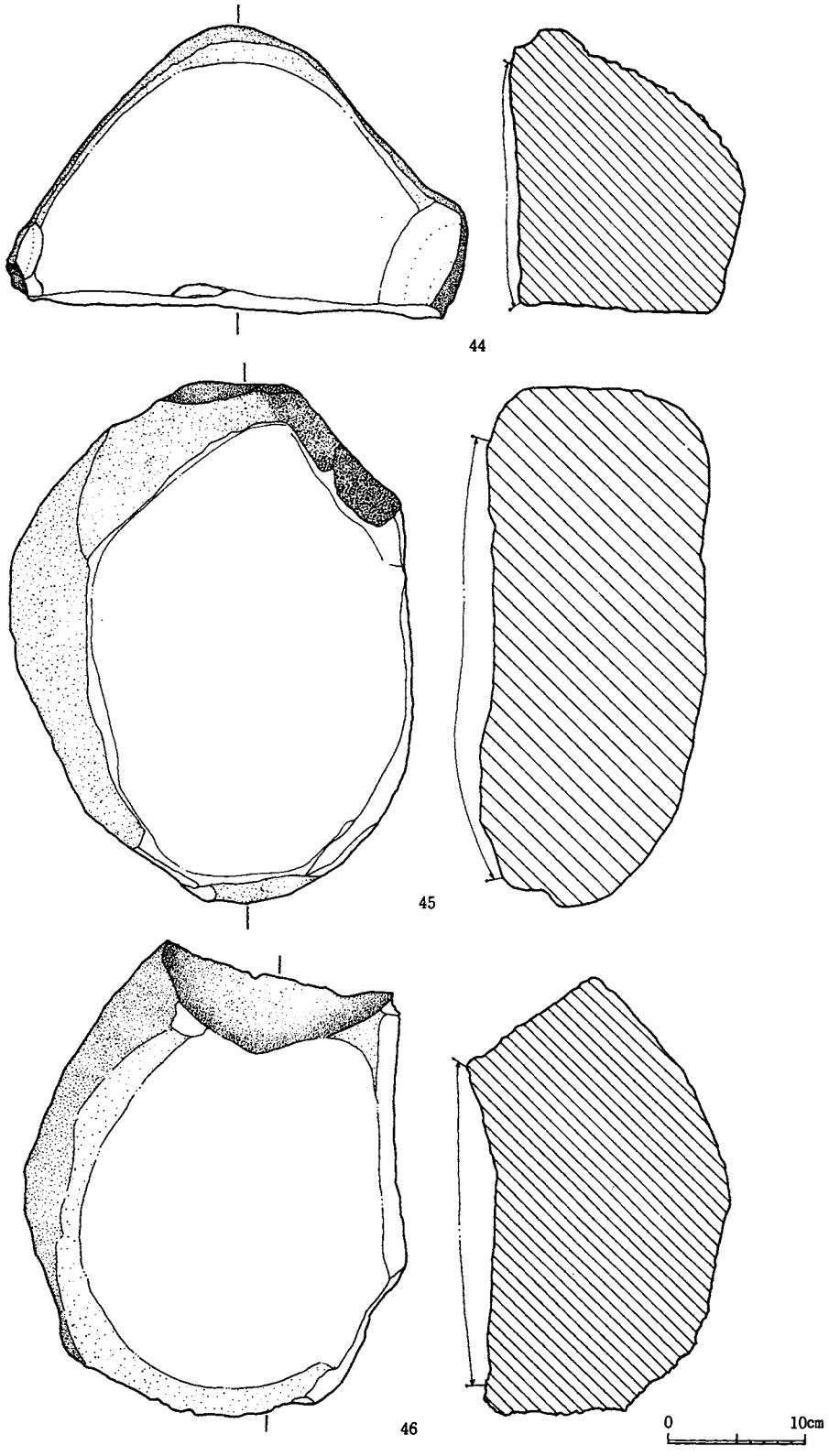


41





第53図　石器実測図



第54図　石器実測図

りブランティングを行い、左側縁は直線上に調整し、右側縁部は、ゆるいかえりを持つ。剝片の鋭利な縁部を刃部として使用し、刃部は使用によると思われる不規則な剝離が認められる。一部自然面を残し、形態はいわゆる「切り出し」を呈する。

⑽細石刃

出土した石器の中で細石核は出土していないが、45は形態的には細石刃に近似している。石質は頁岩で表面に２本の平行な稜が走り、背面に小さな打痕が認められる。ごく少数であるが、両側縁部に不規則で微小な剝離が認められ、使用によるものと考えられる。横断面は台形状を呈し、表面はかなり風化している。　（豊崎）

4）まとめ

土の色と縄文土器の出土状態から、Ｊ－１層（古墳構築時における表土層・淡黒褐色土）、Ｊ－２層（明褐色土・キナ粉状）、Ｊ－３層（明褐色土・火山灰層）と三層に分けた。

古墳構築時における表土層の中からは、古墳時代の遺物（須恵器・土師器）の他に、弥生時代の遺物（甕の口縁、方柱状抉入石斧）、縄文晩期の土器片を検出している。このことから、縄文時代晩期や、弥生時代の遺構の存在の可能性を思わせるが、周辺部は果樹園開墾によって削平されているので明らかではない。しかし、近隣地には竜北町大野貝塚（縄文中期から後期）・西平貝塚（縄文後期）が存在することから、宮原町立神字岩立地区のような狭い谷間の小丘陵にも、縄文晩期から弥生時代の何かの遺跡が存在した可能性も考えられる。

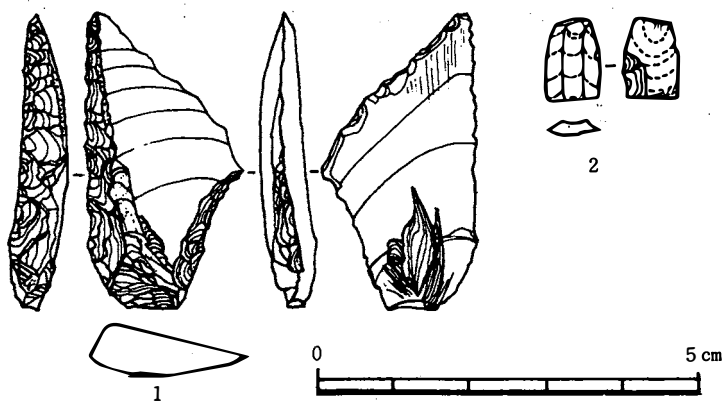
Ｊ－２層中からは、器厚の薄い前期の条痕文土器が検出されたことから、明褐色の土（キナ粉状）からなるこの層は縄文前期の土層と考える。検出された文様のある土器は轟式に比定できると思われる。

縄文前期と晩期との間の時期の遺物が出土せず、遺跡が連続して使用されていないのは、県内各地（中後迫、沈目、桑鶴土橋、馬場楠等）の遺跡の例と類似している。

Ｊ－３層からは、押型文土器（山形、格目、楕円）、撚糸文土器、条痕文土器の他に４ヵ所の集石を検出している。集石中からは石皿、スクレイパー、礫器、チップ（黒曜石、チャート）等を採取した。以上の遺物からこの層は縄文早期と考える。この層は土中に含まれている粒状物質（軽石状の軟い物質）の密度から、二つの層に区分するように試みたが、肉眼的に区分はできなかった。この層の下は、風化をうけやすい阿蘇火砕流Ⅳの層である。

岩立C古墳が存在しているような狭小な谷間の地形は、砂川以南氷川以北の間には多い。一帯を地質的に見ると、宮原花崗岩帯の中にあるので、大変浸食をうけやすい地帯である。洪積世の小丘陵の間の谷は阿蘇火砕流によって埋まり、その火砕流が浸食をうけて、小さな谷が複雑に入り組んでいる。

下益城郡小川町以南八代市までの八代平野沿いの一帯では、竜北町大野、西平両貝塚や鏡町有佐貝塚等、縄文時代の遺跡はあるが、数は少ない。ところで九州縦貫自動車道建設工事にと



第55図　ナイフ型石器と細石刃

もなう埋蔵文化財発掘調査によって、立神寺院址・平原瓦窯址・境遺跡からも縄文時代早期の遺物が検出されている。 従来この一帯では平野部・海岸近くに目を向けて、縄文時代の遺跡の調査を行って来たため、遺跡のブランク地帯と考えられてきた。そこで、今後はこの調査を契機として目を小丘陵の間の狭小な谷間の平坦部にも向けるべきであろう。

先土器時代の遺物（ナイフ形石器、細石刃）も検出されているが両者とも攪乱（古墳時代・蜜柑植樹穴）部から検出されたものである。先土器時代の遺構は検出されていない。もし、先土器時代の遺構が存在したと仮定しても、縄文早期の生活面の下、阿蘇火砕流Ⅳの上に生活面が存在したということになる。縄文早期の層は大変薄くJ－3層の厚さと押型文土器が出土した高さから0.1m程度と推測される。この厚さでは縄文早期の生活面と先土器時代の生活面(仮定)は大差がなく、日常生活の中で攪乱をうけると思われるので、我々が当時の生活面と断定し得る面を確認するのは、この調査区では困難であった。

以上、縄文時代の検出遺物について、層位的に記したが、この地での早期、前期の遺物の検出の意義として、周辺の狭小な10～20アール程度の平坦地の阿蘇火砕流Ⅳの上の土層中から早期・前期の遺構・遺物が発見出来る可能性が強くなったと言える。つまり、小川町から八代市にかけての一帯からは今後、縄文前期、早期の遺跡が多く発見される可能性は強い。

（村　井）

第５章　Ｃ地区（大瀬田横穴群）

１　現状と調査の方針

八代郡竜北町大字高塚字大瀬田に所属する。

下益城郡小川町稲川の集落の南、稲川の対岸、丘陵の南側崖面である。周辺一帯は蜜柑園であり、崖面には凝灰岩が露出している。

『竜北村史』によると「南および西南の向きに11基の古墳があるが、すでに６基は破壊されており、やや完形に近いものが５基残る。」とのことである。

調査の対象地域は大瀬田横穴群が開口している崖面の続きである。大瀬田横穴群の分布状態はまだ充分に確認されていなかったので、路線内に横穴が存在するかどうかの確認のため、次のような調査計画をたてた。

① 繁みを切り開き、焼却する。

② 地形に合わせて５本のトレンチ（幅３ｍ、長さ５～15ｍ）を設定する。

③ トレンチの観察結果に従って重機（ユンボ・湿地用ブルドーザー）を投入して、表土を掘削除去する。

④ 人力により清掃作業を行い、遺物・遺構の存否を確認する。

２　調査日記抄

８月11日　発掘器材を現場に搬入する。発掘現場近くにプレハブ小屋を建てる適当な場所がなく、発掘作業員の休息と器材の収納場所はテント内とする。

８月12日　以前、地元の高塚区々長（福島千万人氏）に依頼していた作業員の方に、作業上の注意を行った後、除草作業から開始する。

８月18日　やぶを伐採中、蜂の大群の来襲があるため作業進展せず。

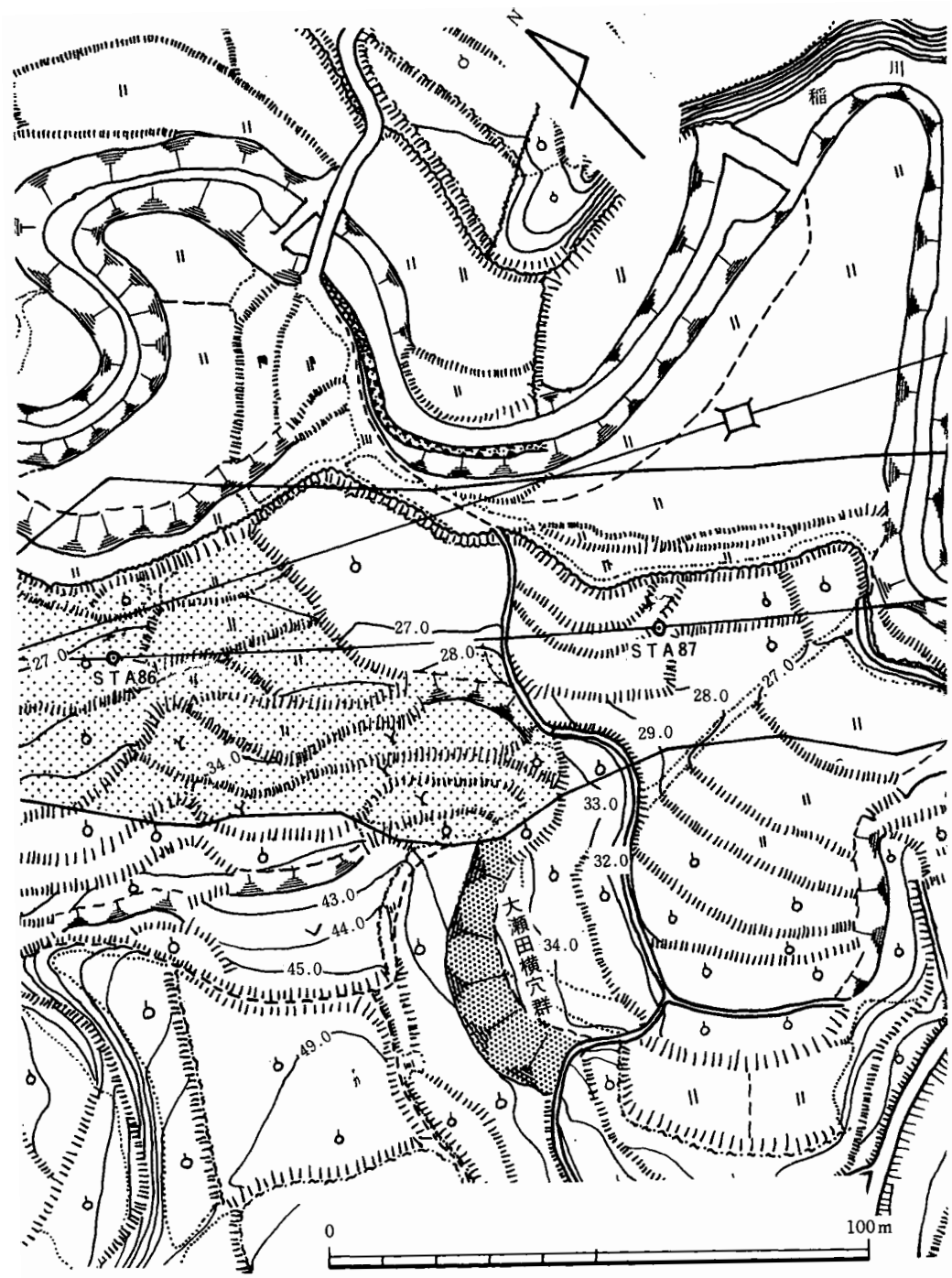
８月24日　伐採した草や竹は真夏の太陽で乾燥させ、焼却した。やっと除草作業が本日で終了した。

８月26日　調査範囲内に、地形に合わせて５本のトレンチ（幅３ｍ、長さ５～15ｍ）を設定する。

９月１日　調査区内は旧密柑園で、深く耕作されていたため、トレンチの発掘作業は進む。

９月８日　トレンチ壁面の実測を開始する。土の層序は、上から耕作土（約0.3ｍ）、暗褐色土層（約0.7ｍ）、褐色土層（軽石混入土、約0.8ｍ）、凝灰岩層（基盤の地層）となっている。

９月14日　人力でできる表土削平の量には限りがあるので、本日より、ユンボ、ハンドドーザー、湿地ブルトザーを投入して、軽石混入の褐色土層上面まで削平を開始する。重機で削平



調査区域　第56図　C地区（大瀬田横穴群）地形図

した後、作業員全員で清掃作業を行い遺構、遺物の存否の確認作業を行う。

9月27日　遺物・遺構は何も検出できなかった。しかし、大瀬田横穴群は、道路建設敷地までは広がっていないことが確認できたので、大瀬田横穴群の広がりの範囲決定の一助になる。

9月28日　本日をもって調査を全て終了する。器材を撤収して、収蔵庫へ搬送する。

3　調査内容

1）トレンチの設定

大瀬田横穴群の崖続きの南斜面に地形に合わせて幅3mのトレンチを3本（A・B・C）、崖下に崖に沿って幅3mのトレンチを2本（D・E）設定した。A～Eの5本のトレンチの長さは地形によって異なり5～15mとした。

2）トレンチの観察と排土作業

表土層（植壌土、0.3m）の下は褐色土（粘性の強い土、0.3～1.2m）であり、その下は軟い凝灰岩の層になっている。各トレンチとも同様の結果であった。

5本のトレンチ内から遺物は1個も検出されなかったので表土層と褐色土層を重機（バックフォー、ブルドーザー）を投入して排除した。

4　まとめ

表土層と褐色土層を排除した後、凝灰岩層の上面を人力で清掃作業を行ったが、横穴に関する遺構、遺物は何ら検出されなかった。また、他の遺物も検出されなかった。このことから、大瀬田横穴群は、縦貫道建設用地までは広がっていないことがわかった。　（村井・上妻）

第6章　D地区（高塚古塔群）

1．現状と調査の方針

八代郡竜北町高塚に所属する。

砂川左岸側の台地上にコンクリートブロック造りのお堂（二柱の御神体を祭る。）と2基の古塔がある。2基の古塔は、五輪塔（2基）と燈籠（2基、笠と基礎部）を組合わせたものである。

二柱の御神体と古塔は将来移築する計画とのことであった。二柱の御神体に対しては、地元民の強い信仰がある。

二柱の御神体のうち向って左方は足手荒神であり、甲斐神社（上益城郡嘉島町下六嘉）を勧請したものといわれる。この御神体は五輪の空風輪であり、上下を逆にしてヨダレカケをかけてある。供物は花、線香、ロウソクの他にゾウリ、ワラジ、松葉杖、足型であった。

右方は地蔵尊を祀っているが祠のみで尊像は失われている。

調査に当って、御神体にはできうるかぎり手をふれることをさしひかえた。古塔は本来の姿を失っており、元の位置から移動していると考えられるので、写真撮影と実測に止めることにした。

2．調査日誌抄

8月上旬の炎暑の中、1週間の予定で古塔周辺の測量、塔の実測、写真撮影を実施する。

古塔は縦貫道敷地境界近くにあるため調査に当って地元の人々とのトラブルがないよう充分に配慮した。

調査中にも、足手荒神に一人、二人と通りすがりにお参りしに来る人、他の町村からお参りに出かけて来た人等を見うけた。

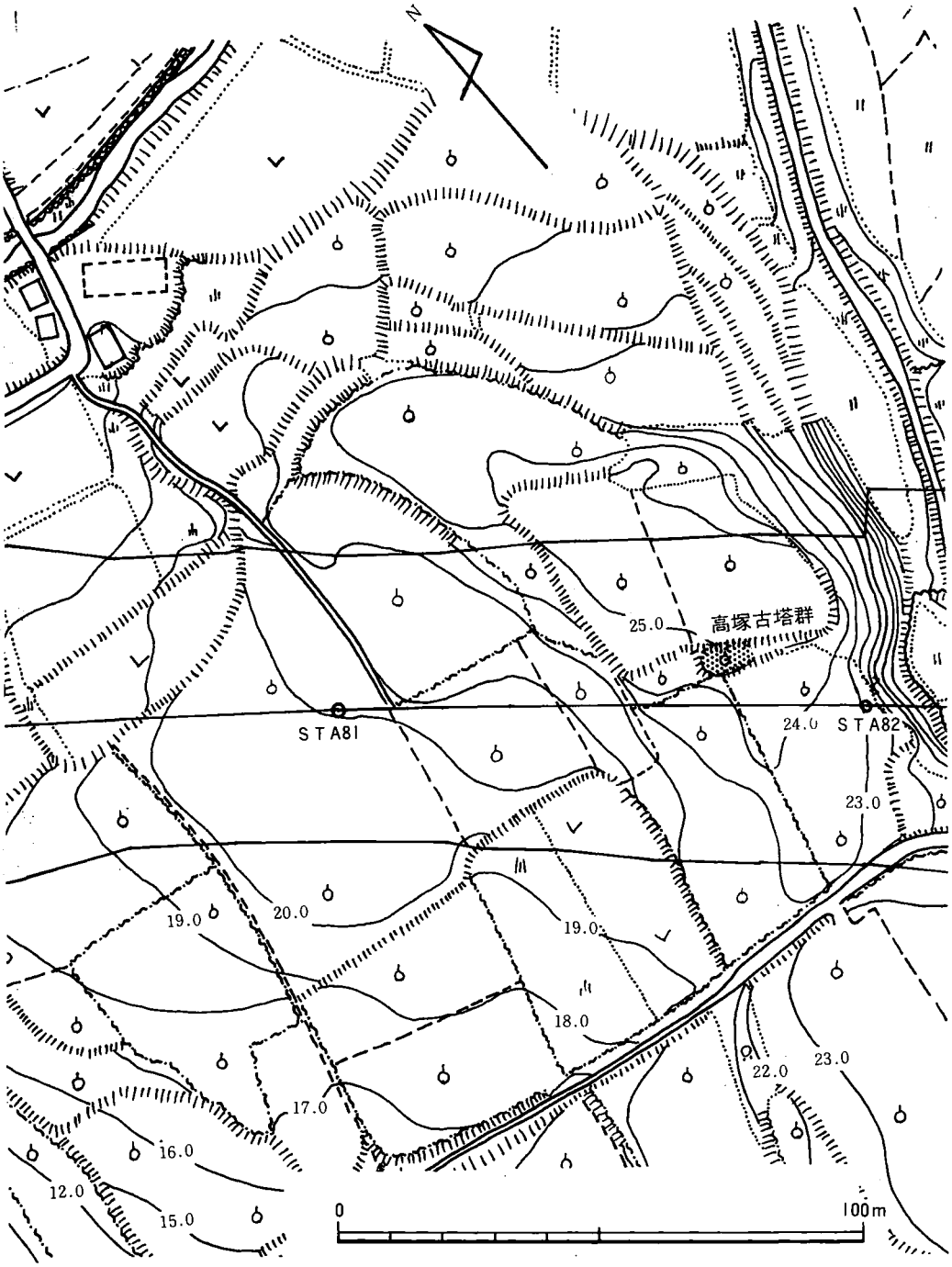
調査地の近く（敷地外）の墓地に十数基の近世末の石塔がある。これらは宝暦・天保頃のものである。

3．調査内容

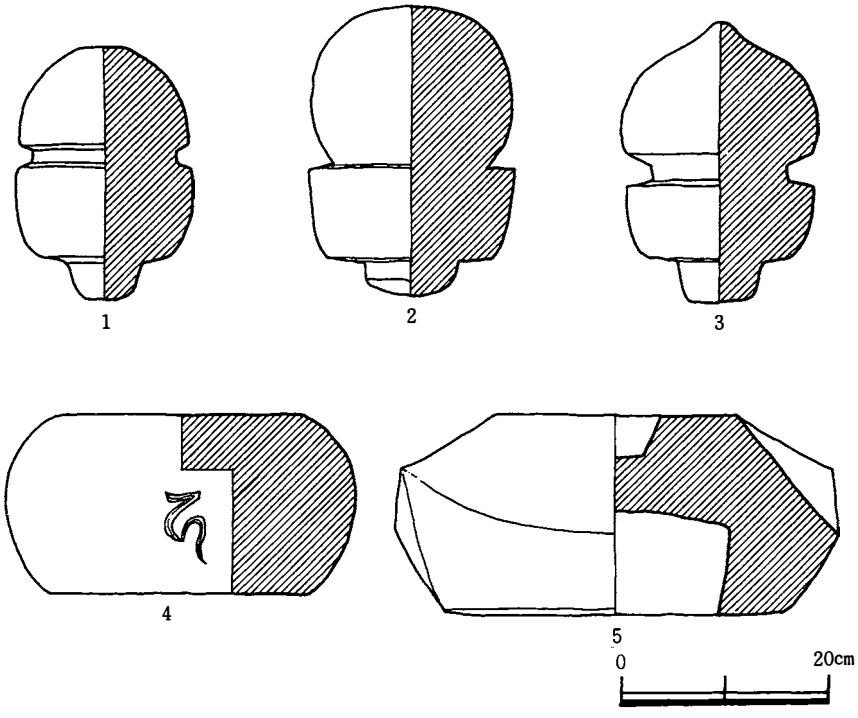
第58図の1～5は当地で発見した五輪塔の実測図である。

1・2・3は五輪塔の空風輪であり、凝灰岩の中でも軽石を多く含む軟い岩石でつくられている。1の空輪の頂部は少し平坦になっている。風輪と空輪の大きさはほぼ等しく、風輪の径（最大部）17.0cm・空輪の径（最大部）16.5cmである。両輪を合わせた高さは20.0cmであり、ほぼ二等分するような位置に1.5cmの区切りの溝がある。

2の空輪の頂部は球形状になっていて、空風輪の全体の形は、円錐台を逆にした形（風輪）



第57図　D地区（高塚古塔群）地形図



第58図　高塚古塔群古塔実測図　　（高　木）

の上に球（空輪）を乗せたような形になっている。風輪の径（最大部）20.0cm・高さ9.0cm、空輪の径（最大部）19.5cm・高さ15.0cmである。

3の空輪は宝珠状になっている。風輪の径（最大部）18.0cm・高さ8.0cm、空輪の径（最大部）19.0cm・高さ12.5cmである。1・2は空輪より風輪の方が少し大きいが、3は空輪の方が風輪より大きい。

4は水輪である。石材は空風輪（1～3）と同様に軽石を多く含む軟い凝灰岩である。太鼓の胴の形になっていて、両端の径は24.0cm、最大径34.3cm、高さ17.0cmである。中央部に「ぅ」の梵字が刻られている。

5は火輪である。石材は上記の空風輪や水輪より硬い凝灰岩である。火輪上部は一辺24.0cmの方形で中央部に径9.0cm、深さ4.0cmの空風輪を立てる穴がある。下部は径19.0m、深さ10.0cmの内側が広がっている穴が掘られている。穴の上の方は少しアーチ形になっている。笠の部分にはゆるやかなそりがある。

以上の5点の空風輪、火輪、水輪の中で対になる物はないようだ。地輪は現地から検出されていない。

4　まとめ

五輪塔は前述したように対になる塔は見い出されず、地輪は１個も検出できなかった。また五輪塔は元の位置から移動していると考えられる。

足手荒神は甲斐神社を勧請したと伝えられるが、勧請の時期については聞き取りでも把握できなかった。地元民の足手荒神信仰は強いようである。

地蔵尊は稲川の近くから移転して、この地に祀ったものである。　（村井・上妻）

附論1

岩立C古墳付近の地質学的所見

——立神遺跡・平原瓦窯跡・岩立C古墳付近の地質学的所見より——

調査・執筆者　長谷義隆
高橋俊正

立神遺跡・平原瓦窯跡・岩立C古墳
付近の地質学的所見

熊本大学理学部　長　谷　義　隆
同　教養部　高　橋　俊　正

Ⅰ．はしがき

筆者らは、熊本県教育庁文化課の委嘱により、昭和51年9月25日および昭和52年9月27日九州縦貫道建設工事予定地にある立神遺跡・平原瓦窯跡および岩立古墳付近の地質学的観察を行なった。ここに観察の概要をとりまとめ報告する。

現地観察に際しては、熊本県教育庁文化課江本直氏をはじめ、職員の方々に考古学的見地からの御教示を賜わった。厚く御礼申し上げる。

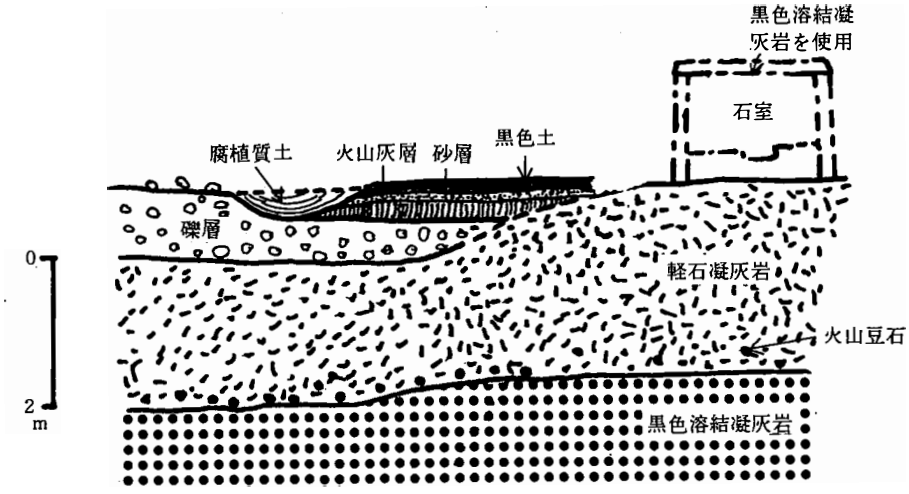
Ⅱ．立神遺跡付近

省　略（立神ドトク遺跡の報告に記す。）

Ⅲ．平原瓦窯跡およびその周辺

省　略

Ⅳ．岩立Ｃ古墳付近



附Ⅰ第Ⅰ図岩立Ｃ古墳地盤概念図

この付近には、立神遺跡付近から連続して分布していると考えられる黒色溶結凝灰岩より新期の地層が分布している。

黒色溶結凝灰岩の上位には、厚さ約２ｍの黄褐色凝灰岩が存在する。この凝灰岩は、軽石を含み、角閃石結晶が認められることから、阿蘇４期火砕流堆積物と考えられる。本岩の最下部には、直径１～２cmの火山豆石が含まれ、また、風化によってみかけ状礫状を呈して、赤色部あるいは異色部が存在する。

黄褐色凝灰岩の侵蝕面上には、厚さ50～100cmの礫層が存在する。礫は亜角礫および亜円礫であり、最大のものは人頭大に達する。礫種はチャートが多く、砂岩も認められる。基質は泥質であり、淘汰が悪いことから、この礫層は、斜面を流下した泥流堆積物と考えられる。

この上位は、厚さ30cmのやや粘土化した赤褐色火山層となり、さらにその上位に、やや黄色をおびた厚さ約20cmの砂層が重なる。この赤褐色火山灰層は、押型文土器出土層準である。

この上位には、礫層上部までを削り込んで、耕作土(？)が存在する。

附論2

野津古墳群

熊本県八代郡竜北村

昭和43年3月

執筆者　乙益重隆

墳丘実測　石人石馬研究会

野津古墳群

（所在地）

○熊本県八代郡竜北村大字大野字北川181番地の４・５・６・７　姫ノ城古墳

○同県　同郡　同村大字野津字上北山王68番地の13　中の城古墳

○同県　同郡　同村大字同字同68番地の14　端ノ城古墳

○同県　同郡　同村大字同字下北山王146番地　物見櫓古墳

（遺跡の現状・性格・特色）

八代平野の東部を限る山麓線丘陵地帯にはすでに消滅したものも加えると大小100基近い古墳が点在する。中でも竜北村東部の丘陵、通称大野原の尾根には、姫ノ城・中ノ城・端ノ城・物見櫓などの前方後円墳がならび、周囲には数個の舟形石棺や箱式石棺も出土している。これらの古墳に相接して北には竜北村多尾古墳群、南には宮原町園ノ迫古墳群や馬原古墳群があり、それらの総数は正確に把握されていない。

姫ノ城古墳は全面雑木林におおわれ、周溝は蜜柑園に開らかれている。墳丘全長85ｍ、後円部の直径37ｍ、高さ７ｍ、前方部幅50ｍ高さ9.20ｍを有し、幅約14ｍの周溝をめぐらす。後円部の直径に比べて前方部が幅広く、約２ｍも高い点では後期特有な姿を呈する。もと後円部は直径45ｍを有したが、昭和28年以来たびたびけずり取られ、現在なお変形しつつある。とくにこの古墳の南側には、前方部と後円部のくびれ部にそって長さ約45ｍ、幅約９ｍ、高さ約１ｍの土壇があったが今では形骸だけをとどめ、この部分に小祠をまつる。昭和30年頃この土壇が開墾されたさいには、現存高さ約50cmの美事な須恵器器台が出土し、他にも須恵器、土師器の破片が採取された。後円部の主体は盗掘され、現在大きなくぼみになっている。周辺の石材から考えて横穴式石室があったのではないかと推定される。周溝内の畑から切子玉１個が採取され、おそらく中心部は完全破壊されたのであろう。

昭和31年頃墳裾が開墾されたさいに、後円部の北側から阿蘇熔岩製の石製表飾が６個分出土した。それらのうち３個は扁平なヤッコダコ形を呈し、おそらく靫か翳を象徴したものと判定される。残りの３個は笠石と円柱からなり、おそらくこれらを組み合せた蓋と推定される。これらの出土状態は墳裾の北側のくびれ部寄りに雑然と倒れていたといい、特別な施設らしいものはなかったときく。さらに昭和41年に墳裾をけずったさいにも、同様なヤッコダコ形石製品と蓋形石製品各１個ずつが出土し、目下現地に放置されているという。おそらくこれらは墳裾かまたは墳頂に樹立したのであろう。

中ノ城古墳は当地方の古墳群中最大の前方後円墳で、周溝は早くから蜜柑園になっているが、墳丘は昭和38年10月にブルドーザーで開墾され、階段状に変形してしまった。主軸の全長98ｍ

後円部直径57.50m高さ10m、前方部幅69.50m高さ12mを有する。おそらくこの古墳も姫ノ城に近い頃の所産であろう。明治の中頃後円部の西側が掘りかえされ大きなくぼみを生じる。その頃人物埴輪が出土し、現在東京国立博物館の所蔵するところである。墳丘の各所に円筒埴輪の破片が散布し、中には線描きの文様もみとめられる。

端ノ城古墳は姫ノ城の南方約200mにあり、墳頂は竜北村の公園になっている。主軸の全長66m、後円部直径40m現存高さ7m、前方部幅42.5m現存高さ8.50mを有する。墳頂はけずられ後円部には日露戦争の記念碑がある。おそらく主体部はそれ以前に掘られたのであろう。この古墳も姫ノ城や中ノ城と同形式で、前方部が後円部よりも約1.50m高い。周溝は地割線と空溝がとぎれがちに残り、その内側と墳裾に埴輪円筒列がならぶ。

物見櫓古墳は大野原の丘陵が西にむかって半島状に突出した丘頂にあり、主軸の全長72m、後円部直径37.50m高さ8m、前方部幅30m高さ6mを有する。この古墳は他の3基とちがって、最も正常な前方後円墳本来の姿を呈するが周溝はない。墳頂に大きな盗掘坑があり内部の状態は明らかでない。出土遺物も伝承もないが、様式上前記の三古墳よりも先行するであろう。

これらの前方後円墳のほかに、字上北山王171番地の2に天堤（あまつつみ）という小形の前方後円墳1基があったが、昭和37年秋の開墾によって完全に消滅した。そのさい巨大な石製表飾の蓋1組が出土し、現在熊本大学法文学部に保存されている。その形態は姫ノ城出土例と同様で、項部が帽子状に高く盛り上る。

また上北山王には昭和37年の開墾時に舟形石棺が出土し、同じく下北山王の物見櫓の下には舟形石棺の石材1組があるときくが確認していない。

なお、これらの古墳群の分布する地方は、氷川をはさんだ宮原町とともに、倭名類聚抄にみえる肥伊郷に比定されるところで、さらに景行天皇紀にみえる火の国火ノ邑に擬せられるところである。

（出 土 品）

野津古墳群はいずれも古く盗掘され、出土品は散逸してしまった。

姫ノ城古墳出土品

○石製蓋3組（竜北東部小学校蔵）

○石製靫？（サシバ？）3組（同小学校蔵）

昭和41年墳裾から石製靫？1個と蓋1組が出土し、現地に放置されているという。

○前方部の墳裾に象形埴輪の破片出土。1括は竜北西小学校に、残りは花岡興輝氏蔵。

○須恵器の器台1個（竜北東小学校蔵）

○水晶切子玉1個（乙益重隆保管）

中ノ城古墳出土品

○須恵器破片（竜北西部小学校蔵）

天堤古墳出土品

○石製蓋１組（熊本大学法文学部資料室）

上北山王古墳出土品

○舟形石棺１組（熊本大学法文学部資料室）

（土地概況）

現在墳丘部の開墾が行なわれていないのは、姫ノ城古墳と物見櫓だけである。それさえも現在危機におかれている。

姫ノ城は昭和26年頃より周溝部の開墾が進み、すでに前方部側は早く蜜柑園化した。また、後円部をめぐる周溝も昭和27年以来開墾され、毎年墳裾が約２ｍ平均けずられつつある。けずり取られた後は蜜柑を植え、地主の計画では将来後円部は完全にとりくずす予定という。前方部の地主は目下のところ雑木林のままにしておくというが、これも早晩破壊を免がれない。おそらく３～４年後まで現状を保ちうるかどうか危ぶまれる。

中の城古墳は去る昭和37年、階段状にブルドーザで開墾され、いちじるしく変形した。目下のところ墳頂は開墾しないと地主は云うが、いずれ近年中に破壊は免がれない。周溝も年々変形し、今のうちに保存処置をとる必要がある。

端ノ城は村有地であるため墳丘の変形は免がれている。しかし墳頂はすでに古く変形し周溝はわずかに地割線をたどりうるにすぎない。

物見櫓は昭和38年まで松林であったが、昭和39年に切られ、これもブルドーザによる開墾が行なわれた。目下墳丘だけは旧態を存するが、今の状態ではこの２～３年以内に完全破壊されるであろう。

天堤古墳はすでに昭和37年にこわされた。

（保存に対する意見）

現在端ノ城を除いて、すべて民有地であり、周辺が蜜柑園であるところから、これを県または村指定にすることは困難である。すでに何度か地主に対して指定の承諾を求めたが、現段階では不可能である。この上は国有地域あるいは県・または村有地として買い上げ、あらためて国指定、または県指定することがのぞましい。土地の買い上げは目下のところ各地主とも承諾しそうである。

（周辺の土地開発状況）

すでに野津古墳群の周辺はほとんど開墾され、竜北村大野から野津、宮原町馬原古墳群、園

ノ迫古墳群にいたるまで、何らの調査も経ずしてほとんど蜜柑園化した。今後開墾の残りがわずかにあるので、その部分から石棺等の出土することはあっても、封土をもった古墳の発見は望みがうすい。せめて現在最も旧態をとどめる野津古墳群4基の保存処置だけでも、早急に着手すべきである。

（報 告 書）

まとまったものなし。

○八代郡教育会編「八代郡誌」

○他に昭和39年「石人石馬研究会」で行なった測量成果にもとづき、報告書執筆中。

○乙益重隆「熊本県姫ノ城発見の石製遺物」

九州考古学3、4号（1958年）九州考古学会。

〈編者註〉

1　「竜北村」は昭和49年4月1日より、「竜北町」と改称した。

2　旧竜北町立東部小学校（旧吉野村立吉野小学校）は旧竜北町立南部小学校と合併、移転して竜北町立東小学校と称している。

　小学校跡は東部社会教育センターとなり、同校に保管されていた近隣遺跡からの出土遺物は同センター内に保存されている。（竜北町大野896番地）

3　本論（附論2）は乙益重隆氏が熊本県教育委員会に昭和43年3月に報告されたものである。

　今回、御同意を得て本書に掲載させていただいた。

4　次頁に示す「野津古墳群実測図」は熊本県文化課に保存してあった石人石馬研究会の実測図をトレスしたものを同会の御同意を得て掲載させていただいた。

5　野津古墳群のうち姫ノ城・端ノ城の二古墳は昭和47年4月26日、物見櫓古墳は50年7月31日にそれぞれ県指定史跡となった。

野津古墳群実測図

――端ノ城古墳――

――物見櫓古墳――

――姫ノ城古墳――

――中ノ城古墳――

野津古墳群の実測は昭和39年８月下旬に石人石馬研究会の手によって実施されました。実施に当っては朝日新聞社の後援と地元関係者の協力がありました。

次に示す名簿は墳丘測量に関与した人々の名前です。残暑のきびしい天候の中での測量作業のため過労で倒れた人々、蜂に刺された人々、漆に激しく気触れた人々が出ました。

今回、このように苦労して作成された実測図を当報告書中に掲載することを承諾して下さった石人石馬研究会に対して心から感謝します。（村井）

調　査　者　名　簿

調査関係者名簿

石人石馬研究会（代表　岡崎　敬）

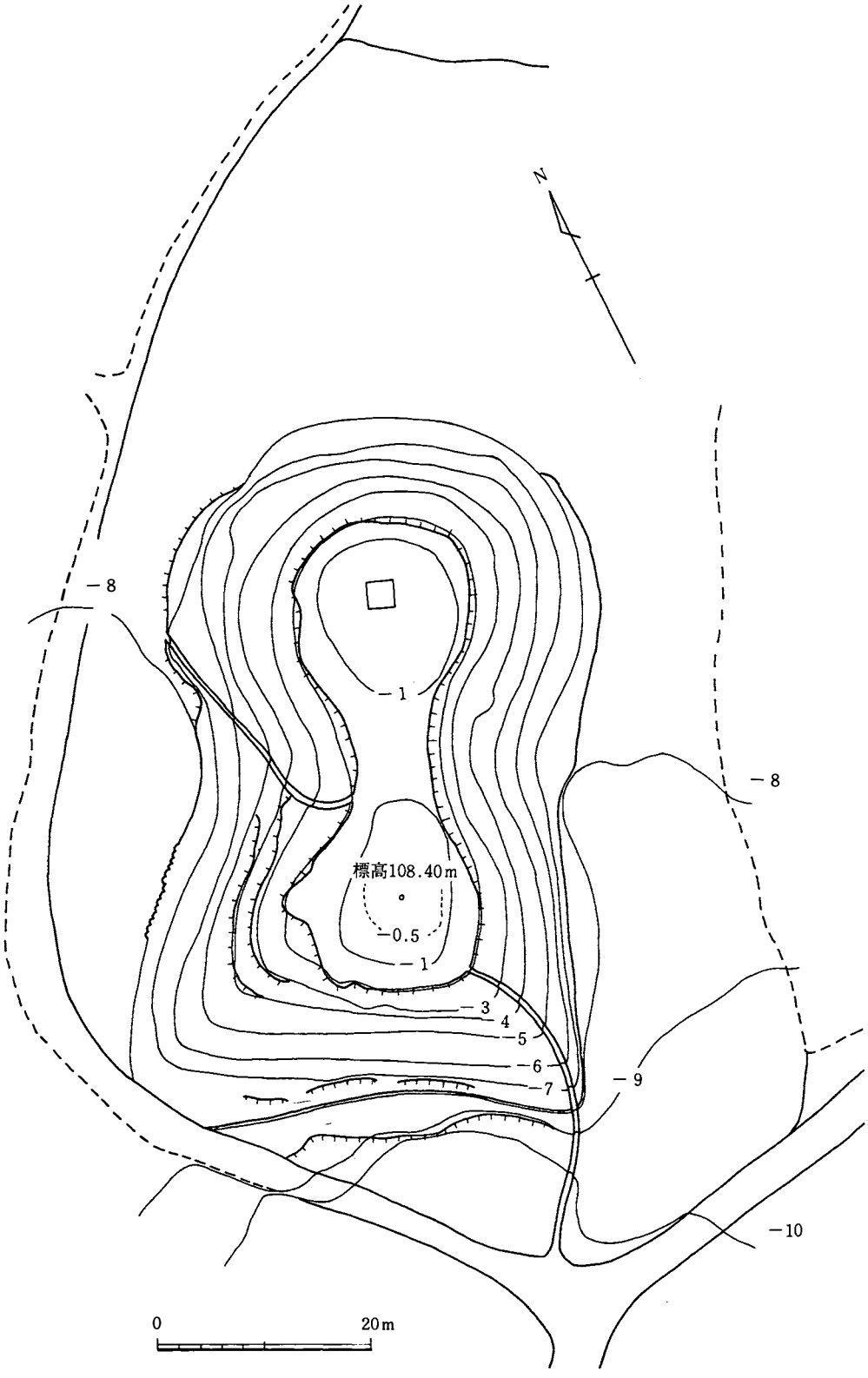
蓑田田鶴男	内田　辰男	前田　繁雄（竜北村村長）
沼田　育三（竜北村助役）		西村　義則（竜北村教育長）
盛高　靖博	牛島　盛光	花岡　興輝
東　光彦	宮村　剛	平岡　勝昭
杉村　彰一	隈　昭志	高島　忠平
伊藤　奎二	北川　繁秋	佐藤　伸二
鬼塚　考明	村井　真輝	富樫卯三郎
上野　辰男	緒方　勉	江上　敏勝
東　弘典	井上　辰雄	田辺　哲夫
田添　夏喜	原口　長之	松本　雅明
坂本　経堯	三島　格	乙益　重隆

宇土高校社会部

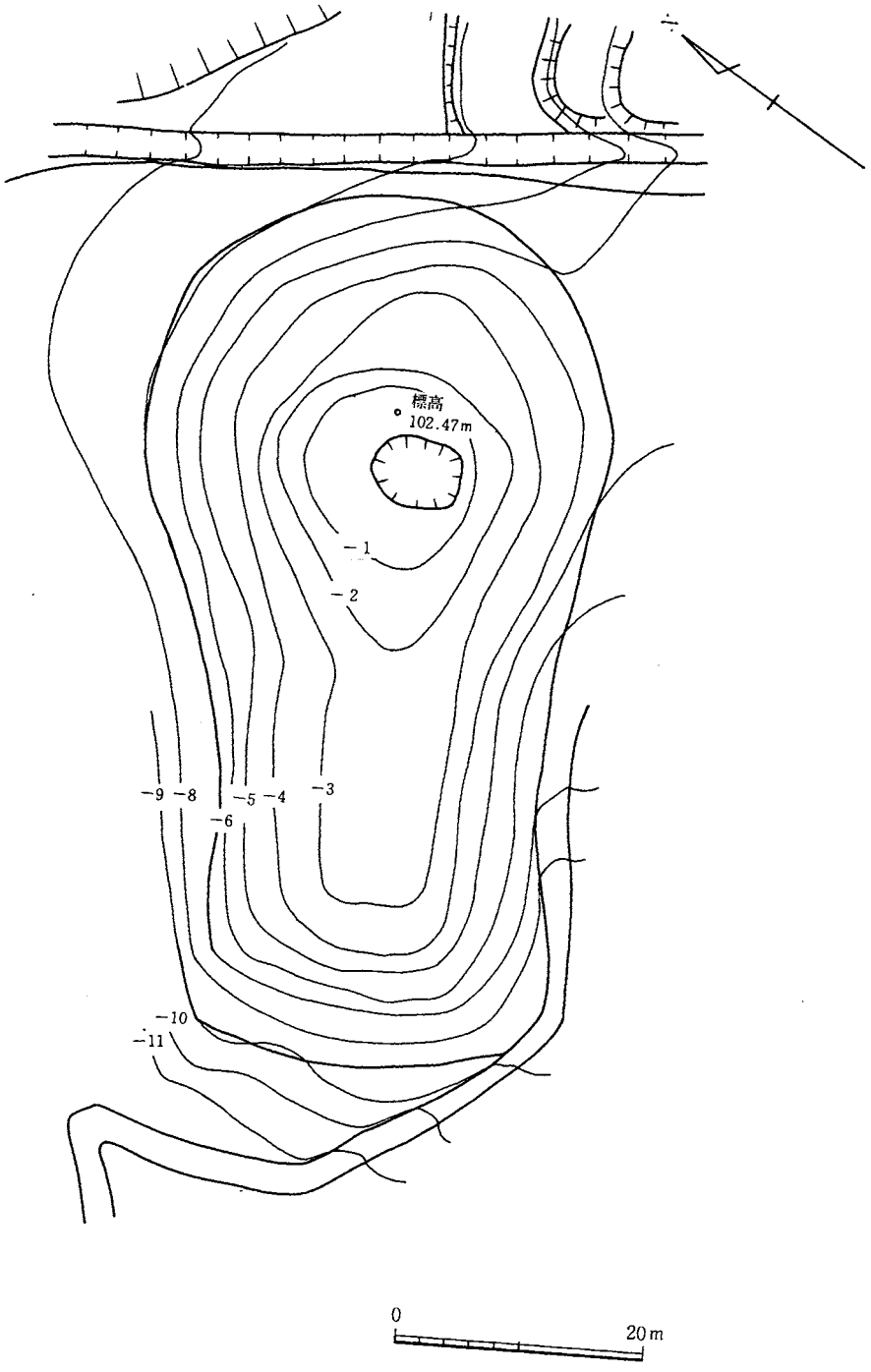
※八代郡竜北村「野津古墳群調査関係者名簿」による。

地元協力者

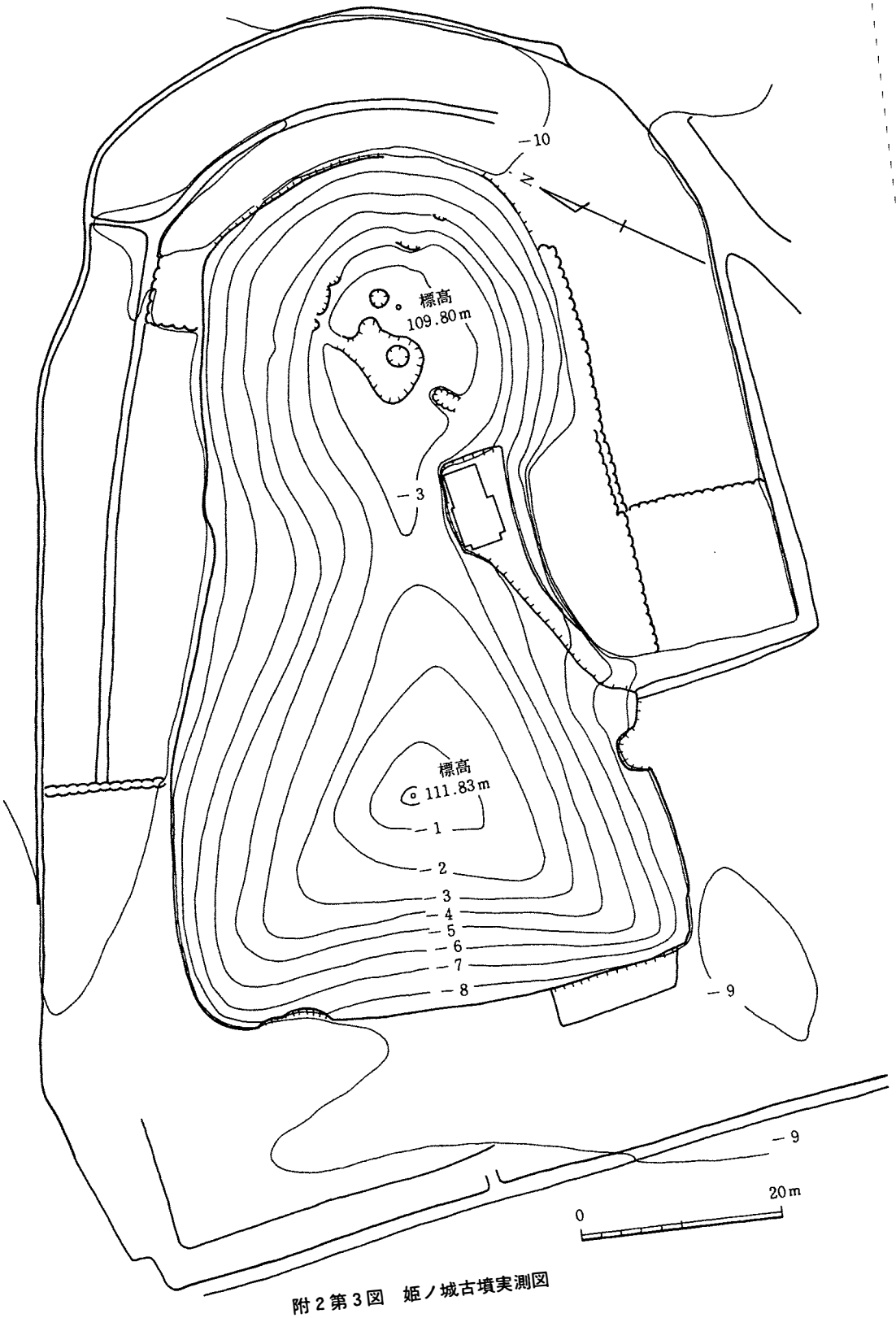
中島源徳　園田英雄　宮川松雄　尾上英雄　守　道順



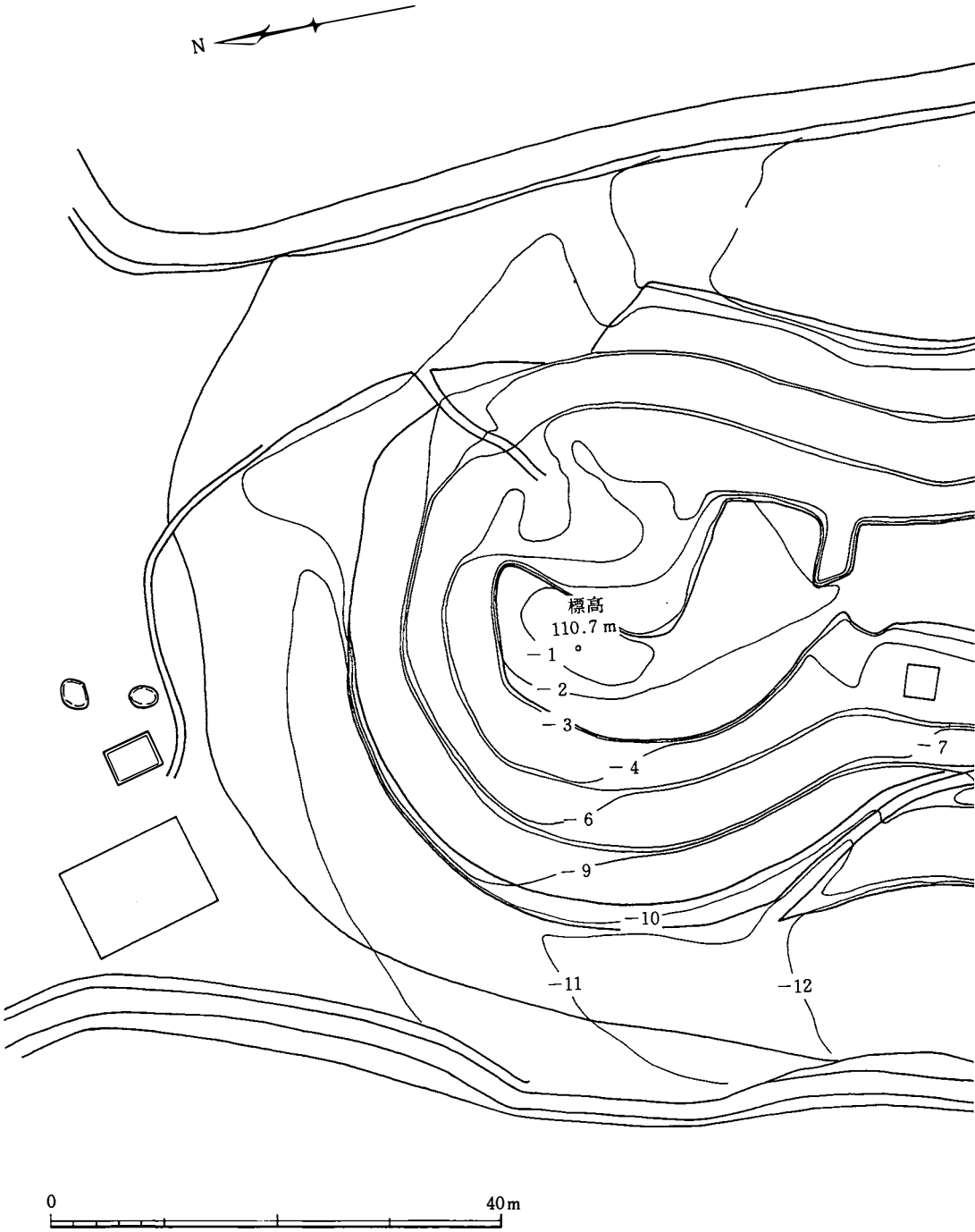
附2第1図　端ノ城古墳実測図



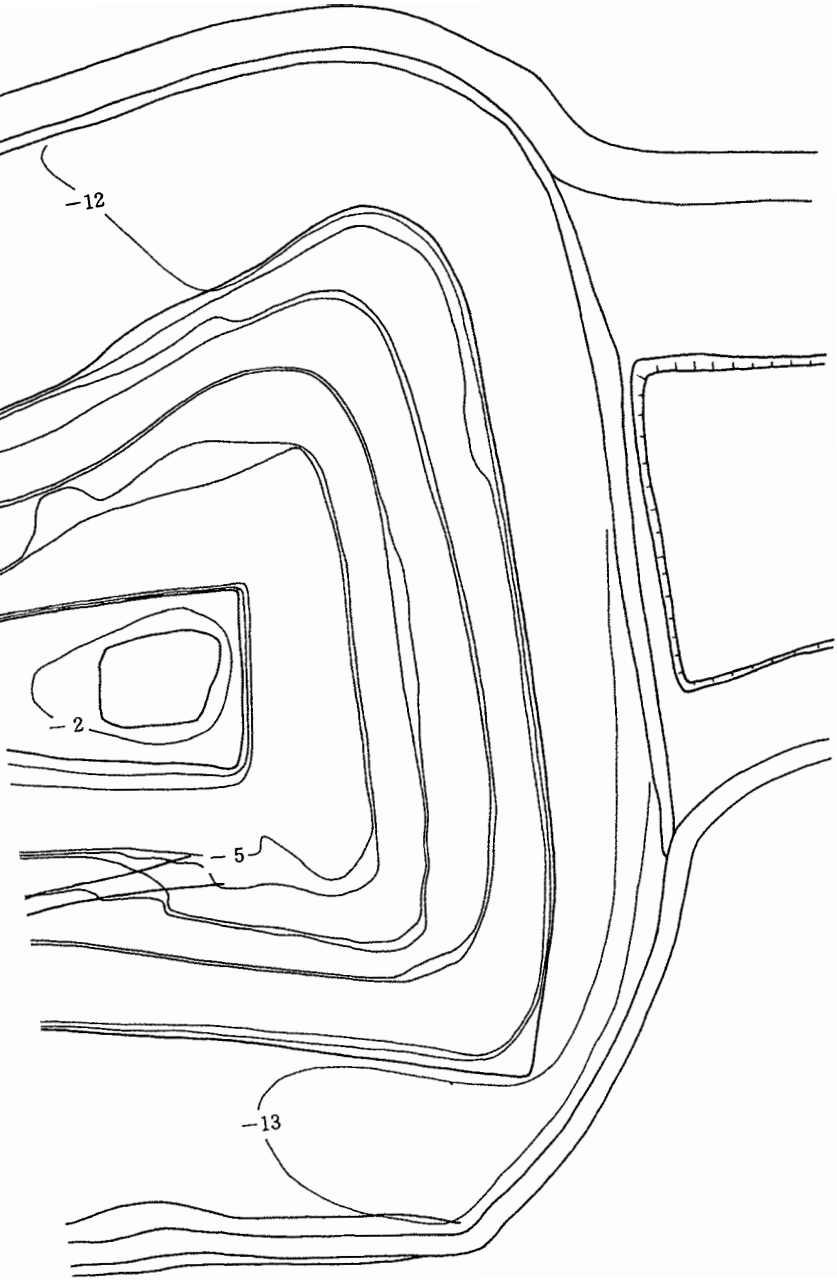
附2第2図　物見櫓古墳実測図



附2第3図　姫ノ城古墳実測図



附2第4図　中ノ城古墳実測図


−12
−2
−5
−13

附論3

大野窟古墳

執筆者・三　島　　格

所 在 地

熊本県八代郡竜北村大野字芝原（附３第２図の16）通称岩屋本

調査期日

昭和37年12月25日～30日

調 査 者

松本雅明、花岡興輝、隈　昭志、平岡勝昭、杉村彰一、古田一英、高島忠平、伊藤奎二、北川繁秋、倉田芳恵、宇土高校、熊本高校社会部、三島　格（責任者）

附３第１図は附３図版１を見て下さい。

はしがき

大野窟（いわや）古墳は、かなり古く開口し[註1]、石室の巨大なることで著名であるが、戦時中陸軍に使用され又浮浪者や見学者などの焚き火のために、壁面は黒変し土砂の流入も甚だしい現況にあった。本墳については古く福原岱郎、高橋健自氏らの記事[註2]があるが、いずれもその記載は簡文にすぎ、石室実測図は『大和島庄石舞台の巨石墳』（浜田耕作[註3]）所収の「日本古墳巨大石室聚成」（梅原末治）の中に下林繁夫氏の実測図が収められているが、当時においては石棺の形態・壁面・墳形などがあきらかでなく、また同書自身も稀観書に近く、研究上不便であったので、冬休みを利用して上記の者が墳形測量と石室実測を行なった。玄室内は暗黒かつ高天井であるので古墳裏の稲田宅より電線を引き照明をなし、二段梯子を使用しかなりの苦心をして実測図を作製した。調査にあたっては、竜北村助役沼田育三、教育長西村義則、同委員会宮村剛氏や県教委及び乙益重隆教授などから種々の御高配を得、同村高塚の小高重寿氏は自宅を宿舎に提供され、遺跡近くの稲田幾一郎、同正盛、木野次男、岡本勝、岩本勇、同勝喜氏などからは、資材の提供のほか多くの厚意を得た。又在熊の自衛隊42連隊徳永義徳氏以下の隊員諸氏は、人員・器材などの運搬のために車輌を提供された。明記して上記各位に感謝の意をささげる。

立　　地

八代平野を西流する、砂川・氷川・大鞘川などの流域平野の背後の丘陵地帯の中で、北は砂川南は氷川に限られた、旧吉野・大野・野津村などに属する台地は、４基の前方後円墳を含む肥後における有力な古墳の分布する地域の一つである。（第２図。江上敏勝「八代地方の埋蔵文化財遺跡分布図」の一部を利用した）本墳は八代市に通ずる国道の、大野バス停留所（至近に大野貝塚あり）より谷間を通って本山部落に通ずる道路の北側の、ほぼ南北に伸びる比高30

～40ｍの舌状台地の上に立地する。古墳下の本山部落に通ずる道路上からは、墳形については判然としないが、台地上に立てば、ほぼ原形を保った円丘が認められる。墳丘の北斜面と東斜面は、かなり急勾配でその裾には民家が接し、西側の斜面は若干のはり出しがあって、観音堂とその境内になり、板碑（大永六年1526年）が立つ。石室の開口部は境内の南側下である。

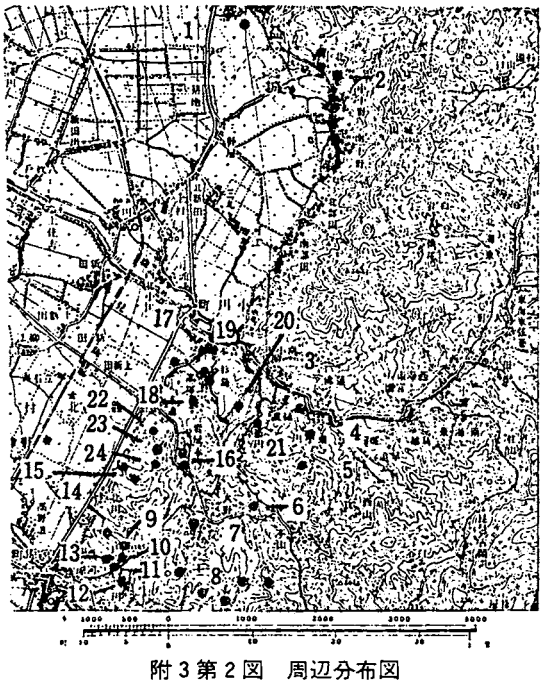
南斜面は北東のそれと比べると、ややゆるやかで鞍部のような低平地を介在して台地状に南方にかなり突出している。しかして墳丘と突出部を含めた地形は、台地上においてあたかも前方後円墳のごとき形状を示すので、同地を訪れる人士の間で話題になることもあった。さらに突出部には古窟（ふるのいわや）とよばれる古墳（第２図16の南）が古く存在し、僅かに低く残る円墳状の小堆土がその跡であることを調査中に知ったが、遺構を示すものは現存せず、巨石があったという聞書きの外、同墳については知ることがない。

墳頂はかなり広くかつ平らかで蜜柑園となっており、それにつづく斜面はほぼ全周にわたって一段落ちて削平されている。この段落ちを含めて、墳丘斜面の全域は竹雑木などが密生している。

以上の観察を基にして、まず地形測量を行なった。頂部を０として－50cm等高線を測り墳域外に及んだ。その結果作製されたのが第３図（紙面の都合上四周及び－50cmの等高を略す）である。まず墳丘についてのべよう。

墳　丘

頂部の平坦な部分は径約９ｍで漸次斜面となるが、前述の段落は概ね－1.5～－2ｍの線で段



1　竹崎古墳
2　年の神古墳
3　樋渡古墳
4　岩屋原古墳
5　山中古墳
6　高雄古墳
7　永田古墳
8　七つ穴、五つ穴、園の迫、蕾園、馬渡各古墳群
9　姫の城古墳(前方後円)
10　中の城古墳(前方後円)
11　端の城古墳(前方後円)
12　下溝口古墳
13　上北山王古墳
14　物見櫓古墳（前方後円)
15　下松尾古墳
16　北－大野窟古墳
　　南－古窟古墳
17　乱橋古墳
18　高塚古墳
19　権内古墳
20　段古墳
21　大瀬田古墳
22　太尾古墳
23　六反田古墳
24　太山古墳

附３第２図　周辺分布図

落ちとなり、広狭の差はあるがおおよそ２～４ｍの幅をもって、墳丘をまわるが、西側では欠失している。これは観音堂や建碑のために墳内を必要とし、はり出させるために削り取られたものと考えられる。頂上の中心からみて完全な円でなく、北～東側は円く西側は前記の境内、南側は耕作のために削り取られてかなりいびつである。－２ｍ等高線において南北径（ＯＰ線において以下同じ）約2.8m、東西径（石室主軸線ＱＲにおいて以下同じ）約23.4mを測り、－８ｍ等高線における東西径は約38.5mでその西端は石室開口部の敷石部にあたる。しかしてこの敷石はなお若干つづくと思われるので、－8.5mの東西径をはかると、約41.6mを得る。この数値は、本円墳の基底径に近い数値と考えられる。[註4]（註６参照）南北径は前述破壊により完全には得られず、現存長38.7mをはかる。比高は北側民家の畠地より11.5m、西側境内より7.5m南側平地より6.5mで、羨門敷石面より約９ｍである。

墳丘面には、葺石・埴輪・土器などの遺物は認められなかった。次に問題になるのは、前記の西側を除き、－1.5～2mの等高線でおち２～４ｍの幅でめぐる段落ちである。しかして西側もめぐっていたと推測できることも前記のごとくである。その現況はところどころ土くずれを認め雑木が密生するが、昭和34年までは樹齢400年を経た杉が観音堂の背後に聳えたち、古来ほとんど耕作されず現況に近い状況であるので、段築と考えてよいと思われる。[註5]なお、削平された墳丘の頂部は、截頭円錐形状を一見呈するが、これは明治末～大正初期に塚状の高い頂部を開墾したものである。なお前記の前方後円墳云々については、古窟古墳の西側断面には、封土築成の縞模様を認めるが、中間低平部の断面にはそれを認めず、航空写真による所見も前方後円墳とは認められないようである。[註6]

石室の構造

（第４図）封土の中央をはずれて構築された、複室の切石積みの横穴石室墳である。石室主軸は北より56.5度東にふれて西南に開口する。その基底の地山は、羨門部の石敷き面に表われている。以下便宜上墓道から玄室にむかって記述し、むかって右を南壁、左を北壁と呼び、南北各側壁石には、手前より南1.2…北1.2…の番号をつける。

(1) 墓道　流入堆積土をさらえ、床面を露出する今次の調査によって発見されたものである。部分的な所見であるが、羨道部の敷石は羨門外にも及ぶ。敷石は厚さ５～10㎝の大小不整形の阿蘇熔岩片で、黄褐色の地山の上に敷きつめたものである。敷石の北端には、高さ１ｍ余の羨道の側壁石よりも低い板石（阿蘇熔岩）２箇が、羨門側壁に接して立つ。調査日数の関係上、敷石南端の立石と敷石の起点をたしかめることができなかったが、ボーリングの結果敷石はなお１～２ｍのびるものと思われるので、羨門に至る墓道と考える。

(2) 羨門　巨石を立てた西側壁と巨大な楣石が墳丘裾に露出しており、楣石には扉石をはめるための長さ1.96m深さ20㎝の切りこみがある。その直下には扉石を受ける設備つまり墓道と

羨道の区別はなく、敷石である。高さ2.14m幅1.98m

(3) 扉石　約40数年前までは実在したが、その後観音堂の石垣を築いた時に、割って材料としたという。（稲田幾一郎氏談）その形状は阿蘇熔岩の巨大な1枚石で、羨門にぴったりはまる大きさで、彩色は認められなかったといわれている。

(4) 羨道　平面形は、ほぼ対称に4個の巨石を縦に配した長方形であるが、羨門部はごくわずかに広がる。天井には巨石を架す。床面は墓道と同じく地山の上に敷石を敷いたものである。北1.2南1.2の側壁石には赤色の顔料を塗彩した装飾文を認めるが、剝落が甚しく図柄についてはほとんどわからない。また南2には明応6年（1497年）銘の碑文がある。開口の古さを示す資料であろう。前室とは、2個の柱状の立石で仕切られ、立石の間には板状の敷居石（奥行38cm）をおき、幅1.26m余の入口を中央につくる。南3にも赤色顔料の装飾文を認めるが、図柄については不明である。奥行き3.84m、幅1.80m、高さ2.08m。

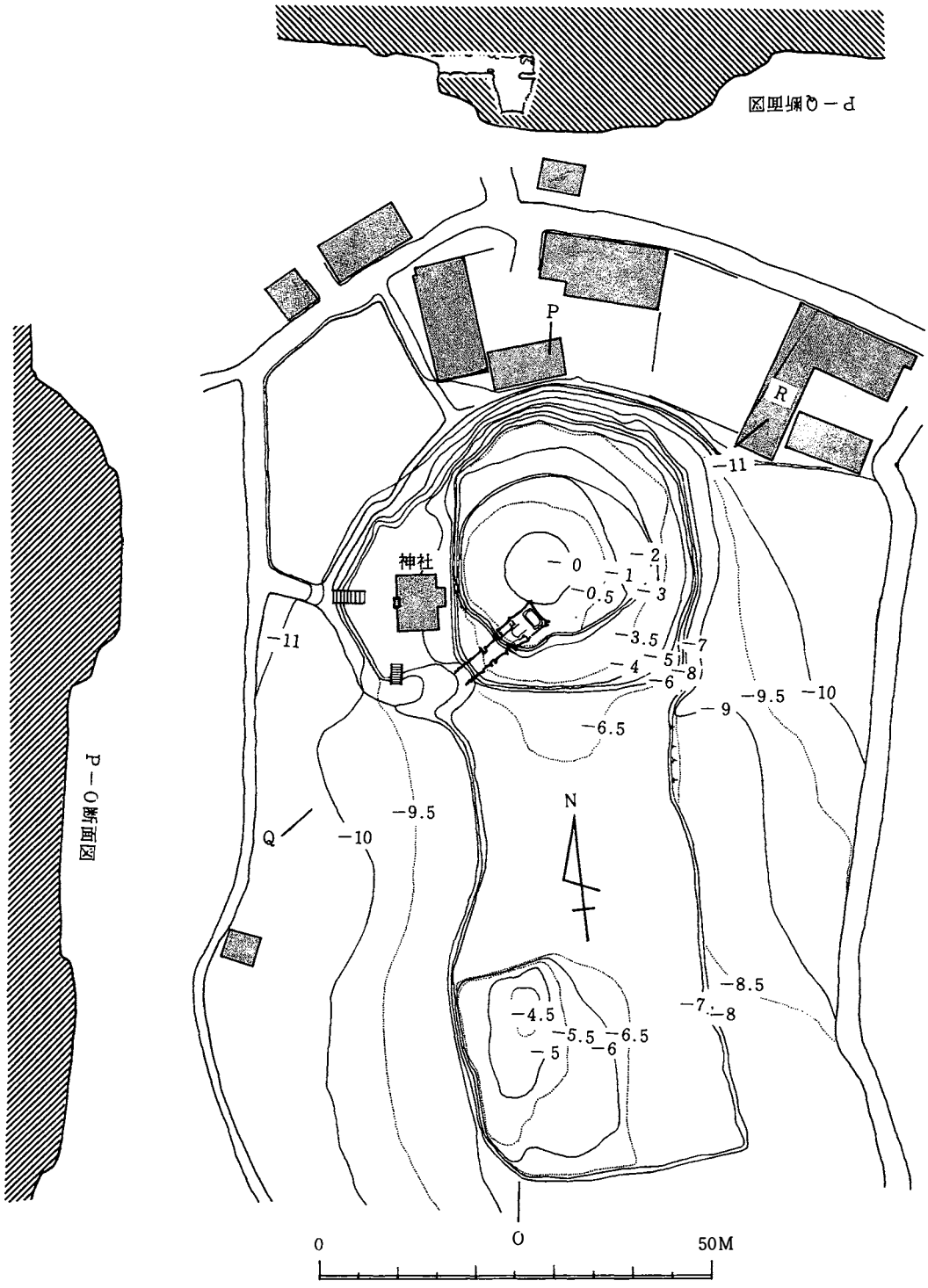
(5) 前室　羨道と玄室の間につくられた、ほぼ方形の平面形を示す、小形の石室である。側壁は巨石の立石で、玄室との間に幅3cm以上、厚さ70cm、高さ2m以上の巨石を立て、仕切り石となしその中央をくり抜いて入口（奥行65cm）としている。また仕切り石に接して、別個の柱状の石（南、北5南壁のそれは面が欠失）が立ち、それぞれ顔料（白・赤）の塗彩を認める。又南・北6にも認めるが、いずれも図柄については明らかにしがたい。天井は羨道と同じくその高さもほとんど変らない。床面は部分掘りの結果、羨道と同じく石敷きであることを確認したが、埋葬施設の有無についてはあきらかでない。奥行き2.30m、幅2.16m、高さ1.92m。

(6) 玄室　土砂の堆積は80cmおよび、排土の結果いくつかの知見を得た。平面形は奥行き5.23m、幅2.90mの長方形で、奥壁には幅3.5mの巨石を立て、両側壁には幅2mと3.05mの二大石を対称に配し、そのすべてに彩色による装飾を認めるが、顔料の剝離や煤のため識別は困難である。奥壁に接して、巨石（阿蘇熔岩）をくりぬいた石棺が置かれ、その直上に石棚が奥壁から挺出している。

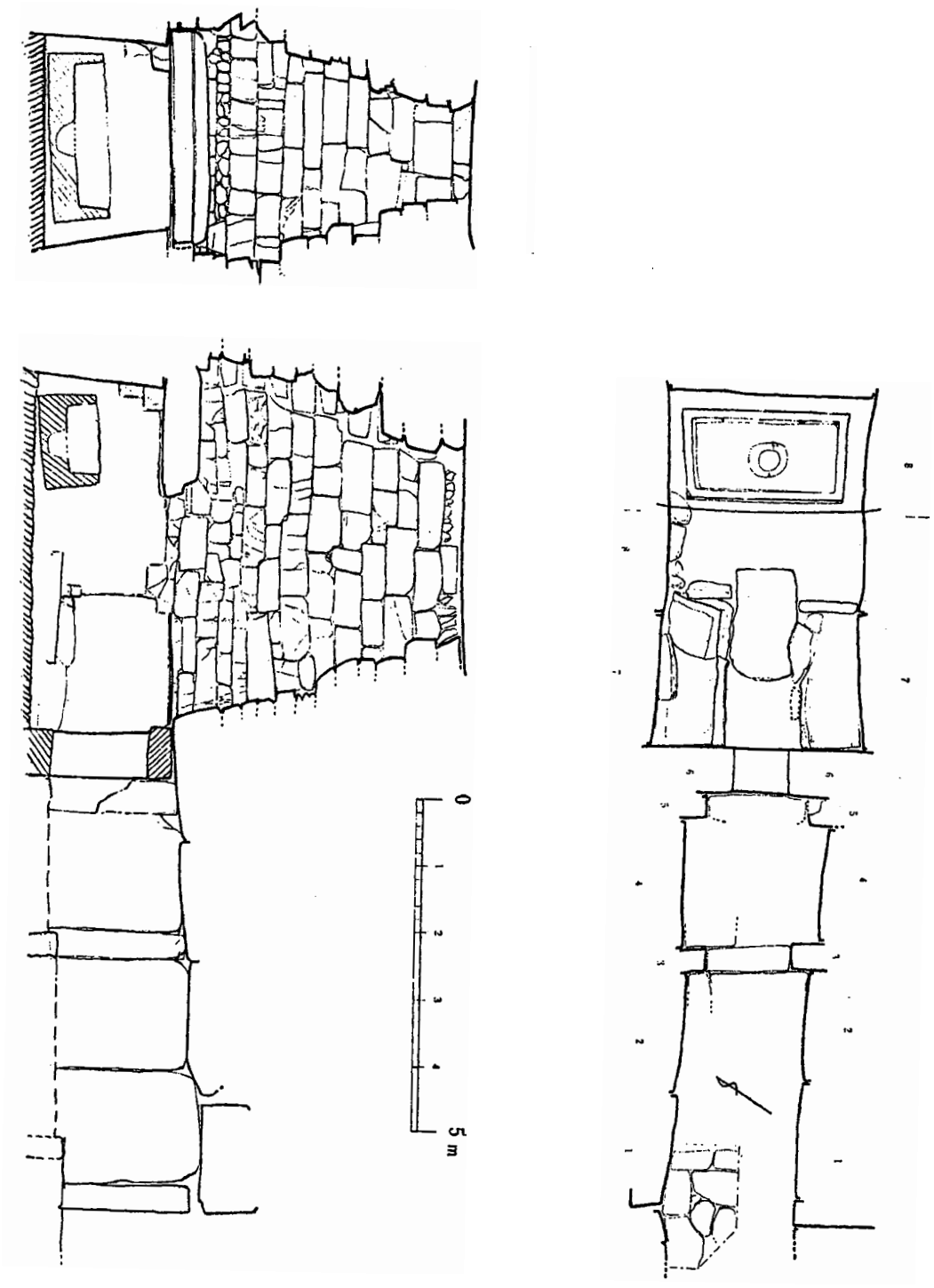
石棺は棺縁のみ従来露出していたものである。長さ2.52m、幅1.53m、高さ87cmという巨大なもので下底はやや広がり安定感をます。巨大な石室にはまことにふさわしい堂々たる石棺である。棺内には土砂が充満し、遺物は認められない。棺底の中央部に長径60cm、深さ30cmの盗掘の穴があるが、下底には達していない。さらに盗掘は棺下にも及び、棺前の敷石をはぎ石棺をこじ上げかけたらしく、多少傾斜している。石棺の下には棺をのせる棺台はない。

石棺正面の棺縁にのみ棺蓋を受けるきりこみがあるが、他縁には施されていない。棺蓋は現存しないが、排土中にわずかに一片、棺身に接する部分のきりこみ（きりこみ部に赤色の顔料の附着を認める）をもつ小片を得た。それは家形を呈する形態であるが、棟幅などの詳細については小片にすぎ推定できない。

棺身正面と棺縁上面には赤色顔料による装飾を認める。前者については残念ながら図柄につ



附3第3図　大野窟古墳墳形実測図



附 3 第 4 図　大野窟古墳横穴式石室実測図

いては明らかにし得ないが、後者は塗彩のみと思われる。

石棺前方の床面は、前述のごとく破壊されて敷石を失うが、黄褐色の粘土の地山面を検出し得た。前室から通ずる通路にあたる所に、板状の石（阿蘇熔岩長1.6m幅１m）が置かれているが盗掘などによりかなり動いている。露出面は平滑であるが、裏面は加工面でない。通路の敷石であろう。その左右に屍床が各々１個あることを発見した。北壁に接する屍床を第１号、南壁に接するものを第２号と呼ぶ。第１号屍床長さ2.3m、幅1.1m、厚さ30cm余の阿蘇熔岩の１枚石を周縁をのこし、舟底状に浅く（20cm）くり抜いたものであるが、蓋を受ける切りこみはない。枕などの設備はない。現況は一端からおよそ⅓ほどの所で折損しているが、屍床下を盗掘しようとしてこじ上げて折損したものである。一端に接して長さ70cm、厚さ30cmの板石が立ち、同形状の板石が側壁に接して倒れている。清掃の結果側壁に接して須恵器破片（第５図の４）を得た。その出土状況からおそらく本屍床に伴うものと考える。

第２号屍床は第１号のごとくくり抜いたものでなく、厚さ30cm、長さ２m板状（阿蘇熔岩）の屍床であるが、枕などの設備はない。第１号と同様に一端に立石が立ち、通路に接して、板石が倒れ、接して別の板石を抜いた跡が認められた。

両屍床の形態は、横穴古墳に認められる屍床と系統的に類縁があると考えられる。立石はおそらく屍床を通路と区画し保護するための障壁[註7]で、本来は両屍床をめぐって立っていたと思われるが、横穴古墳には類例を見ないようである。２個の屍床の先後関係については明らかにし得ないが、第２号屍床がより粗雑な作りである。両屍床とも顔料の塗彩を認めないので、二次・三次の追葬時には、顔料の使用はなかったのではないかとも考えられる。

つぎに、玄室の壁面についてのべる。羨道・前室と同様に面をとった巨石を縦に壁体として地山の上に立て、その上に切石（一部塊石使用）を横積みにして持送式に積み上げ最後に天井石１枚をもっておおったものである。奥壁面を見るに、床面から約1.9 mの高さに石棚が挺出している。石棚は長さ約3.3m、幅約２m、厚さ60cmの巨大な一枚石で、その両端は側壁に架せられ、その前縁上面は一段ひくく段をなし、同裏面にも浅いきりこみがある。前縁に朱の塗彩を認める。石棚上面で古銭（年代不詳）を得た。石棚直上には煉瓦状の比較的平らな石を横ならべにし、その上に人頭大の塊石を積み、その上を天井まで切石を横積みに10段積み上げる。南壁面は、壁体の腰石直上から積み上げ、天井石直下で縦積みにならべる。前室に通ずる西壁も同様に切石の横積みであるが、仕切石の上に巨岩（長さ3.1m厚さ0.8m）をのせ、その直上から横積みをなす。彩色による装飾は腰石面と石棚前縁・石棺上縁にのみ限られ石積の壁面には認められない。

天井石は長さ3.5m、幅1.5m以上の巨大な平石（ほぼ中央に径４cmの１孔を穿つ）で、天井部は長方形状を呈する。しかして床面より天井まで6.48mを測る。玄室の断面形は梯形であるが、前後両壁の傾斜は左右両壁のそれよりかなり急である。

雨水の浸入により玄室壁面の崩壊はかなり激しいが、巨岩を自由に駆使した本墳の石工技術には見るべきものがあるが、石組みの手法上注意すべき点は、切石の木口を合せて横積みにする際、一石の木口をかぎの手状に切り取り、他石の木口を密着させる積方で、本墳において数個所認める。この手法は、切石積みにおける自然発生的なものであり、県内では本墳より古い年代の井寺古墳[注8]の東壁面にも認められ、下降する例には大阪観音塚[注9]・群馬宝塔山古墳[注10]さらに福岡御所ヶ谷の水門[注11]の石垣面などにも認められる。また玄室南北腰石上縁の内側を切りこみ、段をつけるが、床面からの高さは両者異なる。この切り込みについての適当な解釈はもたない。本石室の計測値は第1表に示す。

遺　物

開口が古いため、遺物については全く手がかりはない。今次の調査において土器片若干を得たが、すべて玄室の堆積土中からの発見であり、副葬状況を知るものはほとんどない。

〔土師器〕

(1) 脚付壺形土器？一脚部の破片と思われるもの1片。胎土は密で黄褐色を呈し焼成は硬い。

(2) 壺形土器一肩部のみ遺存し口縁部と胴腹部以下を欠失するが、壺形土器と考える。胎土は密で、色調は淡褐色を呈する。表面には縦の刷け目、裏面は斜めの櫛目を認める。

(3) 高坏形土器一坏部と脚端部を欠損し、脚部のみ遺存。胎土は密で焼成は硬く紅色を呈する。この種の高坏は横穴古墳などに出土するものとよく似ており、下降した編年が考えられる。その他数片あるが、細片で特記すべきことはない。

〔須恵器〕

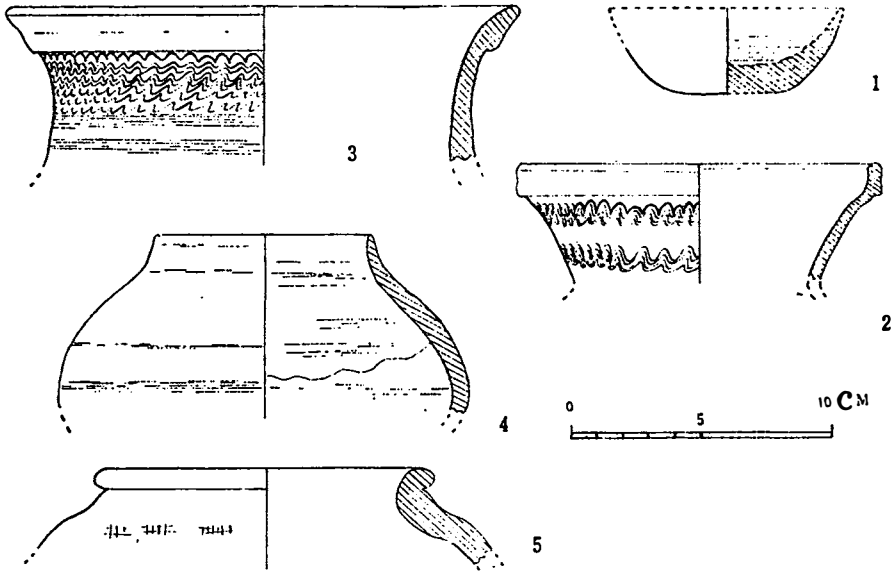
(1) 坏形土器（第5図の1）一器体の厚い平底で、表面には轆轤による水引きの跡がのこり、底部は切り放しのままである。全体としてかなり粗雑な仕上げである。胎土は密で焼成は硬くねずみ色を呈する。

(2) 甕形土器一かなり大形の甕の破片ほぼ3個体分と頸部破片2を得た。前者は胴腹部のみの破片で、器形の復元は困難であるが、各個の所見は次のごとくである。

イ、施文はないが蓆目状のたたき目の上に、横走のかき目を認め、内面には同心円状のたたき目を認める。胎土は密で焼成は非常に硬く、吹き出し釉を認める。ロ、格子目のたたき目に縦のかき目を認めるが、内面にはたたき目はない。ハ、条痕のたたき目で、内面にはたたき目はない。後二者は焼成は悪くやや瓦質に近く、編年上イよりやや降るものと考える。

頸部の破片は、櫛描き波状文をもつが、口縁の形状は不明である。焼成・胎土から前文3個の何れにも属さない。

(3) 壺形土器一イ）（第5図の4）口頸ひくくかつやや内傾した器形で、胴腹部以下からすぼまり、底部はあるいは台がつくとも考えられる。内面にはたたき目を持たず、肩部につなぎ



附3第5図　大野窟古墳須恵器瓦質実測図（1～4須恵器、5瓦器）

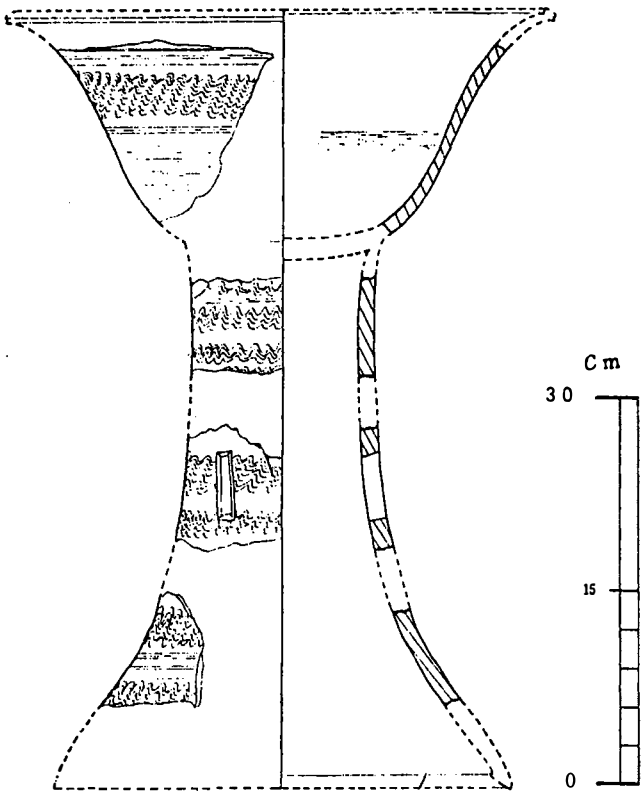
目を認める。なおこの土器は、第1号屍床に伴うものである。（ロ）　口縁と胴腹部以下を欠失する肩部である。あるいは壺であるとも考えられる。表面はうすいかき目で、内面にはつなぎ目を認める。胎土はよく焼成は良く灰青色を呈する。（ハ）　第5図2、3は口縁部であるがいずれも口頸部に櫛描き波状文をもつ。胎土は密で焼成は硬く2は灰色3はねずみ色を呈する。そのほか長頸・短頸壺の口頸と思われる破片が各1片と、底部に近い破片や胴腹部の破片が若干あるが、いずれも細片にすぎあきらかにし得ない。

(4)　高坏土器―坏部の砂片で、脚部が脱落した跡を認める。胎土は密で色調はねずみ色を呈する。

(5)　大形器台（第6図）―坏部1片と脚部3片のみ遺存する。坏部はその口縁と脚部に接着する部分を欠くが、坏はかなり深い。脚部片の観察によれば、短冊形の透しをもち、櫛描き波状文とうすい沈線をめぐらす脚部であることが判明する。遺存する破片だけでは復原形を得ることは困難であるが、かりに復原すれば図（第6図）のようにかなり深い坏部をもち、筒形の台脚（ほぼ中央部で直径16.4cmに復原される）が次第に広がり脚裾がわずかに反転する型式の器台に属すると考える。本墳より古い例ではあるが県内では長目塚古墳の前方部から同例が出土している（註15参照）

(6)　瓦器その他―壺形土器口縁部片（第5図5）と甕形土器の口縁部片や皿形土器の小片などがあるが、細片で特記すべきことはない。瓦器以外に糸切底の小皿の破片や近代の陶片若干がある。これらの遺物は本墳に伴うものではないが、後代の祭祀などに使用されたものもあろ

う。



附3第6図　大野窟古墳出土土器復元図

結　語

上記簡記した本墳の石室構造上の特徴は、玄室の床面が長方形で断面は梯形を呈し、石棚をもち家形石棺と障壁をめぐらす二屍床をおさめる、切石積みの複室の巨大な横穴式石室（長さ12.4m）である。さらに彩色による装飾（抽象文が多いと考えられる。）という要素を持っている。[註12] また墳丘は巨大な石室をおさめるにふさわしい二段式築成による円墳で、直径41mを測るという大きさである。

本墳の年代を示す遺物は少いが、得られた土器のうち、比較的に器形の判明する須恵器を考えると、壺形土器の口縁（第5図2・3）は、三期後半の年代を考えることが適当であろうと考える。なお熊本県内のこの時期の古墳に器台を伴うことを明らかにしたことは今後の須恵器研究上に資料を提供するものといえよう。第5図1の坏形土器は、器形・手法上から同4の壺形土器とともに四期に属し、上述土師器の高坏形土器とは平行関係にあるものとも考えられる。なお、この壺形土器は、第1号屍床に伴うものである点も注意される。須恵器編年上からの実年代は、その上限は6世紀後半、下限は6世紀末ないし7世紀初葉という年代の幅が考えられる。またこの年代は石室構造上の特色といちじるしく矛盾しないものと考える。王塚古墳[註13]（福岡県嘉穫郡桂川町）につづくベンケイが穴古墳[註14]（熊本県山鹿市熊入）あるいは上御倉・下御倉古墳[註15]（熊本県阿蘇郡一の宮町）などとほぼ平行の年代に比定されよう。従来本墳については、巨石墳なるが故に7世紀代に属するであろうという、漠然とした推定が筆者自身にもあったが、末期の所謂巨石古墳とは考えにくい上述以外の傍証がある。本墳の玄室の高さと羨道の高さを、後者1として、算出した計測値は3.11（第1表）で所謂巨石古墳の数値からはるかにはみ出す。第2表上段の数値は奈良県を中心にした巨石墳の諸例の数値[註16]であり、数値の変化は内部主体の家形石棺の形式的な変遷と矛盾しないといわれている。参考となろう。ついでに7世紀代に属する九州諸例の一、

附3第1表　大野窟古墳石室計測値数

	玄室	羨門(ロ)	前室	羨門(イ)	羨道	羨門	全長
奥行	5.23m	0.65	2.30	0.38	3.84	—	12.40m
幅	2.90	0.48	2.16	1.26	1.80	1.98	玄室高/羨道高
高	6.48	1.46	1.92	2.00	2.08	2.14	3.11

備考　1　羨門の(イ)は羨道と前室、(ロ)は前室と玄室との間の入口である。

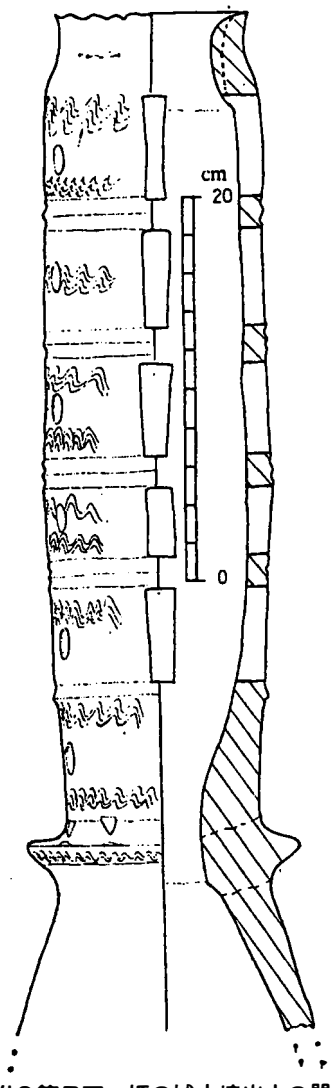
附3第2表　羨道高と玄室高との比較表

古墳名		所在地	羨道高	玄室高	玄室高/羨道高
第Ⅰ期	石舞台古墳	奈良県高市郡明日香村岡	2.61m	4.85m	1.96
	天王山古墳	〃　桜井市倉梯	2.61	4.64	1.80
第Ⅱ期	艸墓古墳	〃　桜井市安倍	1.54	2.58	1.67
	岩屋山古墳	〃　高市郡明日香村越	1.68	2.72	1.62
第Ⅲ期	文珠院西古墳	〃　桜井市安倍	1.7	2.16	1.25
	西宮古墳	〃　生駒郡平群村西宮	1.76	1.98	1.12
宮地獄古墳		福岡県宗像郡津屋崎町	2.85	2.85	1.00
江田穴観音古墳		熊本県玉名郡菊水町	1.42	2.10	1.47

備考　1　上段は坪井清足氏の資料（註16）による。
　　2　江田穴観音古墳については註17による。
　　3　宮地獄古墳については註17参照。

二の数値を示すと第2表下段のごとくである。[註17]

最後に、本墳の被葬者について少しく考えたい。もとより被葬者を考古学上から比定することは不可能であり、文献史学上からの考定も、現在われわれの知る史料の範囲からでは同様であると思われる。それにもかかわらず興味を覚えるのは、筆者のみではあるまいかと考える。次に筆者の仮説を提出する。手がかりを得る方法として、八代平野における古墳の分布を前方後円墳を指標として捉えると、1、八代群4基。2、竜北群4基。3、松橋群1基＋？の3群に大別され、その中で最も有力であるのは、2の竜北群の4基（姫の城・中の城・端の城・物見櫓）で、いずれも大野窟古墳の南約1.5kmに群在する。（第2図の9・10・11・14）4基とも考古学的調査を受けておらず、内部主体や遺物については不明の点が多いが、姫の城・中の城は全長100mに近く肥後における有力な前方後円墳の一つで今までに姫の城からは円筒埴論・器財埴論・大形の須恵器台[註18]（第7図）形象石製品[註19]、中の城からは円筒埴輪・人物埴輪（東京国立博物館蔵）などが発見され、さらに中の城の後円部裾から北約50mはなれた地点で、



附3第7図　姫の城古墳出土の器台

完形に近い蓋形石製品1個とその近くで別個体の支柱を発見した。[注20] これらの遺物中姫の城の形象製品と新発見の蓋形石製品は極めて重要な遺物であると考える。石質はともに肥後に多産の軟質の阿蘇熔岩で、前者は後円部の丘裾からの出土で、翳・靫・楯などの仮説[注21]のある石製品と蓋形石製品である。後者の新発見の蓋は姫の城のそれより大形かつ重厚である。なお筑後・肥後などに豊富な分布をもって著聞する石人は肥後南半では未発見である。上記の分布中、大量かついちじるしい変容を示した石人類を製作・樹立したのは、岩戸山古墳である。円体石人5、扁平石人10、裸体石人3、楯7、靫2、さしば1、その他の石製品40以上が、墳丘のみならず「別区」にまで置かれ、その墳丘は北九州第一の前方後円墳である。石製品の或るものは、埴輪との共通手法が認められるにしても、伝統にとらわれない強い独自性が各種石製品に認められることは諸家の指摘するところである。本墳は筑紫国造磐井の墳墓に比定[注22]されるが、彼は6世紀の前半継体天皇21年（572年）に火・豊二国に掩拠し叛を起し、翌年誅せられたが、生前に造った墓についての記載が、釈日本紀にとどめられた筑後風土紀の逸文にあることは周知のごとくである。この叛以来、筑紫君一族が肥後の国内に本貫をもつ肥君一族と婚姻関係を通じて再編成されたと推察される書記（欽明紀17年正月条）の記載[注23]がある。肥君はもともと八代平野の干拓によって成長したと考えられる在地族長で、朝延の権力と結びついた時期は、5世紀初頭から中葉にかけての時代[注24]であると考えられている。肥君の本貫地については、火国を和名抄にいう肥伊郷に比定する八木田政名の説[注25]を嚆矢として、肥伊郷即ち現在の八代郡宮原町氷川域を、多くの文献史家は想定[注26]し、同地域内に立地する本前方後円墳群を肥君の墳墓に擬定する説[注27]もある。考古学的には未調査で、個々の編年もあきらかでなく、資料上の制約はあるけれども、今日まで知り得た上述の遺物を通観すると、石製品のごとき特異性を指摘することができると思われる。

前記の形象石製品は、熊本県はむろん九州においてもたしかに異色の遺物であるが、もっと

も類似する石製品は、岩戸山古墳の石製品である。姫の城出土のいくつかの仮説のある石製品３例は、岩戸山の扁平石人と同じく板彫式に属し、表現上にも強い類縁性を認め得る。蓋形石製品は岩戸山にはなく、全国的にも数少い遺物で、計３基の出土は注意される。新発見の同品は、笠状の石と棒状の支柱からなり、笠石は１個の大石をくりぬいて、笠状に形成（頂部は丸くなく突起状となる）したものであるが、径90cm、高さ48cmという巨大なものである。その裏面は平滑であるが突起部の直下に支柱を受けるための枘穴（径26.5cm深さ10.5cm）がある。支柱は1.89mに及ぶ巨大な石柱で、断面はほぼ長方形を呈し、笠石に嵌入する部分には浅いくりこみがある。しかして支柱は笠石に嵌入する。笠石・支柱ともに彩色・線刻などの加飾を認めない。材質が石であるという制約上、埴輪蓋にみられるような笠の頂部や四方に装飾を加えることはないが、その反面には埴輪蓋においては作成困難な笠をささえる長い支柱をもつ。また奈良県日葉酢姫陵出土の埴輪蓋のように、本例も実物大あるいはそれ以上と推定される大きさをもつ。『日本書紀』（欽明天皇13年条）『和名抄』『万葉集』『古語拾遺』などに見られる蓋は、貴人の威儀の調度品であり、それを仮器として土または石に造形したものが上記の遺物であるが、生前の権力の強大さをうかがうに足る遺物である。

つぎに、南方八代群と北方松橋群の前方後円墳をながめよう。両群とも考古学的調査を受けておらず、多くは盗掘・破壊墳であるので、内部主体や遺物についてあきらかにすることはできない。八代群には１、大塚古墳（八代市片方）２、高取上の山古墳[注28]（八代市上片）３、岡塚第２号墳（別名岡の坊古墳八代郡竜峯村）４、車塚古墳[注29]（八代郡竜峯村）の４基がある。１は未発掘墳であるが、前方部に二段後円部に三段の構築を認めるがすべてが当初の築成によるものであるか明らかでない。全長58.28mを測る。土師器や須恵器・ 円筒埴輪などが採集されている。２は後円部には割石積の一部を遺存するが変形・破壊が甚しい。前方部に熊野神社を祀る。全長59.09m、土師器・須恵器が採集されている。３は開墾のために変形甚しく後円部の主体部を欠ぐ。主軸長約40m前方部巾20m、伴出遺物は不明であるが「中期の様式をうけついだ古墳であろう[注30]」と考えられている。４は現在は採草地となり変形甚しく墳頂も変改が激しい。３の岡塚古墳と一連をなすものと考えられている。以上４基の前方後円墳の立地上の特色は、球磨川の北岸のしかも沖積平野に他の円墳とともに竝列集中することで、東方竜峯山地の傾斜面にある円墳群と対象的である。松橋群の１基は夫婦塚とよばれ、雁回山（木原山314m）南麓の低い台地上にある前方後円墳で「長径約50m、高さ９m[注31]」であったが、封土（盛土）の大部分が採土のために破壊され、内部主体や遺物などについて明らかにし得ないが、墳形の観察から後期に属すると考える。その他、同地区には１～２基の小型の前方後円墳があるといわれているが、確認されていない。

以上八代平野における、３群の前方後円墳を概観したが、火君という国造の版図内に包含されると考えられる、竜北群の古墳文化が他群のそれに比べかなりの特異性と優位性を示すこと

は承認されるであろう。かかる時、その背後に国造のごとく地方政治上の支配者の存在を考えることも亦自然であろう。[註32] その基準に、長軸100mに近い2基の前方後円墳を含む4基の前方後円墳と、主として形象石製品などの遺物を考えた。しかして、姫の城のごとく、一墳に比較的多量の特色ある石製品を副葬し得た背景は、はたして火君独自の所産であろうか。国造としての権力を考慮にいれても、上文に見たごとく筑紫君文化圏の影響は見のがせないと考える。また文献上の、書紀欽明記17年正月条の記事や5～6世紀における筑紫・火両国造の勢力を考慮にいれると、両者には数次の接触があったものと想像される。17年正月条の記事もその間の一例と見たい。さらに姫の城の今のところ唯一の土器である、大形の器台は、岩戸山にも同類[註33]がある。ともに円筒状の器形であるが、岩戸山よりも退化した型式で、上っても三期前半よりも下らぬ器形と考えられる。[註34] 以上主として姫の城関係の遺物を中心に考察したが、比較的近距離に立地する3墳も、相互に無関係ではなかろうと考える。新しく発見された蓋形の石製品の所属墳については現段階では決定し得ないので後日を期したい。

ひるがえって、本前方後円墳群の北方約1.5kmに立地する大野窟古墳を見よう。既述のごとき巨大な石室と封土を構築するためには、背後山地からの石材の切出しや運搬・構築に多大の人力の消費があったことは勿論であるが、こうした第一級の古墳を構築し得た被葬者は、やはり前述のごとき政治権力を背景にし得た者であろうという推論は、中通古墳群（熊本県阿蘇郡一の宮町）や上御倉・下御倉古墳（熊本県阿蘇郡一の宮町）などが、周辺の古墳群との対比において、阿蘇国造の墳墓に比定[註35]されるごとく、必ずしも飛躍的な考察ではないと思う。

註1　花岡興輝「大野窟関係文献」私刊。大野村碌之石刻（明応5年）・大野古城をおさめる。

註2　福原岱郎「肥後雑見」考古学会雑誌第2編9号　明治32年　東京。
高橋健自『古墳と上代文化』大正13年東京。『熊本の歴史』第1巻　昭和33年熊本。

註3　浜田耕作『大和島庄石舞台古墳の巨石古墳』京都大学研究報告第14冊　昭和12年　京都。

註4　周辺地域では円墳の大なるものには、茶臼山古墳（八代市上片町）がある。二段築式で直径50.91m。盗掘墳らしく主体については不明。江上敏勝氏によれば須恵器・土師器が採集されている。（同氏のプリント昭37．38年による）

註5　註4のほか、巨石墳の二段築成は註3書の日本古墳巨大石室聚成表にある。九州分は豊前綾塚古墳がある。

註6　隣接の小川町役場の資料（1/5000）であるが、考古学上の目的をもって撮影されたものではない。又同写真によれば大野窟古墳は0.8cm（東西・南北径）の径が測られ、測量値と符合する。

註7　渡辺正気『佐賀市関行丸古墳』　佐賀県文化財調査報告書所収　昭和33年　佐賀。

註8　『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第4冊所収　昭和2年　熊本。

註9　梅原末治『近畿地方古墳墓の調査』所収　昭和10年　奈良。

註10　水野清一・小林行雄『考古学辞典』横穴式石室の項　昭和34年　東京。

註11　『北九州古文化図鑑』第2輯　九州考古学会　昭和26年　福岡。

註12　樋口隆康「九州古墳墓の性格」史林　第38巻第3号　昭和30年　京都。
本村豪章「装飾古墳とその背景」広島史学会　第86号　広島。

註13　梅原末治・小林行雄『筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳』京都大学研究報告第15冊　昭和15年　京都。

註14　原口長之「装飾古墳弁慶が穴調査報告」熊本史学　第11号　昭和32年　熊本。

註15　坂本経堯・乙益重隆『阿蘇長目塚・阿蘇谷の古墳群』熊本県文化財調査報告第3集　昭和37年　熊本。

註16　坪井清足「墓制の変貌」『世界考古学大系』　4　昭和36年　東京。

註17　宮地嶽古墳の計測値については鏡山猛教授の次の如き教示を得た。羨門部から数mは土砂が流れこみ、床面は不詳であるが、現高は2.5〜2.8m。床面の確実な所で2.85mを測る。また玄室と羨道の区別が判然しない石室であるが、玄室高は2.85mである。森貞次郎「北九州古墳の編年的研究」西日本史学第1号　昭和24年、福岡。なお宮地嶽古墳の実測図は鏡山教授によるものが註3書に収められている。
梅原末治「玉名郡江田村中小路穴観音古墳調査報告」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1冊所収　大正11年　熊本。

註18　昭和33年花岡興輝氏から通報をうけ調査した。本誌次号に実測図を発表する予定である。

註19　乙益重隆「熊本県姫の城古墳発見の石製遺物」九州考古学　第3・4号　昭和33年　福岡。

註20　昭和37年11月八代郡竜北町にて伊藤奎二・高島忠平・北川繁秋・三島らによって発見。近く紹介の予定。熊本大学保管。

註21　註19書

註22　森貞次郎「筑後風土記逸文に見える筑紫君磐井の墳墓」考古学雑誌　第41巻　第3号　昭和31年　東京。鏡山猛『北九州の古代遺跡』昭和31年　東京。本村豪章「古墳文化からみた北部九州社会」考古学研究　第7巻　第1号　岡山。

註23　17年春正月、百済の王子恵罷らむと請ふ。仍りて兵杖、良馬を賜ふ甚多なり。亦頻り賞禄す。衆の欽み嘆むる所なり。是に阿倍臣、佐伯連、播磨直を遣して、筑紫国の舟師を率ゐて、衛り送りて国に達らしむ。別に筑紫の火君を遣して、（百済本紀に云く、筑紫君の児、火中君の弟。）勇士一千を率ゐて、弥氏（弥氏は津の名なり）に衛り送らし

む。（岩波文庫黒板勝美）上文に論及したものに門脇禎二「八・九世紀における奴隷制の諸条件」日本史研究　47号　昭和35年　東京。

上田正昭『日本古代国家成立史の研究』

井上辰雄「大化前代の肥後」熊本大学法文論叢　14号　昭和37年　熊本。

註24　註23井上書

註25　八木田政名『新撰事蹟通考』1841。

註26　吉田東伍『大日本地名辞書』

斉藤忠「国造に関する考古学上よりの一試論」『古墳とその時代』2　所収　昭和33年　東京。

圭室諦成『熊本の歴史』昭和29年　熊本。

松本雅明、乙益重隆、山口修編集『熊本の歴史』1　昭和33年　熊本　所収。その他註23井上書註27志方書など。火国肥伊郷説の反対説は勿論ある。例えば井沢長秀『肥後地誌略』（1699）成瀬久敬『新編肥後国誌草稿』（1718年）本居宣長『古事記伝』（1798年）などで、火国不知火説の立場である。そのほか、火の国阿蘇火山説もある。

註27　志方正和「西南辺境よりみた律令国家」芸林　第14巻第1号　昭和38年　東京。

註28　1・2は註4江上氏プリントによる。

註29　3・4は『竜峯村史』（乙益分担執筆）昭和36年　熊本。

註30　註29書。

註31　「松橋町所在文化財候補地説明」松橋町教育委員会　昭和36年　松橋。

註32　註26斉藤書

註33　註12樋口書及同氏「須恵器」『世界陶器全集』1　昭和33年　東京。

註34　小田富士雄氏の教示を得た。

註35　註15書

附記　1　調査日数の制限上封土築成及排水溝などの調査は後日にゆずった。

2　地形・石室の実測図は隈・平岡・杉村・古田・高島・伊藤・北川・倉田の諸氏によるものである。銘記して感謝の意とする。

〈編者註1〉　文中の市町村名は旧市町村名のままにしておいた。昭和54年現在において、竜北村は竜北町に竜峰村は八代市岡町、興善寺町、川田町になっている。

註2　附3第7図は元の原稿では器台の写真であったが、今回は実測図を入れた。

註3　本論（附論3）は「九州考古学　第19号　1963　九州考古学会」に掲載された「熊本県八代郡大野窟古墳」を三島格氏の御好意により、今回本書に掲載させていただきました。

附論4

付城横穴群

山鹿市城小原

調査・執筆者　隈　　昭志

付城横穴群

(山鹿市城小原)

Ⅰ．位置と立地

岩野川がその本流菊池川と合流する地点の西側には、海抜65.8mを最高とする洪積台地が南北に連なっている。合流点から北方約300mに鍋田横穴群（国指定史跡）、さらに北約2.3kmに付城横穴群（県指定史跡）、さらに北約1.7kmに城横穴群（県指定史跡・26穴）が、それぞれ台地の東側に面して存在する。また、付城横穴群の西南約500mには装飾古墳のチブサン古墳（国指定史跡）、北約300mには馬塚古墳（県指定史跡）がある。

付城横穴群はその数も装飾の性格なども明確にされていなかったが、昭和42年度の調査でかなり把握することができた。まず、数は北側の下段から1号とし、一段目に36、二段目に17、三段目には12、三段目のやや南の下に3穴の計69穴が、約200mの間に一群をなし、さらに南方約200mの距離に湾入する谷を隔てて6穴が存在し、合計75穴が確認されている。

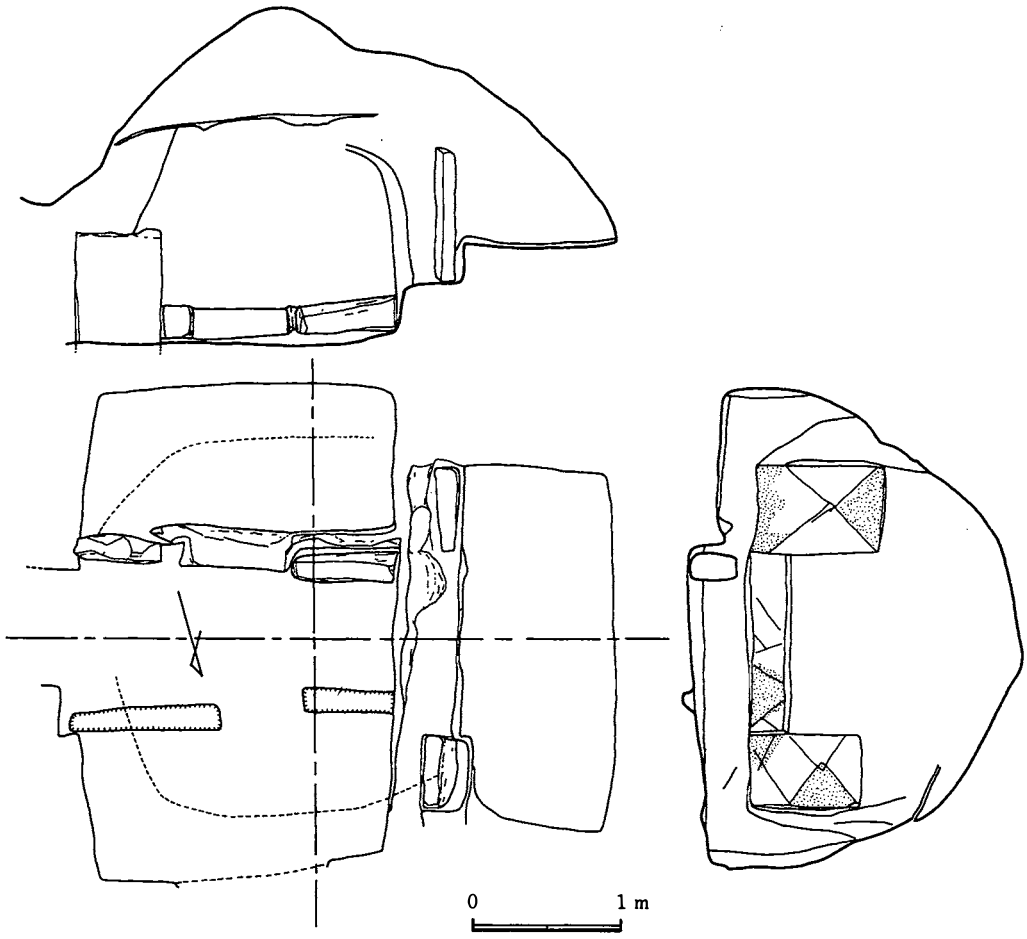
この横穴群は正式に発掘調査や実測などが行われたことはなく、ほとんど放置された状態であった。したがって、凝灰岩が脆弱なこともあって、確認されないままに崩壊した横穴があるであろうと想像する。また、第二次大戦中の防空壕への転用や物置きなどに使用された跡もあちこちに認められるし、聞くところによると、第二次大戦中の頃までは横穴の入口に相当な数の蓋石が転がっていたといわれるが、その後運び出されて、現在ではそのほとんどがなくなっている。

Ⅱ．横穴群の特色

付城横穴群の装飾については『装飾古墳』（平凡社・昭和39年）の地名表にあるが、現在までのところ一段目の21号、28号、32号に装飾文があることを確認した。また、横穴内に朱を認めるのが8号と35号で、ほかに複室になっているのが31号である。なお、埋没している横穴も多く、横穴内部を実見できないので、今後正式の調査を実施すれば装飾をもつものや複室をもつものなどが発見される可能性がある。

次におもな横穴について略述する。

21号―防空壕として使用されていたため入口は拡大され、横穴内の床面も相当に破壊されている。墓室の全長約3.1m、幅2.7m、高さ約1.96mで、プランは方形を呈し、天井部は寄棟の妻入りになっており屋根の軒を表わす溝が墓室をめぐっている。装飾は奥壁のほぼ中央部（奥壁の床面より約50cmの高さ）のところに、白粘土をもって塗りつけている。具象的文様でおそらく楯ではあるまいか。なお、奥壁には点々と朱痕を認めるので、奥壁一面に朱を塗ったあと

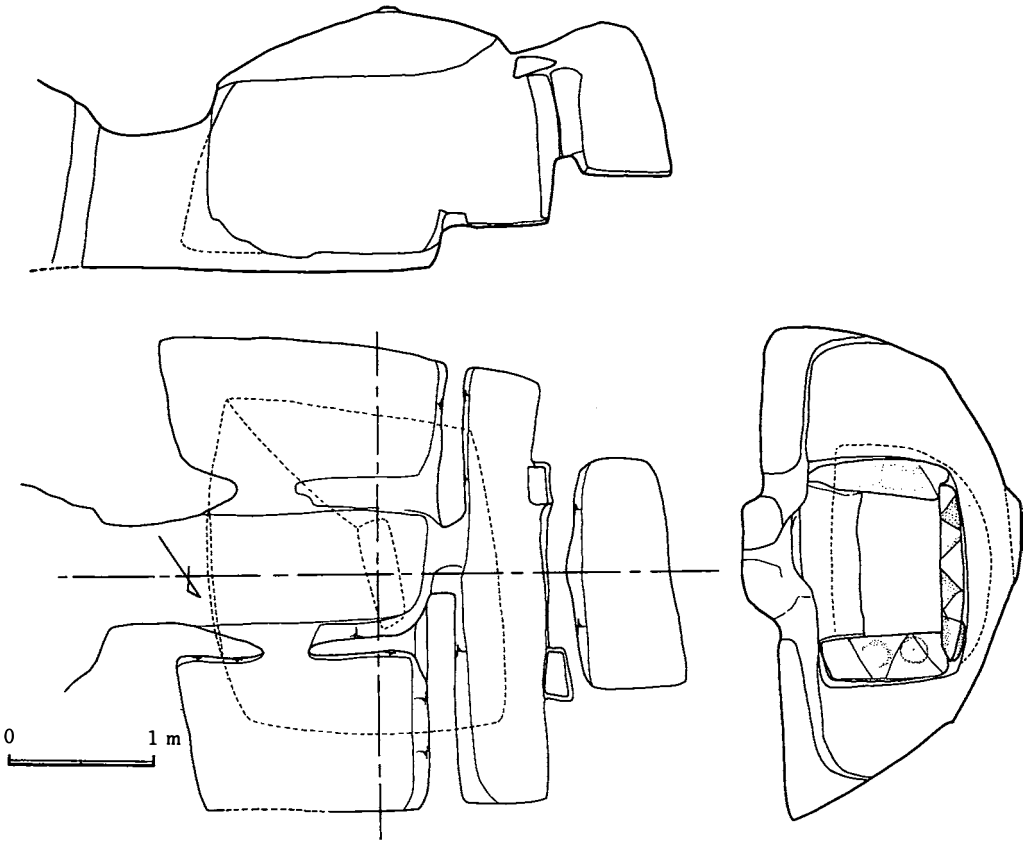


附4第1図　付城横穴第28号

白粘土で描いたものであろう。そのほか奥壁面に線刻様の線があるようにも観察されるが明瞭ではない。

28号—プランはいわゆるコの字状屍床を呈するが、このうち、奥屍床の部分は一段高く設けられ石屋形状になっている。全長約3.5m、幅約3.3mで、石屋形の幅は狭く、約2.35mである。天井はドーム形で、床面から最も高いところで約2.35mを計り、墓室の左右の壁面上端に軒を表わす溝が認められる。石屋形の前面には二枚の凝灰岩の板石を左右にはめこんで立て、その前面には線刻と朱による鋸歯文が描かれている。そのほか、右袖石の南面と石屋形の屍床前面にも同様の線刻による鋸歯文がある。また墓室の左右の屍床の一部には凝灰岩のはめこみが認められる。

32号—付城横穴群の中で最も特異な形状を呈し、コの字状屍床とさらに作りつけの石屋形を備えている。墓室の全長約3.4m、幅3.8mで、入口寄りの幅がやや広くなっている。石屋形は幅約1.6mで狭く、床面より約56cm高く作られている。とくに、石屋形の前面には三枚の凝灰



附4第2図　付城横穴　第32号

岩の板石をアーチ状に組んで設け、線刻による鋸歯文と朱で描かれた同心円文が認められる。おそらく、ここの凝灰岩の質が軟弱であるため、わざわざ良質の凝灰岩の板石を持ちこんで、それに文様を描いたものと思われる。天井は寄棟で、入口は平入りになっており、やはり軒を表わす溝が壁面上部をめぐっている。床面から天井の最高部までの高さは約1.8mである。

以上の三例はいずれも墓室内の装飾であり、この山鹿・鹿本地方の鍋田、長岩、城横穴群などにみられるような墓室外の装飾は現在のところ不明である。

そのほか、複室墓として確認した31号については規模の点において他の横穴と大差ないが、この墓室は後世隣接する32号の壁を破壊し、両横穴間の出入が出来るため、蓋を閉鎖したままの状態になっていて、その状態が墓室内からよく観察できる点で珍らしいといえる。また奥室は未完成になっており、その形態はよく分らないが、おそらく石屋形様のものを作る予定であったものが途中で中止したものではなかったかと推測する。このような造りかけの横穴は城横穴群、長岩横穴群、桜の上横穴群（鹿本郡鹿央町）に例がある。

付城横穴群は装飾文及び墓室の特殊なことから、昭和49年3月23日熊本県指定史跡となった。

Ⅲ．出土遺物

明治44年に横穴群のすぐ南側に県道が建設されたときに、多量の須恵器類が出土したので、旧制鹿本中学（現熊本県立鹿本高等学校）および熊本市立博物館に保管されていたが、鹿本中学の遺物は昭和24年、同校の火災のため大半が不明となった。第二次大戦中の防空壕への転用の際やその後において採取した遺物は、県立山鹿高等学校（現鹿本高等学校）と山鹿市立山鹿中学校に保管されている。その多くは須恵器で、ほかに少数の土師片と金環１個がある。ことに、昭和40年に採石のためにブルドーザが入ったとき前庭部周辺から多量の須恵器が発見され、山鹿市立八幡小学校や平小城小学校の生徒が採集し、一部は山鹿高等学校に保管されたが、中には完形品もかなりあった。大体の時期は須恵のⅢ期が主体である。ただ、残念なことに横穴内から検出したものが少ないため、横穴の形式と須恵の時期の的確な判断ができない。

付城横穴群は昭和49年３月23日、県指定史跡となった。

附論5

寺山宮の東横穴群

玉名郡菊水町

調査・執筆者　高　木　正　文

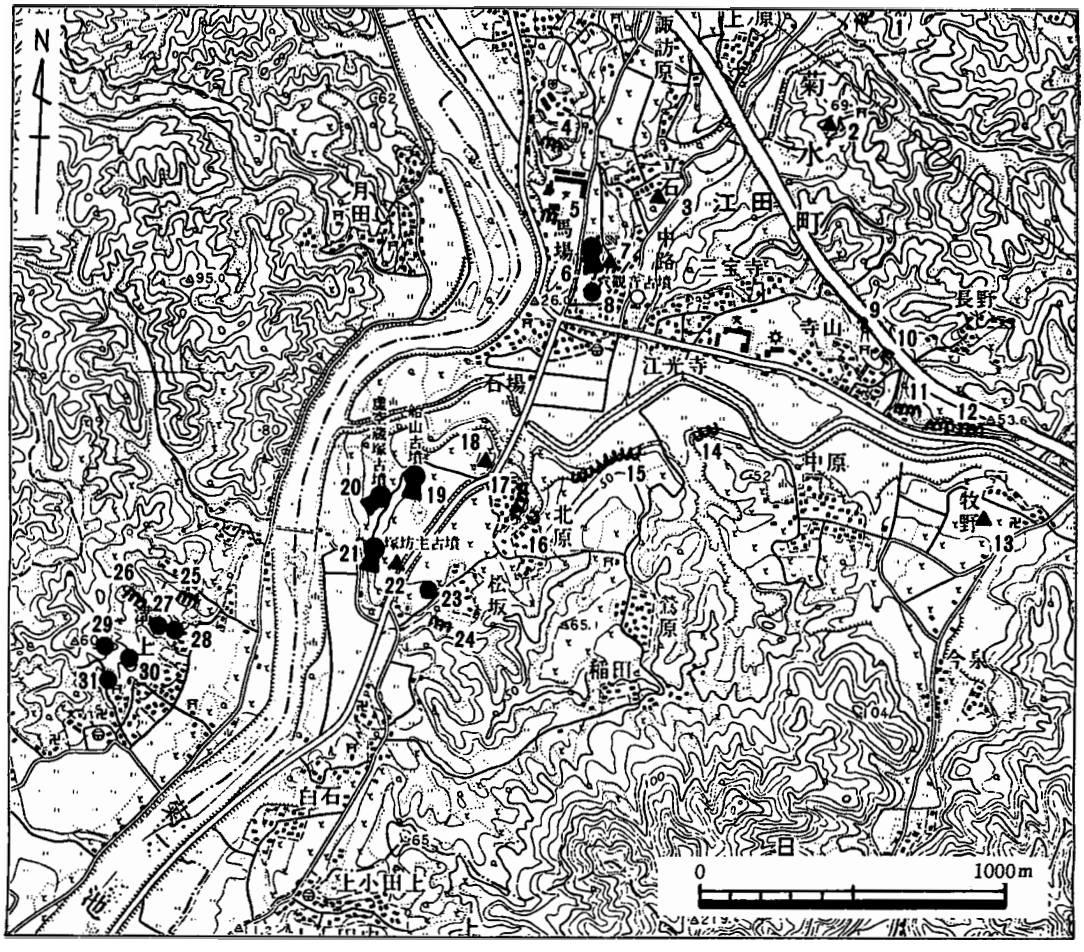
寺山宮の東穴群

（玉名郡菊水町江田寺山）

Ⅰ．位置と立地

菊池川支流江田川の両岸は、小山々および河岸段丘に狭まれた小規模の水田がみられ、それを縁どるようにところどころに高さ５～30mの阿蘇凝灰岩の崖がみられる。この崖面には多くの横穴が造られ、また後には石切場となり、壊された横穴も多い。

江田川右岸には妙見横穴、寺山宮の東横穴群、寺山小原坂横穴群、牧野横穴群と約700ｍの



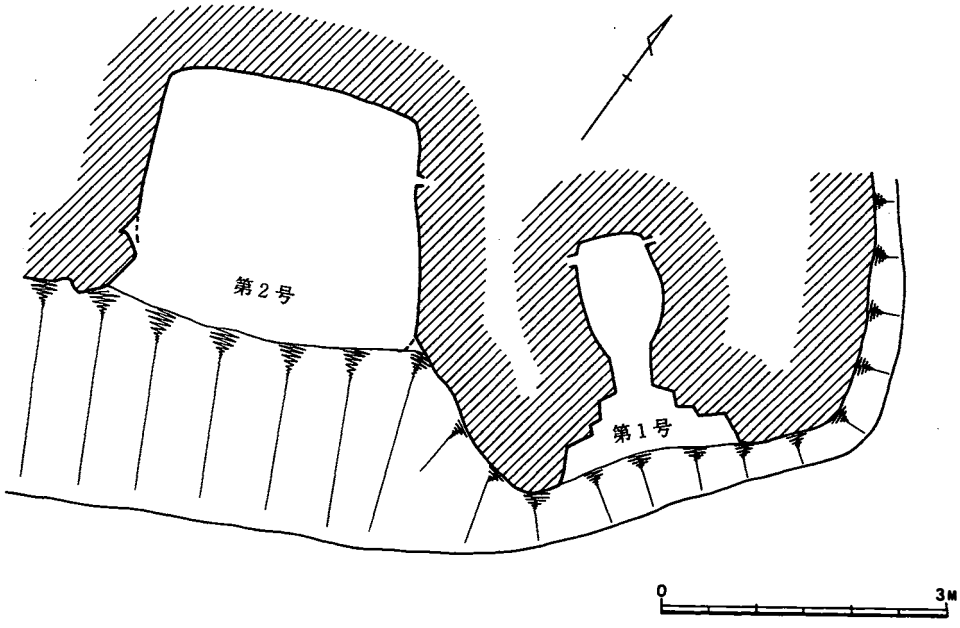
附５第１図　寺山宮の東横穴群位置図

１．浦谷とんご山横穴群　２．土喰石棺群　３．天神免石棺　４．狸が浦横穴群　５．いご浦横穴群　６．若宮古墳　７．若宮石棺　８．江田穴観音古墳　９．妙見横穴　10．寺山宮の東横穴群　11．寺山小原坂横穴群　12．牧野横穴群　13．中原北池ノ本石棺　14．中原帽子下横穴群　15．鶯原入口横穴群　16．長力横穴　17．北原横穴群　18．大久保石棺　19．船山古墳　20．虚空蔵塚古墳　21．塚坊主古墳　22．清水原古墳　23．姫塚古墳　24．松坂横穴群　25．水尻横穴群　26．城迫門横穴群　27．真福寺西古墳　28．真福寺東古墳　29．赤禿古墳　30．前田古墳　31．宮の後古墳

間に4群があり、中でも牧野横穴群は石切りで破壊される前は50基以上あったと推定される。また対面する江田川左岸にも、中原帽子下横穴群、鴬原入口横穴群、長力横穴、北原横穴群があり、長力横穴第1号は羨門の外側に円文や鋸歯文などの幾何学文様が、北原横穴第3号の内壁には線刻の絵が描かれている。また寺山宮の東横穴群から西方1kmのところには若宮古墳（前方後円墳）、江田穴観音古墳（円墳）があり、南西1.5kmのところには船山古墳（前方後円墳）、虚空蔵塚古墳（前方後円墳？）、塚坊主古墳（前方後円墳）などがあり、山鹿と玉名の中間地域における古墳の集中した地点である。

Ⅱ．横穴群の調査と概要

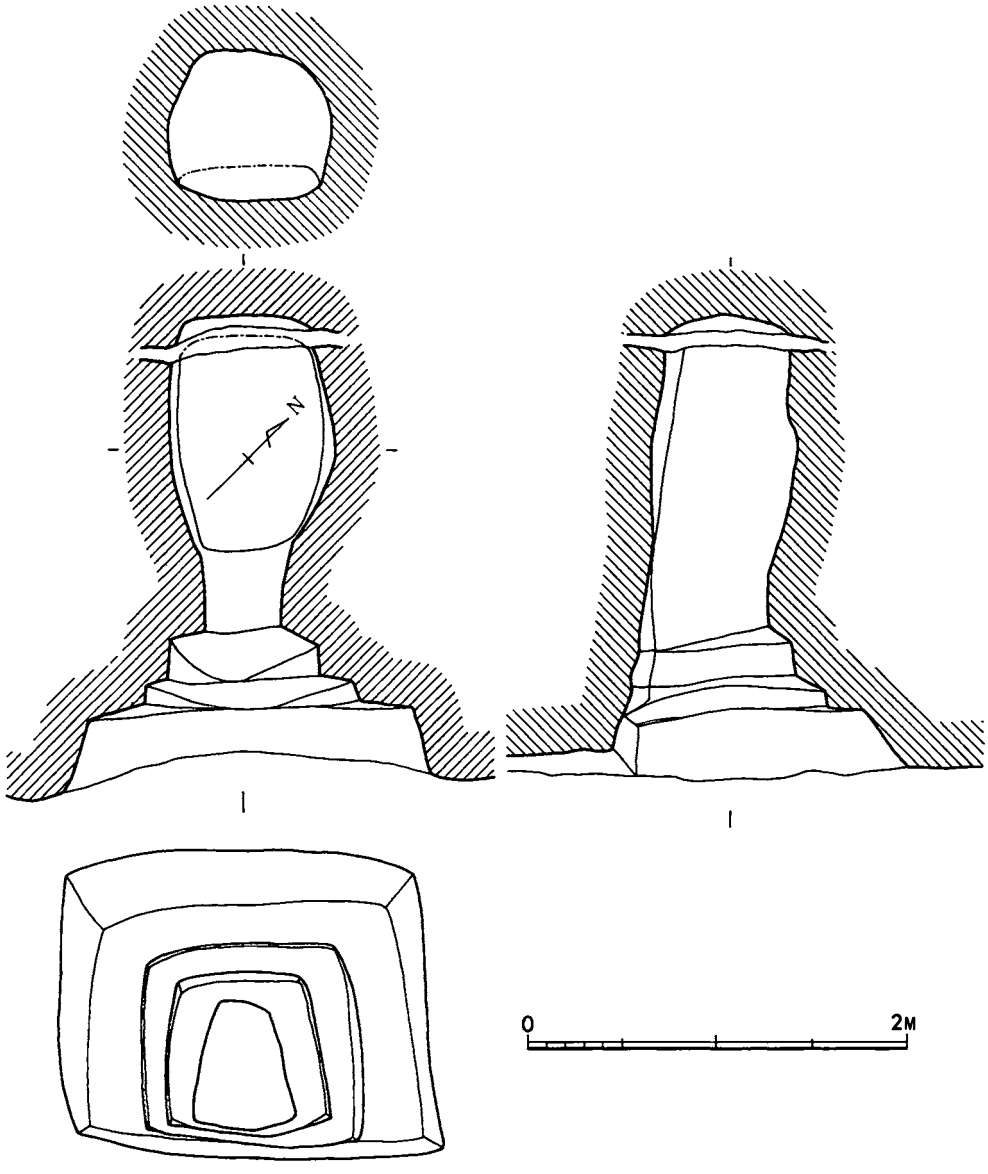
寺山宮の東横穴群は寺山の集落の北方、標高約50mの宮山の東側崖面にあり、昭和初期に数基（おそらく5、6基）あることが確認されたが、その後亀裂が生じ、集中豪雨の際に転落したため、北端の2基だけ残っていた。これを北側から第1号、第2号と呼ぶことにした。しかしこの2基にも亀裂が生じ、倒壊の危険にさらされていたため、第2号については昭和43年頃個人的に実測を行ったが、第1号は未実測のままであった。その後、ここを九州縦貫自動車道が通ることになり、昭和44年7月に第1号についても実測調査を行ったものである。なお、破壊されるかと思われた2基の横穴は、景観は一変したものの、かろうじて道路の法面のところに顔を出している。また前面を埋められたので倒壊の危険はなくなった。



附5第2図　寺山宮の東横穴群配置図

Ⅲ. 各横穴と特徴

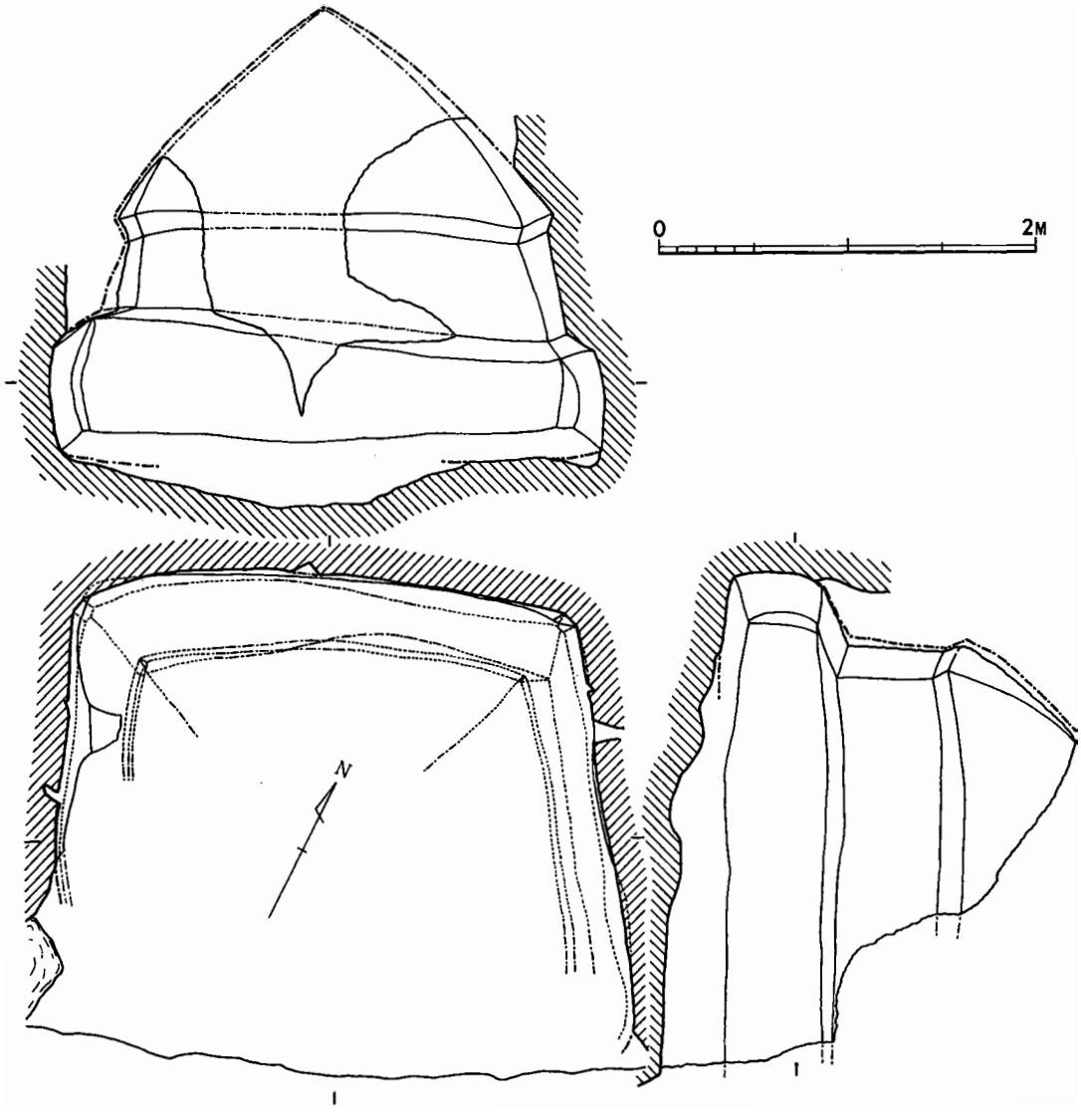
第1号—南東に開口し、床面は垂直な崖の下から約3mの高さにある。羨門の外側に四角な飾り縁が三重にあり、最も外側の表飾は幅2.0m、高さ1.6mを計る雄大なもので、造りも丁寧である。羨門部は最大幅0.54m、高さ0.64m、長さ0.42mを計る。墓室は極めて粗い造りで、壁面全体に奥に向かったノミの痕が残っている。外観とは不釣合である。墓室の大きさも最大



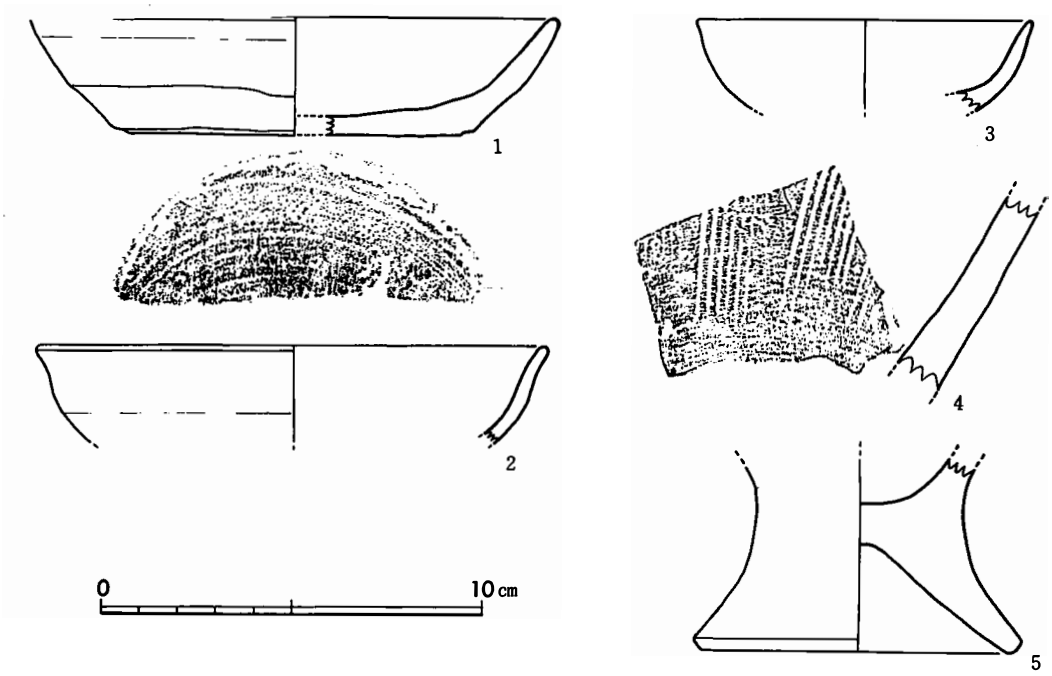
附5第3図　寺山宮の東横穴実測図（第1号）

幅0.85m、奥行1.20m、高さ0.76mと狭い。このように墓室内は狭く粗いものの一応埋葬は可能な大きさであるので造りかけではないとみられる。但し成人の遺体を伸展葬で安置することは不可能である。奥壁近くには亀裂が横切っている。床面には土がいくぶんみられたが、攪乱されており、調査の時に土師質の皿の破片が3個体分発見された。いずれも後世持ち込まれたものとみられる。

第5図(1)は口径14.0cm、高さ3.1cmを計り、体部下方を箆けずりされた糸切底の皿である。(2)は口径約13.5cmを計り、口縁部はいくぶん外反している。他の1個は口縁部が尖りぎみに薄くなった皿の小破片である。



附5第4図　寺山宮の東横穴実測図（第2号）



附５第５図　寺山宮の東横穴採集遺物（１，２　第１号内・３，４，５　第２号内）

第２号―第１号と並列しているが、主軸を南南東にとり、床面は第１号より１ｍ程低い位置にある。羨門部と天井の大部分は壊れている。床面も後世に荒らされ、穴が掘られたり、火が燃やされたりした跡があり、住まいにも利用されたようである。墓室のプランは方形で、残存部から復元すると幅3.0ｍ、奥行約2.7ｍ、高さ2.4ｍあったとみられる。屍床は３区あったと推定され、奥の屍床は幅0.7ｍ、長さ2.5ｍ、左右の屍床は幅約１ｍ、長さ約1.6ｍ程であったろう。壁面は丁寧に仕上げられている。墓室は床から立ち上がり、0.5ｍのところに軒が造られ、さらに0.5ｍ立ち上がったところにも軒を造り、天井は寄せ棟となった、二階建ての家を模した形である。床面の埋土を除去した際、３片の遺物が発見されたが、いずれも横穴の時期のものではない。

第５図(3)は土師質の皿の破片で、体部は丸みをもち、口縁部はわずかに外反し、口径は約8.8cmを計る。(4)は瓦質すり鉢の破片で、内面はいくぶん摩耗している。(5)は甕の脚部で、弥生時代後期のものであり、上方の宮山に弥生時代遺跡があるものとみられる。

寺山宮の東横穴群は２基しか残存していないものの、１基は外側が丁寧な造りであるにもかかわらず、墓室は粗雑な造りであり、他の１基は墓室が大きな二階建の家形をしているという特異なものである。また並列して存在しながら形態・規模が全く異なるのはなぜであろうか。周辺の横穴群と合わせて進めなければならない研究課題である。

附論6
梅木谷横穴群

鹿本郡鹿央町

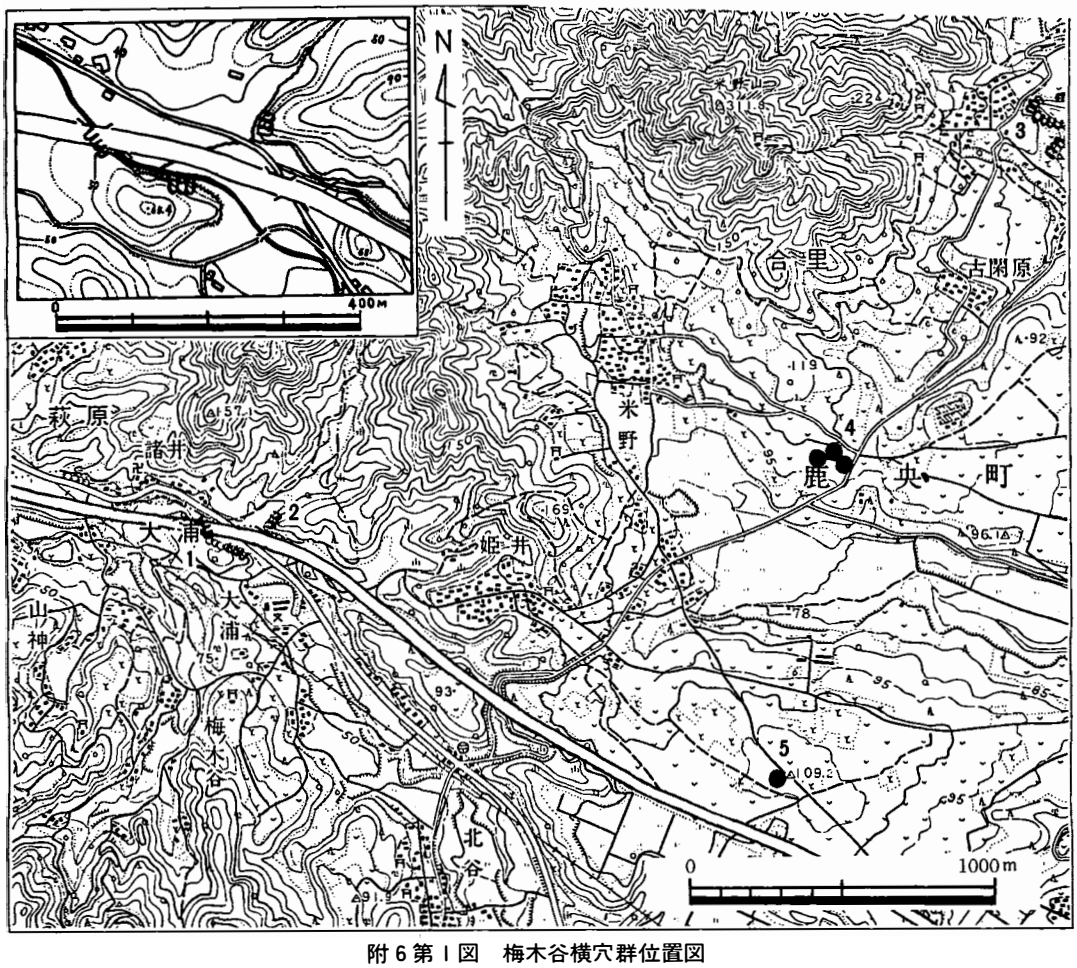
調査・執筆者　隈　　昭　志
高　木　正　文

梅木谷横穴群

（鹿本郡鹿央町梅木谷）

Ⅰ．位置と立地

菊池川の支流の江田川上流には河岸段丘が発達し、部分的に阿蘇凝灰岩の崖面が露出している。ここに梅木谷横穴群と諸井横穴群が川を挟んで100m離れて対峙している。この付近では横穴はここだけしか発見されておらず、最も近いものでも西方（江田川下流）3km にある牧野横穴群と北東に同じく3km離れた米野横穴群である。また周辺の古墳としては2km 程離れた駄ノ原台地上に駄ノ原長者古墳など3基、広台地上に堤古墳群（円墳3基）など6基の古墳がある。



附6第Ⅰ図　梅木谷横穴群位置図

1．梅木谷横穴群　2．諸井横穴群　3．米野横穴群

4．堤古墳群　5．駄ノ原長者古墳

Ⅱ．横穴群の調査と概要

この横穴群は全国遺跡地図〔熊本県〕（文化財保護委員会発行、昭和41年）では「山内横穴」として記録されているが、その後「梅木谷横穴群」と呼ぶことにした。昭和40年秋に熊本県立山鹿高等学校考古学部で山鹿周辺の横穴の基数と形態の調査をしたが、その時筆者らはこの横穴群についても調査した。しかし実測は行わなかった。その後、九州縦貫自動車道の建設計画が発表され、ルート内に横穴群が入ることがわかり、昭和45年に熊本県立鹿本高等学校と同鹿本商工高等学校の考古学部の援助を受けて杉村彰一氏と隈昭志が実測調査を行った（第１～６号)。また九州縦貫自動車道建設着工後、未調査の横穴がもう１基（第７号）あるのを発見したので、高木正文が急遽実測調査を行った。

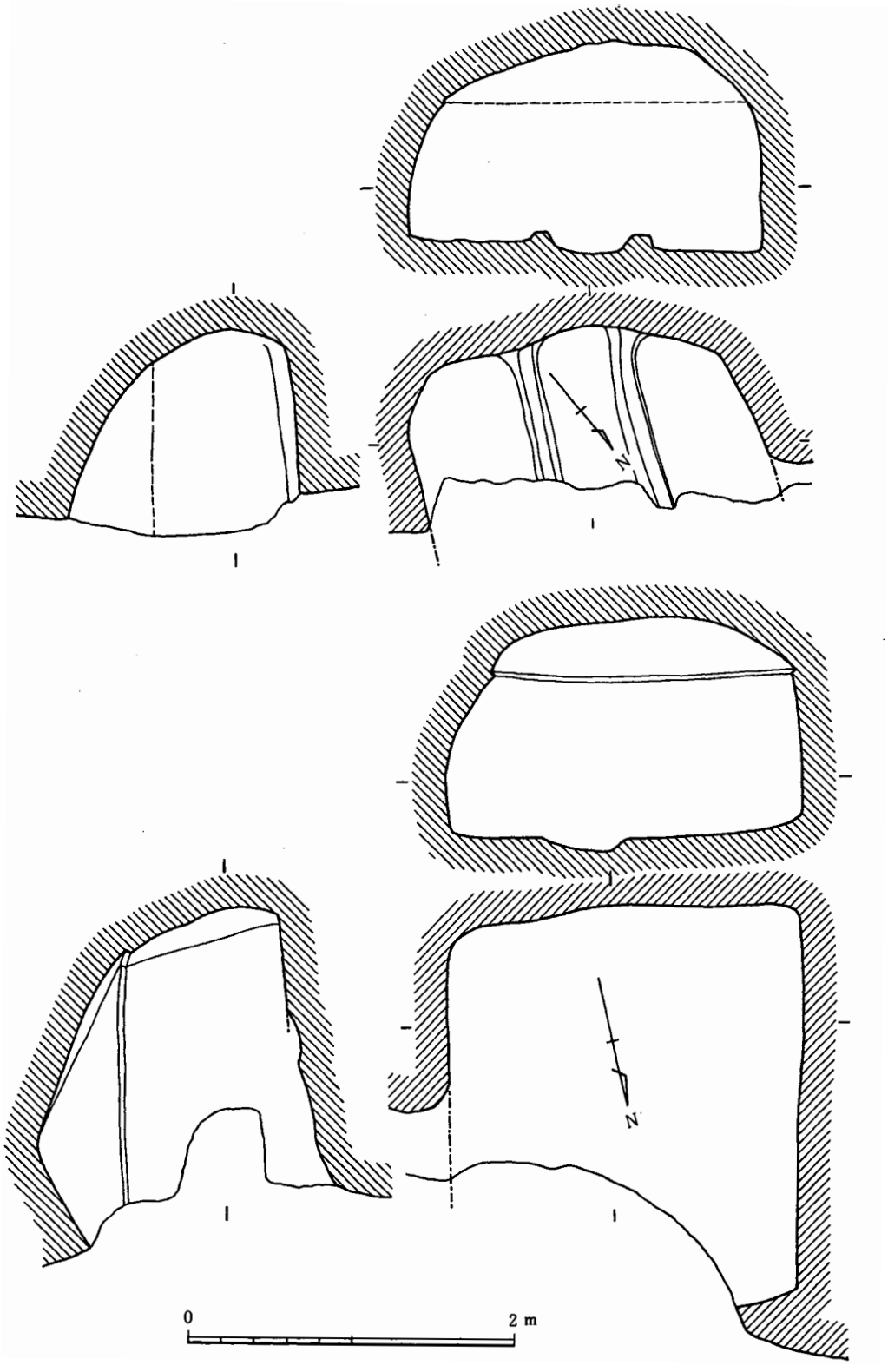
梅木谷横穴群は独立した小丘陵（通称至誠園、標高65.4m）の北側崖面200mの範囲にある。残っていたのは東側に３基、西側に４基であったが、江田川に浸食されている中間部分にも10基以上あったのではなかろうか。各横穴の名称は東側から第１号、第２号、第３号、第７号、第４号、第６号とした。７基のうち西側の４基が九州縦貫自動車道建設によって消滅した。この横穴群のうち第１号～第４号は現水面上約0.8m～1.2mと低い位置にあるが、第５号と第６号および小型横穴の第７号はそれよりもかなり高く、現水面上約2.20mのところにある。このうちもっとも保存のよいのが、第５号と第６号である。それは比較的高位置にあるため、梅雨期においても増水の流入をまぬがれたのと、羨門の外側がすぐ川に面して、横穴に人が侵入しにくいことも関係あると考える。

Ⅲ．各横穴と特徴

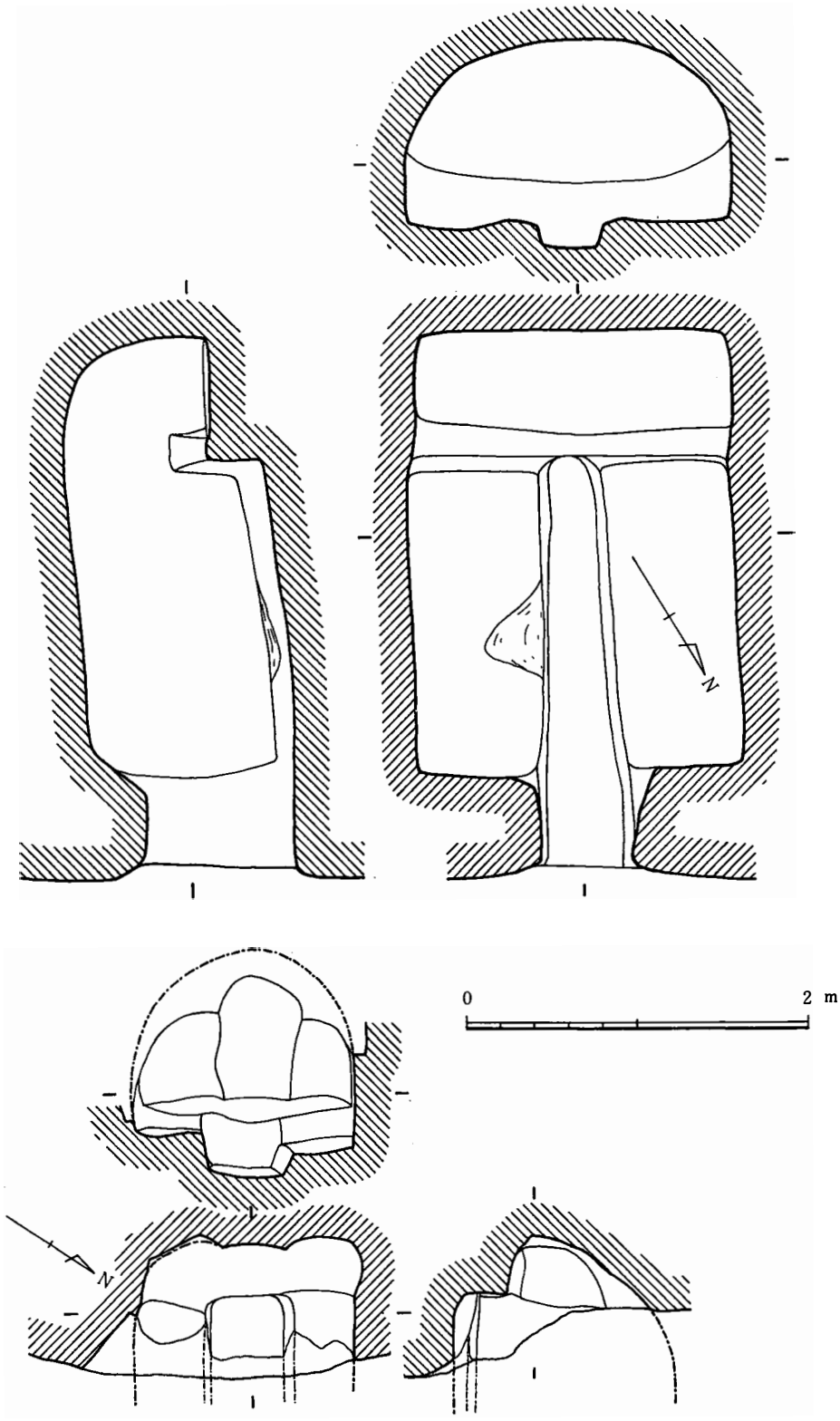
第１号—北北東に開口するが、羨門部と墓室の前半部は崩れ落ち、奥壁近くが残っているのみである。隅丸の方形プランで、墓室の幅は2.12m、高さは1.40mを計る。屍床は通路の左右に２区みられ、通路の幅0.1m、高さ0.1m程度の支切りがみられる。屍床の幅は羨門からみて右が0.65m、左が0.75mを計る。天井部はドームに近いが、床から0.9mのところに軒を表わすとみられる線刻が残っている。出土遺物はない。

第２号—ほぼ北に開口し、羨門部から第１号側の墓室にかけて抉られている。プランは長方形で幅2.15m、長さ2.40mを計る。床面は後世削平されたため、奥壁近くが残っているだけで、平坦に近い。残存している奥の屍床から天井までは1.50mを計る。天井は家形で、平入り型式である。床面から0.9mのところに軒を表わす段が明瞭にめぐらされている。出土遺物はない。

第３号—北北東に開口している。割合保存が良い。外壁は浸食されているが、羨門は長さ0.6mあり、幅0.58m、高さ0.88mを計るかまぼこ型である。墓室は幅1.90m、長さ2.54mの長方形のプランで奥と左右の３区の屍床を造り出している。奥の屍床は左右の屍床よりも0.20m程



附6第2図　梅木谷横穴実測図（上、第1号・下、第2号）



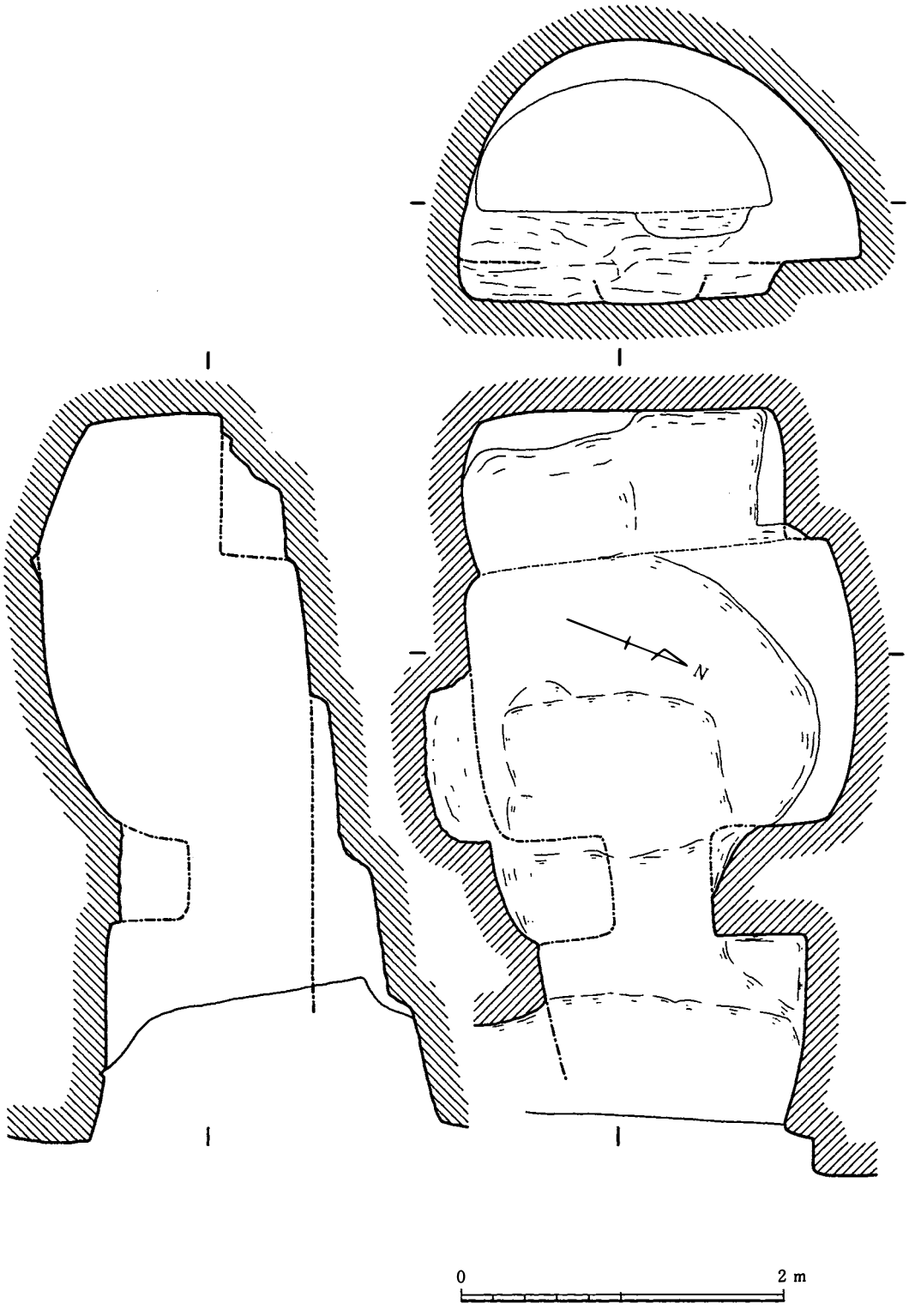
附6第3図　梅木谷横穴実測図（上、第3号・ 下、第7号）

高く造られ、区切りも割合明瞭であるが、左右の屍床はいくぶん縁の方が高まっているものの区切りが明瞭ではない。屍床の規模は奥が幅0.60m、長さ1.85m、羨門からみて右が幅約0.6m長さ1.75m、左が幅約0.55m、長さ1.76mを計る。左の屍床は後世の破壊の跡がみられる。天井部はドーム型の単純な形式である。通路から天井までの高さは1.2mを計る。内部から多数の亀甲や骨が検出された。しかしこの動物遺体がはたして横穴と直結するものかどうか、不明である。

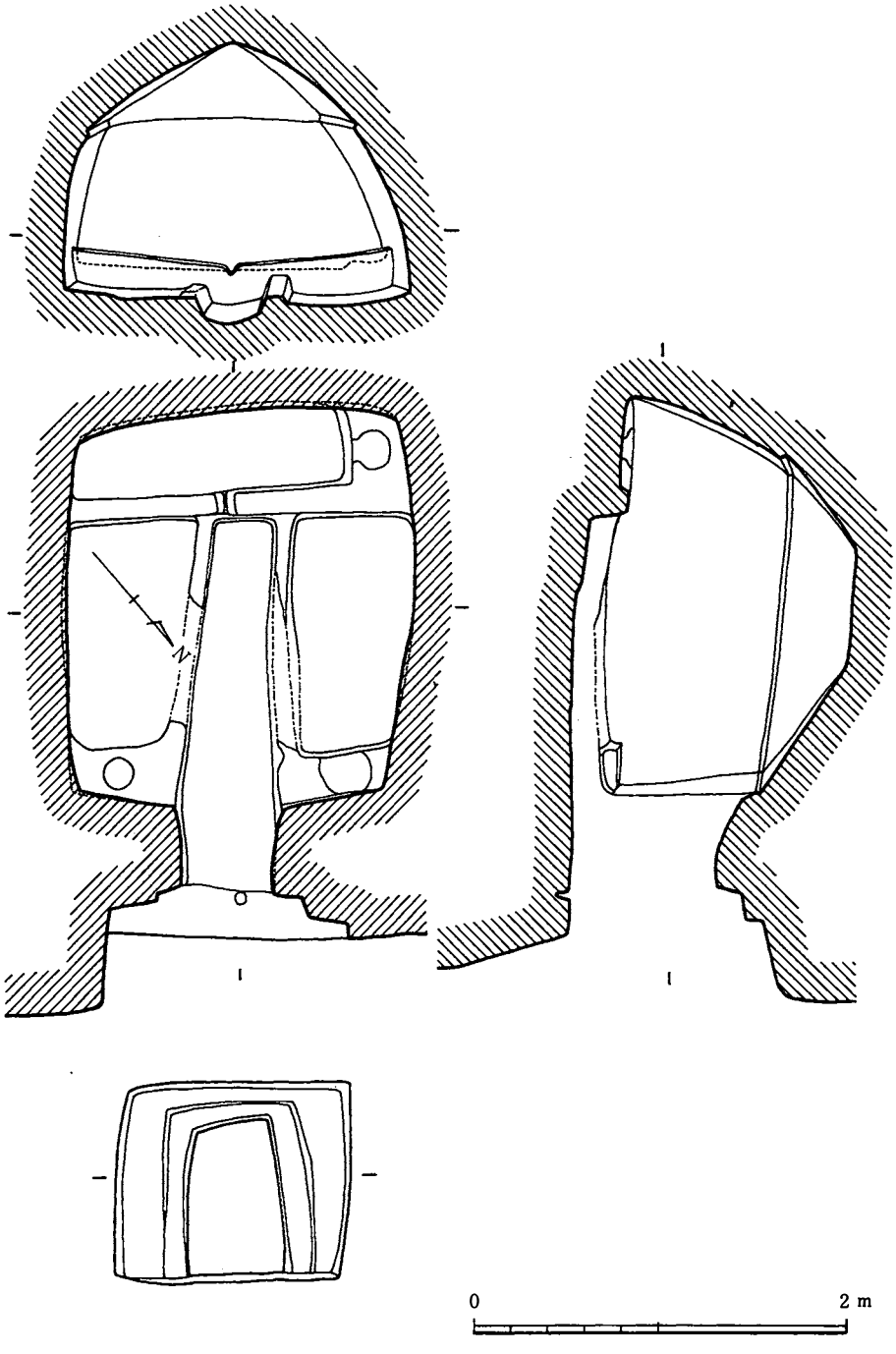
第7号—東北東に開口部をもつが、奥壁近くが残っているだけである。この横穴群中で最も小型の横穴である。仕上げはいくぶん粗く、奥壁は3つに抉られ、ノミ痕が残るが、プランはほぼ長方形を成していたものとみられる。墓室の幅は1.3mを計り、小形であるにもかかわらず、屍床は3区設けられている。屍床は3区とも平坦で、中央部の通路から右が0.12、左が0.24m高く、奥はさらに高く、0.35mを計る。奥の屍床は幅0.3m、長さ1.28mある。奥に向つて右の屍床は幅0.35m、左の屍床は幅0.40mを計り、長さは1.3m以下と推定される。3区の屍床とも成人の埋葬は困難な大きさである。天井までの高さは復原すると1.3mで、ドーム状を成していたとみられる。出土遺物はない。

第4号—北東に開口している。この横穴群のうちもっとも規模の大きな横穴であるが、残念ながら乞食や浮浪者の住居となったことがあって、横穴内部、とくに床面の破壊がいちじるしいうえに、煮沸による煤の付着もひどい。したがって以下に述べる数値は復原値である。プランは幅2.35m、長さ1.75mの方形の墓室に、さらに奥に2.0m×0.77mの屍床を造り付けたような形を呈している。おそらく奥の屍床もふくめて3区の屍床をもっていたものであろう。床面から天井までの高さは約1.6mあり、天井の形は変化の乏しいドーム型とみられる。羨門部は左側を破壊されているが幅0.6mと推定され、長さは約0.86mである。羨門部の前は1.65m、高さ約1.7mを計り、さらに入口に向かって狭まりながら約1.2mのび、羨道部を形成し、最外部は段がつけられている。奥壁から最外部までは4.7mを計る。出土遺物はない。

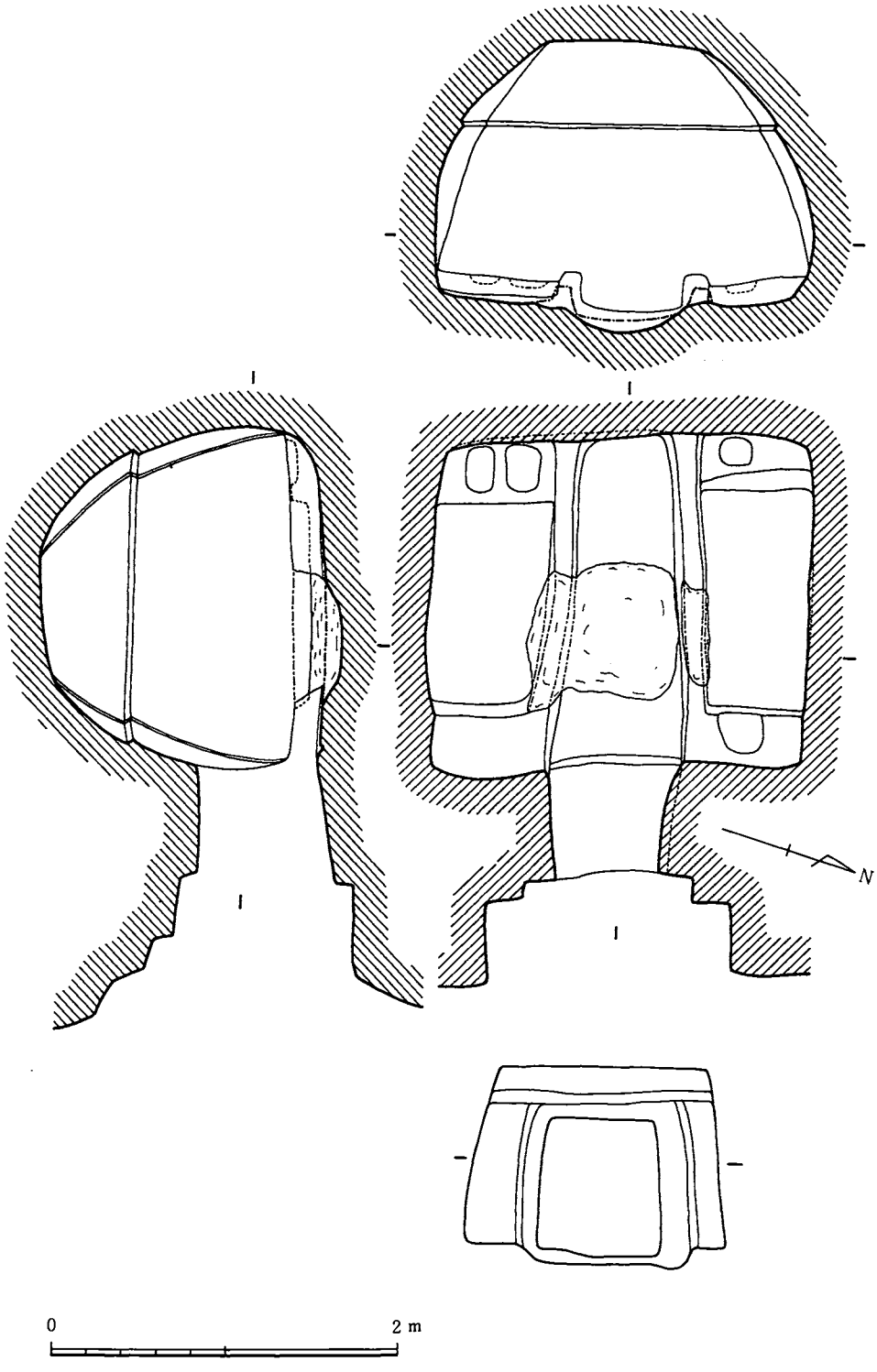
第5号—北東に開口している。羨門部は幅0.52m、高さ0.78m、長さ0.44mを計り、正面観は長方形である。さらに羨門の外側に幅0.80m、高さ0.93mと幅1.30m、高さ1.06mの二重の飾り縁をめぐらしている。墓室は幅1.88m、長さ2.10mでいくぶん胴張りの長方形である。3区の屍床が設けられ、区切り部は高く造り出され、奥の区切りの中央はV字形の油流しがみられ、左右の区切りはその部分が欠損しているがここにもあったものとみられる。左右の屍床は通路より約0.1m高く、奥の死床はさらに高く通路より約0.2m高く造られている。屍床には造り付けの枕が設けてあり、奥の屍床は羨門からみて右に、左右の屍床はそれぞれ羨門側に1個ずつの枕が設けられている。各屍床は石枕の設備が一段高く造られているため、狭く感じるが石枕部を含めた屍床の大きさは、奥が幅0.48m、長さ1.80m、羨門からみて右が幅0.69m、長さ1.50m、左が0.70m、長さ1.50mを計るので、伸展葬をとる余地は充分ある。墓室は



附 6 第 4 図　梅木谷横穴実測図（第 4 号）



附6第5図　梅木谷横穴実測図（第5号）



附6第6図　梅木谷横穴実測図（第6号）

まさに家形で、高さ約0.4mの屋根をもち、家型石棺を横穴に転じた感がある。寄棟造の家に妻入りの形をとっているといえる。通路から天井までの高さは1.5mである。なお各屍床を河原石が埋めつくしていたが、埋葬時からのものかどうか不明である。出土遺物としては第3号に例があったように多数の亀の甲などを検出した。

第6号—東北東に開口部をもつ。羨門は正面観が長方形で、幅0.65m、高さ0.8m、長さ0.62mである。羨門の外側にはさらに幅0.98m、高さ1.03mと幅1.41m、高さ1.20mの二重の飾り縁がつくが、内側の飾りの左右は上部より一段くぼんでいる。なお飾り縁には赤色顔料の塗られた痕跡が認められた。墓室内は幅2.20m、長さ1.83mの幅の広い長方形プランを呈し、2区の屍床が通路に沿って並んでいる。第5号と同じく石枕の造りがあるが、配置の点では第5号とかなり異なっており、複雑である。羨道からみて右屍床は幅0.67m、長さ1.88mあり、奥と入口側とにそれぞれ1つの石枕が彫られており、差し違えて遺体を納めたものである。それにしてもこの場合石枕がどちらも中央寄りに設けられているのは不自然である。何らかの理由が存するのであろうか。左側の屍床は幅0.71m、長さ1.93mを計り、奥に2つの石枕を有するいわゆるダブルベッド式であるが、羨門側にも頭を置く凹みはないが枕状の施設がある。墓室の形態は第5号同様の寄棟造りの家型で妻入りに掘られている。通路から棟までの高さ1.10m、天井までの高さ1.63mを計る。第5号同様河原石がみられたが、出土遺物はなかった。

梅木谷横穴群は比較的数が少ないにもかかわらず、その型式がバラエティに富んでいることに注目しなければならない。

平面図はほとんどが長方形で、屍床は2区と3区とが認められる。そのうち2区の場合でもとくに第6号は同時に4体は納めることができる施設を有しており、横穴が本来の性格として墓地、それも追葬墓としての性格を示すことがよく理解できるわけである。3区の屍床の場合でも第5号は頭部の位置を暗示する一つの例として貴重である。また第7号は3区の屍床を有するが小形で、成人の遺体をそのまま安置することは困難であるが小児であれば可能である。小形横穴に新しい問題を提起するものである。

残念なことに横穴の時期の決め手となる遺物を全く検出することができなかったけれども、こうしたプラン、墓室の形態などによって、今後時期的な問題も解決できるものと期待したい。

附論7
崩平横穴群

飽託郡北部町

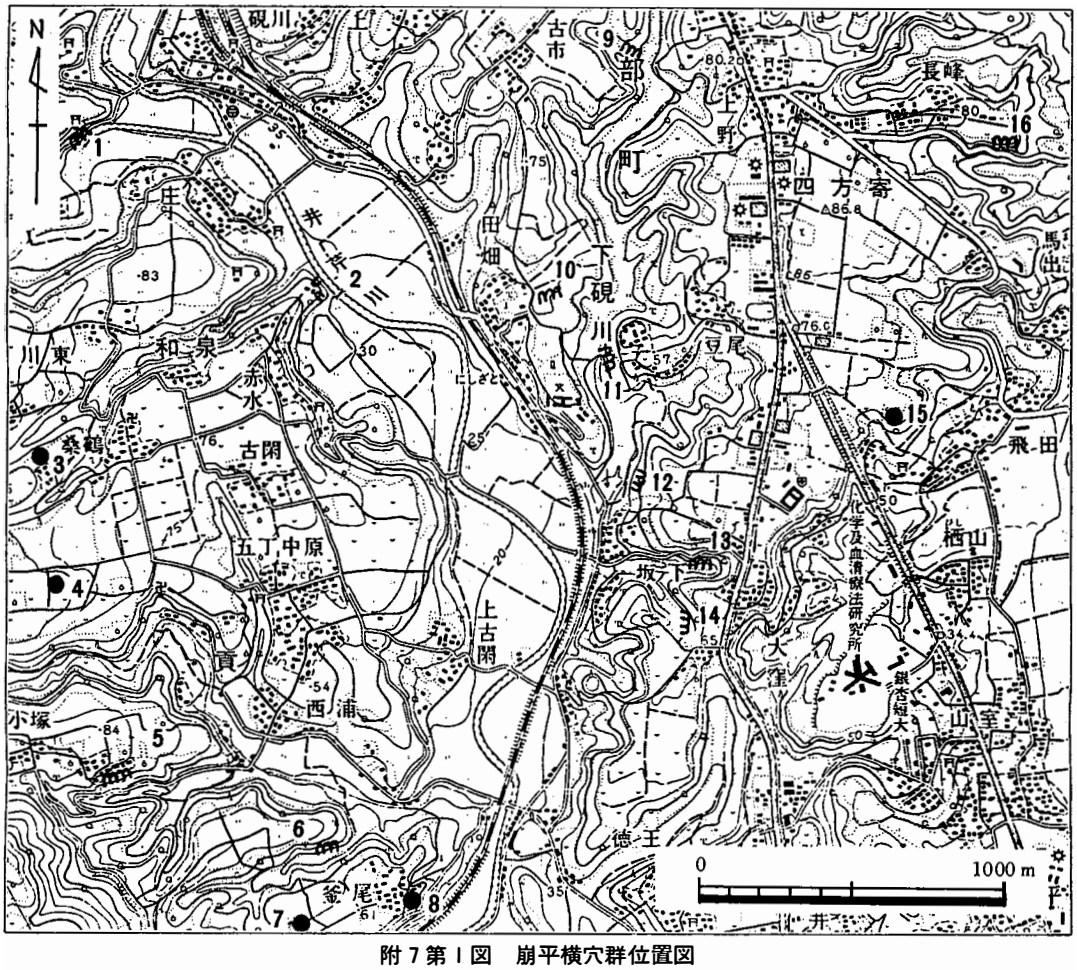
調査・執筆者　高木正文

崩　平　横　穴　群

（飽託郡北部町和泉崩平）

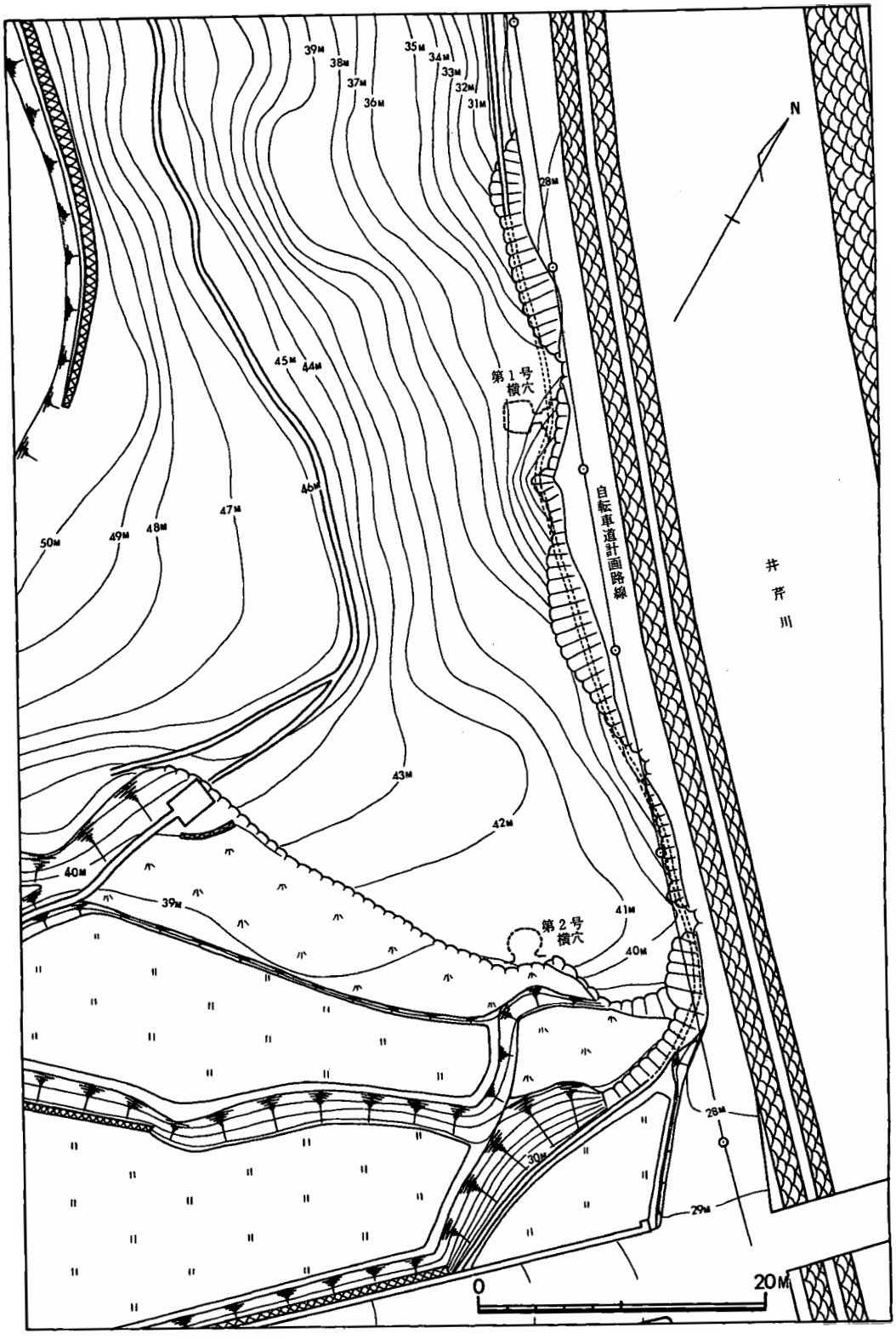
Ⅰ．位置と立地

北部町は坪井川と井芹川が流れ、両河川に浸食された両岸にはいたるところに阿蘇凝灰岩の露頭がみられ、この部分に多くの横穴が造られている。現在知られているだけでも、北部町に19ヵ所の横穴群がある。崩平横穴群は井芹川右岸にあり、この付近では右岸の方は崩平以外は割合に緩斜面であるので横穴は少ないが、対面する左岸（東側）は割合に急で阿蘇凝灰岩の露頭も多く、一丁畑横穴群、豆尾横穴群、黒井横穴群、坂下横穴群、狩衣横穴群などが造られて



附７第Ⅰ図　崩平横穴群位置図

１．今熊横穴群　２．崩平横穴群　３．迫畑古墳　４．大塚原古墳　５．原口原横穴群　６．扇田横穴群　７．橋口古墳　８．釜尾古墳　９．六反田横穴群　10．一丁畑横穴群　11．豆尾横穴群　12．黒井横穴群　13．坂下横穴群　14．狩衣横穴群　15．飛田葉山塚古墳　16．辻横穴群



附7第2図　崩平横穴群分布図

いる。崩平横穴群のある崖の上部は中世の赤水城の跡で、この奥は広い台地となっており、崩平横穴群から南西に1km余りのところに迫畑古墳と大塚古墳の2基の円墳がある。また井芹川沿に2km南下すると装飾古墳として有名な釜尾古墳（円墳・横穴式石室・国指定史跡）がある。

Ⅱ．横穴群の調査と概要

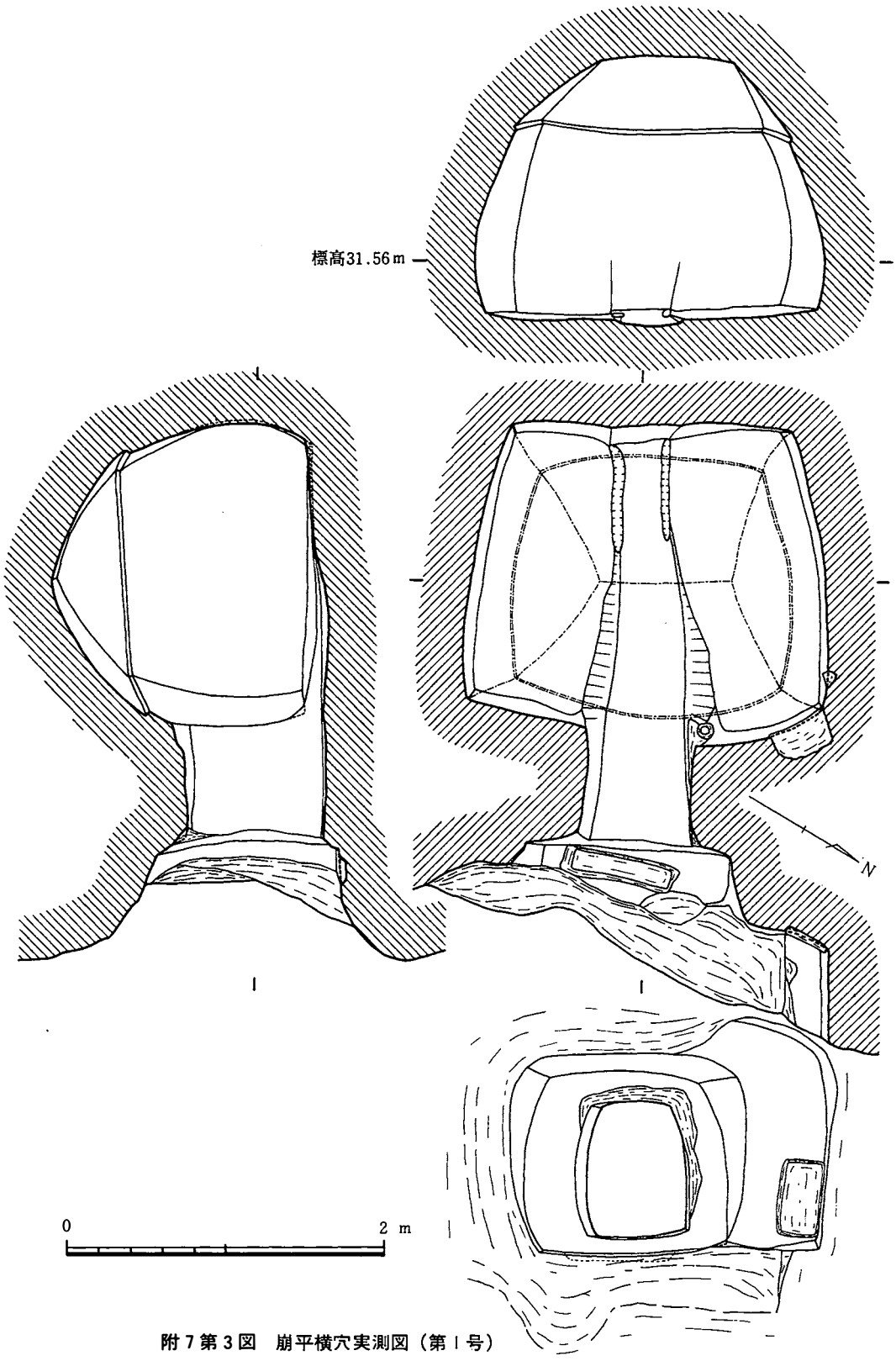
崩平横穴群はわずか2基からなるが、このうち1基が山鹿一熊本自転車道の建設によって、羨道の一部が破壊されることになったので、昭和53年12月急遽実測調査を行った。

赤水から延びた舌状地形の突端は南北に井芹川で浸食され、高さ4m～22mの凝灰岩崖面を長さ70mにわたってさらけ出しており、ここに1基の横穴があり、これを第1号とする。またこの崖面は南端から西に曲がり、中段が長さ40m続いている。この部分は凝灰岩の質が悪く、高さも2.5m程しかないがここにも1基の横穴があり、これを第2号とする。この2基は直線距離で36m離れている。この2基の間に横穴が存在したかどうか不明であるが、その残欠すらみることができない。2基のうち第1号は保存が良いが、不幸にもこの横穴の羨道部の一部が破壊されることになった。

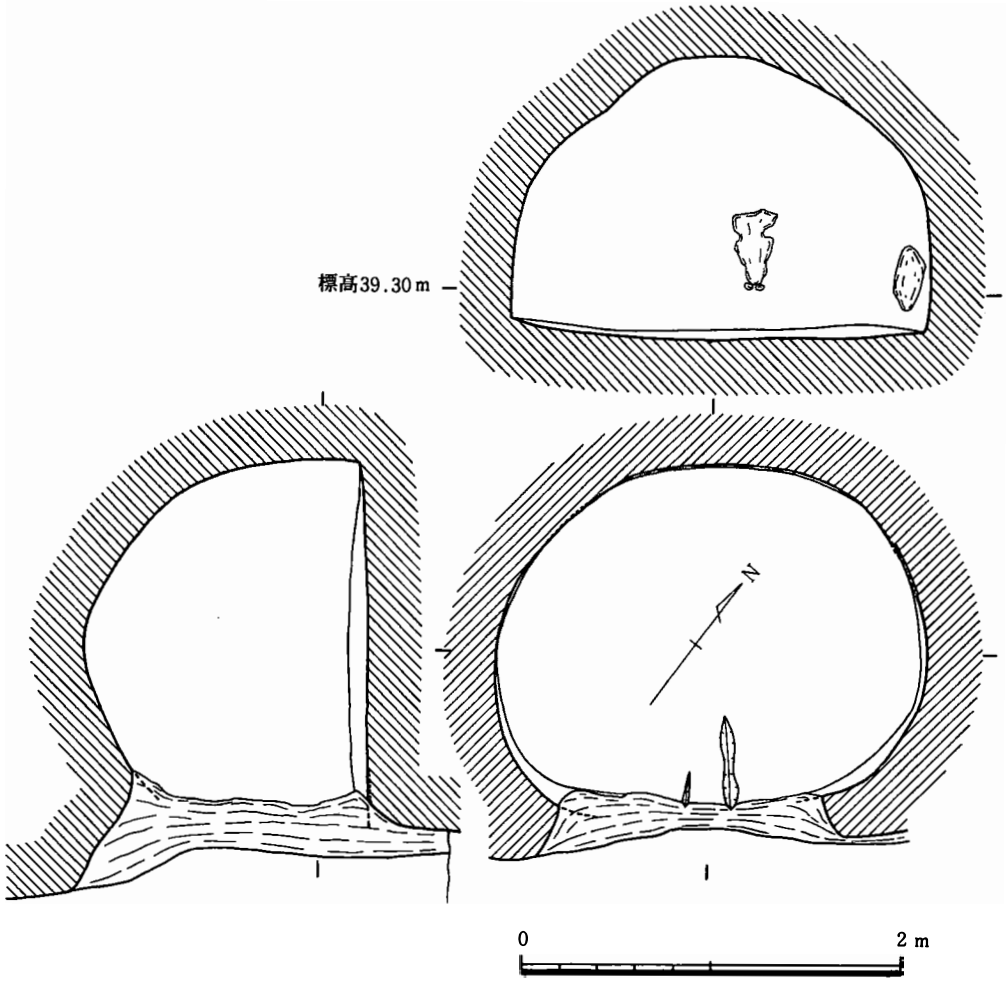
Ⅲ．各横穴と特徴

第1号—約6mの崖のやや上方にあり、東北東に開口している。羨道は幅0.65m、高さ0.85m、長さ0.63mを計り、正面観は胴の張った長方形を呈し、その外側に二段の縁飾りがあるが下部と向って左側は壊れている。羨門の直前は床の右端にこの部分を掘り窪めていた形跡がみられ厚さ0.3m、幅1.2mもある石蓋をしてあった可能性もある。なおこの部分にさらに掘られている幅0.15m、長さ0.7mの溝は羨門入口の方向といくぶんずれており、またノミ痕も新しいようなので後世のものとみられる。また正面から見て縁飾りの右端にある長方形のくぼみもノミ痕が新しい。墓室内は幅2.30m、長さ2.00mの奥がやや狭い胴張りの台形を呈し、屍床は2区設けられている。通路と屍床の区切りは造り出していないが羨門近くは段差があり、奥壁近くは浅い溝で表現している。羨道から見て右の屍床は中程で幅0.9m、長さ2.00m、左の屍床は幅0.88m、長さ1.85mを計る。墓室の形態は、高さ約1.2mのところに軒のある家形で、平入りの形式である。通路から天井までの高さは1.75mある。羨門からみて右側の屍床の壁には掘りくぼめた所があるが後世に掘られたものであり、通路の横にある穴も後世のものであろう。内部は後世に何度も火を燃したらしく、煤が付着し、床にも灰がたまっており、出土遺物はなかった。

第2号—南南東に開口部をもつ。第1号の地点よりも軽石状のものを含む粗悪な凝灰岩層であるため、横穴の羨門も壊れており、内壁も剝落がみられる。墓室は幅2.28m、長さ約1.80mを計る横広の楕円形で、床は平坦なままで屍床の区切りはない。羨門近くに不明瞭ではあるが



附7第3図　崩平横穴実測図（第1号）



附7第4図　崩平横穴実測図（第2号）

溝状のノミの痕があるのは羨門部を造った時の傷跡であろうか。天井部は高さ1.49mの単純なドームである。内部には後世火を燃した跡があったが、土もほとんど入っておらず、出土遺物もなかった。

崩平横穴群は2基ではあるが、墓室は整った家形と極めて単純なドーム形であった。出土遺物がないので時期が不明であるが、形態の差は時間的な差を示すものかもしれない。遺物を伴なう横穴からの追求が必要である。

図　　版

1　第1トレンチ西方崖面掘削

2　第5トレンチ断面

3　第10トレンチ（南方より）

図版1　A地区（五ッ穴横穴群）トレンチ

1　発掘直前の墳丘
（東方より）

2　表土排除後
（北方より）
谷の奥には
五ッ穴横穴
群が開口し
ている。

3　周溝の発掘終了
（北方より）

図版２　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）遠景

1　古墳調査終了
（南西より）

↓印は岩立Ｂ古墳

2　封土中に含まれる凝灰岩片（層をなす）

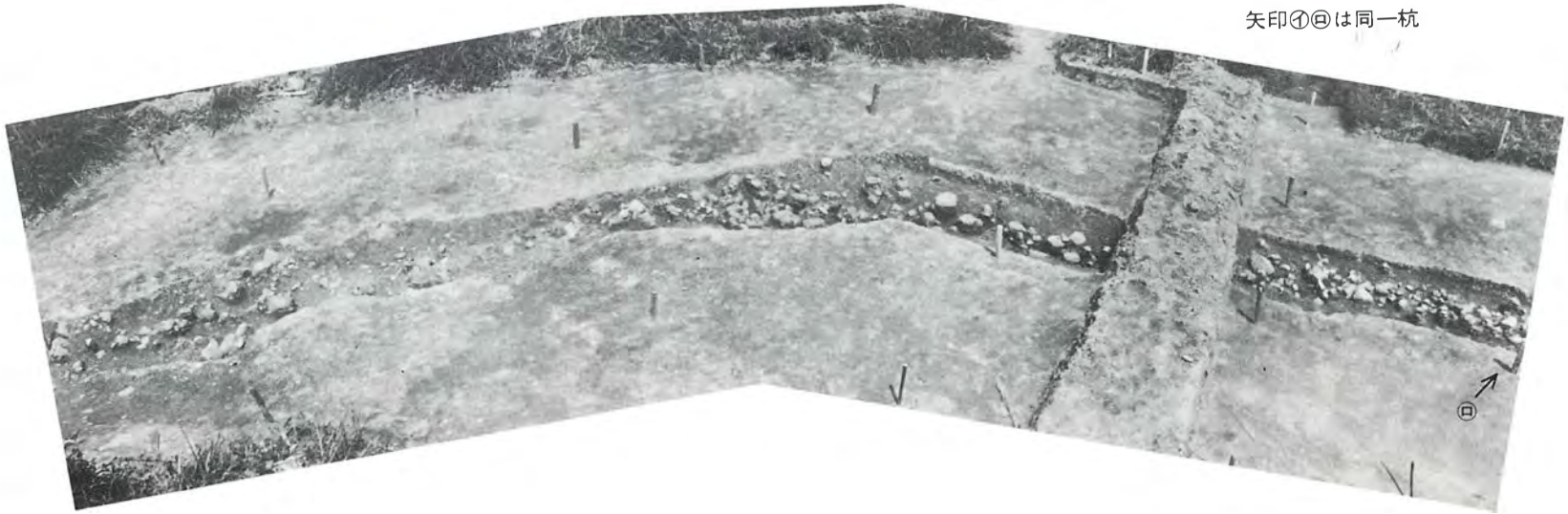
3　墳丘上の葺石と埴輪

図版３　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）墳丘

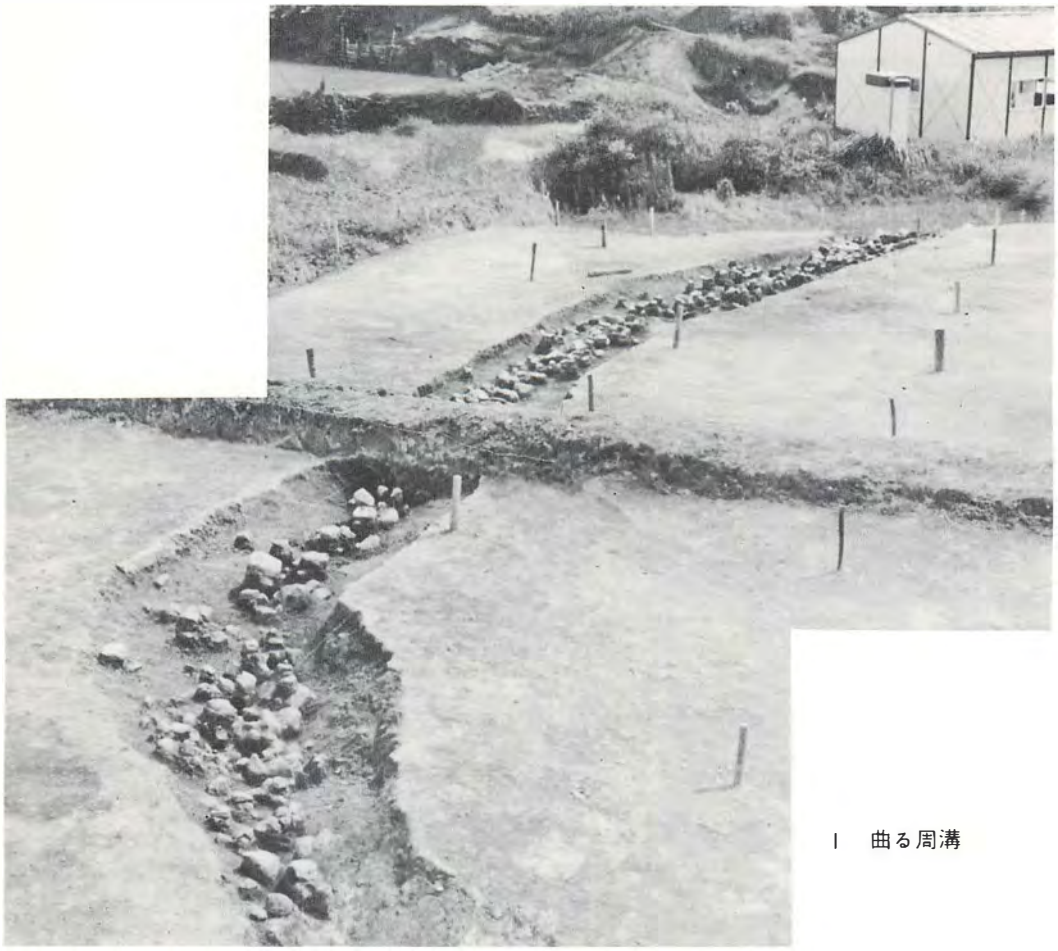
1　ＥＦ断面
東側々壁外に
は裏込石あり

2　ＯＣ断面

図版４　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）墳丘の断面



図版５　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）　周溝第Ⅰ～Ⅴ区（墳丘 より）



1　曲る周溝

2　周溝末端部

図版6　B地区（岩立C古墳）周溝　第Ⅰ～Ⅵ区

1　第Ⅰ区遺物出土状態

2　須恵器（台付長頸壺・高坏）・土師器（長頸壺）出土状態

3　大甕の破片出土状態

図版７　Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）周溝中の遺物出土状態

1　羨道部

2　第Ⅸ・Ⅹ区

3　第Ⅹ区

図版8　B地区（岩立C古墳）第Ⅸ・Ⅹ区

1　馬具・武具・装身具の出土状態

2　金環・刀子の出土状態

3　メノウ製の丸玉出土状態

図版9　B地区（岩立C古墳）第Ⅸ・Ⅹ区遺物出土状態

1　鉸具出土状態

2　轡・銀環出土状態

3　鉄鏃出土状態

図版10　B地区（岩立C古墳）第Ⅸ・Ⅹ区遺物出土状態

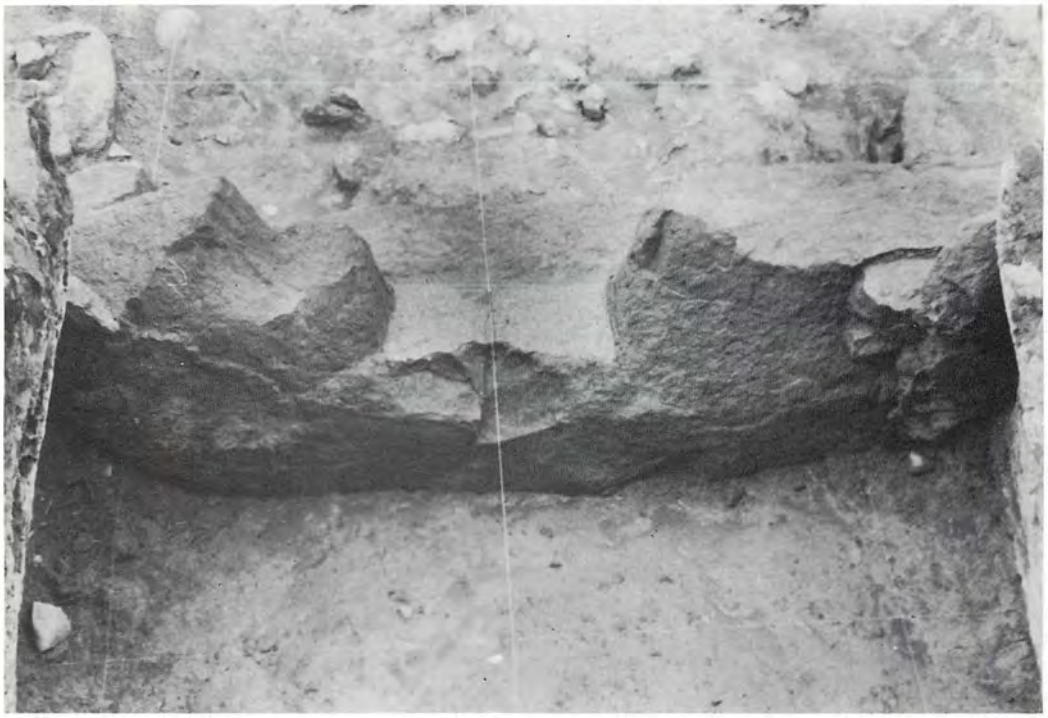
1　石室正面

2　西側側壁外面

3　奥壁裏面

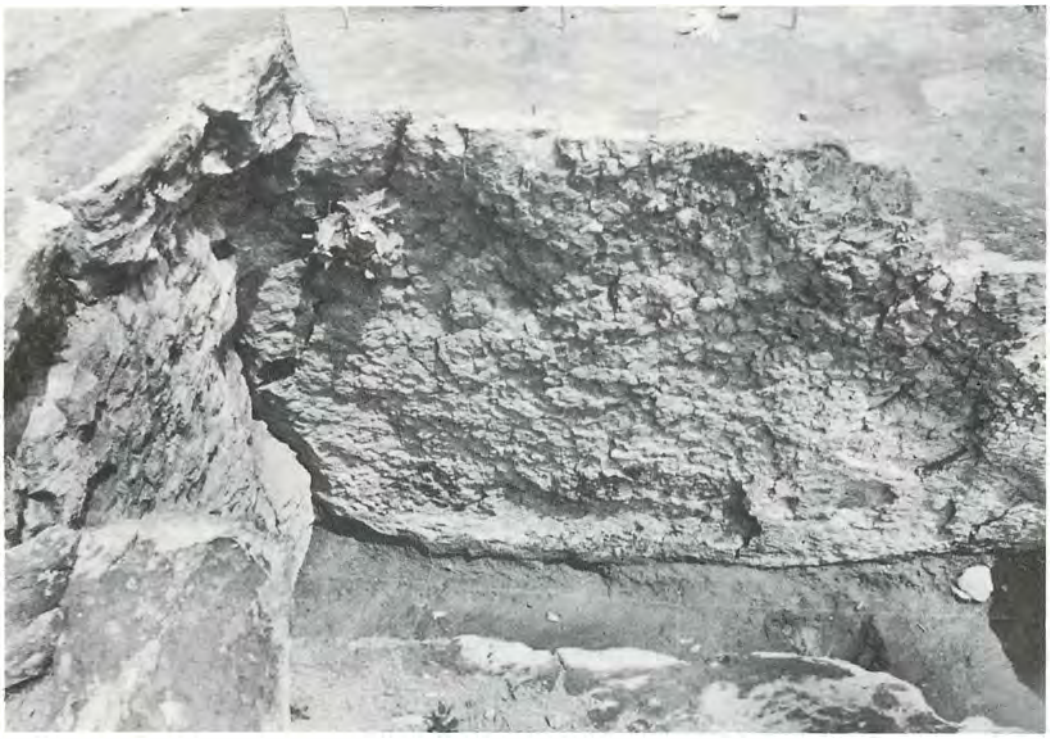
図版11　B地区（岩立C古墳）石室外観

1　奥　壁



2　框　石

図版12　B地区（岩立C古墳）石室内観



1　東側側壁と奥壁

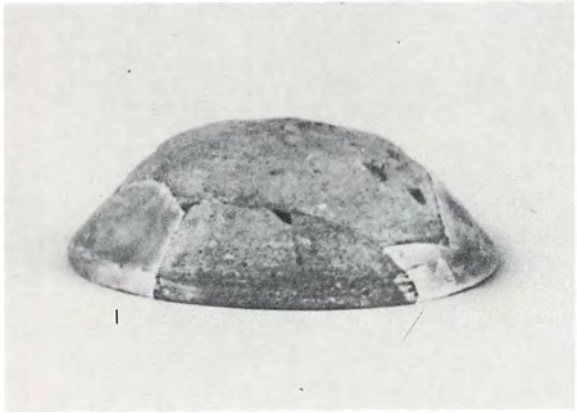
2　東側々壁と框石

図版13　B地区（岩立C古墳）石室内観

1　J－I区　出土の集石（J－3層中）

2　隆起文土器の出土状態

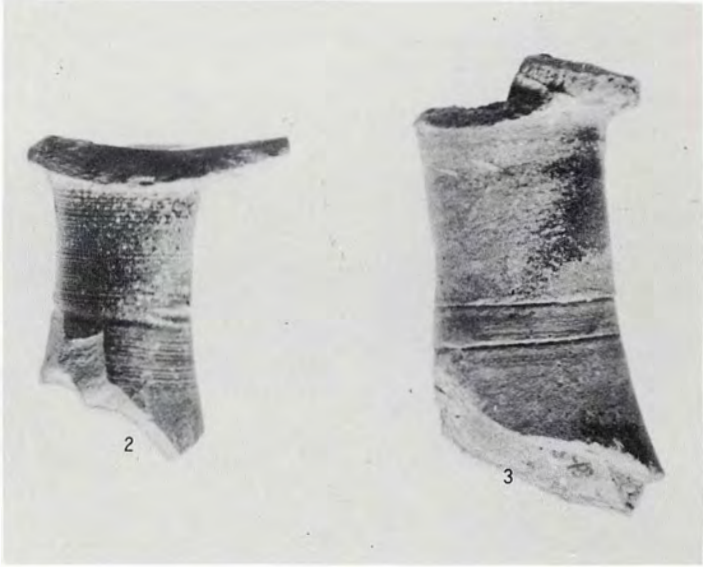
図版14　B地区　J－II区の遺物出土状態



1・2　A地区より表採の坏

3　周溝第II区出土

図版15　A地区（五ッ穴横穴群）とB地区（岩立C古墳）出土の須恵器

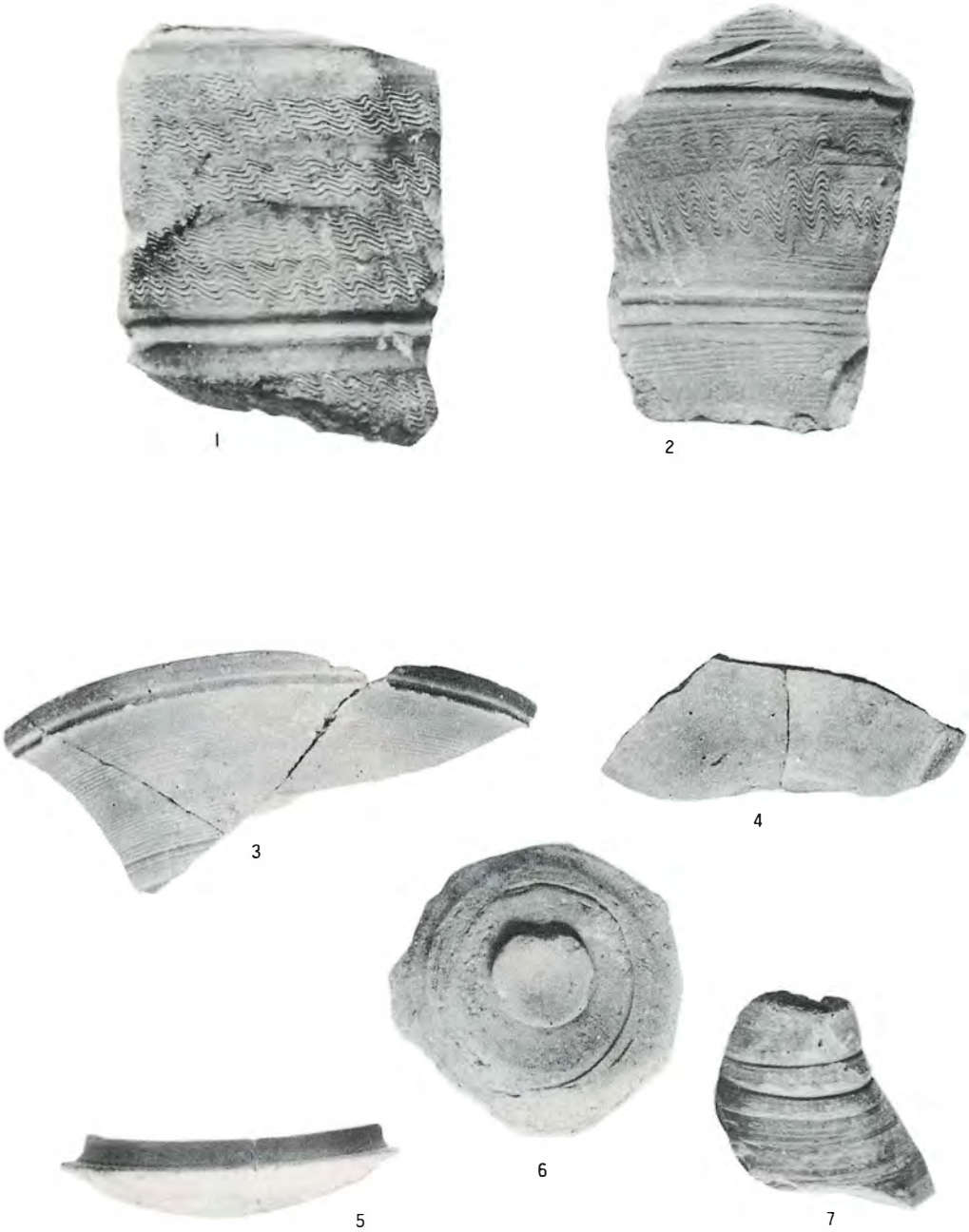


1・2・3　須恵器高坏

4　周溝第Ⅰ区より出土

5　周溝第Ⅱ区より出土

図版16　B地区（岩立C古墳）出土の須恵器



1・2 器　台　3 甕の口縁　4・5・6 坏　7 高　坏

図版17　B地区（岩立C古墳）出土の須恵器

1

2

3

4

5

6

7

8

9

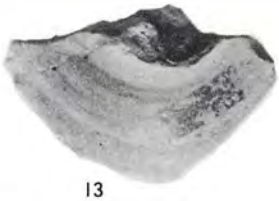
10

14

12

11

15


13

1～13　坏　　14　器種不明　15　近世陶器

図版18　B地区（岩立C古墳）出土の須恵器と近世陶器

1

×$\frac{1}{8}$

2

×$\frac{1}{4}$

図版19　B地区（岩立C古墳）周溝中より出土の大甕

1　土　　鍋

2　湯　　釜

3　高台付塊

4　土師質土器

5　高台付壺（蔵骨器）

図版20　B地区（岩立C古墳）出土の土器

1

2

3

4

5

図版21　B地区（岩立C古墳）出土の埴輪

1

2

3

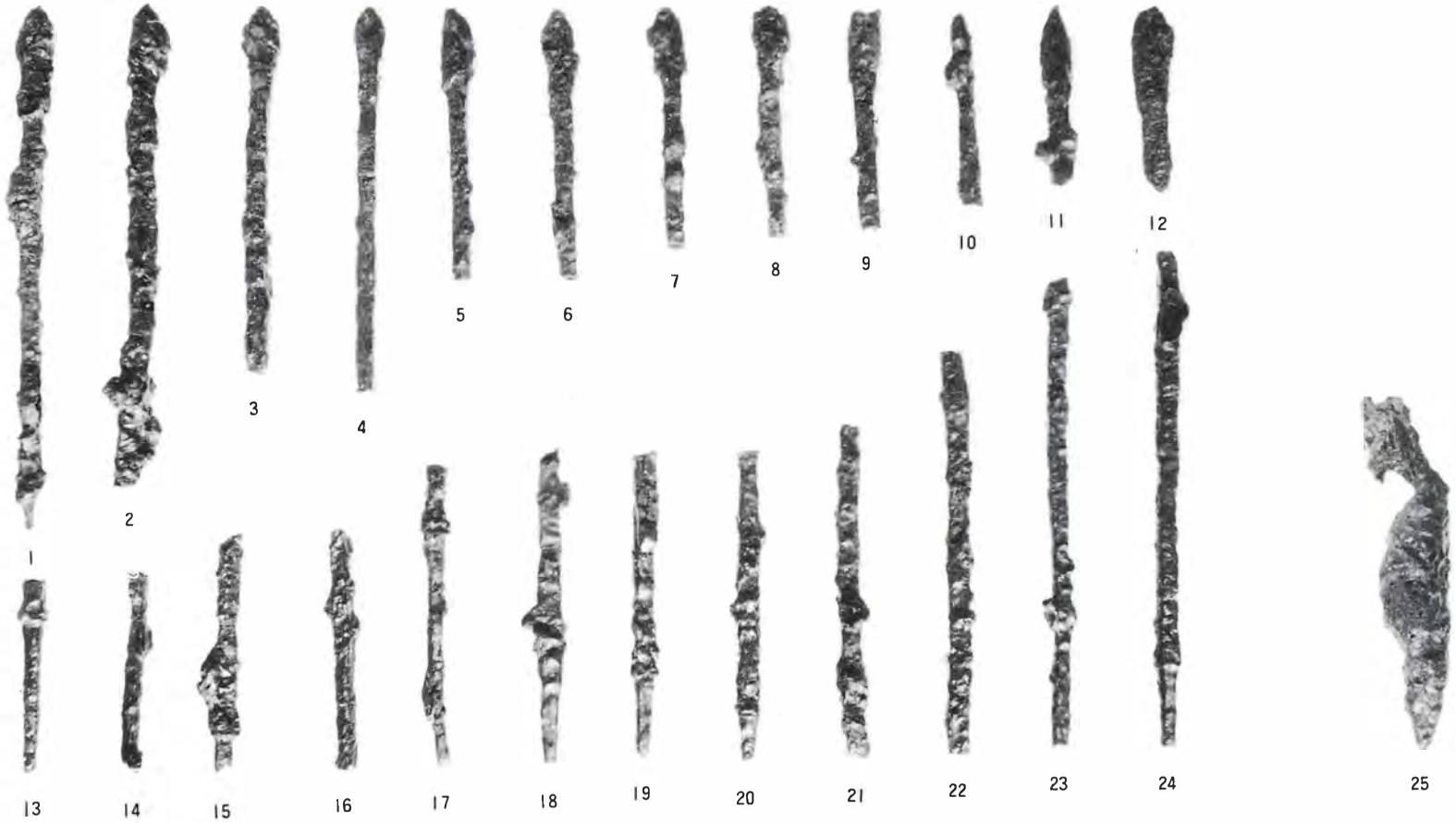
4

図版22　B地区（岩立C古墳）出土の埴輪

1　第Ⅰ区より出土

2　第Ⅱ区より出土

図版 23　B 地区（岩立 C 古墳）周溝出土の土師器



図版24　B地区（岩立C古墳）第Ⅸ・Ⅹ区出土鉄鏃・石突き

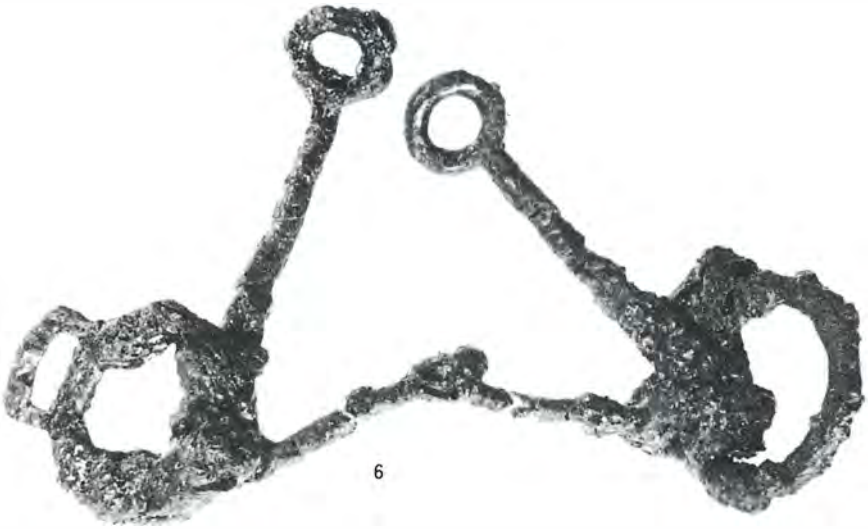
1

2

3

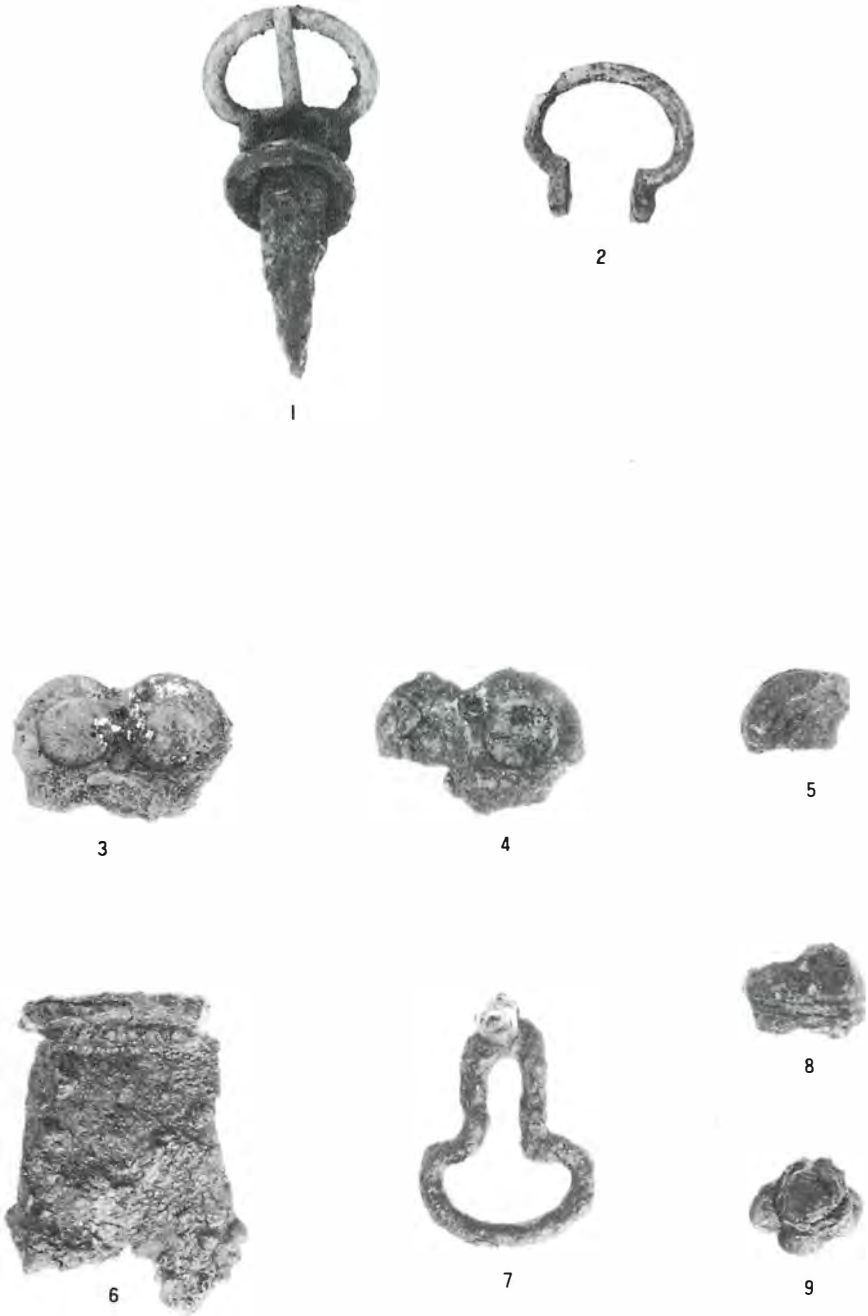
4

5

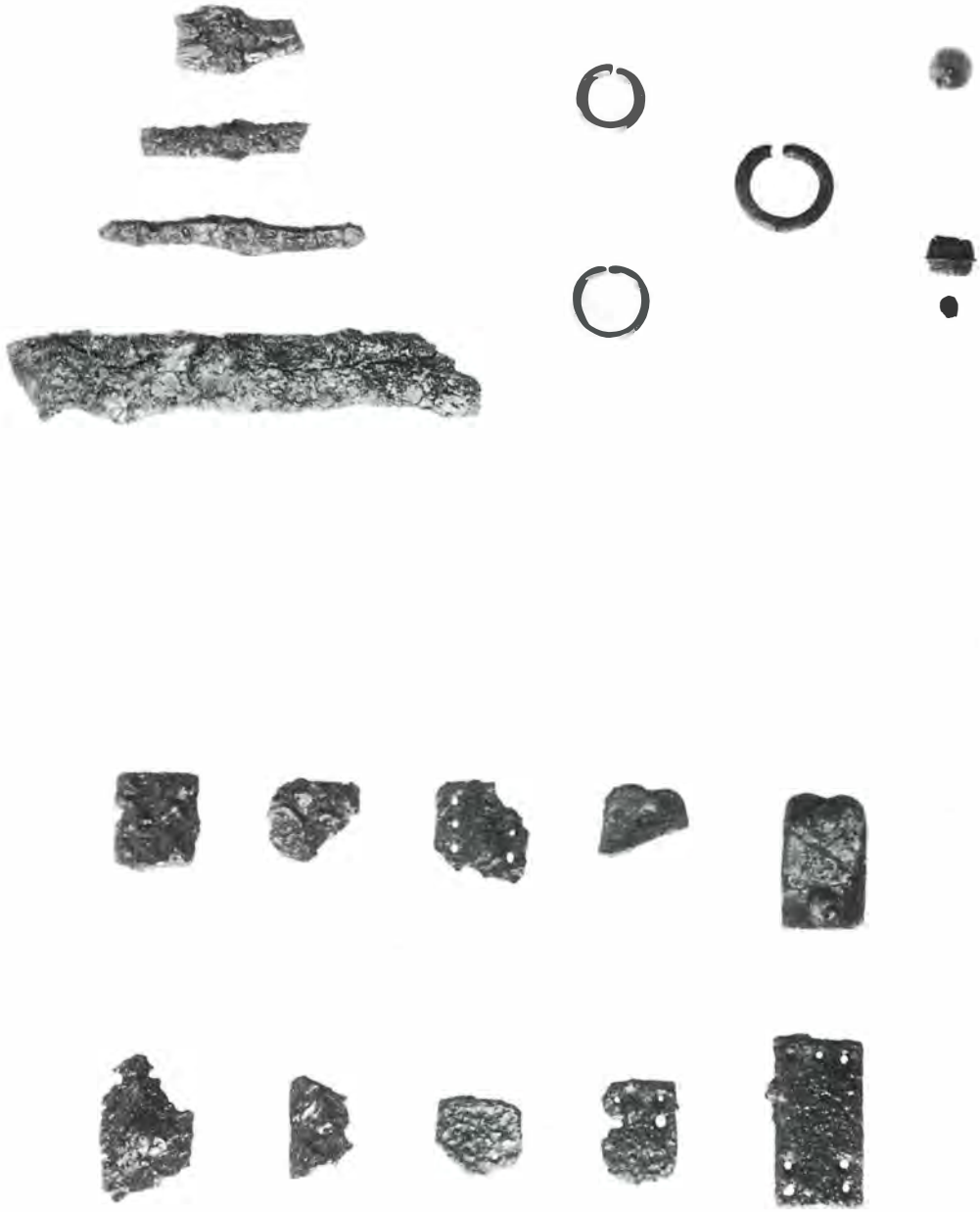


6

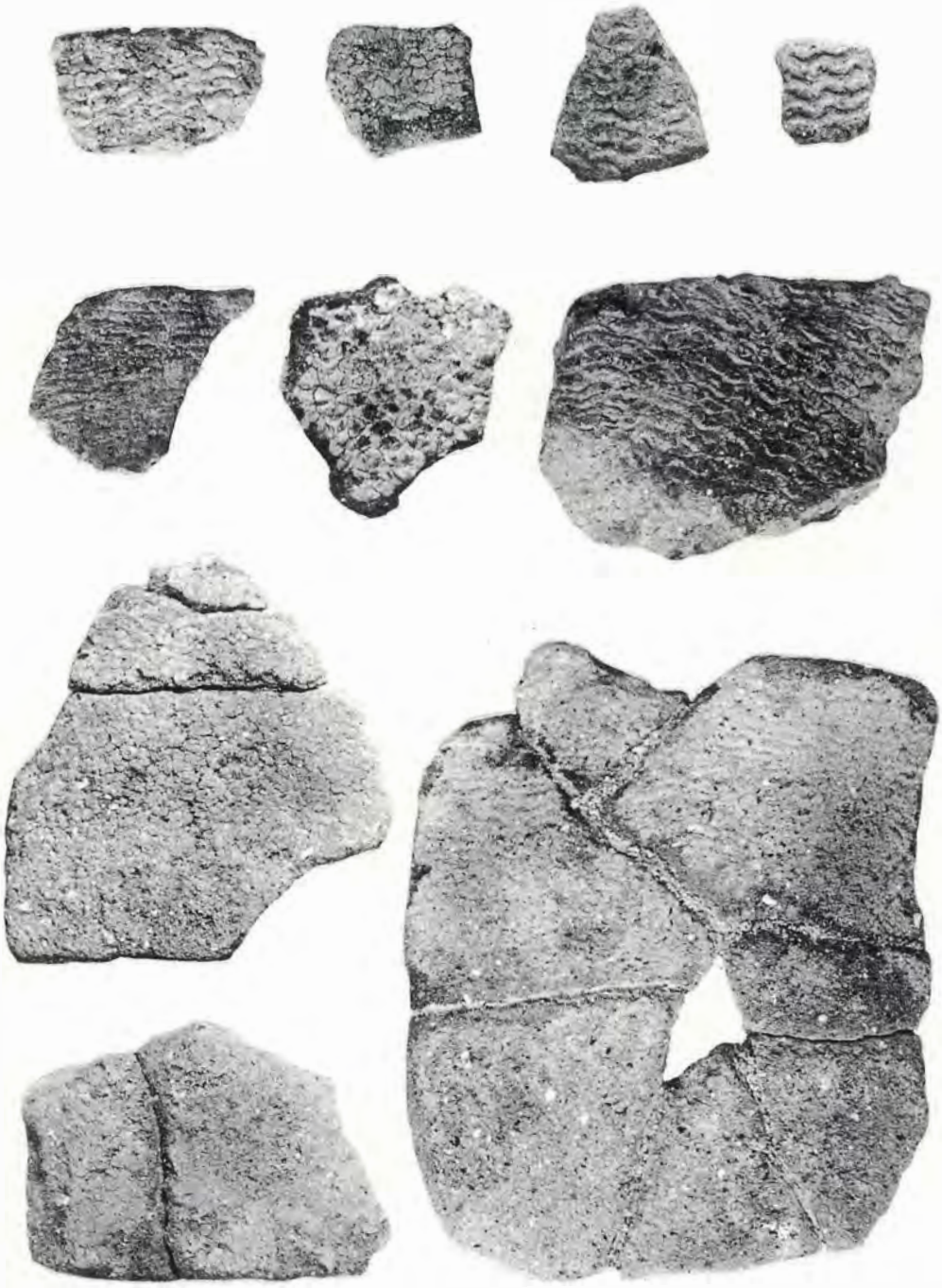
図版25　B地区（岩立C古墳）第Ⅸ・Ⅹ区出土馬具



図版26　B地区（岩立C古墳）第Ⅸ・Ⅹ区出土馬具



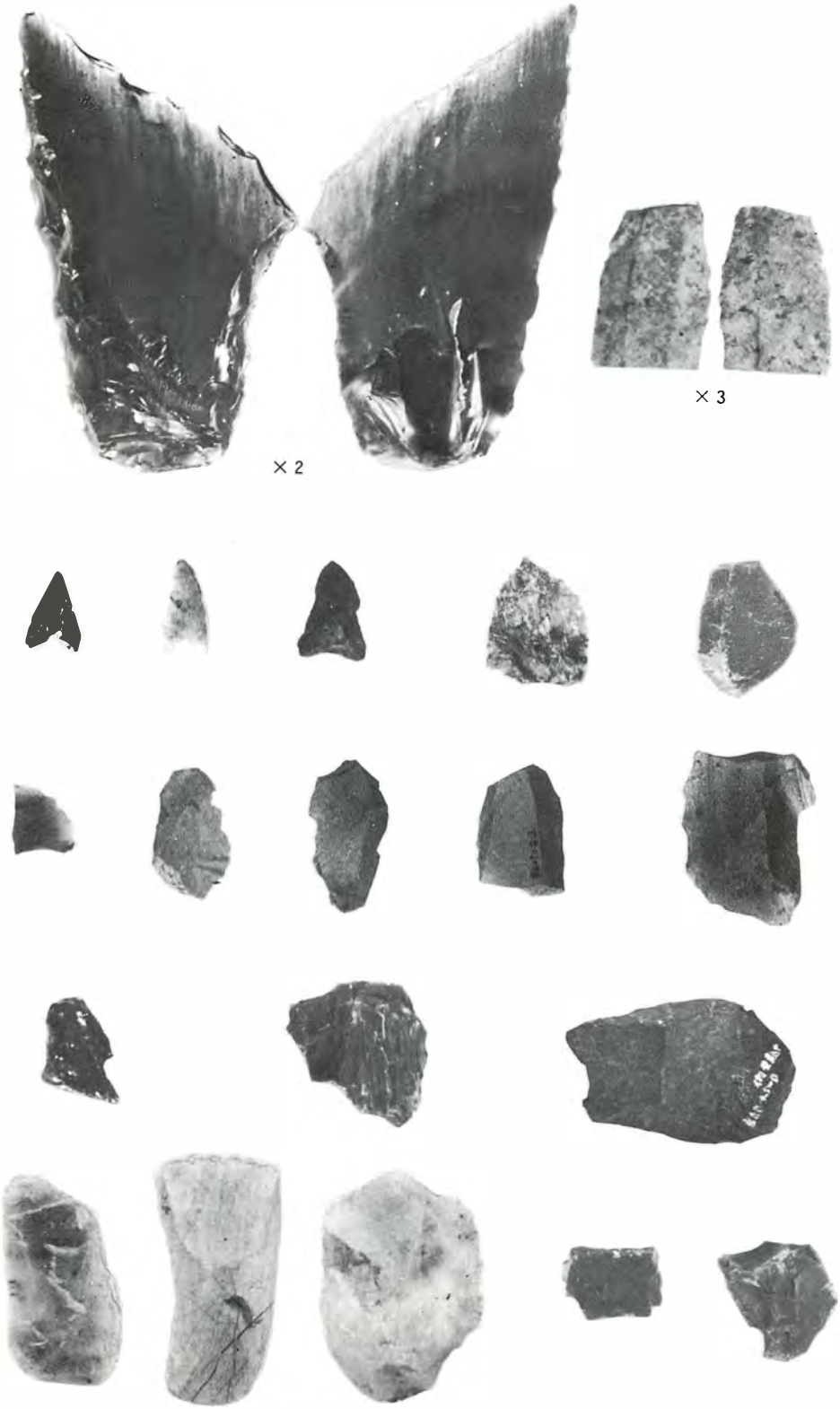
図版27　B地区（岩立C古墳）第Ⅸ・Ⅹ区出土武具・装身具



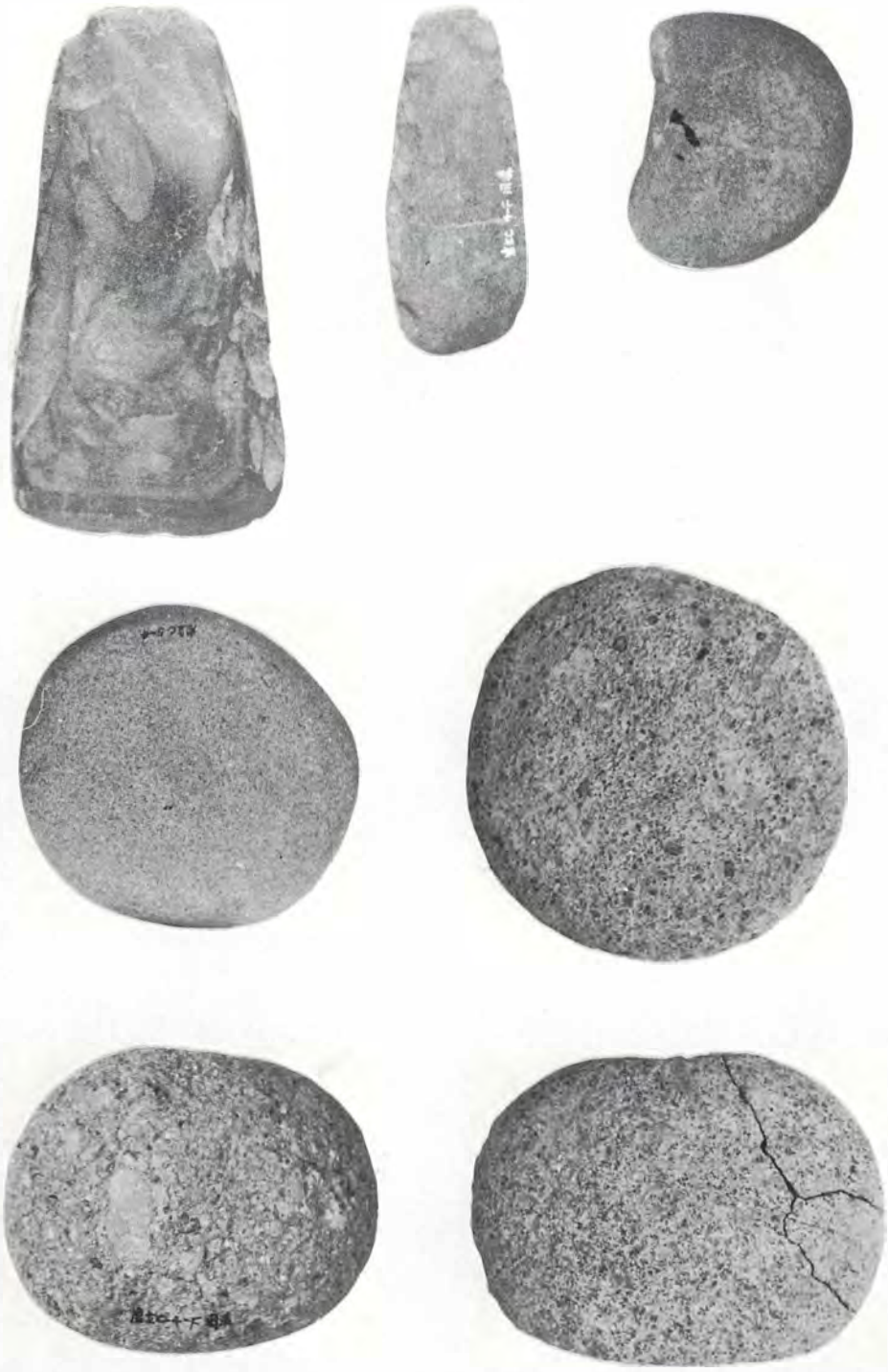
図版28　B地区出土縄文式土器

図版29　B 地区出土縄文式土器

図版30　B地区出土縄文式土器



図版31　B地区出土の石器



図版32　B地区出土の石器

1　調査区全景（小川町稲川より）

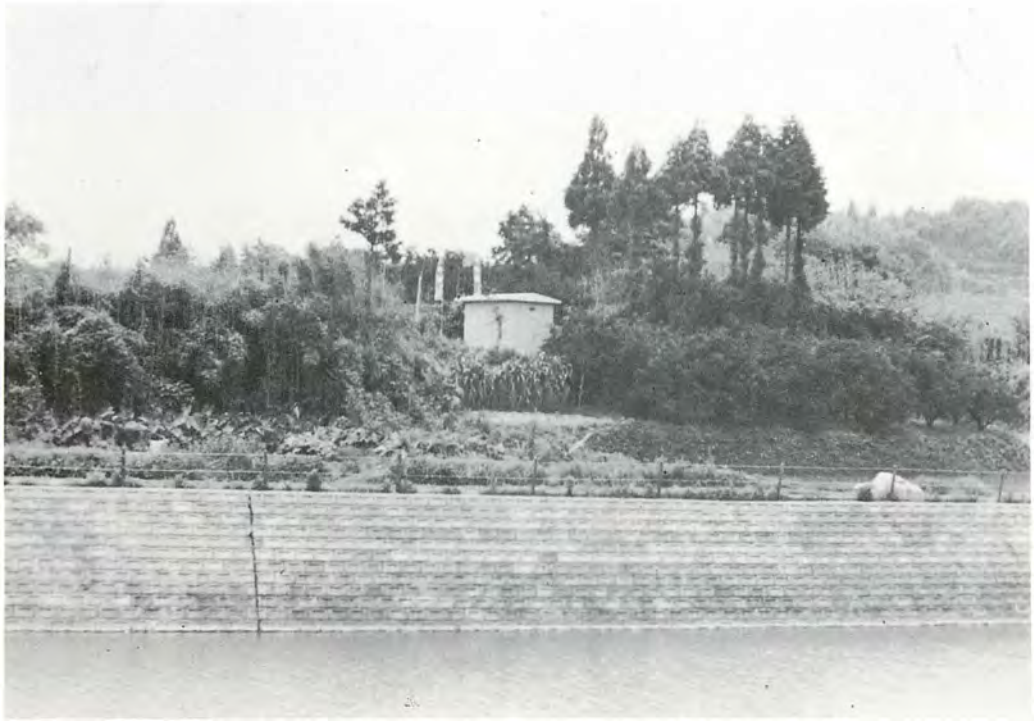
2　重機による排土

図版33　C地区（大瀬田横穴群）調査区全景

1　A・B・Cトレンチ発掘風景

2　Aトレンチ

図版34　C地区（大瀬田横穴群）トレンチ



1　小川町砂川右岸より見る

2　参道より見る

図版35　D地区（高塚古塔群）全景

1

2

図版36　D地区（高塚古塔群）御神体と古塔

1　姫ノ城古墳　開墾前の光景　東方より（昭和42年開墾）　（乙益）

2　中ノ城古墳　後円部　北方より　（乙益）

1　中ノ城古墳　東北方より（ブルドーザーで段々畑に変形）　（乙益）

2　物見櫓古墳

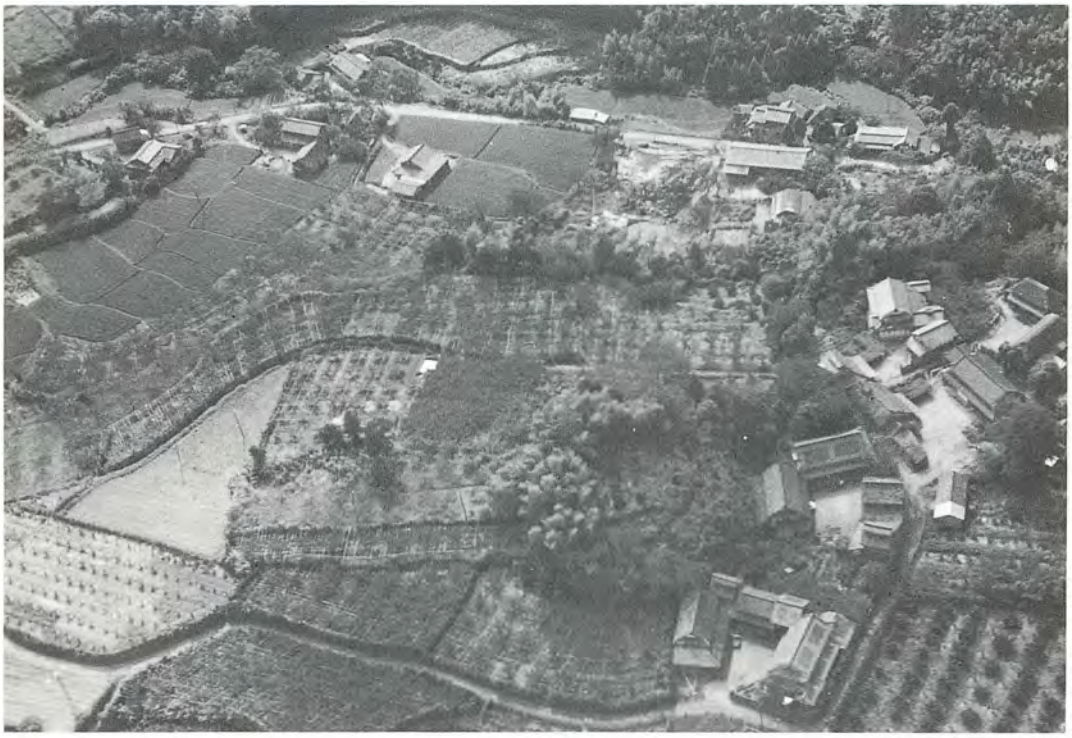
1　端ノ城古墳（西方より見る）

2　野津古墳群（端ノ城古墳墳丘より）

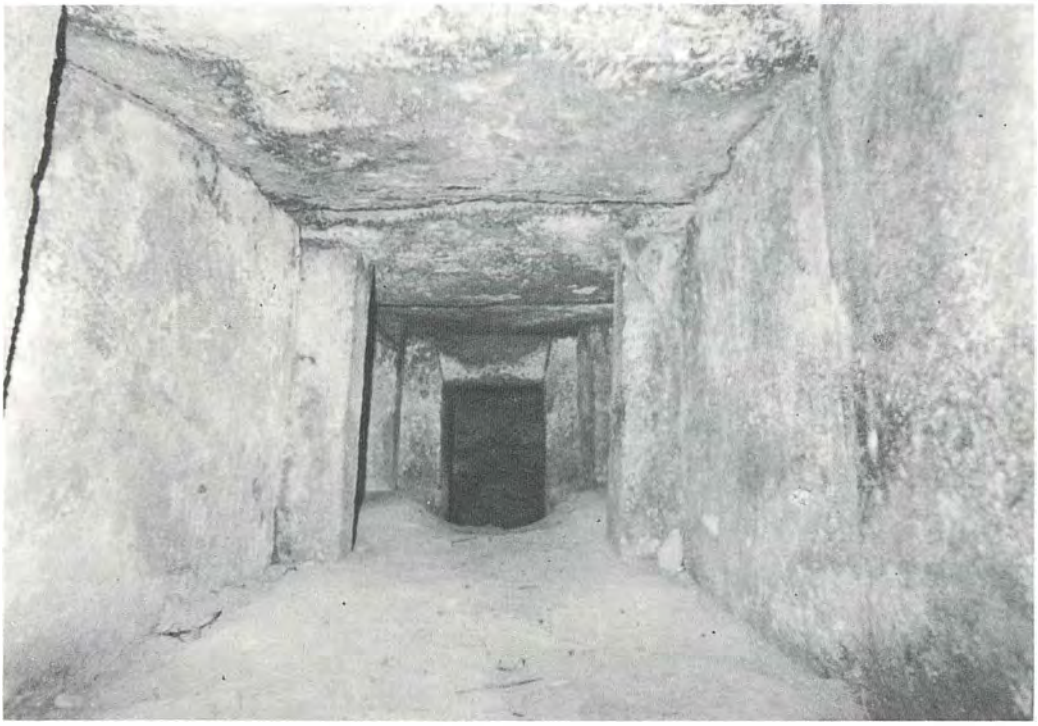
1　姫ノ城出土石製品（乙益）

2　姫ノ城出土石製品（乙益）

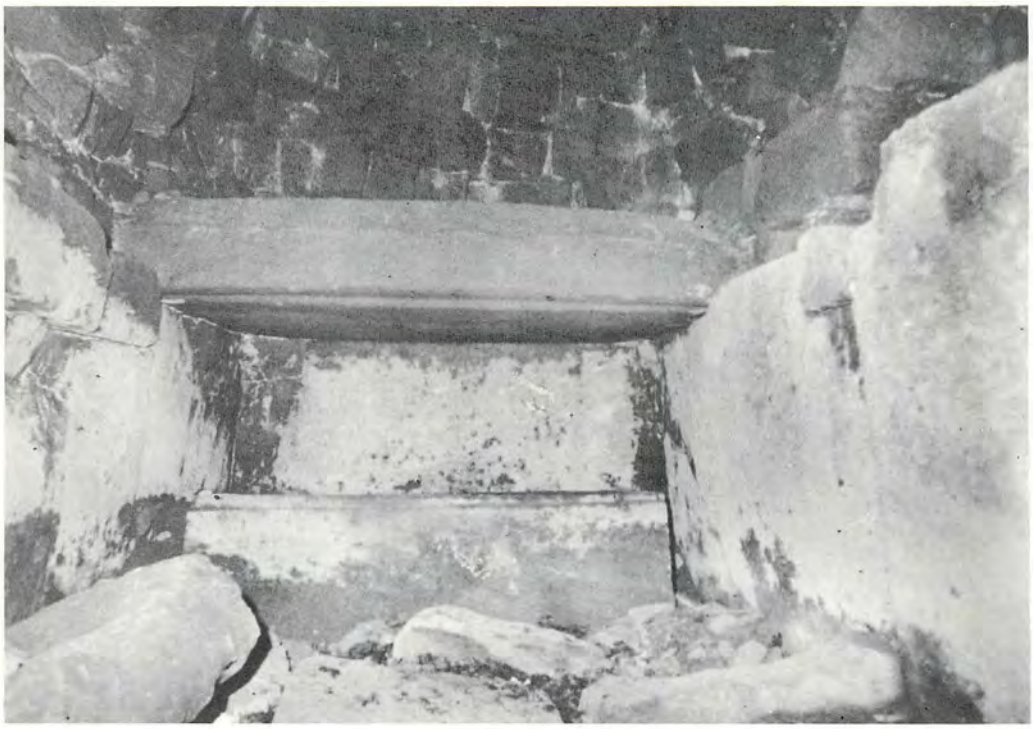
3　姫ノ城出土石製品　（乙益）



1　大野窟古墳全景　（石人石馬研究会・朝日新聞社）

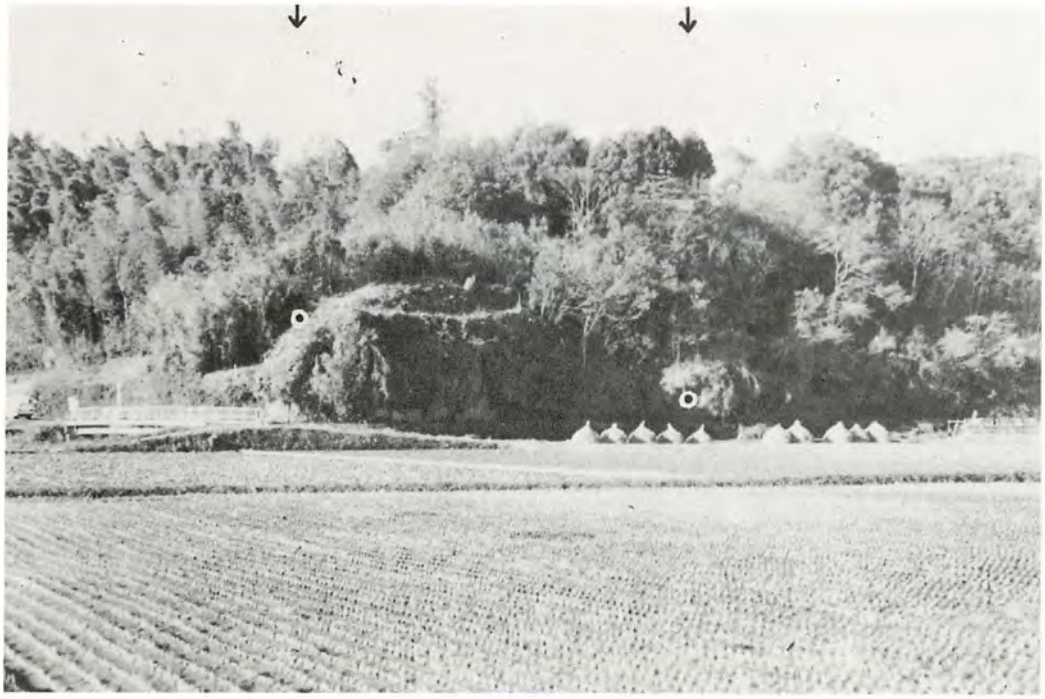


2　大野窟古墳（羨道より玄門を見る）



1　大野窟古墳玄室（玄門より見る）

2　大野窟古墳玄室（天井を見る）



1　崩平横穴群遠景

2　崩平横穴第1号

3　崩平横穴第2号

熊本県文化財調査報告　第34集

五ッ穴横穴群

昭和54年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒 861　熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　コロニー印刷
〒 861　熊本市二本木3丁目12－37

五ッ穴横穴群正誤表

頁	行	正	誤
3頁	21行	氷川の左岸	氷川の右岸
13頁	第4図2	Ⅲ′ 砂 Ⅳ′ 砂	Ⅵ 砂 Ⅶ 砂
14頁	26行	第1表	第2表
15頁	第1表 図版1	形態上の特徴 天井部はフラットである。	形態上の特徴 天井部はフットである。
31頁	25行	このことから	こ□ことから
34頁	1行	区から多くの	□から多くの
37頁	19行	単独に出土したものも	単独に出土し　ものも
42頁	6行	この焼土もまた掘り方の	この焼土もまた掘込みの
46頁	17行	Ⅲb	Ⅲ6
50頁	第27図 スケール	0　30cm	0　10cm
54頁	第31図 スケール	0　20cm	0　10cm
57頁	第5表 25－12	形態上の特徴 明瞭で	形態上の特徴 明朗で
58頁	第5表 25－21	形態上の特徴 頭部は欠損	形態上の特徴 頭部は失損
62頁	第5表 29－9	色調・胎土・焼成 色調は青灰色 胎土は小粒子を含む 焼成は良好。	色調、胎土、焼成 色調は□ 胎土は□ 焼成は□
83頁	22行	第3表	第4表
84頁	10行	第8表	第9表
85頁	第8表 踏　石	縦　0.47	縦　0.20
85頁	第8表 踏　石	戦国　2.0 晋　2.0	戦国　2.1 晋　※　2.0
86頁	9行	第10表	第11表
	11行	第10表	第11表
87頁	4行	第9表に	第10表に
	20行	（村井）	文責者名欠落
89頁	17行	り方の中	り込み中
95頁	24行	口縁部片であろう。	口縁部片□□□う。
119頁	7行	「ん」	「ん」（カ）
143頁	附3 第3図	R－Q断面図	P－Q断面図
172頁	13行	第4号、第5号、第6号	第4号、第6号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 34 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：五ッ穴横穴群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日